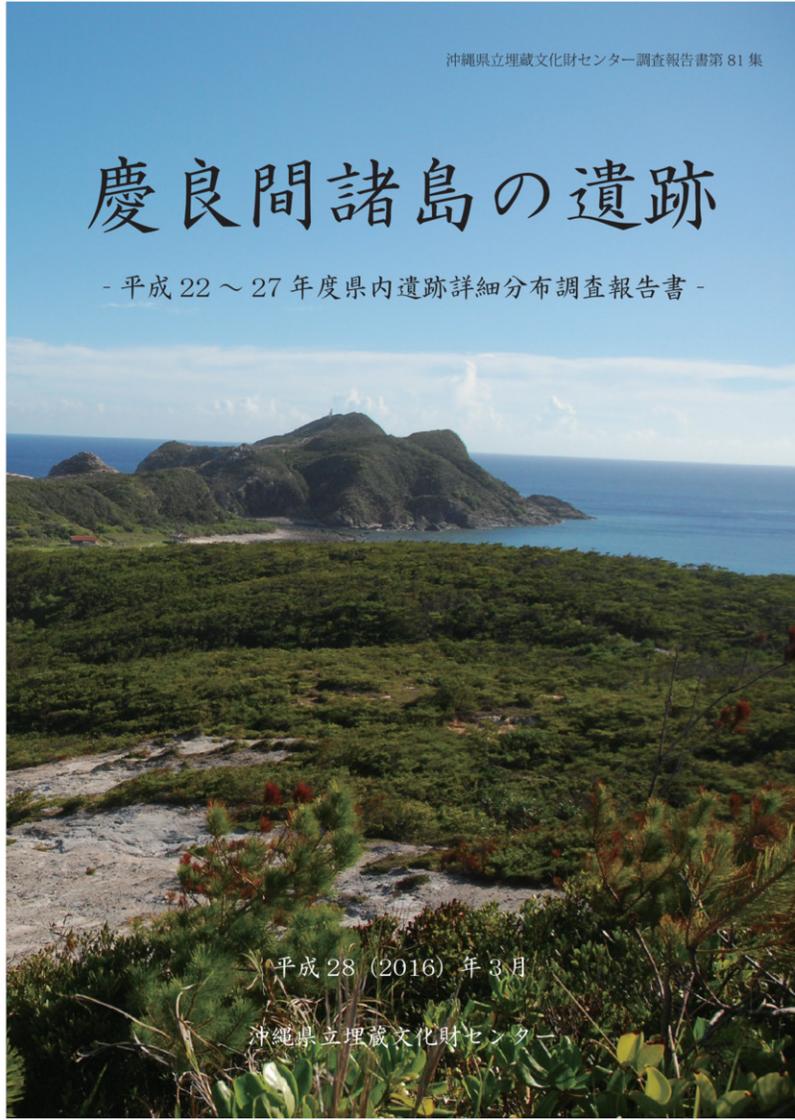


慶良間諸島の遺跡

- 平成 22 ～ 27 年度県内遺跡詳細分布調査報告書 -



平成 28 (2016) 年 3 月

沖縄県立埋蔵文化財センター

慶良間諸島の遺跡

—平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書—

平成28(2016)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、沖縄県立埋蔵文化財センターが文化庁の補助を受けて2010～2015（平成22～27）年度にわたって慶良間諸島（渡嘉敷村・座間味村）で実施した県内遺跡詳細分布調査の成果をまとめたものです。

慶良間諸島は、那覇から日帰りで行くことも可能である身近な離島でもあり、近年は中国・台湾等の海外からの観光客も多く訪れております。また、2014年3月5日に、全域を慶良間諸島国立公園として指定されております。

現在のところ、大規模なリゾートホテルの開発などはありませんが、かつては採砂工事が多く行われたため、特に渡嘉敷島の船越原遺跡と阿波連浦貝塚において、その遺物包含層が一部露頭し、自然崩壊の危機にありました。そこで、これらの遺跡の保護を保護するために、その保存状況や範囲内容を把握するための範囲確認調査を行うことにしました。その結果、現在も遺物包含層は残されており、露頭した部分を保護することができました。

また、本諸島においては、沖縄県教育委員会による1976（昭和51）年度の分布調査、1980・1981年度の座間味村古座間味貝塚の範囲確認調査以来、新たな埋蔵文化財包蔵地の確認を行っていませんでした。今回の調査で、渡嘉敷村で20か所、座間味村で8か所の遺跡を新たに確認し、各々37か所と46か所、合計83跡を数えることになりました。なお、この内の30か所が先史～グスク時代の遺跡となっております。

このような成果を掲載した今回の報告書は、慶良間諸島の歴史・文化を理解する資料として活用されるとともに、地域における文化財の保存活用のために役立てば幸いです。

最後に、様々な御指導・御助言・御協力を戴きました諸機関及び関係各位に心から感謝申し上げます。

2016（平成28）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 下地 英輝

例 言

1. 本報告書は、沖縄県内における遺跡の分布状況や内容を把握する「県内遺跡詳細分布調査」の一環として、慶良間諸島における遺跡の分布状況、管内の渡嘉敷村船後原遺跡及び阿波連浦貝塚の範囲確認調査の成果をまとめたものである。
2. 本調査は、文化庁の補助（8 / 10）を受けた沖縄県内遺跡発掘調査事業に伴うもので、沖縄県教育委員会の指導のもと、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）が実施した。
3. 現地調査・資料整理を平成 22 ～ 27 年度、報告書作成を平成 27 年度に行った。
4. 現地調査については、渡嘉敷村教育委員会、座間味村教育委員会による多大な協力を得た。
5. 本書に掲載した遺構図の座標軸は国土座標軸（第 XVI 座標系）を使用し、その座標値は日本測地系である。
6. 本書の編集は、宮城淳一の協力を得て、瀬戸哲也が行った。執筆は、下記以外は瀬戸が行った。なお、第 5 章における慶良間諸島の遺跡概要については、現地調査担当であった山本正昭の所見や意見を参考とした。
第 2 章…平良和輝 第 4・5～7 章内の土器…亀島慎吾 第 4・5～7 章 4 内の石器・第 8 章…大堀皓平
第 5 章（9）・（13）・（47）・（71）・（72）…山本 第 6 章第 4 節…バリノサーヴェイ株式会社
第 6 章第 5 節…山崎真治・黒住耐二・國木田大 第 7 章…宮城
7. 土色は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「新版標準土色帖」2011 年度版を使用している。土質は肉眼で粒径を観察し、地質学によるウエント・ワース法（文化庁 2010『発掘調査のてびき』）で表現している。
8. 本書に掲載した写真は、遺物を領家範夫（埋蔵文化財資料整理嘱託員）、現地調査状況を第 1 章第 3 節に記載した調査担当および文化財調査嘱託員が撮影した。
9. 本書では、縄文時代・弥生～平安並行時代（県教委 2003『沖縄県史 各論編 2 考古』）の遺跡を多く取り扱うことになるが、両者にまたがる遺跡や土器の表記が煩雑になる。そこで、第 4・5 章で後述するが伊藤慎二・新里貴之の見解に基づき、両者をまとめて先史時代として、その細分名称として貝塚前期、貝塚後期、さらに前 4 期などと称するものとする（新里 2014、伊藤・新里ほか 2014）。
10. 現地調査で得られた遺物及び実測図・写真等の記録は、全て当センターにて保管している。

目次

序	
例言	
第1章 経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	2
第2章 位置と環境	4
第3章 今回の調査と遺跡の取り扱い	7
第4章 遺物の概要・分類	8
第5章 慶良間諸島の遺跡の分布と概要	16
1. 渡嘉敷島	16
2. 儀志布島	33
3. 前島	35
4. 神山島	36
5. 座間味島	38
6. 屋嘉比島	51
7. 安室島	51
8. 嘉比島	51
9. 安慶名敷島	51
10. 阿嘉島	56
第6章 船越原遺跡	61
第1節 概要	61
第2節 遺物散布状況と既往の調査・採集遺物との検討	61
第3節 平成24・25(2012・2013)年度範囲確認調査	74
第4節 渡嘉敷村船越原採集のオオツタノハ遺体の産状と年代について	103
第5節 船越原遺跡の自然科学分析	106
第6節 小結	122
第7章 阿波連浦貝塚の調査	124
第1節 概要	124
第2節 既往の調査研究・採集遺物	124
第3節 平成26・27(2014・2015)年度範囲確認調査	131
第4節 小結	145
第8章 渡嘉敷島における石材踏査	146
第9章 総括	154
引用参考文献	155
遺物観察表	159
付編 埋蔵文化財調査基準関係資料	167
遺物図版	171
報告書抄録	

目次

第1図 沖繩本島の位置	5	第42図 船越原遺跡の調査区	72
第2図 慶良間諸島の位置	5	第43図 船越原遺跡1・2地点の位置	74
第3図 渡嘉敷島北側の遺跡分布図	17	第44図 船越原遺跡1地点露頭断面	75
第4図 渡嘉敷島南側の遺跡分布図	18	第45図 船越原遺跡2地点露頭断面	77
第5図 渡嘉志久貝塚の範囲	19	第46図 船越原遺跡2地点露頭の調査区	79
第6図 渡嘉志久貝塚表採資料(1)	20	第47図 船越原遺跡2地点露頭西区平面・断面	80
第7図 渡嘉志久貝塚表採資料(2)	21	第48図 船越原遺跡2地点露頭北西区断面図	83
第8図 渡嘉志久貝塚多和田貞淳採集資料	22	第49図 船越原遺跡2地点南側の調査区	85
第9図 渡嘉志久貝塚沖繩郷土文化協会採集資料	22	第50図 船越原遺跡2地点6018A平面オルソ画像	85
第10図 アーガー・アリガヌマワ、パンリグチ遺物散布地の範囲	23	第51図 船越原遺跡2地点6018A断面	86
第11図 アーガー・アリガヌマワ、阿波連集落周辺の遺物散布地・阿波連貝塚表採遺物	25	第52図 船越原遺跡2地点6018E断面	89
第12図 東上原遺跡・渡嘉敷集落周辺遺物散布地・東上原遺跡表採遺物	26	第53図 船越原遺跡2地点6021A断面	90
第13図 阿波連貝塚・アーガー貝塚沖繩郷土文化協会採集資料	27	第54図 船越原遺跡2地点6020A断面	91
第14図 安福宜グスクの縄張り図	28	第55図 船越原遺跡2地点6021TY断面	91
第15図 渡嘉敷集落周辺遺物散布地の範囲	29	第56図 船越原遺跡2地点6320Y断面	92
第16図 東上原遺跡・阿波連貝塚・阿波連集落周辺遺物散布地の範囲	30	第57図 船越原遺跡2地点6220Y断面	92
第17図 ジングスクの縄張り図	32	第58図 船越原遺跡2地点6117X断面	93
第18図 儀志布島の遺跡分布図	35	第59図 船越原遺跡2地点6017L断面	93
第19図 前島の遺跡分布図	36	第60図 船越原遺跡2地点東側ビーチロック	94
第20図 神山島の遺跡分布図	36	第61図 船越原遺跡2地点東側ビーチロック堆積位置	94
第21図 座間味村の遺跡位置図	39	第62図 船越原遺跡3地点調査区	96
第22図 古座間味貝塚の既往調査状況・出土遺物	41	第63図 船越原遺跡3地点5616B断面	96
第23図 古座間味貝塚表採遺物	42	第64図 船越原遺跡3地点5517A断面	97
第24図 座間味貝塚・阿佐遺物散布地沖繩郷土文化協会採集遺物	42	第65図 船越原遺跡3地点5717U断面	97
第25図 大和馬遺物散布地(1)表採遺物	43	第66図 船越原遺跡3地点5135U断面	98
第26図 大和馬遺物散布地(2)・阿真遺物散布地表採遺物	44	第67図 船越原遺跡3地点5212A断面	98
第27図 シルグスクの縄張り図	45	第68図 船越原遺跡3地点5315U断面	99
第28図 嘉比島・安慶名敷島・安室島・原嘉比島の遺跡分布図	48	第69図 船越原遺跡3地点5217U断面	99
第29図 阿嘉島・慶留間島の遺跡分布図	53	第70図 船越原遺跡4地点調査区	100
第30図 阿嘉貝塚・ウタハ遺物散布地表採遺物	54	第71図 船越原遺跡4地点4126RW断面	101
第31図 ウタハ・阿嘉貝塚採集遺物	54	第72図 船越原遺跡今回調査表採・出土遺物	102
第32図 グスク山の縄張り図	55	第73図 遺跡周辺地形図・オオツクノハ採集地点	103
第33図 ツングスク(積城)の縄張り図	57	第74図 2地点南壁の模式柱状図、試料採取位置	107
第34図 宮城報告の船越原遺跡における遺物採集地点	62	第75図 花粉化石群集と微粒炭数	111
第35図 船越原遺跡の遺物散布地の位置	62	第76図 2地点南壁の喪中式柱状図、試料採取位置及び分析層位	115
第36図 宮城報告の採集土器	63	第77図 船越原遺跡の想定範囲	123
第37図 船越原遺跡既往採集土器(1)	64	第78図 阿波連浦貝塚の位置	124
第38図 船越原遺跡既往採集土器(2)	65	第79図 沖国大調査阿波連浦貝塚IV層出土土器	127
第39図 船越原遺跡既往採集土器(3)	66	第80図 沖国大調査阿波連浦貝塚VI層出土土器	127
第40図 船越原遺跡既往採集土器(4)	67	第81図 阿波連浦貝塚表採土器(1)	128
第41図 船越原遺跡既往採集土器(5)	68	第82図 阿波連浦貝塚表採土器(2)	129
		第83図 沖繩国際大学の確認調査 調査区平面図	134
		第84図 阿波連浦貝塚の調査区	134
		第85図 阿波連浦貝塚 トレンチB 北壁断面	136
		第86図 トレンチ1南壁断面	138
		第87図 トレンチ1西壁断面	138
		第88図 トレンチ1平面図	138
		第89図 トレンチ2東壁断面図	140

第90図	阿波瀬浦貝塚IV層出土土器(1)	142	第96図	調査地点②	148
第91図	阿波瀬浦貝塚IV層出土土器(2)・Ⅴ層出土魚骨	143	第97図	調査地点③	149
第92図	阿波瀬浦貝塚Ⅵ層・Ⅶ層出土土器	144	第98図	調査地点④	150
第93図	阿波瀬浦貝塚遺跡想定範囲	145	第99図	砂岩の石質	152
第94図	慶良間諸島の地質と踏査地点	146	第100図	緑色千枚岩・片岩の石質	152
第95図	調査地点①	147	第101図	座間味村の遺跡分布	156
			第102図	渡嘉敷村の遺跡分布	157

写真目次

写真1	巻貝(1)	12	写真42	大墓内部	37
写真2	巻貝(2)	13	写真43	古座間味貝塚遠景	40
写真3	巻貝(3)	14	写真44	古座間味貝塚近景	40
写真4	二枚貝	15	写真45	古座間味貝塚遺物散布状況(1)	40
写真5	渡嘉志久集落と阿嘉島	19	写真46	古座間味貝塚遺物散布状況(2)	40
写真6	渡嘉志久貝塚近景	19	写真47	大和馬遺物散布地近景	40
写真7	アリガヌワラ・パンリグ子遺物散布地	24	写真48	阿佐遺物散布地近景	40
写真8	パンリグ子遺物散布地	24	写真49	阿佐船頭屋敷	40
写真9	アリガヌワラ遺物散布地	24	写真50	阿佐船頭屋敷内梵字碑	40
写真10	アーガー遺物散布地	24	写真51	シルグスク遠景	46
写真11	渡嘉敷集落周辺遺物散布地M地点	29	写真52	シルグスク近景	46
写真12	渡嘉敷集落周辺遺物散布地L地点	29	写真53	シルグスク石積(1)	46
写真13	根元家の石垣	29	写真54	シルグスク石積(2)	46
写真14	渡嘉敷川河口遺物散布地	29	写真55	カンジャー森(鍛冶跡)伝承地近景	47
写真15	阿波連集落遠景	30	写真56	カンジャーガー	47
写真16	阿波連集落周辺遺物散布地B地点	30	写真57	座間味港の古墓群(ユナエー墓)	47
写真17	東上原遺跡遠景	30	写真58	座間味港の古墓群(上アカエー墓)	47
写真18	東上原遺跡近景	30	写真59	阿真のアカエー墓近景	47
写真19	グスク島	31	写真60	阿真のアカエー墓内部	47
写真20	ジングスク遠景	31	写真61	阿佐集落西岸の古墓群	47
写真21	ジングスク頂上部の石積み	31	写真62	阿佐集落西岸の古墓群内部	47
写真22	ジングスクのろし台	31	写真63	安室島遠景	49
写真23	渡嘉敷港遠景	34	写真64	安室島西側戸戸	49
写真24	イシッピー原の古墓群近景	34	写真65	安室貝塚近景	49
写真25	サミカ原の古墓群厨子龕内部	34	写真66	安室貝塚段散布状況	49
写真26	孝行カンジャンシーの墓近景	34	写真67	ウフタ遺物散布地近景	49
写真27	阿波連の古墓群近景	34	写真68	ウフタ遺物散布状況	49
写真28	ヒータチャマのろし台	34	写真69	嘉比島遠景	50
写真29	船越原の石切り場近景	34	写真70	嘉比島北側遺物散布地	50
写真30	船越原の石切り場加工痕	34	写真71	嘉比島北側貝散布状況	50
写真31	ヘイジョウウグワアの遺物散布地	35	写真72	嘉比島北側土器散布状況	50
写真32	儀志布原の古墓全景	35	写真73	安慶名敷島サンラーガマ	50
写真33	儀志布原の古墓内部	35	写真74	安慶名敷島東岸遺物散布状況	50
写真34	アカヤーの古墓近景	35	写真75	屋嘉比島遠景	52
写真35	前島古集落(古島)伝承地	37	写真76	屋嘉比島旧集落遠景	52
写真36	前島旧集落の石垣	37	写真77	屋嘉比島旧集落建物跡	52
写真37	前島旧集落内通路	37	写真78	屋嘉比島旧集落貯水タンク跡	52
写真38	前島旧集落屋敷地の糞散布	37	写真79	屋嘉比島旧集落水路跡	52
写真39	前島旧集落の殿内	37	写真80	屋嘉比島旧集落釜山跡	52
写真40	印良菊原古墓群	37	写真81	屋嘉比島棧橋跡	52
写真41	大墓近景	37	写真82	屋嘉比島棧橋基礎	52

写真 83	阿嘉貝塚近景	54	写真 130	船越原遺跡 2 地点露頭北西区堆積状況	83
写真 84	ウタハ貝塚近景	54	写真 131	船越原遺跡 2 地点露頭北西区石材出土状況	83
写真 85	グスク山遠景	56	写真 132	船越原遺跡 2 地点南側	84
写真 86	グスク山平場	56	写真 133	船越原遺跡 2 地点 6018 A 石材出土状況	87
写真 87	グスク山立石	56	写真 134	船越原遺跡 2 地点 6018 A 堆積状況	88
写真 88	グスク山石積	56	写真 135	船越原遺跡 2 地点 6018 A 石材集中状況	88
写真 89	ツングスク遠景	58	写真 136	船越原遺跡 2 地点 6018 E 堆積状況	89
写真 90	ツングスク 北より	58	写真 137	船越原遺跡 2 地点 6018 E III B 層遺物出土 状況	89
写真 91	ツングスク 東より	58	写真 138	船越原遺跡 2 地点 6021 A 堆積状況	90
写真 92	ツングスク平場	58	写真 139	船越原遺跡 2 地点 6021 A III B 層土器出土 状況	90
写真 93	ツングスク石積 (1)	58	写真 140	船越原遺跡 2 地点 6020 E 堆積状況	91
写真 94	ツングスク石積 (2)	58	写真 141	船越原遺跡 2 地点 6021 T Y 堆積状況	91
写真 95	阿嘉印部石	59	写真 142	船越原遺跡 2 地点 6021 T Y III B 層土器出土 状況	91
写真 96	阿嘉集落西側古墓群	59	写真 143	船越原遺跡 2 地点 6320 Y 堆積状況	92
写真 97	阿嘉港東側古墓群 (タジリ墓)	59	写真 144	船越原遺跡 2 地点 6020 Y 堆積状況	92
写真 98	慶留間東側古墓群	59	写真 145	船越原遺跡 2 地点 6117 X 堆積状況	93
写真 99	慶留間遺跡遠景	59	写真 146	船越原遺跡 2 地点 6017 L 堆積状況	93
写真 100	慶留間遺跡近景	59	写真 147	6117 X III A 層シャコガイ出土状況	93
写真 101	宮城報告の船越原遺跡現況	62	写真 148	船越原遺跡 2 地点東側ビーチロック	94
写真 102	渡嘉敷村史での船越原遺跡現況	66	写真 149	船越原遺跡 2 地点東側ビーチロック	94
写真 103	船越原遺跡西側全景	69	写真 150	船越原遺跡 3 地点 西より	95
写真 104	船越原遺跡西側全景	69	写真 151	船越原遺跡 3 地点頂部付近	95
写真 105	船越原遺跡 2 地点の調査前	70	写真 152	船越原遺跡 3 地点貝類・石材散布状況	95
写真 106	流出する爪形文土器	70	写真 153	船越原遺跡 3 地点 5616 B 堆積状況	96
写真 107	調査の案内表示	71	写真 154	船越原遺跡 3 地点 5517 A 堆積状況	97
写真 108	重機掘削状況	71	写真 155	船越原遺跡 3 地点 5717 U 堆積状況	97
写真 109	人力掘削状況	71	写真 156	船越原遺跡 3 地点 5135 U 堆積状況	98
写真 110	爪形文系土器取り上げ状況	71	写真 157	船越原遺跡 3 地点 5212 A 堆積状況	98
写真 111	断面実測状況	71	写真 158	船越原遺跡 3 地点 5315 U 堆積状況	99
写真 112	断面剥ぎ取り状況	71	写真 159	船越原遺跡 3 地点 6013 U 堆積状況	99
写真 113	現地説明会状況	71	写真 160	船越原遺跡 3 地点 5217 U 堆積状況	99
写真 114	環境省への事前説明	73	写真 161	船越原遺跡 4 地点 北より	100
写真 115	法面保護着工状況	73	写真 162	船越原遺跡 4 地点 4254 W 堆積状況	101
写真 116	法面保護施工完了状況	73	写真 163	船越原遺跡 4 地点 4028 A 堆積状況	101
写真 117	法面保護施工後の様子	73	写真 164	船越原遺跡 4 地点 4126 調査前	101
写真 118	船越原遺跡 1 地点現状	75	写真 165	船越原遺跡 4 地点 4126 R W 堆積状況	101
写真 119	船越原遺跡 1 地点露頭断面	75	写真 166	ビーチロック (A) の位置	104
写真 120	船越原遺跡 2 地点露頭近景	76	写真 167	ビーチロック (A) の下位に位置する	104
写真 121	船越原遺跡 2 地点露頭断面	76	写真 168	採集されたオオツノタハ	104
写真 122	船越原遺跡 2 地点露頭基本層序	78	写真 169	試料 No.1	105
写真 123	船越原遺跡 2 地点露頭 III B 層爪形文系土器包含 状況	78	写真 170	試料 No.2	105
写真 124	船越原遺跡 2 地点露頭調査終了状況	79	写真 171	花粉化石・微粒炭	112
写真 125	船越原遺跡 2 地点露頭西区 III A 層チョウセン サザエ出土状況	81	写真 172	種実遺体	118
写真 126	船越原遺跡 2 地点露頭西区 III A 層石材出土 状況	81	写真 173	阿波連浦貝塚遠景	125
写真 127	船越原遺跡 2 地点露頭西区堆積状況	81	写真 174	調査以前の状況	125
写真 128	船越原遺跡 2 地点露頭西区 III B 層爪形文系土器 出土状況	82	写真 175	阿波連浦貝塚遠景	125
写真 129	爪形文系土器出土状況	82	写真 176	阿波連浦貝塚遠景	125
写真 130	船越原遺跡 2 地点露頭北西区堆積状況	83	写真 177	阿波連浦貝塚全景	125

写真 178	沖国調査時阿波連浦貝塚調査風景	126	写真 201	トレンチ 1 南壁堆積状況	138
写真 179	沖国調査時阿波連浦貝塚出土遺物	127	写真 202	トレンチ 1 西壁堆積状況	138
写真 180	表土掘削状況	130	写真 203	トレンチ 1 平面遺物出土状況	138
写真 181	人力掘削状況	130	写真 204	トレンチ 1 完掘状況	139
写真 182	貝集積遺構検出状況	130	写真 205	トレンチ 1 貝集中遺構	139
写真 183	壁面撮影状況	130	写真 206	トレンチ 1 IV-1 層・VII層検出状況	139
写真 184	壁面実測状況	130	写真 207	トレンチ 1 IX層遺物出土状況	139
写真 185	遺物出土箇所実測状況	130	写真 208	トレンチ 2 IV-1 層	139
写真 186	トレンチ B サブトレンチ 北壁	132	写真 209	トレンチ 2 東壁分層状況	139
写真 187	トレンチ 1 南壁	132	写真 210	トレンチ 2 東壁断面	140
写真 188	トレンチ 2 東壁	132	写真 211	トレンチ 3 掘削前状況	141
写真 189	トレンチ 3 西壁	132	写真 212	トレンチ 3 完掘状況	141
写真 190	阿波連浦貝塚 基本層序	132	写真 213	法面保護作業状況	141
写真 191	トレンチ A 沖繩国際大学調査区検出状況	133	写真 214	阿波連浦貝塚 法面保護後状況	141
写真 192	トレンチ B 掘削前状況	133	写真 215	トレンチ B 法面保護施工前	141
写真 193	トレンチ B IV-1 層	133	写真 216	トレンチ B 法面保護施工後	141
写真 194	トレンチ B 貝集中遺構検出状況	135	写真 217	調査地点①	147
写真 195	トレンチ B 貝集中遺構	135	写真 218	調査地点②	148
写真 196	トレンチ B 貝中積遺構	135	写真 219	調査地点③	149
写真 197	トレンチ B IV-1 層遺物出土状況	135	写真 220	調査地点④-1	150
写真 198	トレンチ B VI-1 層遺物出土状況	135	写真 221	調査地点④-1 付近の粟石石灰岩露頭	151
写真 199	トレンチ B 北壁分層状況	136	写真 222	調査地点④-2	151
写真 200	トレンチ 1 完掘状況	137			

表目次

第 1 表	伊藤慎二・新里貴之による南西諸島土器編年	9	第 13 表	微細物分析結果	118
第 2 表	船越原遺跡出土貝類遺体	10	第 14 表	粒度分析結果	119
第 3 表	阿波連浦貝塚出土貝類遺体	11	第 15 表	土壌理化学分析結果	120
第 4 表	慶良間諸島各遺跡の表採貝類遺体	11	第 16 表	遺物観察表 (1)	159
第 5 表	渡嘉敷島船越原採集オオツタノハの計測値	105	第 17 表	遺物観察表 (2)	160
第 6 表	船越原採集オオツタノハの放射性炭素年代	105	第 18 表	遺物観察表 (3)	161
第 7 表	サキタリ洞遺跡調査区 II・IVC 層 (条痕文期) の放射性炭素年代	105	第 19 表	遺物観察表 (4)	162
第 8 表	放射性炭素年代測定結果	109	第 20 表	遺物観察表 (5)	163
第 9 表	暦年較正結果	109	第 21 表	遺物観察表 (6)	164
第 10 表	花粉分析・微粒炭分析結果	110	第 22 表	遺物観察表 (7)	165
第 11 表	放射性炭素年代測定結果	118	第 23 表	遺物観察表 (8)	166
第 12 表	暦年較正結果	118	第 24 表	遺物観察表 (9)	167

遺物図版目次

遺物図版 1	渡嘉志久貝塚 (1) ……………	171	遺物図版 15	大和馬貝塚 ……………	184
遺物図版 2	渡嘉志久貝塚 (2) ……………	172	遺物図版 16	阿真東海岸・阿真ニタ浜 ……………	185
遺物図版 3	渡嘉志久貝塚 (3) ……………	173	遺物図版 17	グスク山・阿佐遺物散布地 ……………	186
遺物図版 4	渡嘉志久貝塚 (4) ……………	174	遺物図版 18	阿真遺物散布地・阿嘉貝塚・阿嘉公民館 ・慶留間遺跡・嘉比北遺物散布地 ……………	187
遺物図版 5	渡嘉敷集落集落周辺遺物散布地・ アーガー遺物散布地・アリガースワラ遺物散布地…	175	遺物図版 19	嘉比北遺物散布地・慶留間集落東海岸	188
遺物図版 6	渡嘉敷集落周辺遺物散布地 渡嘉敷川河口 周辺遺物散布地……………	176	遺物図版 20	安室貝塚周辺・ウタハ貝塚?・ウフタ遺物 散布地……………	189
遺物図版 7	東上原遺跡……………	177	遺物図版 21	船越原遺跡 (1)……………	190
遺物図版 8	阿波連貝塚……………	178	遺物図版 22	船越原遺跡 (2)・船越原石切り場……………	191
遺物図版 9	神山島灯台付近遺物散布地……………	178	遺物図版 23	船越原遺跡 (3)……………	192
遺物図版 10	阿波連集落周辺遺物散布地・船越原 石切り場北……………	179	遺物図版 24	船越原遺跡 (4)……………	193
遺物図版 11	ハンガチ・東川上御嶽周辺・旧前島集落 儀志布島不明・ハダヨグワァー・ジープ スカシ遺物散布地	180	遺物図版 25	船越原遺跡 (5)……………	194
遺物図版 12	ヘイジョーグワァー遺物散布地 ……………	181	遺物図版 26	船越原遺跡 (6)・座間味島採集地不明 サンゴ石……………	195
遺物図版 13	古座間味貝塚・座間味貝塚 (244)・産業 組合の塚付近……………	182	遺物図版 27	船越原遺跡 (7)……………	196
遺物図版 14	古座間味貝塚・シルグスク ……………	183	遺物図版 28	阿波連浦貝塚 (1)……………	197
			遺物図版 29	阿波連浦貝塚 (2)……………	198
			遺物図版 30	阿波連浦貝塚 (3)……………	199

第1章 経緯と経過

第1節 調査の経緯

慶良間諸島における遺跡報告は、1961（昭和36）年度に新田重清により古座間味貝塚など座間味島3遺跡、阿嘉島3遺跡、慶留間島1遺跡の7遺跡が報告されたのが最初とされる（新田1961）。1966年には沖縄学生文化協会による踏査が行われ、具体的な内容が報告された（『郷土』8号）。最初の文化財保護行政としての取り組みは、沖縄県教育委員会（以下、県教委）による1975・1976（昭和50・51）年度の県全域を対象とした「沖縄県開発地域埋蔵文化財分布調査」であり、これにより座間味村域10遺跡、波嘉敷村域6遺跡が報告された。

この調査を受けて、県教委では土地改良事業との調整を目的として、1980・1981（昭和55・56）年度に古座間味貝塚の確認調査を実施し、縄文時代後期（貝塚前4期）を中心とした住居跡や多くの遺物が確認された（県教委1982）。また、波嘉敷村阿波連浦貝塚では沖縄国際大学による1978・1979（昭和53・54）年の試掘調査、1986・1987（昭和61・62）年度の学術調査が実施され、弥生並行時代（貝塚後期）の多くの遺物が確認され、特にVI層から出土した土器は後に当該期の標式資料とされた（沖国大1999、岸本他2000）。この2遺跡の調査は、本諸島における本格的な発掘調査であり、考古学的に重要な遺跡として評価されることになった。

その後、県教委において、地域の埋蔵文化財を保存するためには、当該市町村自らが調査主体となって分布調査を実施するように各自治体に指導依頼してきたところであり、1980年代には大半の地域において一定の遺跡分布状況が把握できることになった。しかしながら、本諸島の波嘉敷・座間味村では、1,000人前後の小規模な自治体でもあり文化財専門職員が配置されておらず、また大規模な開発も少なかったこともあり、前述の調査以降は分布調査も実施されなかった。

そのような中で、沖縄県立埋蔵文化財センター（以下、当センター）では、2004～2009（平成16～21）年度にかけて「沿岸地域遺跡分布調査」を実施し、海底の遺物散布地や石切り場などの遺跡を確認することになった。その調査において、砂丘地域に位置し20遺跡（伊藤2014）の出土例に留まっている瓜形文系土器が出土している船越原遺跡が遺物包含層が露頭し、自然崩壊の危機にあることが確認された。その現状から当センターでは、この船越原遺跡の保護を含めた慶良間諸島における遺跡分布調査が必要であると考えた。

県教育庁文化課（現、文化財課）と調整した結果、国庫補助事業として2010～2015（平成22～27）年度の7年間で「県内遺跡詳細分布調査」と称して、慶良間諸島を含む緊急性が生じた地域の詳細分布調査を行うことになった。当初は、同じく分布調査が行われていない東村も対象としていたが、他事業との兼ね合いや緊急性により、慶良間諸島の分布調査と、先述した船越原遺跡と同様に自然崩壊の危機と判断された阿波連浦貝塚の2遺跡の確認調査を実施することになった。

現地調査は、各年において6～9月の間に20～30日程度実施し、波嘉敷村・座間味村の両教育委員会（以下、教委）に多大なる協力を得ることができた。また、2013年9月14日には、船越原遺跡において波嘉敷村教委と共催で現地調査説明会を行い、波嘉敷村民を中心に約70名の参加を得ることができた（写真113）。なお範囲確認調査を行った船越原遺跡・阿波連浦貝塚は最低限の調査に留めて、埋戻し後には土砂流出を防ぎ、自発的に植生を促すドレーンシート工法により、遺跡保護を行った（写真115～117、写真213～216）。

第2節 調査体制

本調査は、県教委の指導により当センターが、現地調査・資料整理を2010～2015（平成22～27）年度、報告書作成を2015年度に下記の体制で実施した。

事業主体 沖縄県教育委員会 教育長 金武正八郎（2010年度）、大城浩（2011・2012年度）、諸見里明（2013

～2015年度)

事業主管 沖縄県教育庁文化財課

課長…大城慧(2010年度)、長堂嘉一郎(2011・2012年度)、新垣悦男(2013年度)、嘉数卓(2014年度) 副参事…鳥袋洋(2011・2012年度)

記念物班長…鳥袋洋(2010年度)・盛本勲(2011～2013年度)・金城亀信(2014・2015年度)

調整担当…久高健(指導主事・2010年度)、田場直樹(指導主事・2011～2014年度)

調査所管 沖縄県立埋蔵文化財センター 所長 守内泰三(2010年度)、大城慧(2011年度)、崎濱文秀(2012年度)、下地英輝(2013～2015年度)

調査班 副参事…鳥袋洋(2013・2014年度)、盛本勲(2015年度)

班長…金城亀信(2013年度)、盛本勲(2014年度)、上地博(2015年度)

調査担当…山本正昭(2010・2011年度)、瀬戸哲也(2012～2015年度)、大堀皓平(2012・2013年度)、金城貴子(2013・2015年度)、宮城淳一(2013～2015年度)、具志堅清大(2014年度)、亀島慎吾(2013・2014年度)

文化財調査嘱託員…山口こずえ・徳嶺里江・瑞慶覧長順(2010年度)、井上奈々・具志堅清大(2011年度)、平田拓也(2012年度)、池原悠貴(2012・2013年度)、新垣有一郎(2014年度)、又吉幸嗣(2013年度)、大屋匡史(2014・2015年度)、仲嶺真太(2014年度)、真謝太地(2015年度)、平良和輝(2015年度)

報告担当…瀬戸哲也、宮城淳一、大堀皓平、亀島慎吾

埋蔵文化財資料整理嘱託員(2015年度) 安次嶺沙織・嘉数渚・幸地麻美・鳥袋久美子・城間彩香・仲里由利・比屋根沙耶香・宮城かの子

調査協力・指導 安座間 充・伊藤 圭・伊藤慎二・伊波直樹・上里隆志・大城 晃・崎原恒寿・新里武光・関根史郎・仲宗根求・西路 章・宮城弘樹・山田浩久・吉田健太

地形測量業務委託 株式会社 琉球サーベイ(2010～2012年度)

発掘調査支援委託 株式会社 ティガネー(2012年度)、株式会社パスコ(2013年度)

自然科学分析委託 バリノ・サーヴェイ株式会社(2012・2013年度)

基準点測量委託 株式会社 パスコ(2014年度)

法面保護設計委託 株式会社 大洋土木コンサルタント(2014年度)

遺構保護業務委託 株式会社 リッチグリーン(2014・2015年度)

印刷製本業務 有限会社 中部電算フォーム(2015年度)

第3節 調査の経過

現地調査、資料整理の経過について、年度ごとに述べる。なお、各年度において文化財課より埋蔵文化財発見通知を那覇警察署へ提出しており、その日付をそれぞれ記しておく。

現地調査

2010(平成22)年度 埋蔵文化財発見通知(平成22年9月14日)

渡嘉敷村域である渡嘉敷島、前島、儀志布島、黒島において、6月1日～8月14日の間のべ32日にわたって踏査を行った。その結果、渡嘉敷島西海岸で貝塚後期土器が散布するアリガヌワラ・ハンリグチ遺物散布地、近世～近代の遺跡としては旧前島集落、渡嘉敷集落および阿波連集落周辺遺物散布地、各島の古墓群などを新規に確認することができた。船越原遺跡については、以前から情報を得ていたように爪形文土器包含層が露頭している状況を確認した。この露頭部分は長さ10m程度、高さ2mの北東を向く崖状となっており、その南西側に

包含層が残存している可能性が想定された。また、この地点を含めて4か所の遺物散布が確認されたので、まずは詳細な地形を把握する必要が考えられたため、地形測量を委託した。

2011（平成23）年度 埋蔵文化財発見通知（平成23年8月19日）

座間味村域である座間味島・阿嘉島・慶留間島・外地島・安室島・安慶名敷島・屋嘉比島・嘉比島において、7月5日～8月12日の間のべ18日にわたって踏査を行った。その結果、安室島では貝塚後期土器が散布するウフタ遺物散布地、近世～近代の遺跡として屋嘉比の集落・釜山跡、バナリ焼が散布する嘉比北遺物散布地などを新規確認した。船越原遺跡については、前年度に引き続き遺物散布範囲の地形測量を委託した。

2012（平成24）年度 埋蔵文化財発見通知（平成24年9月13日）

前年度、踏査できなかった座間味島・阿嘉島・慶留間島の古墓群について、6月12～15日の4日間の踏査を行った。また、6月26日～8月17日の間のべ18日にわたって、船越原遺跡の範囲確認調査を実施した。本年度は、2地点露頭と称した遺物包含層が露頭した範囲について、4つの調査区を設定した。その調査により、爪形土器包含層が露頭範囲の南側に残存していることが確認できた。その範囲について地形測量も委託した。

2013（平成25）年度 埋蔵文化財発見通知（平成25年10月14日）

7月9日～9月20日の間のべ22日にわたって、前年度に引き続いて船越原遺跡の範囲確認調査を行った。2地点については、爪形文系土器包含層の広がりを確認するために、6つの調査区を設定した。前年度よりも土器の出土は少なかったが、包含層の広がりを確認し、径約50mの範囲に残存していると考えた。また、石材が集中する調査区も確認された。その他、3地点で12か所、4地点で7か所の重機による試掘を行ったが、遺物包含層・遺構は確認できなかった。先述のように9月14日に現地説明会を実施した。なお、阿波連浦貝塚についても、過去の調査区の壁面が露出するなど崩壊が進んでおり、範囲確認調査を行う必要性を確認した。

2014（平成26）年度 埋蔵文化財発見通知（平成26年11月14日）

8月4日～9月11日の間のべ17日にわたって、阿波連浦貝塚の範囲確認調査を実施することにした。まずは、過去に行われた沖縄国際大学の調査区の範囲を抑えるためにトレンチを設定した。そして、過去調査で指摘されていた貝塚後1期土器包含層であるⅣ・Ⅵ層を確認することができた。それに並行して、船越原遺跡の2地点露頭の爪形土器包含層の法面を保護することを計画し、本年に国立公園に指定されたこともあり、環境省慶良間自然保護官事務所と工法について調整する必要が生じた。それにより、植生をできるだけ自然に回復させることが条件となり、植生を促すドレーンシート工法により法面保護を行った。

2015（平成27）年度 埋蔵文化財発見通知（平成27年9月29日）

6月30日～9月10日の間のべ14日にわたって、前年度に引き続き阿波連浦貝塚の範囲確認調査を実施した。前年度では確認できなかった最下層の遺物包含層であるⅧ層を確認するために、調査区を設定した。そして、調査終了後には、過去の調査区の壁面である東側の法面について、昨年度と同様にドレーンシート工法による法面保護を行った。これにより、現地調査を全て終了した。

資料整理作業

各年度において、現地調査で得られた遺物を洗浄し、写真や図面等の記録類について整理を行った。報告書作成は、2015年度に実施することになった。現地踏査で得られた遺物については、小片であっても遺跡の時期・性格を検討するために必要と考えて写真はほぼ掲載することにした。また、過去の分布調査等で採集された遺物もできるだけ掲載することにした。ただ、沖縄学生文化協会が採集した遺物は実見していない。

整理作業を経て作成した遺構・遺物実測図は当センターでパソコン上により作図ソフト（イラストレーター）を用いてデジタルトレース及びレイアウトを行った。その後、写真や文字原稿も含めて編集ソフト（インデザイナー）を用いてDTP印刷用の編集を行い、最終的には全てPDFファイルとして作成し、指名競争入札を行ったうえで決定した印刷製本業者へ入稿した。

第2章 位置と環境

地理的環境

慶良間諸島は、那覇市の西方海上約20～40kmの間に分布する大小30余からなる島嶼である。行政区としては、慶良間海峡を挟み東側に当たる渡嘉敷村と、西側の座間味村に分けられる。渡嘉敷村は東から神山島（かみやまじま）・クエフ島・ナガンネ島・ハテ島・中島（なかしま）・拜島（おがみじま）・前島（めーじま）・黒島（くるしま）・儀志布島（じしつじま）・離島（はなりじま）・城島（ぐすくじま）・渡嘉敷島（とかしきじま）・ウン島の大小10以上の島々からなり、座間味村は座間味島（ざまみじま）・屋嘉比島（やかんじま）・伊和加積島（いじゃかじゃじま）・嘉比島（がひじま）・安慶名敷島（あぎなしくじま）・安室島（あむるじま）・阿嘉島（あかじま）・慶留間島（げるまじま）・外地島（ふかじま）・久場島（くぼーじま）・奥武島（おーじま）などといった島々で構成されている。珊瑚礁の上に砂が堆積してできた3つの砂州島、神山島（0.13km）・ナガンヌ島（0.37km）・クエフ島（0.33km）は「慶伊瀬島（チービシ）」と総称され、那覇泊港から北西約10kmに位置する。伊和加積島は阿嘉島の北西600mに位置する9つの島からなる小島嶼群、奥武島は阿嘉島の南約3kmにある10余の島からなる小島嶼群の総称である（宮城2002、吉川2005）。

慶良間諸島の島々は山地主体の島で、極めて平地が少ない地形が特徴である。渡嘉敷島（15.29km）は南北に約9km、東西幅が最大2.5kmの慶良間諸島最大の島で、最高点の赤間山（227.3m）をはじめ、200mを越す山は11を数え、海岸から直接急斜面になり、山地をつくっている（渡嘉敷村1987）。儀志布島（0.49km）は100m超の海崖が発達し、低地は崖下に僅かに存在する砂浜である（宮城2002）。前島（1.6km）には那覇港から望むと台地状に見える標高100m超の丘陵の尾根があり、北東側に海岸段丘を有する。前島の海岸低地にはかつて集落が存在したが昭和37（1962）年以後は無人島となった。座間味島（6.66km）は、海拔160.7mの大岳や143.5mの番所山といった100m前後の山が連なった地形で、北海岸側は山地が海に突っ込む急な地形となっているのに対し、南海岸側は傾斜が緩やかで沖積低地が発達、そこに集落が形成されている。屋嘉比島（1.26km）は山地により東西に二分され、北と南側の海岸は急崖地形となっているが、唯一の平地が東海岸側に存在する。阿嘉島（3.82km）は中央部を187.2mの大岳、165mの岳原、158.3mのクポー岳といった山々が占め、北東・北西海岸側は急な崖を成し、南海岸の阿嘉と岳原・クポー岳の南東側は平坦な地形となっている。慶留間島（1.15km）は北東部に147.4mの御岳を有し、山地は海岸で断崖地形をつくっているが、南東側は砂丘地になっている場所があり、そこに唯一の集落がある。久場島（1.55km）は屋嘉比島の南約3kmに在り、島の南西側には270.1mの慶良間諸島最高所の岳を有し、西から南にかけての海岸側には崩落崖が多いが、北東には海拔50-60mの平坦面が存在する。安室島（0.73km）・嘉比島（0.13km）・安慶名敷島（0.1km）は低島で、安室島と嘉比島は二つの丘陵からなる島が砂州で繋がった形状をしており、安慶名敷島は南側に丘陵、北側に海岸低地を有する地形となっている（座間味村1989、宮城2002）。諸島の地質は古第三紀中生層の砂岩や千枚岩で構成され、低地は沖積層や砂丘で成っており、これは沖縄本島北部の国頭山地と共通する地質である（宮城2002）。また、屋嘉比島と久場島には銅鉱脈が在り、大正期にはこれらで産する銅鉱の生産量が県が生産量の99%を占めていた（座間味村1989）。

山地にはイタジイなどの自然林が残り、国指定天然記念物に指定されている生物ではカラスバトやアカヒゲ、マダラトカゲモドキ、屋嘉比島・慶留間島・阿嘉島にはケラマジカが生息している（座間味村1987）。渡嘉敷島の谷間には清流が多いが、開けた川原やマングローブ林、河口部の瀧みが見られない（渡嘉敷村1987）。慶良間諸島の海岸線は屈曲に富むリアス式海岸で、切り立った崖と砂浜が交互に連なる風景をもち、周辺の海は透明度が高くサンゴ礁に囲まれている。座間味村の北西部には据礁と海岸の間にあるイノー（礁池）が多くみられ、湾

入が大きい「阿護の浦（あぐのうら）」は好鰯地とされる（宮城 2002、小嶺・仲松 1986）。

歴史的環境

慶良間諸島にはかつて多くの呼称があった。琉球王国の歴史の中での初見は、英祖王 5（1264）年に「慶良間島（きらまじま）」として中山に入貢したという記録が『球陽』（1745 年）にあり、渡嘉敷島と座間味島、その周辺島嶼をまとめて「慶良間島」として扱われている。『海東諸國紀』（1471 年）に収録されている「琉球国図」の中に「計羅婆島即百島（けらふあじま、すなわち、ももしま？）」との表記があり、これが現在慶良間について最も古い呼称とされる（座間味村 1989）。また、「馬齒山（ぼしざん）」とも別称され、徐葆光の『中山伝信録』（1721 年）等では現在の渡嘉敷村域を「東馬齒」、座間味村域を「西馬齒」とも称した（沖縄県 1971・1972、宮城 2002、小嶺・仲松 1986、座間味村 1989）。1606 年に渡来した冊封使の夏子陽は『使琉球録』の中で「溪頼末」と記し、1603 年に来琉した僧、袋中上人は「京馬・景満」と『琉球神道記』に表記した。1611 年の薩摩藩による検地により交付された「琉球国知行目録」には「計羅摩」と出てくる。1816 年に来琉したバジル・ホールは『大琉球島探検航海記』に“Amakirima”と記録した（座間味村 1989）。

王府時代の間切区分は渡嘉敷・阿波連・前慶良間（後に前村と改称）・小嶺の 4 つの村が渡嘉敷間切、座間味島の座間味・阿佐・阿真の 3 つの村と阿嘉島・慶留間島の 2 島が座間味間切とされる（宮城 2002）。中山と唐を往来する時には慶良間諸島は重要な中継地となっており、渡嘉敷村・阿波連村の入江で風待ちを行う際には入り組んだ海岸線をよく知る水先案内人が必要で、渡嘉敷間切・座間味間切では唐船乗りや薩摩と往来する船の乗組員を多く輩出している（宮城 2002）。関連して、座間味島では冊封船や外国船の往来を中山に知らせるために番所山などから狼煙をあげていたという。また、慶良間島は王府時代には軽犯罪者の流刑地、他島へ送られる流人の中継地点でもあった（座間味村 1989）。

明治 12（1879）年の慶藩置県に伴い、渡嘉敷間切・座間味間切は沖縄県の管轄となり、明治 41（1908）年には沖縄県及島嶼町村制により渡嘉敷村と座間味村が設立される（宮城 2002）。昭和 19（1944）年那覇に日本軍の第 32 軍が創設された半年後に、慶良間諸島は特攻艇の秘匿基地となる。翌年の昭和 20（1945）年 3 月 23 日からは米軍による爆撃や艦砲射撃が行われ、同月 26 日には阿嘉島を皮切りに上陸した。この戦闘の中、多くの島民が集団自決に至った（座間味村 1989、渡嘉敷村 1990）。

慶良間諸島ではかつてカツオ漁と鯉節生産業、銅鉱を採掘する鉱業、薪木の生産が盛んであった。明治 30 年代にカツオ漁を中心とする漁業が導入され、島民は富を築いた。近海のカツオの減少により遠方のフィリピン方面にも出漁していたが、第二次大戦により壊滅することになる。戦後、米国政府の救済等により復活したものの、若者の島外流出や米軍基地作業による人手不足により、カツオ漁と鯉節生産業は廃業してしまう（渡嘉敷 1990）。鉱業については、大正 3（1914）年の第一次世界大戦の勃発により銅価が上がったのを機に、慶良間の銅山採掘の出願が続出し、本格的な採掘が行われるようになった。同大戦の終結により銅価が暴落し衰退したものの、昭和 14（1939）年の第二次世界大戦の勃発によって銅価が回復したことにより、再び採掘が活発化する。しかし、戦中は人手不足や連絡船を失うなどの被害を受けて採掘は困難になり、戦後復活することはなかった。島の山林からは薪が産出され、那覇に供給されていた。薪木は「キラマダム」と呼ばれ、火付きが良く、煙も出ずよく燃えるものであった。カツオ漁業が軌道に乗ると薪木の伐採は下火になったが、鯉節製造の燃料としての需要ができ、第二次大戦終戦直後は島尻部の各市町村で薪木が不足したため、座間味村が薪木を供出し、本島南部の各家庭に供給されている（座間味村 1989）。

昭和 53（1978）年には慶良間諸島が沖縄海岸固定公園に指定され、島々の自然に魅せられた観光客を相手にしたホエール・ウォッチングやダイビングサービス、民宿といった観光業が営まれており、現在の島の経済を支えている。平成 26（2014）年には、慶良間諸島国立公園となり、海外からの観光客も増加し始めている。

第3章 今回の調査と遺跡の取り扱い

第5章で詳述するように、今回の詳細分布調査により慶良間諸島においては83遺跡を数えることになり、新規に確認したものは29遺跡となる。これらの遺跡については、原則的に文化財保護法に基づくことになり、また埋蔵文化財に関する文化庁の指導や本県の基準等により取り扱っていくことになる。また、今回の調査により既往遺跡の再検討や名称変更なども生じている。これらの遺跡、埋蔵文化財の取り扱いについての留意事項を下記のとおりまとめる。なお、本件の埋蔵文化財調査基準等完形資料を付編として巻末に付した。

文化財保護担当部局と埋蔵文化財分布調査 文化財保護は、国の機関としては文化庁（「文部科学省設置法」）、地方自治体においては教育委員会（「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」）が担当部局となっている。文化財の種類として埋蔵文化財があり、その保護の一環として遺跡の存在をあらかじめ把握する必要性があり、その手段として分布調査が位置づけられる。この分布調査については、地域に密着して状況を把握しやすい市町村が担当するべきだが、その文化財保護体制が不十分な場合は当面県が実施することが望ましいとされている（「埋蔵文化財の把握から開発事前の発掘調査に至るまでの取り扱いについて」以下、「平成10年報告」とする）。本県でも、「沖縄県埋蔵文化財事務処理規則」に基づき、発掘調査等埋蔵文化財に関する事項は、教育長が定めることになっている。それにより、所管課は教育庁文化財課、調査普及は埋蔵文化財センターが担当しているところである。今回の慶良間諸島における分布調査は、これらに基づいて実施したものである。

周知の埋蔵文化財包蔵地 文化財保護法第95条には、国及び地方公共団体は、周知の埋蔵文化財包蔵地について資料の整備・周知の徹底を図ることとする。この周知の埋蔵文化財包蔵地とされたものが、文化財保護法に基づく手続きが適用されることになり、その保護のために必要に応じて発掘調査等が行われることになる。そして、県が市町村と調整・協議のうえで、この周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲を決定することになる。この範囲として、おおむね中世までに属する遺跡は原則的に対象となるが、近世・近現代の遺跡については各地域に応じてその取扱いを検討することとなっている（平成10年報告）。

沖縄県における埋蔵文化財の取り扱い 本県においては、県教委が平成18年度に「沖縄県埋蔵文化財発掘調査基準」が策定されている。これは平成8年に策定され平成27年までに数度の改正を行われている「九州地区埋蔵文化財発掘調査基準」に基づいて、本県の状況により考慮したものである。ただ、対象とする埋蔵文化財としては、平成10年報告と同様であるが、中世と近世は1609年の慶長の役、近世と近代は1879年の廃藩置県と具体的な年代を挙げている。

慶良間諸島における近世・近代の遺跡の取り扱い 後述するように今回新規に確認した遺跡の多くは、近世・近代の遺跡である。これらを全て埋蔵文化財として取り扱えるかは、更なる情報やまたは関係者との調整が必要と思われる。今回の報告書を基に、更なる調査が行われ、関係者の協力を得られるように努めていくものである。

遺物散布地 今回、表面踏査で遺物の散布を確認できた範囲については遺物散布地と呼称することにした。先史時代では渡嘉敷村域のパンリグチ・アリガヌワラ、座間味村域のウフタの遺物散布地が相当する。これらは、現時点では採集される遺物は数10点以下と非常に少ないため、今後の試掘調査等により更なる情報を収集する必要がある。また、アーガー遺物散布地は、以前遺跡とされていたが過去および今回の採集遺物が少ないため、遺物散布地と称した。また、クラリアフなど数点以下の遺物採集されたのみの場所は、今回は遺跡の数に含めずに遺物採集地点として注意喚起をするのに留めている。

伝承地 かつて「座間味村史」に掲載されたカンジャー森遺跡については、鍛冶屋があったとされる伝承以外には、遺物の散布、明確な遺構の存在は全く確認できなかったため伝承地として遺跡の数には含めていない。また、前島旧集落の祖先の古島集落も伝承以外には明確ではなかったため、これも伝承地とした。

第4章 遺物の概要・分類

今回の調査では、慶良間諸島の各遺跡で地表面の踏査により採集（表採）、船越原遺跡および阿波連浦貝塚の範囲確認調査により土器、石器・石材、陶磁器、貝類遺体等の遺物が得られた。それに合わせて、県教委による1975・1976年度の分布調査（県教委1977）、1980・1981年度の古座間味貝塚の範囲確認調査（県教委1982）、また同時期に行われたグスク分布調査時（県教委1983）などに採集されたと思われる出土遺物があり、当センターに保管されていた。その他、宮城朝光（宮城1979）、伊藤圭・久貝弥嗣・山田浩久（伊藤ほか2010）が採集、渡嘉敷村歴史民俗資料館蔵の船越原遺跡、沖縄県立博物館・美術館保管の渡嘉志久貝塚・シルグスク・神山島などの資料について、写真・図を掲載した。なお、沖縄学生文化協会による踏査資料や両村史掲載資料（座間味村1989、渡嘉敷村1990）は、実見していないが参考のため図・写真を引用した。

以下、各遺物の概要・分類を記述する。なお、詳細は遺物観察表（第16～24表）を参照していただきたい。

土器 先史時代（縄文～平安並行時代）の土器群の諸型式が一定量得られているが、細分する場合にその表記が煩雑となる。そこで、土器編年・型式については、基本的に伊藤慎二・新里貴之のものに基づいた（伊藤・新里ほか2014）。また、グスク時代・近世の土器は小片であり細分できないものが大半であった。個々の遺物観察においては、判別できる範囲で型式名等を記載した。以下、今回出土した土器型式・種類について列記する。

貝塚時代前期（縄文時代）相当土器群

爪形文系 野国タイプ：指頭痕、縦位弓状、爪形文や縦位沈線文が縦長に連続するもの。 **ヤブチ式**：指頭痕を基調とし、概ねD字状を呈し上下段の連続が意識されないもの。 **東原式**：爪形文が施文され、上下段の連続が意識されないもの。

条痕文系 曾畑式：平口縁と波状口縁があり丸底で、器面全体に幾何学の沈線文を施文する。 **室川下層式**：尖底で口縁横位に列点文や羽状文、斜行文を施文する。 **神野A式**：短小刻文を口縁及び胴部に施文し、口唇部に刻目を施文する。

隆帯文系 面縄前庭式：頸部がしまり肩から胴部にかけて張り出し、底部は乳房状尖底や平底状。2条の刻目突帯を頸部を挟んで上下にめぐらせ頸部間に突帯や複線鋸歯文を施文する。胴部にも同様の文様を施文する。

籠目文系 嘉徳Ⅱ式：平底の深鉢で、外反口縁と直立口縁があり、波状口縁と平口縁がある。文様は沈線文のみで構成される。

点刻線文系 伊波式：平底の深鉢で、ゆるやかに外反する波状口縁。叉状工具による各種文様を施文。 **荻堂式**：平底の深鉢で波状口縁や頸部が強くびれるものもあり、口縁部に瘤状突起を有するものもある。伊波式と同様に叉状工具を用いて文様を施文するが、連続した文様を意識したものが主体を占める。

肥厚口縁系 室川式：幅広の口唇部をもち、平底の深鉢で有文と無文土器がある。胎土に特徴があり、石灰質微粒を多く含むものと石灰質細礫や貝殻細片などが多く混入するものがある。

貝塚時代後期（弥生～平安並行時代）相当土器群

無文尖底系 喪（深鉢）・壺・鉢が基本器形である。 **阿波連浦下層式**：リボン状突起、「く」の字状の頸部の特徴である。 **浜屋原式**：乳房状尖底が主体となる。外面はナデ調整を丁寧に行い、内面は指オサエ痕が残る。胎土には角閃石が混入し、直口口縁が主体となる。 **阿波連浦Ⅳ層土器群**：浜屋原式の器形的特徴を持つが胎土や調整は大当原式の特徴をもつ土器群（宮城2005、2009）。 **大当原式**：尖底で、器面調整が粗く粗造で粘土紐接合部が隆起する。

弥生土器 入来Ⅰ式：大きな断面三角形に近い口縁で、三角突帯部が器壁の厚さを超え、下面付け根部分に接合線が残る（中園1997）。

第3表 阿波連浦貝塚出土貝類遺体

巻貝 No.	遺跡・地点・層	阿波連浦貝塚																合計										
		1期遺体								2期遺体																		
		表探	IV層 貝類集中	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	表探	IV層 貝類集中	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	実	残									
1	ウツノガイ科	ニシキウツノ	1						1							15	5	20	0	0								
2	ウツノガイ科	オオベッコウガイ																0	0	0								
3	ウツノガイ科	ヨマガサ																0	0	0								
4	ヨマガサガイ科	オオベッコウガサガイ	4	3	5	1	2	1	1	4	4	2	27	8	8	6	4	12	1	10	44	152						
5	ヨマガサガイ科	ベッコウガサガイ	1	1	3					1	1	1	12	1	1	7	2	4	5	2	2	25	46					
6	ヨマガサガイ科	イホナゴ	2	3						4			15	2	4	12	4	7	9	15	31	1	2	42	25	44		
7	ヨマガサガイ科	マナゴ																						0	0	1		
8	ヨマガサガイ科	キツノガイ	1	1																					0	0	1	
9	ヨマガサガイ科	マナゴ	1	1																					0	0	1	
10	ヨマガサガイ科	キツノガイ																								0	0	1
11	ヨマガサガイ科	キツノガイ																								0	0	1
12	ニシキウツノ	ニシキウツノ	3	2																						1	2	14
13	ニシキウツノ	キツノガイ																								0	0	1
14	ニシキウツノ	キツノガイ																								0	0	1
15	ニシキウツノ	キツノガイ																								0	0	1
16	ニシキウツノ	キツノガイ																								0	0	1
17	アマモボナ科	アマモボナ	1																							2	1	0
18	アマモボナ科	アマモボナ	1																							1	2	10
19	アマモボナ科	アマモボナ	6	1	1	1																				22	3	9
20	オニシキウツノ	オニシキウツノ																								2	0	3
21	オニシキウツノ	オニシキウツノ																								0	0	1
22	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
23	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
24	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
25	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
26	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
27	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
28	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
29	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
30	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
31	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
32	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
33	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
34	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
35	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
36	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
37	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
38	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
39	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
40	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
41	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
42	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
43	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
44	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
45	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
46	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
47	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
48	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
49	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
50	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
51	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
52	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
53	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
54	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
55	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
56	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
57	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
58	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
59	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
60	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
61	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
62	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
63	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
64	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
65	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
66	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
67	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
68	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
69	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
70	タマキビ科	タマキビ																								1	0	0
71	タマキビ科	タマキビ																										



写真1 巻貝(1)

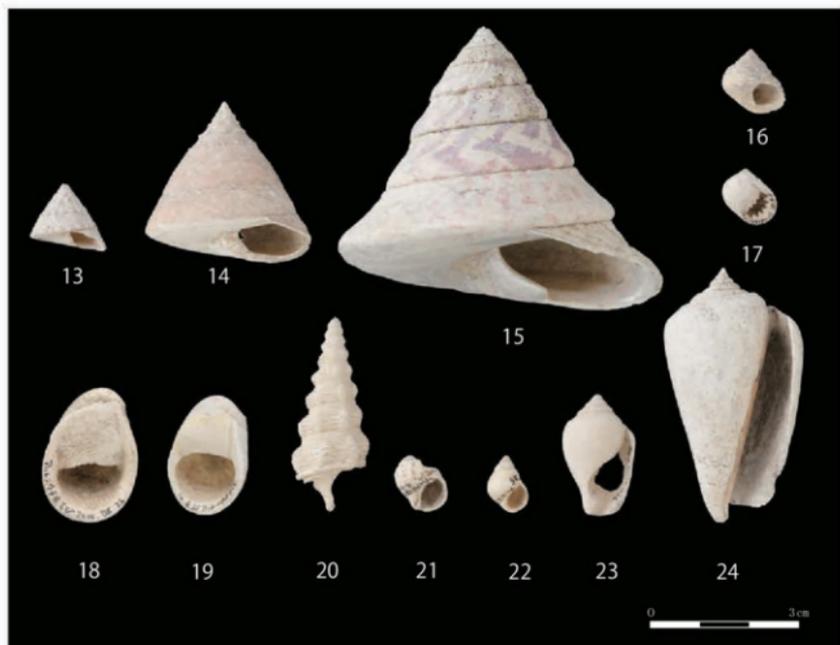


写真2 巻貝 (2)

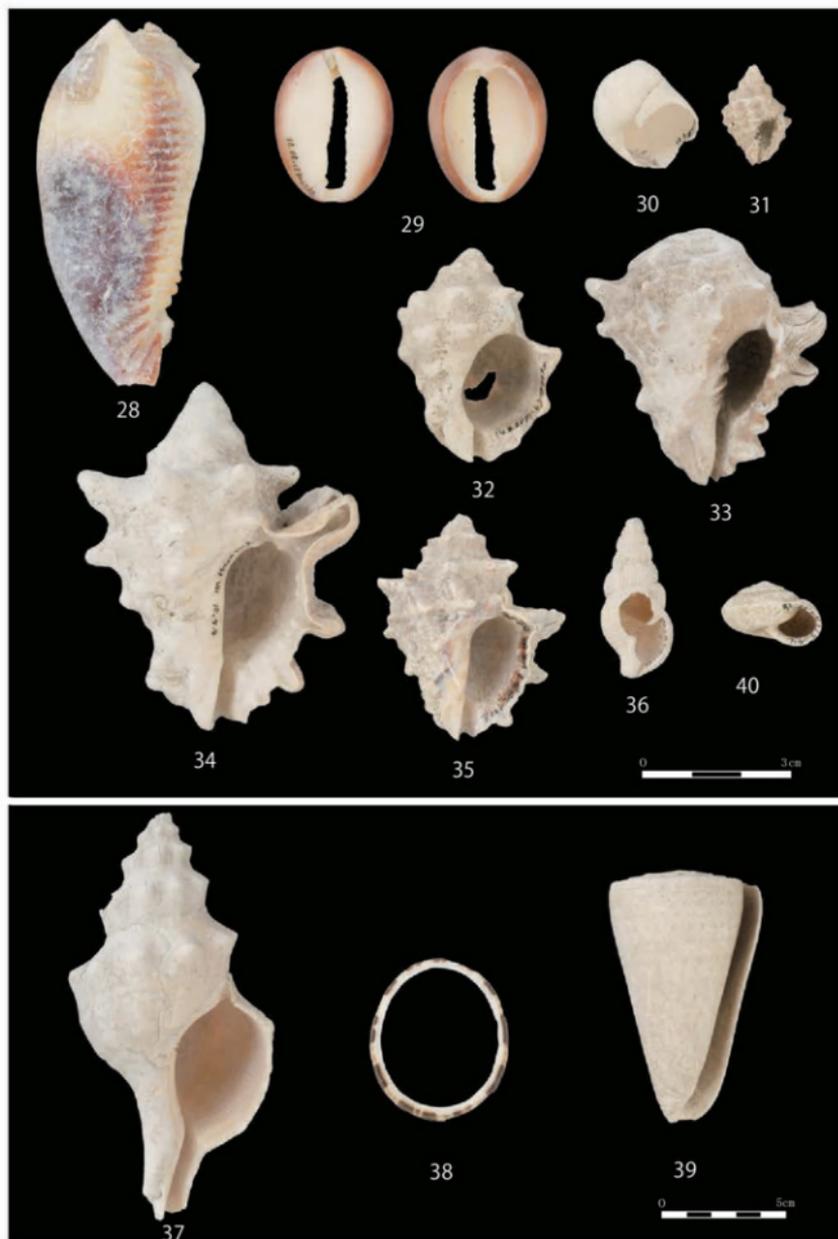


写真3 巻貝 (3)

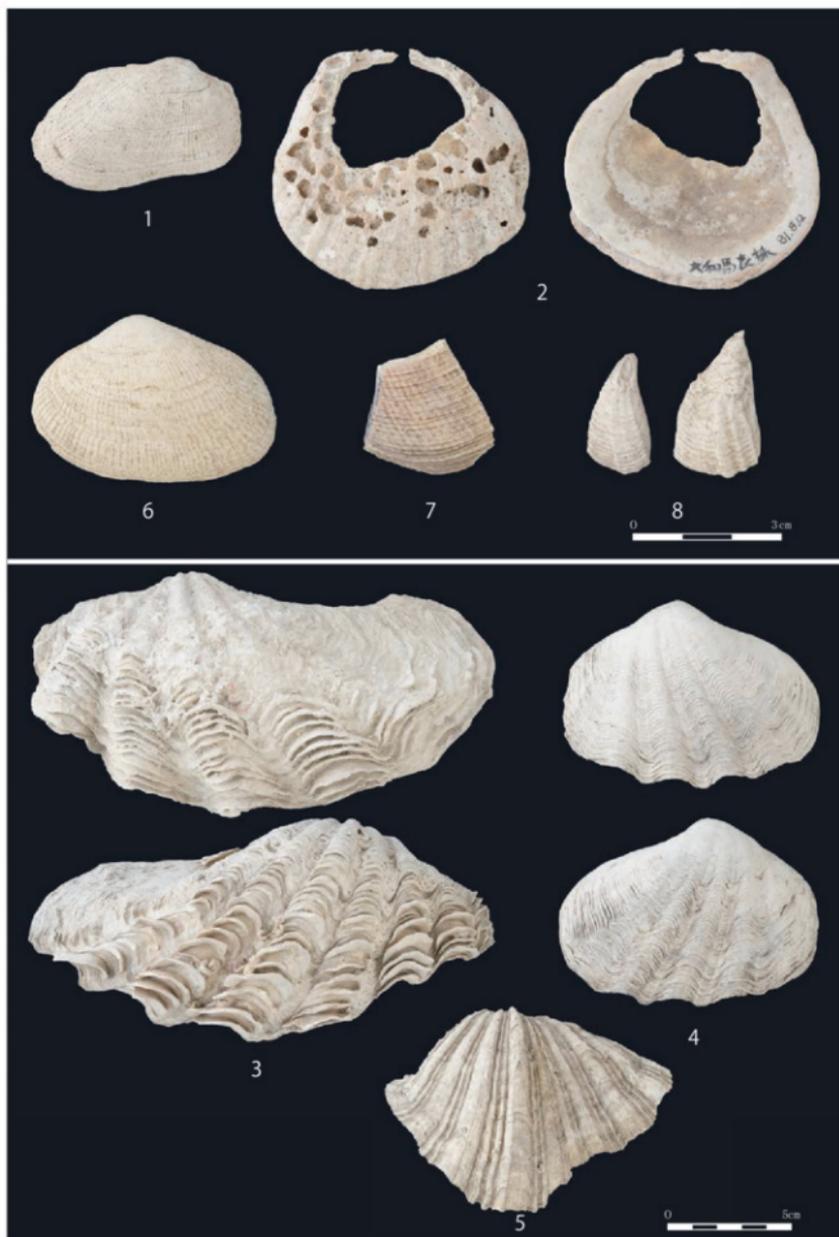


写真4 二枚貝

第5章 慶良間諸島の遺跡の分布と概要

慶良間諸島において、今回の調査により新規に確認できたものは29遺跡、渡嘉敷村域37遺跡、座間味村域46遺跡、合計83遺跡を数えることになった。遺跡もしくは遺物が確認されたものは、渡嘉敷島、儀志布島、前島、神山島、座間味島、屋嘉比島、安室島、嘉比島、安慶名敷島、阿嘉島、慶留間島の11ヶ所である。なお、久場島と神山島については今回天候・スケジュールの都合により踏査ができなかったが、後述するように神山島については過去の表探遺物を確認している。一方、黒島・外地島については現地踏査を行ったが、遺跡・遺物は確認できなかった。

以下、各島の様相を記述するが、前章で整理したように、沖縄県における埋蔵文化財の対象としては、先史〜グスク時代以前の遺跡が原則的となる。その数は、渡嘉敷村域10遺跡、座間味村域20遺跡、合計30遺跡となる。一方、近世以降の遺跡については、表面踏査を行ったのみであるので、現時点で全て埋蔵文化財の対象として取り扱えるかについては、更なる情報が必要と考えている。そこで、先史〜グスク時代、近世〜近代・時代不明の2つに分けて説明する。なお、先史〜グスク時代が主体である遺跡において、近世・近代の遺物・遺構がある場合は前者の中で触れる。

以下、遺跡に付した番号は連番とし、分布図に対応している。ちなみに、新規確認とした29遺跡は、県教委及び当センターの調査報告書（県教委1977・1982・1983、沖埋文2004・2010・2015）、2004年度に公開された沖縄県内遺跡地図（沖縄県地図情報システム <http://gis.pref.okinawa.jp>）に掲載されていないものである。

1. 渡嘉敷島

南北8.6km、東西2.7kmの規模を図る渡嘉敷村における最大の島で、現在は本島のみが有人である。全体が標高約100～200mの丘陵になっており、その丘陵間に短い砂丘が平地として見られる。その中で比較的平地が見られるのが、渡嘉敷集落と阿波連集落である。特に前者は、少なくとも近世以降は港として利用されており、那覇に最も近い島として、海上交通における要所であった。

先史〜グスク時代 9遺跡

先史時代には、丘陵間に挟まれた海岸砂丘に営まれる。グスク時代の遺跡は、砂丘背後の丘陵に営まれる東上原遺跡が比較的陶磁器が散布している。その他、グスクと称されるものについては、その地形の特徴から安瀬宜グスクについては当該期に遡る可能性が高いと判断した。

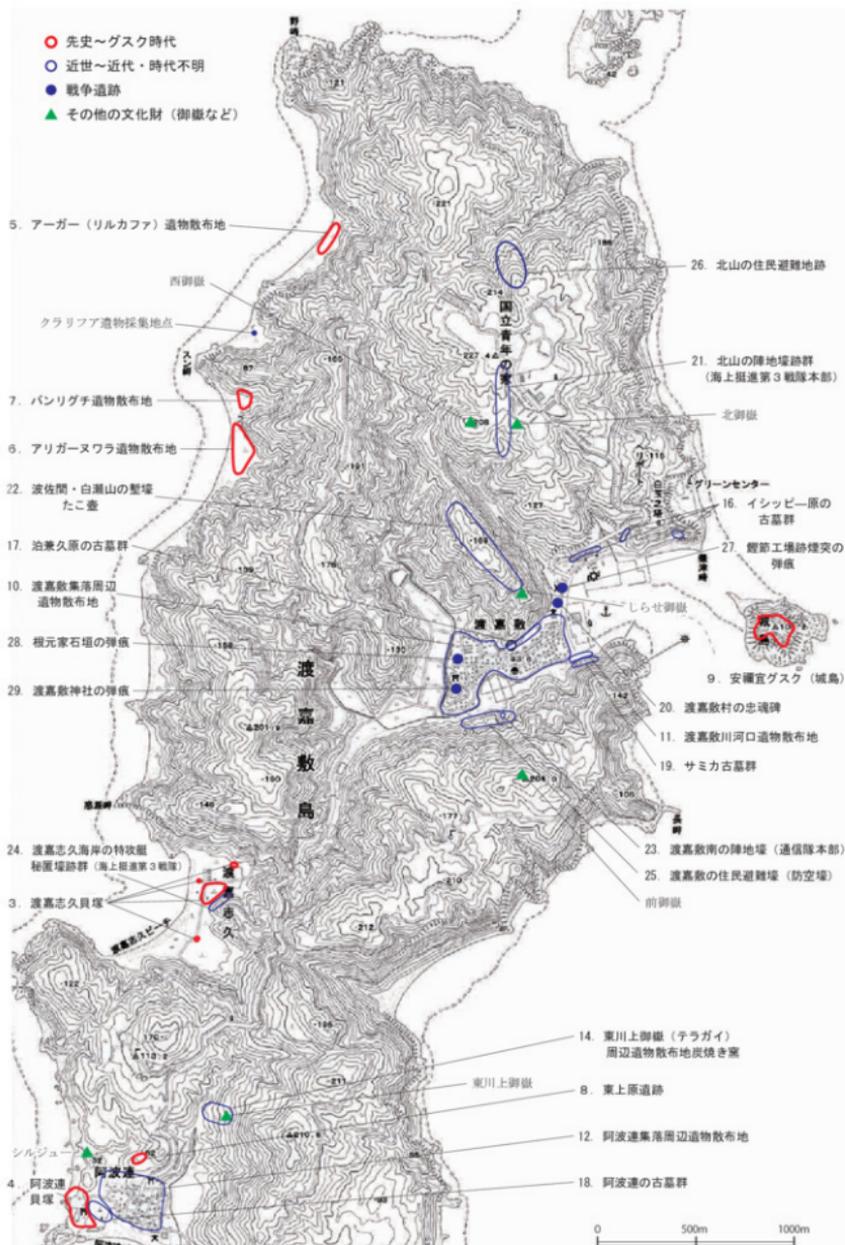
(1) 船越原遺跡

渡嘉敷島の最南端に位置し、この地点は東西の幅が最も狭い場所であり、両岸は砂丘になっている（第4図）。これまで、東海岸が概ね縄文時代前〜後期の遺物散布・包含層、西海岸が弥生並行時代の遺物散布が確認されていた（県教委1977・宮城朝1979・中村1990・伊藤ほか2010）。今回の範囲確認調査により、東海岸で縄文時代前期の爪形文系土器の包含層が残存しており、その範囲を確認することができた。

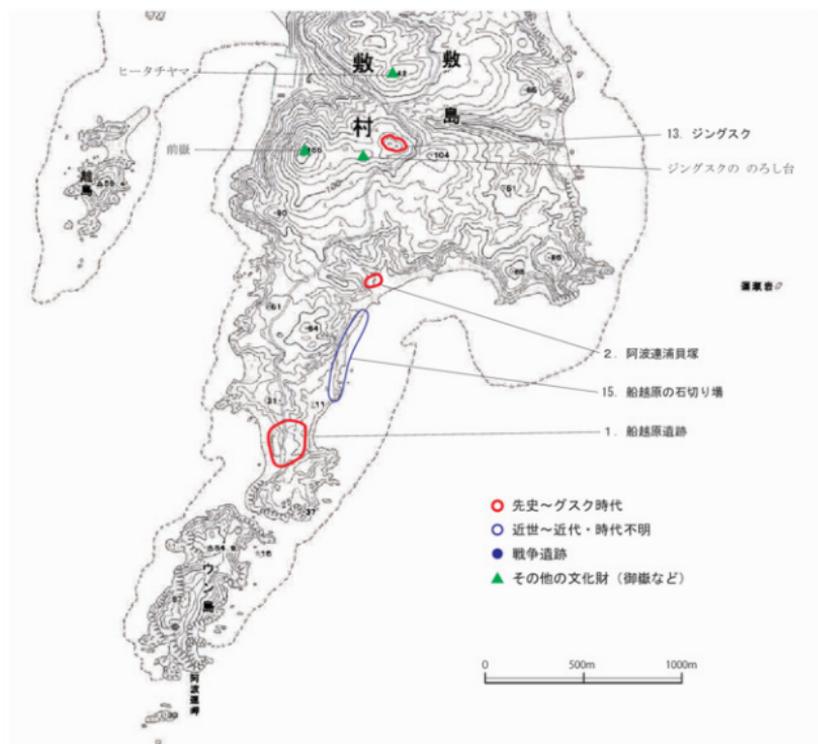
なお、本遺跡は西に約45km離れた同様の爪形文系土器が出土する嘉手納町野国貝塚などで多く見られる石斧等の素材である緑色片岩等の転石が多く見られることから、その石材給付地として注目されてきた。今回の調査で、石斧片が1点表探でき、なお爪形文系土器包含層前後において、石材の集中地点も確認できた。これまでの見解を裏付けた成果として重要なものと考えられる。詳細は第6章で後述する。

(2) 阿波連浦貝塚

阿波連集落より南東約2km、三方が標高約60mの丘陵に囲まれた砂丘地に位置する。前項の南西約1kmに位



第3図 渡嘉敷島北側の遺跡分布図



第4図 渡嘉敷島南側の遺跡分布図

置する船越原遺跡からは直接見ることはできないが、東端の岬は見る事ができる（第4図）。なお、遺跡の東方の谷部には、水流が砂丘際まで常に確認できている。船越原遺跡では、このような水流が確認できないことは対照的である。

県教委の1976年分布調査により、大規模な採砂工事から後期土器、貝殻等が大量に得られたことから確認された。その後、沖縄国際大学の試掘調査、確認調査により貝塚後期の尖底土器群が良好に得られた遺跡である（沖国大1999・中村1990）。今回の調査でも概ね同様の成果が得られたが、これまでより古い土層を確認し、山形口縁の無文土器が得られ前4期のものと考えている。詳細は第7章で後述する。

(3) 渡嘉志久貝塚

渡嘉敷島の西海岸中央部にある渡嘉志久集落がある砂丘地に位置し、現状では畑地において土器が少量散布している（第3・5図、写真5・6）。沖縄学生文化協会による1966年時点の報告（『郷土』8号）では、かなり広範囲にわたって土器が散布されたようで1,023点の土器片が採集されたそうである（第9図 中村1990）。今回、南方約200mの地点でも土器を表採している。

表採遺物については、今回の資料と合わせて県教委の1976年時表採資料（第6・7図、遺物図版1・2-1～44 県教委1976）、多和田真淳が表採した沖縄県立博物館・美術館所蔵資料（第8図、遺物図版3・4-45～61・63～67 多和田・知念1985）掲載した。なお、沖縄学生文化協会の表採資料については実見できてい



写真5 渡嘉志久集落と阿嘉島



写真6 渡嘉志久貝塚近景

ない。これらは、貝塚後期土器、グスク土器である。特に、貝塚後期のくびれ平底系が多く、底部が厚くなったタイプが多く出土している。なお、石器も表採されている。

(4) 阿波連貝塚

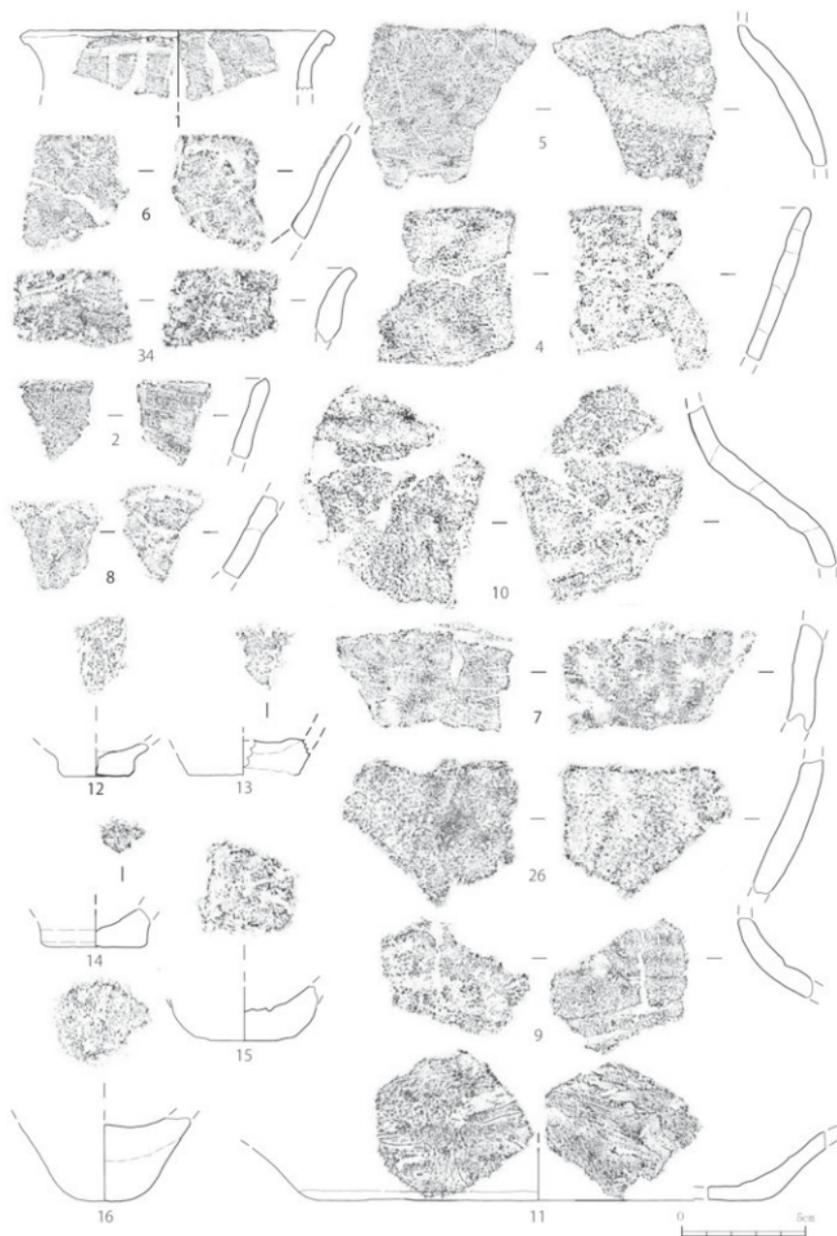
阿波連集落の南西にある通称クハ山と称される岩山西側の砂丘地一帯である(第3・16図)。沖縄学生文化協会の踏査時点では、遺物包含層と考えられる黒色土が見られたとのことである(中村1990)。その時点では682点の土器の表採があったようである(第13図)。県1976年踏査での遺物を報告する(第11図・遺物図版8-167~178 県教委1977)。これらの内容からは、後期土器のうちくびれ平底系が主体である。

(5) アーガー(リルカファ)遺物散布地

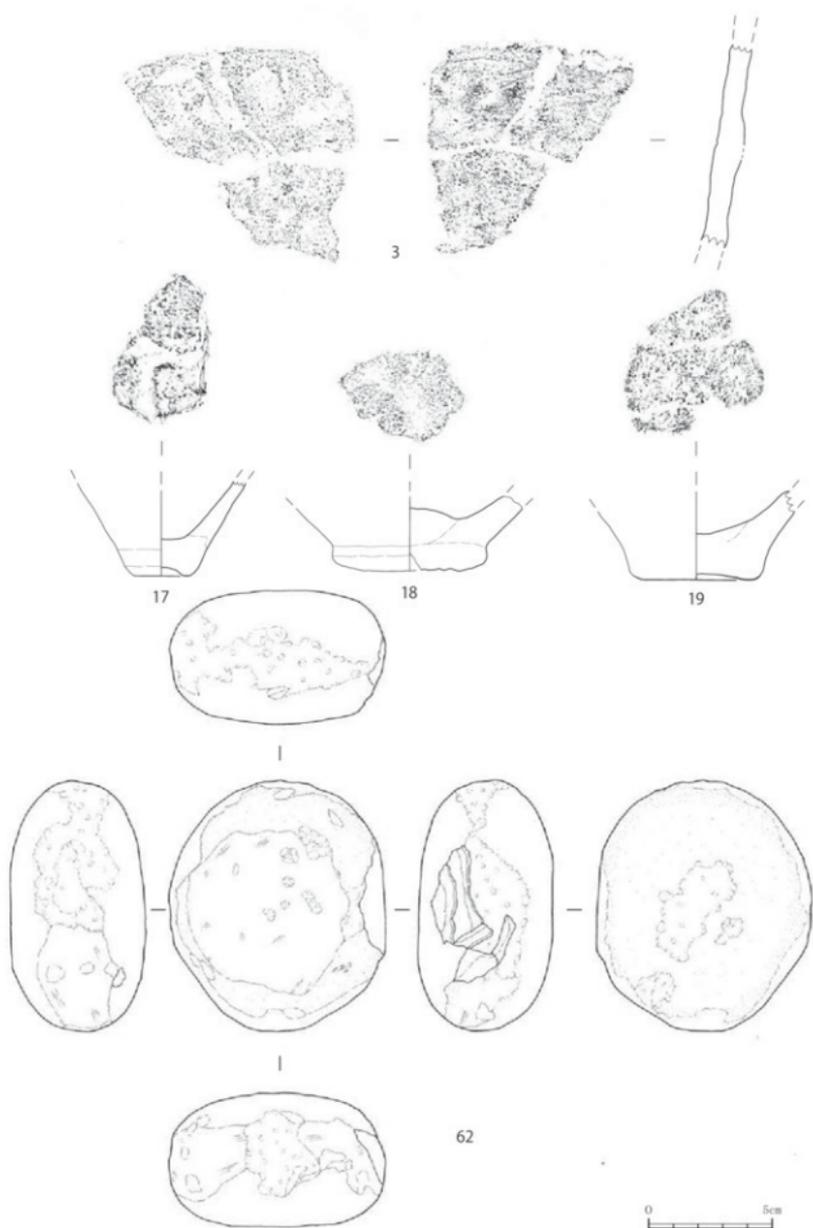
渡嘉敷島の西海岸北方の砂丘奥部に位置しており、沖縄学生文化協会により発見されアーガー遺跡と称されていた(第3・10図、写真10)。しかしながら、その時点でも採集された土器



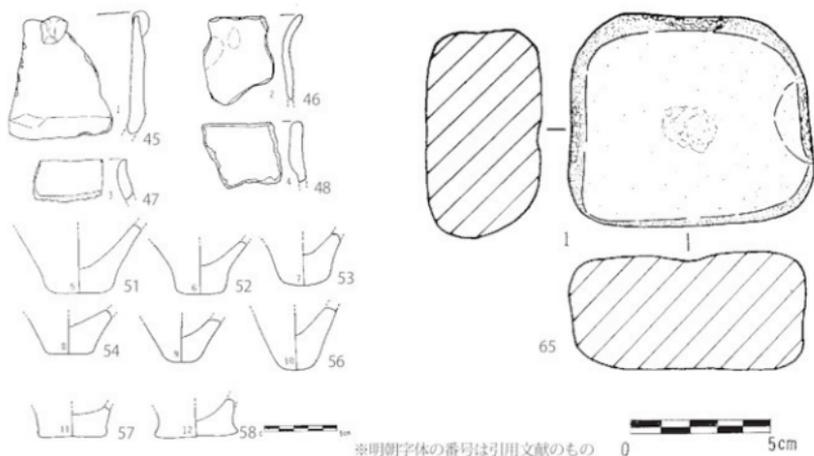
第5図 渡嘉志久貝塚の範囲



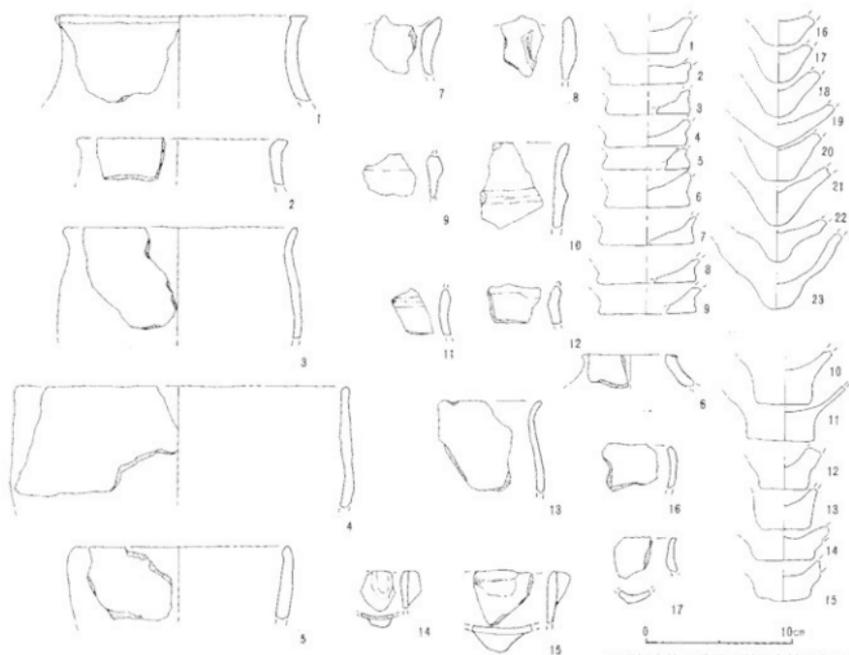
第6図 波嘉志久貝塚表採資料(1)



第7図 波嘉志久貝塚表探資料(2)



第8図 渡嘉志久貝塚多和田真淳採集資料（沖縄県立博物館・美術館保管）資料（多和田・知念 1985）



第9図 渡嘉志久貝塚沖縄郷土文化協会採集資料（『郷土8号』所収図 本図は渡嘉敷村 1990 より）



第10図 アーガー・アリガースワラ・バンリグチ遺物散布地の範囲

は60点と少なかった(第13図 中村1990)。今回も10数点で(第11図、遺物図版5-71~84)、これまで試掘調査を行っておらず、現時点での遺跡の内容としては遺物散布地が望ましい。本地点はリルカファとも呼称されていることから、アーガー(リルカファ)遺物散布地とする。

なお、このアーガー遺物散布地より丘陵を挟んだ南方500mに位置するクリラファと称される砂丘後背地では、ヤコウガイ蓋が1点表採した(第3・10図)。しかし、土器等は確認されておらず、埋蔵文化財包蔵地とするには情報が不足している。今後、この地点も留意されたい。

(6) アリガースワラ遺物散布地 新規確認

アリガースワラと呼ばれる砂丘後背地に、後期土器や近世陶磁器、貝が広範囲に散布していたのを今回新たに確認した(第3・10・11図、遺物図版5-85~102、写真7・9)。貝はサラサバテイラ、ヤコウガイ、チョウセンサザエなどが4~5か所に分散して見られた。



写真7 アリガースワラ・バンリグチ遺物散布地



写真8 バンリグチ遺物散布地

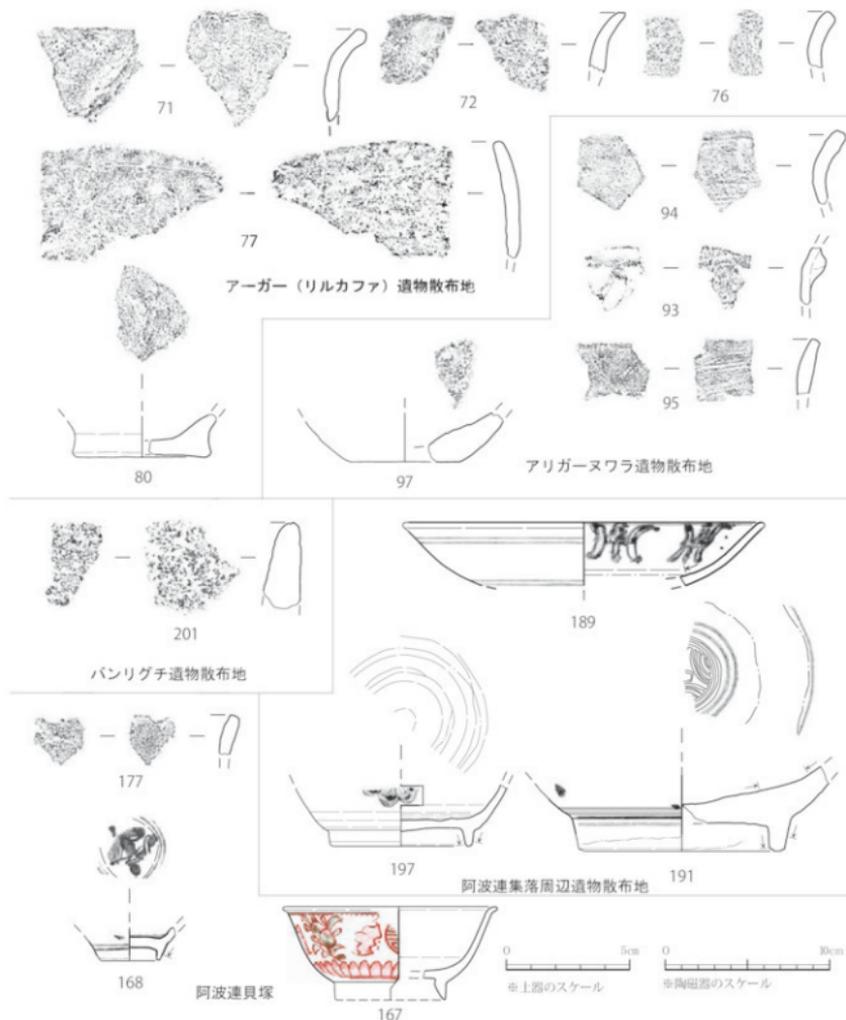


写真9 アリガースワラ遺物散布地 (左: 全景 右: 土器散布状況)



写真10 アーガー遺物散布地 (左: 全景 右: 土器散布状況)





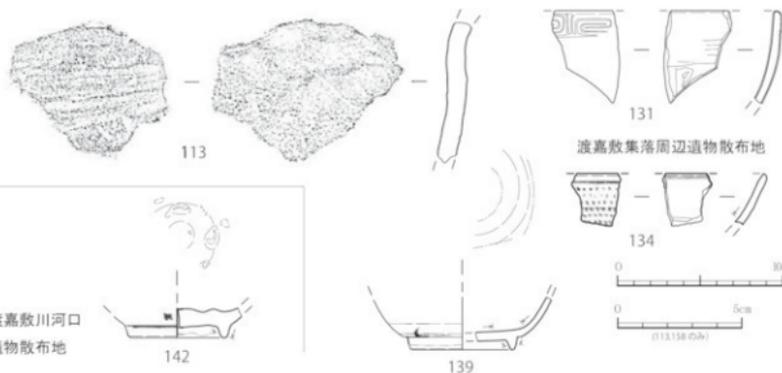
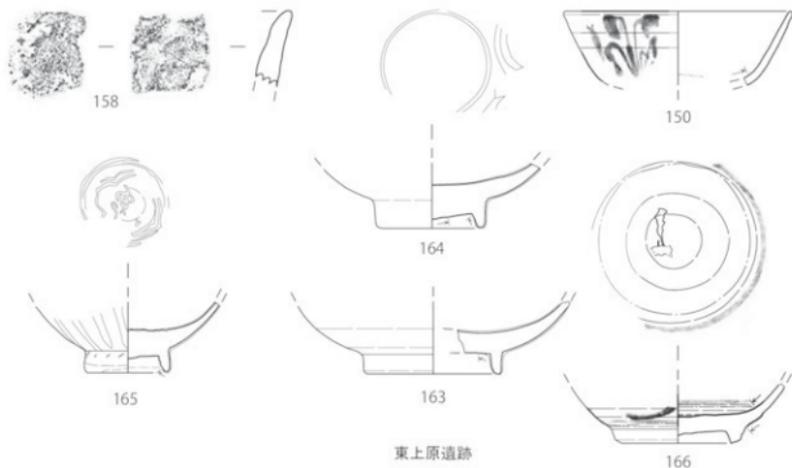
第11図 アーガー・アリガースワラ・阿波連集落周辺遺物散布地・阿波連貝塚表採遺物

(7) バンリグチ遺物散布地 新規確認

アリガースワラより北方約200m離れて近接する尾根を越えた砂丘後背地で、後期土器等の遺物散布地である(第3・10・11図、写真7・8、遺物図版11-201~203)今回新規に確認した。

(8) 東上原遺跡

阿波連集落から北方に至る旧道沿いに位置する丘陵裾部から中腹に位置する(第3・16図、写真17・18)。沖縄学生文化協会では、土器片34点、カムイヤキ1点、青磁4点、染付8点、陶器3点が表採されたようである(中村1990)。県1976年調査(県教委1977)、今回の遺物でも青磁、青花、貝が得られている(第12図、



第12図 東上原遺跡・波嘉敷集落周辺遺物散布地・東上原遺跡表採遺物

遺物図版 8 - 146 ~ 166)。土器は丘陵裾部から得られ、陶磁器は中腹の平坦地で表採され、畑などの区画なのか石積みも見られる。この丘陵の最高所には、上の殿と呼ばれる拝所がある。立地から考えると、グスクに類似したような印象を受けた。

(9) 安彌宜グスク(城島)

波嘉敷港の北側に位置する城島は干潮時にもみ、波嘉敷島から渡ることが可能で、最頂部には雨乞いの御嶽である安彌宜御嶽が見られる(第3・14図、写真19)。御嶽への出入り口は、御嶽へは御願のための道が北西側に取り付くとされているが、現状では道の痕跡は窺えない。

最頂部の東西にやや広い平場をそれぞれ確認することができた。東側の平場は東西約50mで南北は40mで、御嶽と井戸跡とされる窪みが見られる。御嶽は最も東側に石製香炉のみ置かれている箇所と、石材が散乱する箇所の2カ所を確認することができ、安彌宜御嶽は後者とされている。この御嶽に隣接してすり鉢状の窪みが見られる。かつて存在していた集落の井戸と伝承されている。西側の平場は東西50mで東西約60m、南北60m

で更に西側は緩やかな傾斜面が続く。標高 106m の最頂部はとくに平場などは見られない。頂上付近ならびに平場周辺は四方が急崖となっており、北西側が唯一の登坂が可能な斜面が見られるが、岩盤崩落が著しく、かなりの急坂となる。

現在の渡嘉敷集落はかつて 3 つの小集落に分かれており、その内の 1 か所が城島の頂上付近に立地していたという伝承がある（渡嘉敷村 1990）。

近世・近代、時代不明の遺跡 20 遺跡

遺跡の種類としては、遺物散布地、グスクと称される地点、石切り場、炭焼き窯、古墓、戦争遺跡がある。なお、渡嘉敷集落周辺の遺物散布地では、後期土器やグスク土器も少量採集できたが、大半が宅地の状況では試掘調査なども困難であり、その時期の判断は今後にゆだねたい。

(10) 渡嘉敷集落周辺遺物散布地 新規確認

渡嘉敷集落内に、遺物が 15 ヶ所（A～E・H～J・L～Q・U 地点）で表採された（第 3・15 図、写真 11～13）。多くは、近世の陶磁器であるが、青磁・グスク土器も散布しており、グスク時代の遺跡であった可能性も考えられる（第 12 図、図版 5・6～68～70・103～127・131～134・137～140・143～145）。しかしながら、前述のように現状では宅地になっており試掘調査なども実施しがたい状況である。なお、集落内の各地点には以下のようなその他の文化財も見られる（渡嘉敷村 1990）。

井戸（G） 沖縄戦後に一時収容された伊江島出身者によって構築された。

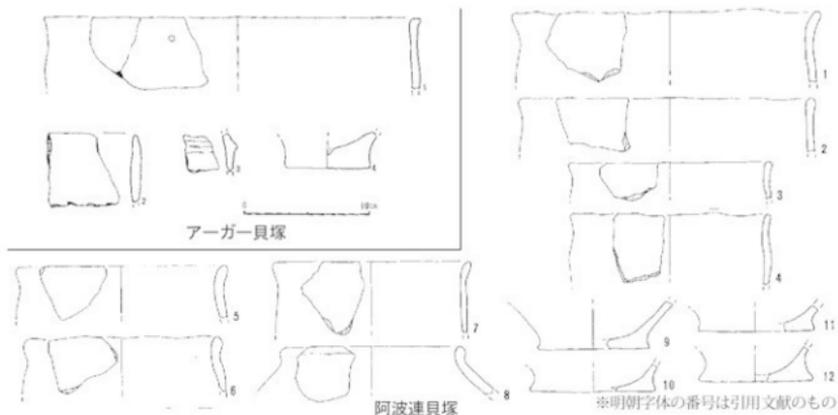
新垣筑兵衛の屋敷跡（Q） 新垣筑兵衛（仁也）は、水主として鹿児島に渡り製紙を行ったとされ、その屋敷跡である。

渡嘉敷神社（O・U） 標高 37 m のクミチジ山の東麓に位置する殿内小とも呼ばれる拝所である。後述するように、鳥居には沖縄戦時の弾痕が残る。なお、クミチジ山には幾つかの平坦面が形成されている。

根元家の石垣（N） 船頭家であった根元家の屋敷地の石垣である。

(11) 渡嘉敷川河口遺物散布地 新規確認

渡嘉敷川の河口における遺物散布地である（第 3 図・15、写真 14）。近世の中国産青花、沖縄産陶器が散布している（第 12 図、遺物図版 6～128～130・135・136・141・142）。『正保国絵図（1644 年）』に港として記されている（沖埋文 2010）。



第 13 図 阿波連貝塚・アーガー貝塚沖繩郷土文化協会採集資料（本図は渡嘉敷村 1990 より）



写真 11 波嘉敷集落周辺遺物散布地M地点



写真 12 波嘉敷集落周辺遺物散布地L地点



写真 13 根元家の石垣



写真 14 波嘉敷川河口遺物散布地



第 15 図 波嘉敷集落周辺遺物散布地の範囲



写真 15 阿波連集落遠景



写真 16 阿波連集落周辺遺物散布地B地点



写真 17 東上原遺跡遠景



写真 18 東上原遺跡近景



第 16 図 東上原遺跡・阿波連貝塚・阿波連集落周辺遺物散布地の範囲

(12) 阿波連集落周辺遺物散布地 新規確認

阿波連集落内では4箇所で近世の陶磁器の散布が確認できた(第3・11・16図、写真15・16、遺物図版10-185~198)。なお、集落より西方300mにある標高31mの丘陵はシルジューと呼ばれており、阿波連集落の祖先の居住地であったとされている(渡嘉敷村1990)。中腹部には平場、その麓には段々畑や水路があり、沖縄産陶器を表採している。

(13) ジングスク

阿波連集落より南東約1.5kmにある独立丘陵状に立地しているグスクで、2つの最高部を小平場として造成し、その間の鞍部も平場造成されている(第4・17図、写真20・21)。これら3つの平場で全体が構成される。最西側の平場は東西方向に広がり、東端には集石が見られる。集石は平場から斜面部にかけて、径1m以上の岩からこぶし大の石まで、大小の石材が大量に集積されている。南側は比較的緩やかな斜面となり、東西北側は急傾斜となる。最東端には直径が2mほどの平面形が楕円形となる狭小な平場であり、全体的に周辺の傾斜は緩やかとなる。中央の平場は3か所の平場の中で最も広い面積を有しており、西端に段状の小平場が取り付く。南側が比較的、傾斜が緩やかである。聞き取りでは、島へ往來する唐船を確認するための遠見台として機能していたとあるが(渡嘉敷村1990)、現状では下草ならびに樹木が繁茂していることから眺望を確認することができない。しかし、狭小な平場群で構成されているため、恒常的に使用ではなく、一時的な機能を主としたグスクであるものと思われる。

なお、北方500mにはヒータチヤマと呼ばれる径2m、高さ0.5mの円形の石積遺構がある(写真28)。また、南方200mには、ジングスクののろし台と呼ばれている高さ0.7m、平面が楕円形の石積みがある(写真22)。いずれも、遺物などは見られず、時期は不明である。距離的にジングスクに近接している。

(14) 東川上御嶽(テラガイ)周辺遺物散布地・炭焼き窯 新規確認

阿波連集落より北東500m、大見座山にある坪所である(第3図 渡嘉敷村1990)。現在は、青磁の香が一つ置かれている。本上産陶器が周辺で表採できた(遺物図版11-204)。また、周辺には棚田、炭焼き窯6基



写真19 グスク島



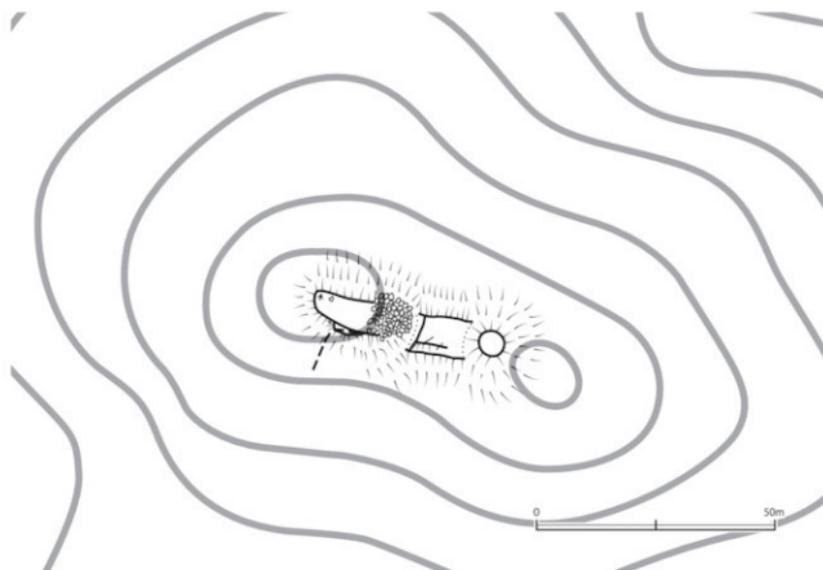
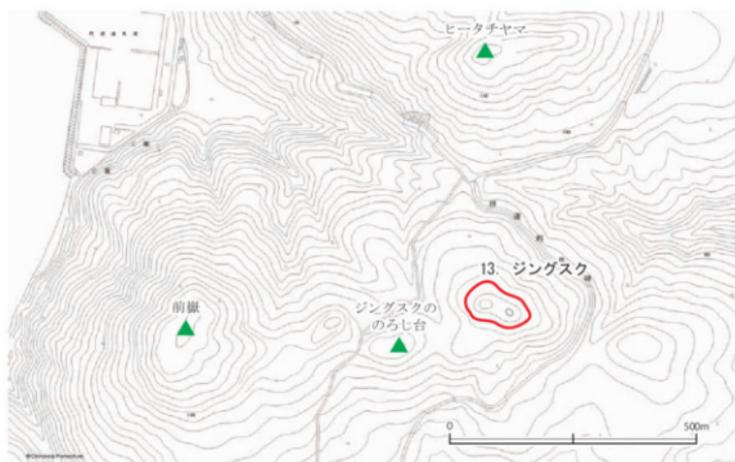
写真20 ジングスク遠景



写真21 ジングスク頂上部の石積み



写真22 ジングスクのろし台



第17図 ジングスクの縄張り図

が確認できた。

(15) 船越原の石切り場

船越原遺跡より北方 200 m の東海岸沿いに残る牧港石灰岩（粟石）を切り出した石切り場跡である（第 4 図、写真 29・30）。当センターの沿岸地域遺跡詳細分布調査でその位置は報告されている（沖埋文 2010）。この石切り場北方海岸で神縄産陶器が表採された（遺物図版 19・22 - 199・200・433）。

(16) イシッピー原の古墓群 新規確認

渡嘉敷港北岸の麓に位置する亀甲墓を中心とした古墓群である（第 3 図、写真 23・24）。

(17) 泊兼久原の古墓群 新規確認

渡嘉敷集落北側の白瀬山のふもとに位置し、11 基確認された（第 3・15 図）。破風墓、亀甲墓のほか、コンクリート造りの墓もある。現在も利用されている。

(18) 阿波連の古墓群 新規確認

阿波連集落の西方の砂丘ぞいの古墓群である（第 3・16 図、写真 27）。亀甲墓のほか、板石で石棺状とする墓などが見られる。

(19) サミカ古墓群 新規確認

渡嘉敷港の南岸の崖壁に造られた古墓群で、洞穴墓が多い（第 3・19 図、写真 25・26）。ウフジーヤーの墓、孝行カンジャンシーの墓など呼ばれる墓がある。

戦争遺跡

今回の調査で確認された戦争遺跡は 10 か所確認しており、その性格としては以下のとおりである。なお、詳細内容については、（沖埋文 2004・2015）を参照。なお、(22)・(23) については、本報告において新規確認となる。

記念碑 (20) 渡嘉敷村の忠魂碑

陣地 (21) 北山の陣地壕跡群（海上挺進第 3 戦隊本部）、(22) 波佐間・白瀬山の塹壕・たこ壺、(23) 渡嘉敷南の陣地壕跡（通信隊本部）

特攻艇秘匿壕 (24) 渡嘉志久海岸の特攻艇秘匿壕跡群（海上挺進第 3 戦隊 渡嘉敷村指定文化財）

住民避難地 (25) 渡嘉敷の住民避難壕（防空壕）、(26) 北山の住民避難地跡（渡嘉敷村指定文化財 集団自決の碑周辺）

弾痕 (27) 鯉節工場跡煙突の弾痕、(28) 根元家石垣の弾痕、(29) 渡嘉敷神社の弾痕

その他の文化財

現時点では、古い伝承がある御嶽には、前の御嶽・西御嶽・北道御嶽・しらせ御嶽があるが、遺物や明確な遺構が確認できていない。そのため、これらは現時点では近世・近代の遺跡には含めないものとした。

2. 儀志布島

渡嘉敷島の北端より 500 m 北方に位置する南北 1.5km、東西 0.5km の無人島で、標高約 100 m の丘陵が中央にありその周縁に砂丘が見られる。記録された集落はないようだが、近世・近代の遺跡を確認した。

近世～近代・時代不明の遺跡 4 遺跡

(30) ジーツブヌクシ遺物散布地 新規確認

儀志布島の東海岸のジーツブヌクシと呼ばれる砂丘で近世の陶磁器を採集した（第 18 図）。その多くは、ローリングを受けている（遺物図版 11 - 215 - 218）。

(31) ヘイジョグワァー遺物散布地 新規確認

儀志布島の西海岸南端の砂丘後背地において、糸満漁民のアガリヘイジョウグワァーと呼ばれる網元の集落が



写真 23 波嘉敷港遠景



写真 24 イシッピー原の古墓群近景



写真 25 サミカ原の古墓群厨子甕内部



写真 26 孝行カンジャンナシーの墓近景



写真 27 阿波連の古墓群近景



写真 28 ヒータチャマののろし台



写真 29 船越原の石切り場近景



写真 30 船越原の石切り場加工痕

あったとされる（第18図、写真31）。現状では、遺構は確認できなかった。沖縄産陶器が表採されるが、ローリングを受けている（遺物図版11・12-214～225）。

(32) アカヤーの古墓 新規確認

儀志布島の西海岸中央にある断崖の岩陰に、木棺の可能性のある木枠が埋もれており、人骨や遺物は見られなかったが、岩陰墓と思われる（第18図、写真34）。

(33) 儀志布原の古墓 新規確認

儀志布島の南端崖下に位置する入口部に石積みを設けた自然洞穴に大型の木棺と思われるものを確認した（第18図、写真32・33）。内部には立ち入れなかったため、人骨等の確認もできなかったが、岩陰墓であろう。

3. 前島

波嘉敷島より東海上8kmに浮かぶ南北3km、東西0.8kmの無人島で、その北端から2kmのリーフ内に中島・拝（おがみ）島・端（はて）島と呼ばれる小島が見られる。近世には前慶良間村（めーぎらま）と呼ばれており、近代



写真31 ヘイジョウグワァーの遺物散布地



写真32 儀志布原の古墓全景



写真33 儀志布原の古墓内部

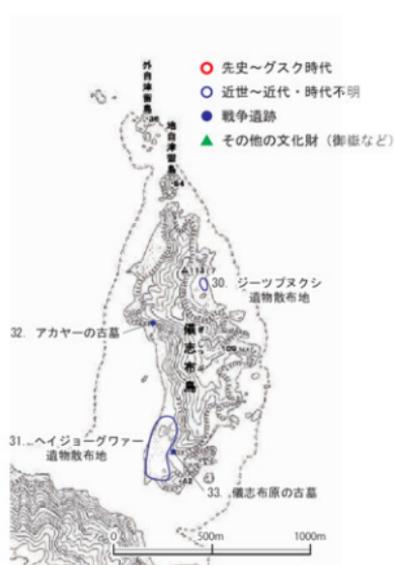


写真34 アカヤーの古墓近景



写真 35 前島古集落（古島）伝承地



写真 36 前島旧集落の石垣



写真 37 前島旧集落内通路



写真 38 前島旧集落屋敷地の甕散布



写真 39 前島旧集落の殿内



写真 40 印良劫原古墓群



写真 41 大墓近景



写真 42 大墓内部

島に大砲を構え、南部を砲撃した。戦後、大規模な採砂工事が行われている。

今回は、天候・スケジュールの都合により、現地踏査ができなかった。

先史～グスク時代の遺跡 1 遺跡

(37) 神山島灯台付近遺物散布地 新規確認

昭和63(1988)年に、当時の那覇市教育委員会職員の仲地博が神山島東端の灯台付近で、土器片を採集した(第20図)。これらは、伊波・荻堂式、貝塚後期、グスク土器で、現在は沖縄県立博物館・美術館で保管されている(遺物図版9-179~184)。

5. 座間味島

波嘉敷島より北東約8kmに位置する最高所160mで、北側が絶壁、南側の海岸線が複雑入り組んでおり、その湾状の部分、比較的平地が見られ、座間味、阿真、阿佐といった集落が見られる。村役場が所在する座間味村の中心で、座間味港から那覇市の泊港、阿嘉港へのフェリーが就航している。

先史～グスク時代の遺跡 11 遺跡

大半の遺跡は、南側の海岸沿いの砂丘上に分布している。以前、遺物散布が確認できた地点においても、今回はできなかったところも多い。

(38) 古座間味貝塚

座間味集落より東方500m、古座間味ビーチと称される長さ約1kmに及ぶ砂丘上の標高約5m前後に位置する(第21図、写真43~46)。土地改良事業が行われる際にその保存調整のため、昭和55・56(1980・1981)年度に範囲確認調査が実施された。縄文時代後期～弥生時代並行期(貝塚前3～後2期)の良好な遺跡であり、大量の土器や骨・貝製品、竪穴建物跡なども確認された(第22図 県教委1982)。この範囲については畑地として利用されているが、大規模な土地改変は避けられているようである。現在でも、貝殻・土器片が畦道際などに見られ、今回も若干の遺物を表採した(第23図、図版13・14-226~243・247)。なお、県教委による1977年分布調査の出土土器はくびれ平底系土器(239・241)も見られ、古座間味第2貝塚のものであった可能性も考えられる。

(39) 古座間味第2貝塚

古座間味貝塚の西方約300m、地形的にも同様の砂丘上に位置する(第21図)。過去には、くびれ平底系の後期土器が表採されていたとのことだが(岸本1989)、前述した県教委が採集した古座間味貝塚の土器が相当するのかが不明である。今回、遺物は採集できなかった。

(40) シル人骨出土地区

古座間味貝塚より南方800m、同様の砂丘上であるが、標高は9mと高い位置にある(第21図)。1977年の採砂工事にあり、人骨が複数発見された。人骨のうち1体は、板サンゴで囲まれた石棺状の囲いから出土したとのことである。沖縄国際大学考古学研究会OB会はこの状況を検討し、読谷村木綿原遺跡のような箱式石棺ではないかと推定している(知名ほか1979)。現時点では、土器等の表採は報告されておらず、時期などは明確ではない。今回の踏査でも新たな発見はなかった。

(41) 座間味貝塚

座間味集落の北端に位置する座間味小中学校前方の畑地周辺で、1966年に報告された沖縄大学学生文化協会より無文土器や青磁などが表採されたようである(第21・24図 岸本1989)。今回の踏査では、同地点付近で中国産青花を採集した(遺物図版13-244)。

(42) 大和馬遺物散布地

阿佐集落より南方約700m、南北に岩壁に囲まれた長さ約200mの砂浜に位置する(第21図、写真47)。



写真 43 古座間味貝塚遠景



写真 44 古座間味貝塚近景



写真 45 古座間味貝塚遺物散布状況（1）



写真 46 古座間味貝塚遺物散布状況（2）



写真 47 大和馬遺物散布地近景



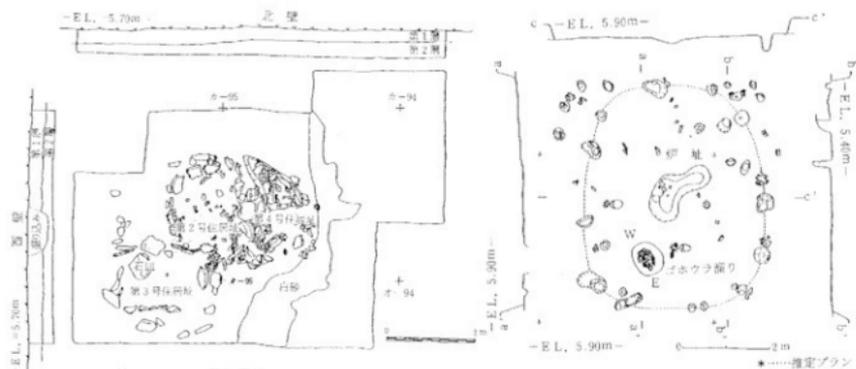
写真 48 阿佐遺物散布地近景



写真 49 阿佐船頭屋敷



写真 50 阿佐船頭屋敷内梵字碑



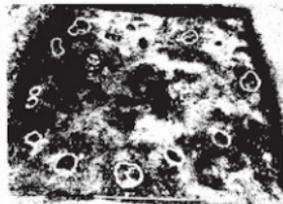
第2・3・4号住居址



貝符



ゴホウラ集積



第1号住居址



ゴホウラ製貝輪 (III区)



ツタノハガイ製貝輪 (III区)



ゴホウラ貝製品
(第1号住居址貯蔵穴)



ゴホウラ製貝輪 (III区)



面縄東河式土器
(I区)



室川式土器
(II区第4号住居址)

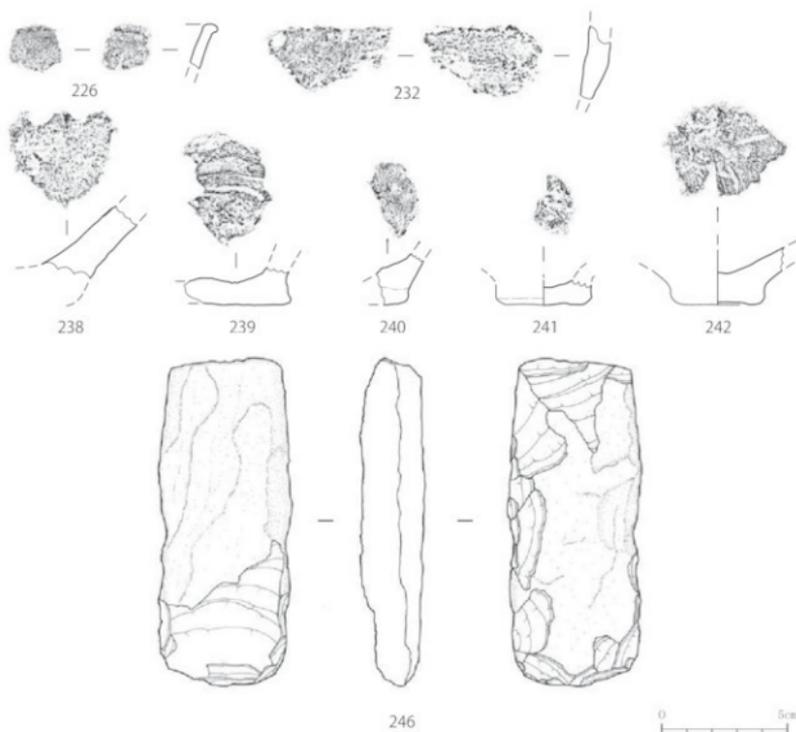


室川式土器
(II区第3号住居址)

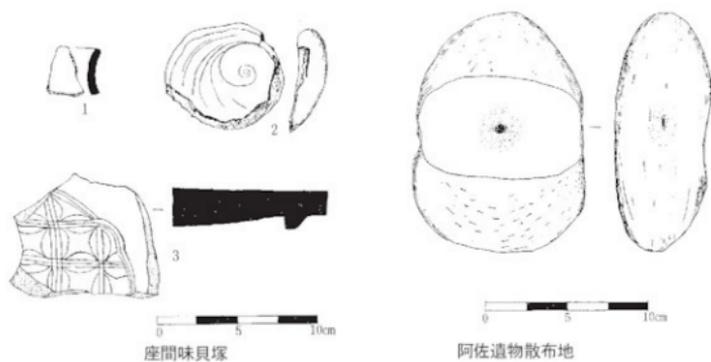


室川式土器
(II区遺構外)

第22図 古座間味貝塚の既往調査状況・出土遺物 (県教委1982・岸本1989)



第 23 図 古座間味貝塚表採遺物



座間味貝塚

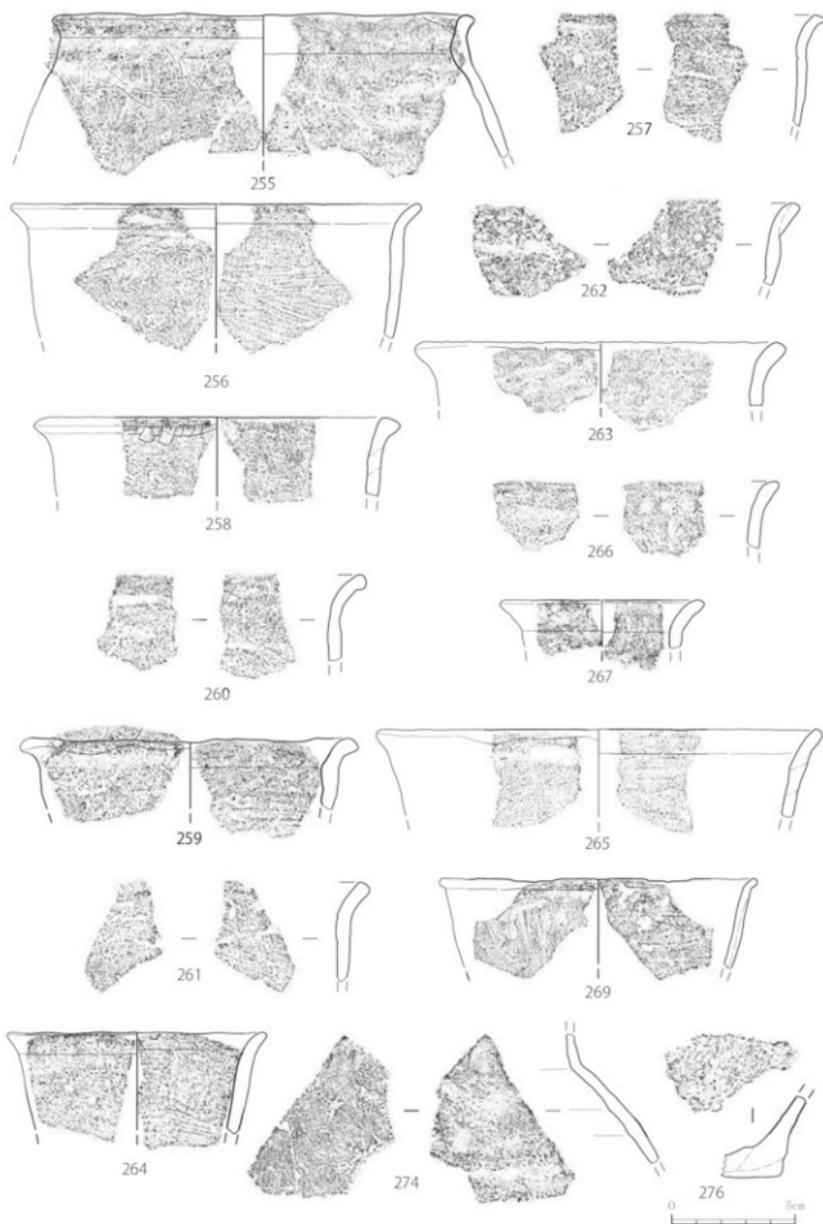
阿佐遺物散布地

※明朝字体の番号は引用文献のもの

(『郷土8号』所収図)

第 24 図 座間味貝塚・阿佐遺物散布地沖縄郷土文化協会採集遺物

本図は座間味村 1989 より)



第 25 図 大和馬遺物散布地（1）表採遺物

県教委により1981年に後期土器が表採されたようであるが、今回は採集できなかった。当センター保管資料で、その袋に記載されていた日付から、この県教委調査時に表採されたと思われる土器が確認できた。これらの大半は貝塚後期のくびれ平底系土器である（第25・26図、遺物図版15～255～283）。

(43) 阿佐遺物散布地

阿佐集落内の畑地一帯で後期土器等の遺物が散布している（第21図、写真48～50 新田1961・県教委1977）。沖縄大学学生文化協会より、土器15点、凹石とされる石器1点、磁器2点が表採されている（第24図 岸本1989）。今回の調査では、北側の畑地や南側の船頭屋敷周辺、さらに南岸の海岸で近世・近代の陶磁器を採集した（遺物図版17～305～319）。

(44) 真喜屋武原遺物散布地

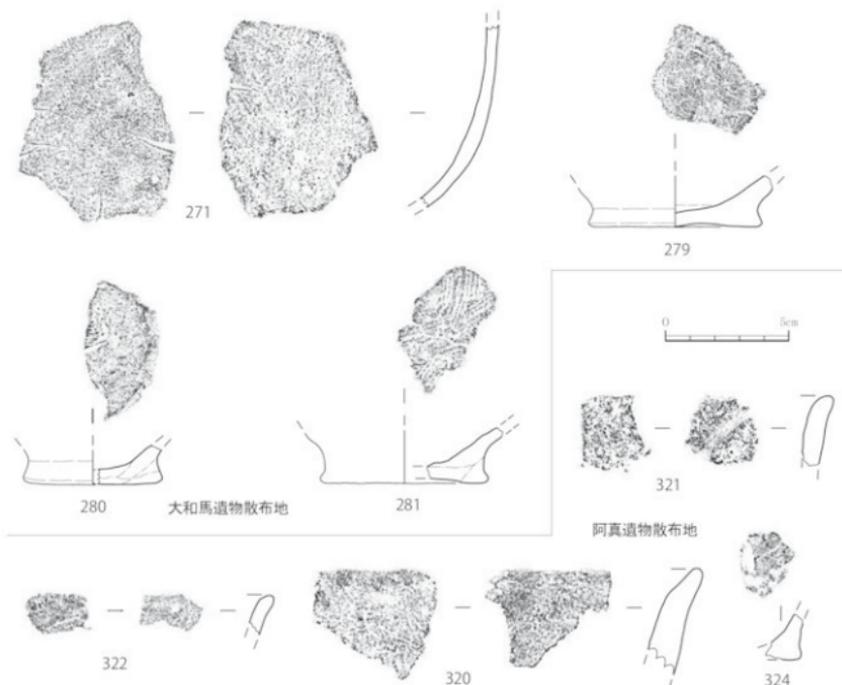
阿佐集落より安護の浦を挟んで南東1.3kmの地点で後期土器が散布していたとのことである（第21図 新田1961・県教委1977・岸本1989）。今回は、遺物の採集はできなかった。

(45) 阿真遺物散布地

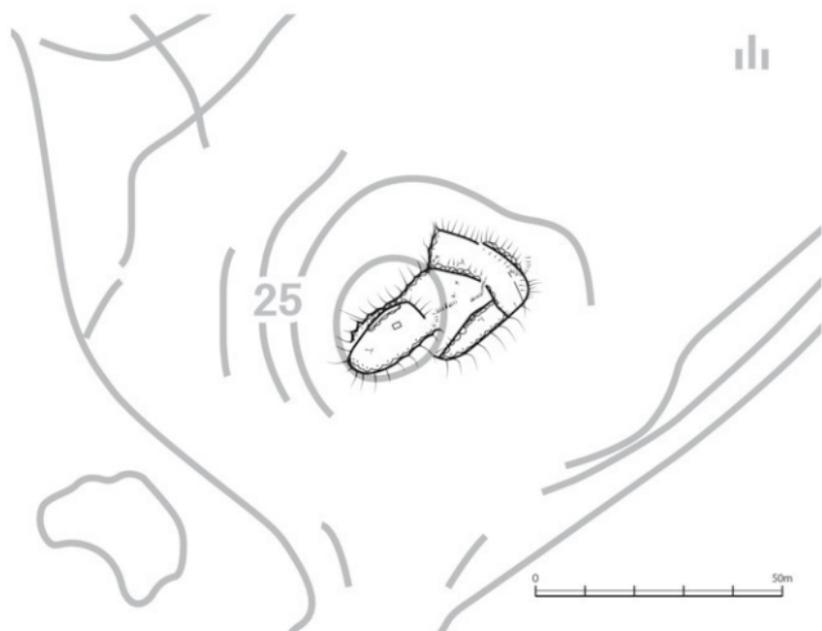
阿真集落北側の畑地や原野一帯に後期土器が散布していたとされる（第21図 新田1961・県教委1977・岸本）。過去に採集された遺物も小片であるが（第26図、遺物図版18～320～324）、今回は確認できなかった。

(46) 大浜（ウハマ）遺物散布地

阿佐集落より北東0.8kmの安護の浦に面した遺物散布地とされる（第21図 岸本1989）。しかしながら、その詳細は不明であり、今回の踏査でも遺物の採集は出来なかった。



第26図 大和馬遺物散布地（2）・阿真遺物散布地表採遺物



第 27 図 シルグスクの縄張り図

(47) シルグスク

座間味島の最西端に位置する標高 35.5 m の岩山一帯に立地するグスクで、満潮時には座間味島から岩山への往来はできない(第 21・27 図、写真 51～54)。県教委のグスク分布調査(県教委 1983)、菅眞嗣一による報告が既になされている(菅眞 1995)。拝所のある最頂部の平場から北東方向に 2 面の平場が階梯状に展開している。北東部分のみが緩斜面となっており、他は急崖が形成されており登坂は不可能である。現在は拝所に登坂する山道が北東端の麓から取り付いており、この山道に面して各平場には石積みが配置されている。最も低い北東端の平場は東西方向に展開し、北東部の一部に石積みが見られる。その上段の平場は北東から南東部にかけて石積みが見られる。この石積みは高さ約 2 m を測り、当該グスクの中で最も規模が大きい。最頂部の平場のみ山道部分は切岸となっており、拝所の背後となる平場の北側端にのみ長さ約 10 m の石積みが見られる。石積みは全て野面積みで、周辺で採取される石材を用いていると思われる。1994 年にこのシルグスクの崖下付近で陶磁器が採集されており、県立博物館・美術館に保管されており、前述した当時職員であった菅眞が採集したようである。青磁Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類、白磁 C 3 群がある(遺物図版 14-248～254)。これらの陶磁器の年代は 13 世紀後半～15 世紀前半の間のものである(瀬戸ほか 2007)。当グスクでは渡名喜島と争ったシンモノヒヤーと呼ばれる人物が石材を自ら運んで築いたという伝承が残されている(座間味村 1989)。

(48) 阿護の浦海底遺物散布地

阿護の浦東側の海底下 5～20 m の地点で、中国産青磁、近世～近代の沖縄産陶器、清朝青花、丹波播鉢などが散布している(第 21 図)。「正保国絵図」にも記載された港である。完形品や、破片も大きく、積荷の一部が沈んだものである可能性が高い。当センターが実施した沿岸地域遺跡分布調査で、遺物の散布を確認している(沖埋文 2010)。



写真 51 シルグスク遠景



写真 52 シルグスク近景



写真 53 シルグスク石積(1)



写真 54 シルグスク石積(2)



写真 55 カンジャー森（鍛冶跡）伝承地近景



写真 56 カンジャーガー



写真 57 座間味港の古墓群（ユナー墓）



写真 58 座間味港の古墓群（上アカエー墓）



写真 59 阿真のアカエー墓近景



写真 60 阿真のアカエー墓内部



写真 61 阿佐集落西岸の古墓群



写真 62 阿佐集落西岸の古墓群内部

近世～近代・時代不明の遺跡 12 遺跡

遺跡の種類としては、古墓群、時代不明のグスク名称の地点がある。また、座間味島西北側の海岸ニタ浜で、沖縄産陶器や粗いタタキ目が入った陶器が見られた（第21図）。それらはローリングを受けており漂着物の可能性が高く、遺物散布地としては保留しておく（遺物図版16－288～292）。

(49) 座間味港の古墓群 新規確認

座間味港の東西両岸沿いに、ユナー、上アカエー、下アカエーと呼ばれる岩陰を利用した墓や亀甲墓などが見られる（第21図、写真57・58）。岩陰墓では、厨子櫃の他に、中国産褐釉陶器なども蔵付器として利用されている。

(50) 阿真の古墓群 新規確認

阿真では、集落南方の棧橋付近にあるアカエー墓や、西方0.5～1kmの間の海岸沿いにある亀甲墓などがある（第21図、写真59・60）。アカエー墓は、岩陰を利用した墓である。この海岸沿いで沖縄産陶器などを表採している（遺物図版16－285～287）。

(51) 阿佐の古墓群 新規確認

阿佐集落の主に南岸と西岸に分かれて墓が見られる（第21図、写真61・62）。西岸の大所墓は閉じられている部分があるが、岩陰を利用した墓である。



第28図 嘉比島・安慶名敷島・安室島・屋嘉比島の遺跡分布図

(52) メーグスク

座間味集落から南西 70 m、宇論の崎に南北に延びる丘陵先端部、最高所標高 52 m 付近一帯がメーグスクと呼称される（第 21 図 県教委 1983）。この頂上は平場であるが、西側一帯は段々畑に伴う石積みが見られる。展望が良い立地から、見張り所、シルグスクの出城などの評価もされる。しかしながら、遺物の採集は見られず、明確な人為的な遺構かどうかは判断できないため、現時点では時代・性格不明の地点とせざるを得ない。

戦争遺跡 下記の 8 か所が確認されている（神埋文 2004・2015）。なお、現存していないが産業組合の壕があったとされる周辺で沖縄産陶器を表採している（第 21 図、遺物図版 13 - 245）。

記念碑 (53) 座間味村の忠魂碑

陣地 (54) 高月山の陣地壕跡群（海上挺進第 1 戦隊本部）、(55) 大和馬の壕と貯水用コンクリート



写真 63 安室島遠景



写真 64 安室島西側井戸



写真 65 安室貝塚近景



写真 66 安室貝塚貝殻散布状況



写真 67 ウフタ遺物散布地近景



写真 68 ウフタ遺物散布状況

特攻艇秘匿壕 (56) 古座間味の特攻艇秘匿壕・関連壕跡群 (海上挺進第1戦隊)

御真影奉護壕 (57) 恩名ガーラの御真影奉護壕跡

住民避難地 (58) 阿真の住民避難壕、(59) シンジュの壕、(60) 阿佐のトゥールガマ

その他 座間味港の南東側の丘陵には、鍛冶屋跡とされるカンジャー森(むい)と呼ばれる場所がある(第21図)。座間味村史では鍛冶屋の神をまつる拝所と言われることから、「カンジャー森遺跡」という鍛冶関係の遺跡であろうとされている。しかしながら、現地を踏査したところ、カンジャーガーと呼ばれる井戸とされる場所や、丘陵には幾つかの平坦面が見られるが、段々畑状になっているため、いつに造成されたのかは不明である(写真55・56)。現時点では、遺跡としては判断しがたい状況である。ため、カンジャー森伝承地として、現時点では遺跡としては保留しておきたい。



写真 69 嘉比島遠景



写真 70 嘉比島北側遺物散布地



写真 71 嘉比島北側貝殻散布状況



写真 72 嘉比島北側土器散布状況



写真 73 安慶名敷島サンラーガマ



写真 74 安慶名敷島東岸遺物散布状況

6. 屋嘉比島

座間味島の南西 3.3km に位置する最高所標高 214 m と傾斜がきつく、南東側海岸の一部に平地が見られる無人島である。「正保国絵図」には、「やかひ嶋」で無人とされているが、明治 13 (1880) 年に銅の鉱床が発見され、第二次世界大戦終戦時まで採掘されたとのことである (宮城 2002)。その鉱山に関連する集落跡などの遺跡が確認できた。

近世～近代・時代不明の遺跡 3 遺跡

(61) 屋嘉比集落・鉱山跡 新規確認

南東側の平地一帯が集落跡で、建物のコンクリート基礎や水路、南東端には棧橋も確認されている (第 28 図、写真 75 ～ 82)。集落跡より 0.3km 北西には銅を採掘した鉱山跡とされる地点があり、用途は不明だが階段状の石積みがある。

戦争遺跡 次の 2 か所が確認されている (沖埋文 2015)。

弾痕跡 (62) 屋嘉比の貯水タンク跡の弾痕、(63) 屋嘉比の棧橋跡の弾痕

7. 安室島

座間味島南端の城ヌ崎 (シルヌサチ) より南海上 130 m に位置し、最高所が標高 98 m で、西側と中央部に砂丘が見られる (写真 63)。「正保国絵図」では「あ室嶋」で無人とされている。

先史～グスク時代の遺跡 2 遺跡

(64) 安室貝塚

安室島の中央部にある洞穴周辺のアツカガーラとも呼ばれる砂丘に、貝製品が散布していたとされ、貝塚後期ごろの貝塚とされる (第 28 図、写真 65・66 岸本 1989)。今回も、サラサバテイラなどが散布し、ヤコウガイ蓋が採集できたが、土器等の散布は確認できない。この東側約 200 m の地点では (第 28 図)、沖縄産陶器を採集した (図版 20 - 369 ～ 372)。

(65) ウフタ遺物散布地 新規確認

安室島西側のウフタと称される砂丘に、後期土器の散布が確認できた (第 28 図、写真 67・68)。後期土器は尖底土器の大当原式である (第 30 図、遺物図版 20 - 381 ～ 389)。周辺に井戸が見られた (写真 64)。

8. 嘉比島

座間味島の入り江である深城崎より南海上 600 m に位置し、最高所が標高 51 m で、中央部に丘陵があり、東西に砂丘が見られる無人島である (写真 69)。

近世・近代の遺跡 1 遺跡

(66) 嘉比北遺物散布地 新規確認

北東の砂丘地に、貝殻や近世・近代の土器・陶磁器などの散布が見られた (第 28 図、写真 70 ～ 72)。土器はバナリ焼きと思われ、ローリングは受けていない (遺物図版 18・19 - 353 ～ 362)。

9. 安慶名敷島

座間味島の宇論崎より南海上 600 m に位置し、南側に最高所標高 47 m の断崖があり、北側には砂丘が広がる無人島である (第 28 図)。南側の断崖際で、サンラーガマと呼ばれる自然洞穴で、墓などの遺構は確認できなかった (写真 73)。また、東岸では沖縄産陶器が 1 点見られたのみなので (写真 74)、遺跡・遺物散布地であるかの判断は保留しておく。



写真 75 屋嘉比島遠景



写真 76 屋嘉比島旧集落遠景



写真 77 屋嘉比島旧集落建物跡



写真 78 屋嘉比島旧集落貯水タンク跡



写真 79 屋嘉比島旧集落水路跡



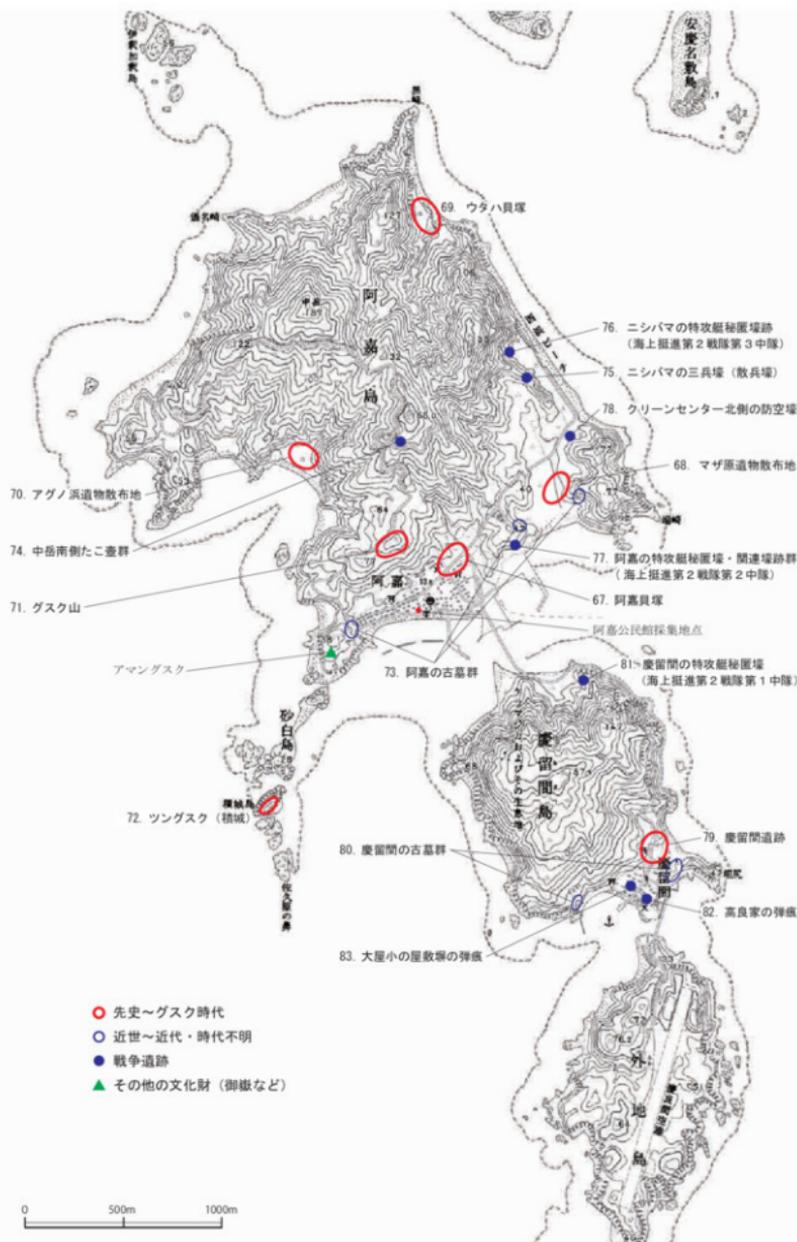
写真 80 屋嘉比島旧集落鉱山跡



写真 81 屋嘉比島棧橋跡



写真 82 屋嘉比島棧橋基礎



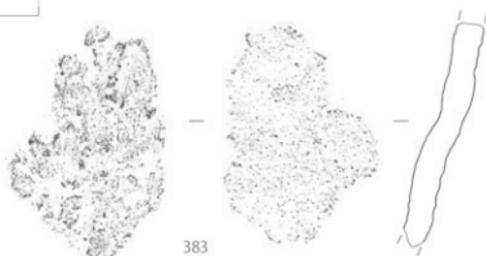
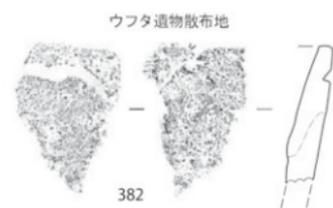
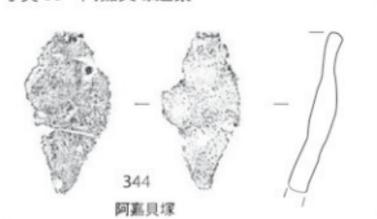
第29図 阿嘉島・慶留間島の遺跡分布図



写真 83 阿嘉貝塚近景



写真 84 ウタハ貝塚近景



第 30 図 阿嘉貝塚・ウタハ遺物散布地地表採遺物



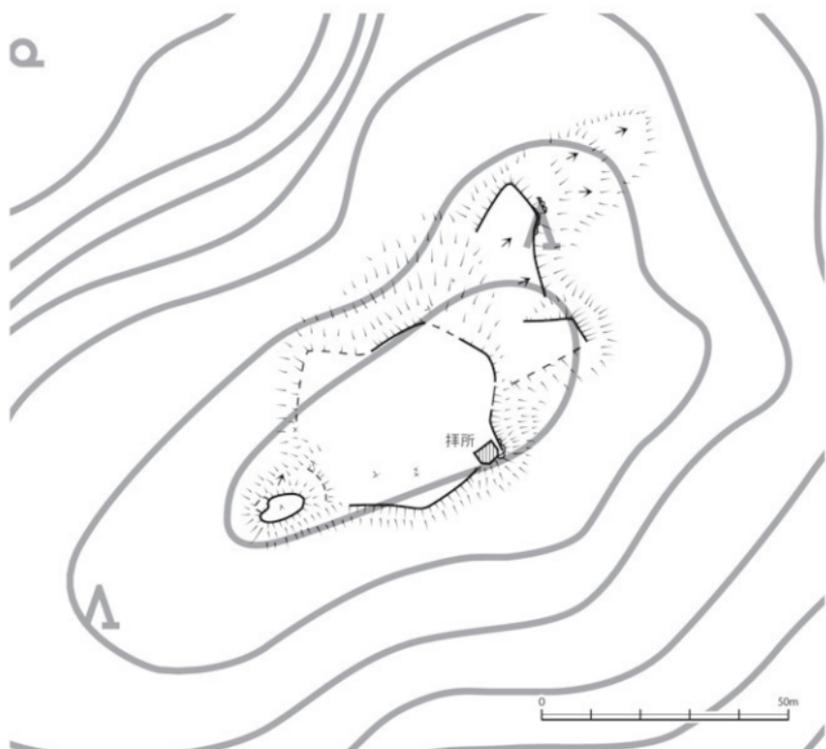
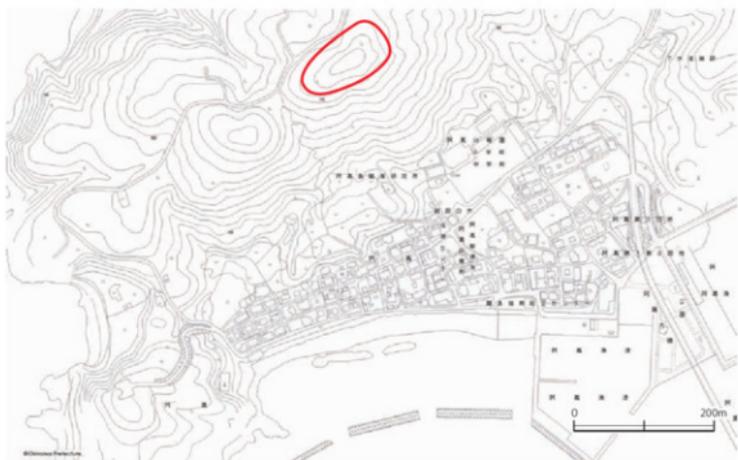
ウタハ貝塚 (高宮 1974)



※明朝字体の番号は引用
文献のもの

阿嘉貝塚
(『郷土 8 号』所収図)

第 31 図 ウタハ・阿嘉貝塚採集遺物 (座間味村 1989 より)



第 32 図 グスク山の縄張り図

10. 阿嘉島

座間味島の南西1kmに位置し、島中央の大岳が最高所標高187mで、南側に阿嘉集落が存在する平地があるが、全体的には傾斜が激しい丘陵地で、部分的に海岸砂丘が見られるのみである。

先史～グスク時代の遺跡 6遺跡

先史時代の遺跡は、砂丘部分に点在して見られ、グスク時代の遺跡は地形を利用したグスクがある。県教委により1981年に阿嘉集落内の海岸沿いに近い公民館で土器、青磁等が表採されているが(第28図、遺物図版18-337~340・342・343~346)、詳細な状況が不明であるため、遺物散布地としての判断は保留としておきたい。

(67) 阿嘉貝塚

阿嘉集落北東側の阿嘉小中学校周辺で遺物の散布が確認され、貝塚後期の遺跡とされていた(第29図、写真83)。かつては、その当時遺物包含層が確認できたとされている(第31図 新田1961)。県教委が1976年や1981年には土器を採集しているが、今回は中国産青花の採集に留まった(第30図、遺物図版18-325~336・341・344・347)。

(68) マザ原遺物散布地

阿嘉集落北東0.7kmの原野に土器の散布が見られたとされる(第29図 新田1961)。今回は採集できなかった。付近に印部石が確認されている(写真95)。

(69) ウタハ貝塚

阿嘉島北端のウタハ浜で(写真84)、かつて伊波・大山式、独特の文様が施されたウタハ式などの貝塚前期土器が採集されたとされる(第29-31図 高宮1974、県教委1977、岸本1989)。今回は採集できなかった。なお、1969年にウタハ貝塚で表採したとされる土器片が当センターに保管されていた。ただ、先述の採集資料と同様なのは不明である。全て無文であるが、貝塚時代前期土器の特徴ではあった(遺物図版18-373~380)。



写真85 グスク山遠景



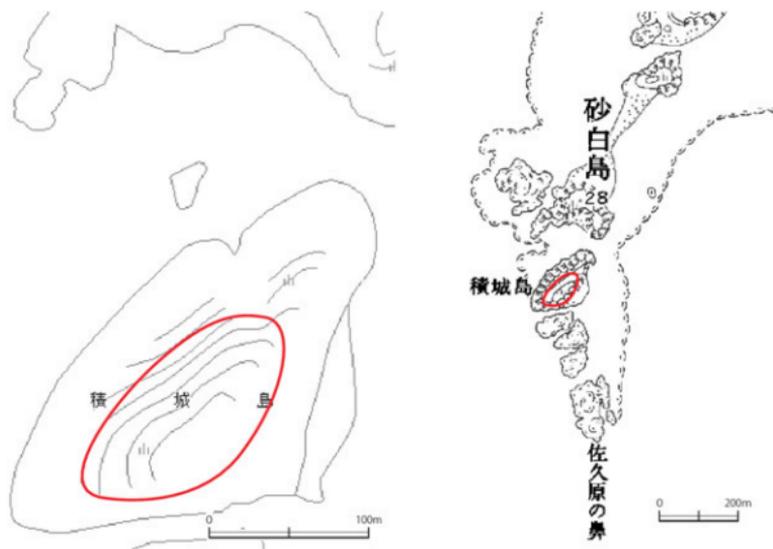
写真86 グスク山平地



写真87 グスク山立石



写真88 グスク山石積



第33図 ツングスク（積城）の縄張り図

(70) アグノ浜遺物散布地

阿嘉集落北東 0.9kmのアグの浜と呼ばれる砂丘地に土器の散布が見られたとする（第 29 図 新田 1961）。今回は採集できなかった。

(71) グスク山

阿嘉集落の背後、北側に広がる丘陵の中に標高 84 m のグスク山と呼ばれる場所があり、集落の御嶽として、現在も頂上部一帯で祭祀が行われている（第 29・32 図、写真 85～88）。この最高地点付近には赤瓦でコンクリート造りの祠が所在し、4 カ所の平場が点在する。グスク山の最高地点は小平場となっており、この小平場から東側に平場が展開する（県教委 1983）。

祠のある平場は最も広く、東西約 60 m、南北約 50 m を測る。かつて阿嘉小中学校の体育館脇からグスク山へ至る林道があったとされ（座間味村史編集委員会 1989）、拝所の東隣にその林道と思われる道の痕跡が確認



写真 89 ツングスク遠景



写真 90 ツングスク 北より



写真 91 ツングスク 東より



写真 92 ツングスク平場



写真 93 ツングスク石積（1）



写真 94 ツングスク石積（2）

できる。この平場の東側に位置する平場の中央付近には4本の立石が見られる。それらを結ぶと長方形となることから建物の石柱である可能性がある。また、北東端の平場の縁辺部には高さ0.3mほどの野面積みの石積みを確認できる。更に北東部は尾根状となり緩斜面が続いていくことから、この位置に石積みを配置することで高低差を削り出し防御性を確保していたと考えられる。

県教委により1981年に、このグスク山西側で青磁・グスク土器等が表採されている（遺物図版17-293～304）。このことも併せて、比較的広い平坦面の形成など城塞的グスクの様相を有する。

(72) ツングスク（積城） 新規確認

阿嘉島の南西部、岩礁で形成される積城島の最高地点である標高45mに位置する（第29・33図、写真89～94）。既に、嘗眞により防御性をもったグスクとして報告されており（嘗眞1995）、緩斜面地である北側から東側にかけて長さ約70mにわたって土留め状の石積みが配されており、西側から南側にかけては急崖が形成され、石積み等の構築物は見られない。



写真95 阿嘉印部石



写真96 阿嘉集落西側古墓群



写真97 阿嘉港東側古墓群（タジリ墓）



写真98 慶留間東側古墓群



写真99 慶留間遺跡遠景



写真100 慶留間遺跡近景

石積みは野面積みで一部、崩落が見られるものの全体的に残存状況は良好である。最も高い部分は約0.6mほどで、石材は周辺から採取される砂岩を用いている。最頂部には2カ所の狭小な平場が見られるが、拝所は見られない。島の最頂部から北東部にかけては尾根となり緩斜面が続くことや、干潮時に北東端から砂白鳥經由で阿嘉島へ渡れることから、グスクの出入り口は北東端が想定される。内部には建物などを配置させるほどの広い平場は見られないことから、あくまで一時的な利用が考えられる。また、全体のプランとしては登坂可能な斜面部がある北側から東側にかけて石積みを配置して閉塞空間を形成している。但し、石積みには意識的な「折れ」が確認できなかったことから、障壁としての用途が主であったと評価される。

近世～近代・時代不明の遺跡 6遺跡

(73) 阿嘉の古墓群 新規確認

阿嘉集落の東と西外れに見られる古墓群である(第29図、写真96・97)。西側のものは亀甲墓なお、東側のものは今は入口が閉じられているが岩陰墓が中心であったと思われる。

東と西にある。

戦争遺跡 下記の5カ所が確認されている(沖理文2004・2015)。

陣地壕 (74) 中岳南側たご壺群、(75) ニシバマの三兵壕(散兵壕)

特攻艇秘匿壕 (76) ニシバマの特攻艇秘匿壕跡(海上挺進第2戦隊第3中隊)、(77) 阿嘉の特攻艇秘匿壕・関連壕跡群(海上挺進第2戦隊第2中隊)

住民避難地 (78) クリーンセンター北側の防空壕

その他 阿嘉集落の西方にある天城展望台には、アマンガスクと呼ばれる拝所があるが、遺構・遺物は明確ではない。

11. 慶留間島

阿嘉島から南海上0.3km、島の中央が最高所標高157mの山となっており、南端の平地に慶留間集落があり、現在は阿嘉島との間に架橋されている。

先史～グスク時代の遺跡 1遺跡

(80) 慶留間遺跡

慶留間集落の東端の畑地等で、土器が散布している(第29図、写真99・100 新田1961)。今回もわずかだが、後期土器などが採集できた(遺物図版18-348～352)。

近世・近代の遺跡 4遺跡

(81) 慶留間の古墓群 新規確認

慶留間集落の東側の丘陵及び海岸沿い、西側海岸沿いに亀甲墓や破風墓などが見られる(第29図、写真98)。東側海岸沿いで沖縄産陶器などを表採した(遺物図版19-363～368)。

戦争遺跡 3ヶ所確認されている(沖理文2004・2015)。

特攻艇秘匿壕 (82) 慶留間の特攻艇秘匿壕跡(海上挺進第2戦隊第1中隊)

弾痕 (83) 高良家の弾痕、(84) 大屋小の屋敷塀の弾痕

第6章 船越原遺跡

第1節 概要

渡嘉敷村船越原遺跡は、渡嘉敷島の最南端に位置しており、東西の海岸幅が約300mと最も狭い場所であり、両岸は砂丘になっている(第4図、写真103～104)。この砂丘においては、復帰前後の1970年代に大規模な採砂工事が行われており、1975(昭和50)年に当時琉球大学の学生であった照屋正賢により発見された。その後、沖縄県教育委員会(以下、県教委)が行った遺跡分布調査により1976年に遺物採集がなされ(県教委1997)、多和田真淳により沖縄タイムスへの紹介もされた(同年10月11日)。宮城朝光はこれらの情報を受け、同年12月及び翌1977年5月に遺物採集を行ってその報告がなされた(宮城1979)。これらの情報により、貝塚時代早期(現在、縄文時代前期)に遡り、貝塚時代後期(弥生並行時代)までの土器が見られる遺跡であることが明確となった。

その後、本遺跡は本格的な発掘調査が行われることなく、砂丘の崩壊が進行していく中で、2007(平成19)年に伊藤圭・山田浩久・久貝勇嗣による踏査が行われ、爪形文土器の包含層が露頭し、遺物も多く散布し、遺跡の崩壊が進んでいることが報告された(伊藤ほか2010)。

このような中で、沖縄県立埋蔵文化財センターは、当遺跡の保存等を検討するために、まず2010年度に現地踏査を実施した。この踏査により、東海岸では北から黒色土が露頭しており貝類が散布する1地点、爪形文系土器が包含する浅黄シルト砂層が露頭する2地点、砂岩が露頭している傾斜が強い丘陵に貝類や少量の土器が散布する3地点、西海岸でかつて後期土器が散布していたとされる4地点として把握した。なお、後節で述べるが、様々な検討が行ったが、各氏の報告による採集地点の全てについては対照させることが困難であった。

この踏査結果を踏まえて、まずは2010・2011年度に詳細な地形測量を行い、そして2012年度から緊急性が高い爪形文系土器包含層が露頭する2地点から範囲確認調査を開始した(写真105・106)。その結果、露頭地点より南西側に包含層が残存する可能性が高いことが想定されたため、2013年度にも継続した。それにより、2地点の爪形文系土器包含層の広がりや推定することが出来た。さらに、3・4地点では試掘調査を行ったが、明確な遺物包含層は確認できなかった。なお、渡嘉敷村民を対象に2013年9月14日に現地説明会を実施した。2014年度は、2地点の露頭区について、環境省の指導を受け環境に配慮したドレーンシート工法により法面を保護することで、本遺跡の現地調査を終了させた(写真107～117)。

第2節 遺物散布状況と既往の調査・採集遺物との検討

前述したように、本遺跡ではこれまで数回にわたり遺物が採集されている。

遺物散布状況 今回の調査では、船越原遺跡において踏査を行ったところ、下記のように4つの地点で遺物散布を確認した(第35図)。

1地点 東海岸において、最も北側で遺物が確認されたところで、大きく東側に挟まれて幅5m、長さ15mほどの窪みとなっている。ここでは、旧地表も露出していたが、遺物包含層はなかった。貝殻の散布の他、爪形文土器をごく少量採集した。

2地点 1地点より南20mの地点で、さらに大きく東側に挟まれて幅15m、長さ30mの大きな窪みとなっている。この南側は高さ3mの崖面となっており、爪形文土器包含層が露頭を含む地層が大きく露出している。この一帯より、爪形文・条痕文・室川式土器を採集した。

3地点 2地点より南80mの地点より半径20mの範囲で大量の貝殻と少量の爪形文土器が散布している。この地点の大半は、砂岩が露頭している状況であった。

4地点 西海岸で、海から100mほど最も奥まった付近で、貝塚前期土器を1点表採したのみであった。後述するが、伊藤らが貝塚後期土器を採集した地点と同一の場所である。

既往の採集遺物 今回確認できた既往の採集遺物を、調査者・保管場所により次の4つに整理した。

① 県教委 1976 年採集資料（第 38・39 図、遺物図版 22・27 - 416・418 - 426・432・528・529）

渡嘉敷島の南東端東側の厚く堆積した砂丘上に大量の大型貝が分布し、爪形文をもつ土器などが表採されたとされる（県教委 1977）。遺物が収納されていた袋には、船越原第 1 遺跡と第 2 貝塚と書かれていたこれらの土器を検討すると、第 1 遺跡は爪形文など、第 2 貝塚は後期土器が見られた。ただ、報告書ではこの両遺跡の違いについて記述されていなかった。なお、神野 A 式とされる（416）は、宮城採集資料の破片と接合したものである。

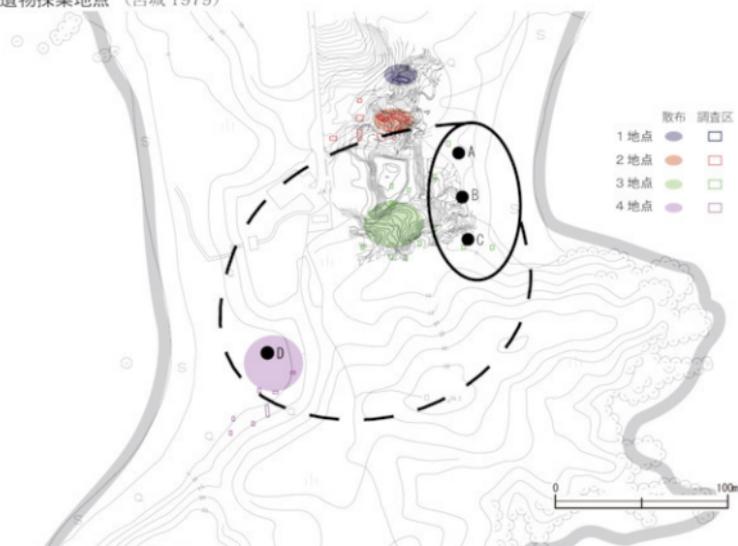
② 渡嘉敷村歴史民俗資料館蔵資料（第 40 図、遺物図版 24 - 480 - 489）

渡嘉敷村歴史民俗資料館で展示されていた資料である。これについては、船越原貝塚、船越原遺跡とキャプシ

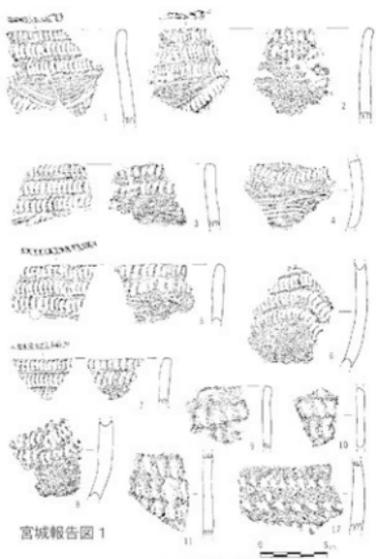
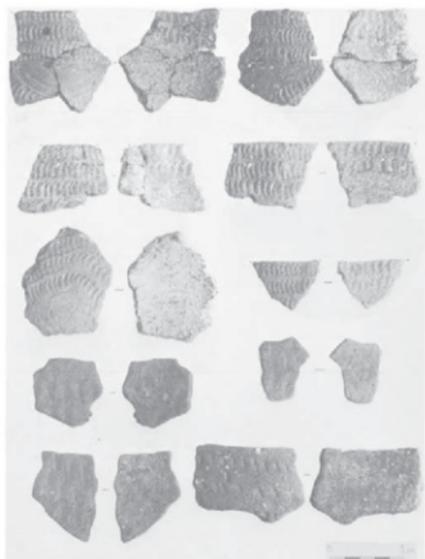


第 34 図 宮城報告の船越原遺跡における遺物採集地点（宮城 1979）

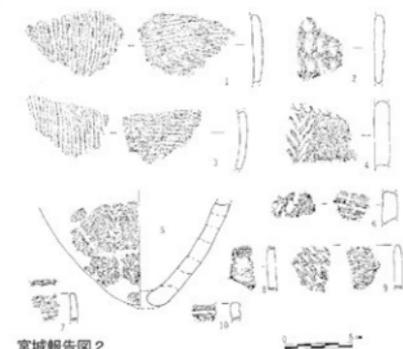
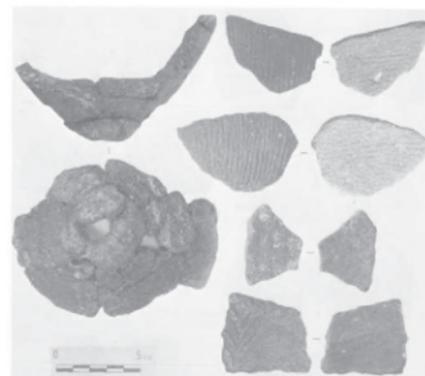
写真 101 宮城報告の船越原遺跡現況（宮城 1979）



第 35 図 船越原遺跡の遺物散布地点の位置（宮城報告図をトレースし地形に沿って重ね合わせた）



宮城報告 1



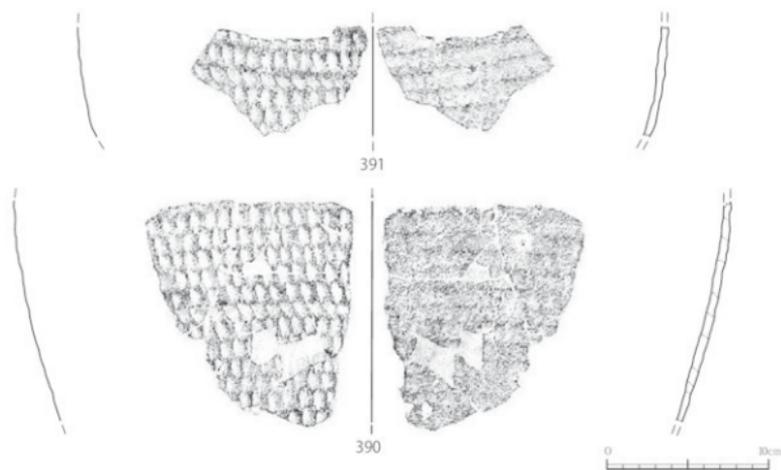
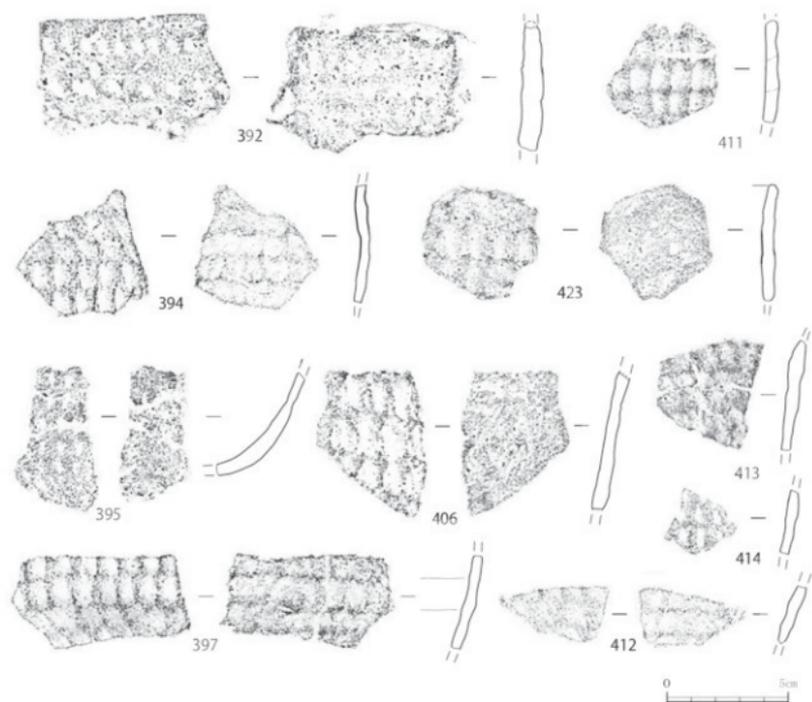
宮城報告 2

第 36 図 宮城報告の採集土器 (宮城 1979 年より)

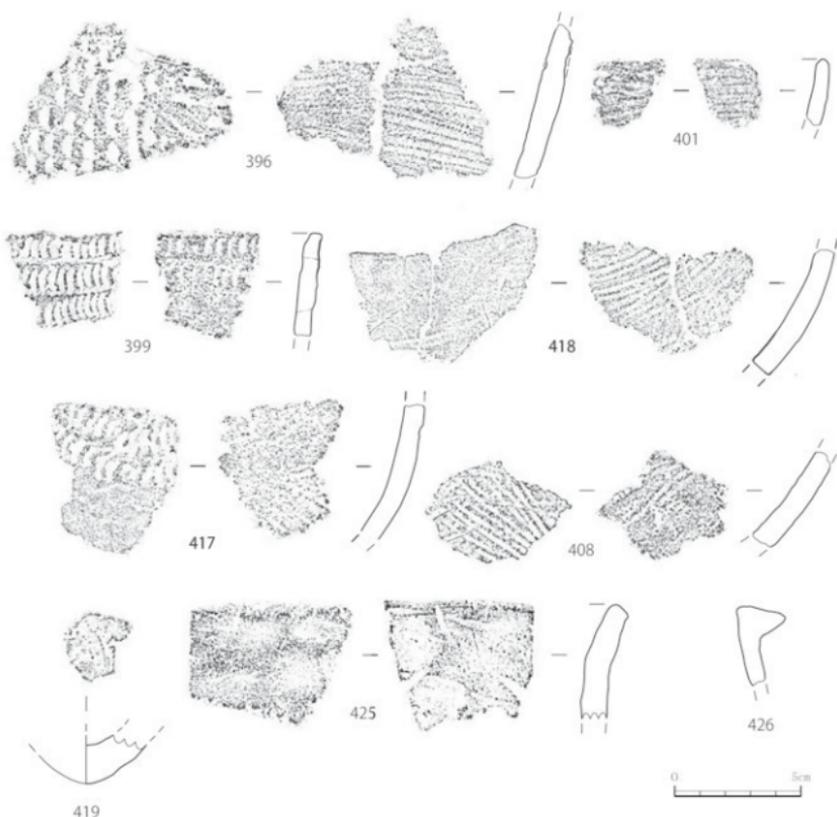
ンが付けられていたが、具体的にいつに表採されたものかは不明である。爪形文、縄文、貝塚後期のものが見られた。今回は爪形文土器については実測していない。

③宮城朝光 1976・1977 年採集資料 (渡嘉敷小学校旧蔵) (第 37～39 図 遺物図版 21・22 - 390～417)

宮城は 4 か所の散布地点を確認しており、A～D 地点としており、その位置関係を示す図も掲載されている。宮城の報告によると、各地点は次のように考えられる。これらは大きく 2 つに分けられ、A～C 地点は東海岸、D 地点は西海岸に位置する。東海岸側の A 地点では最も北側にあり、砂丘断面に帯状に黒褐色の包含層が見られ、貝塚時代後期土器がわずかなら採集されたとする。これより南西に B 地点があり、採砂されて砂がなくなり乳白色の粘土 (風化土壌) 上にはヤブチ式土器、砂が堆積している部分には曾畑式の底部や型式不明とする土器片が採集されている。さらに南へ約 20 m 離れた C 地点では採砂地の外れで砂が堆積しており、黒色砂、礫と貝殻が



第 37 図 船越原遺跡既往採集土器 (1)



第38図 船越原遺跡既往採集土器（2）

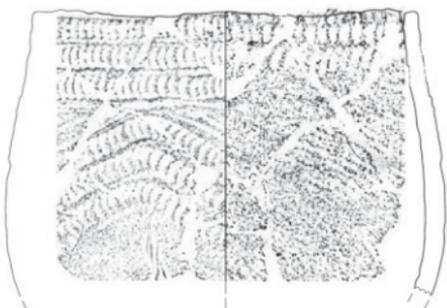
混じった跡らしきものが2か所あり、その周辺から爪形文・条痕文・ヤブチ式土器が採集されたとする。D地点は貝塚後期土器が採集されたとする。

さて、宮城が報告した土器であるが、現在の観点から検討すると、中村、伊藤らも指摘するように型式名が若干混乱しているものがある（第36図 中村1990、伊藤ほか2010）。特に、爪形文土器（宮城報告1図1～8）は、現在では神野A式に相当する。曾畑式とされている資料（宮城報告2図4・5）は、現在の室川下層式と思われる。一方、型式不明の土器とされたもののうち、（宮城報告2図7・9）が曾畑式の可能性がある。

これらの土器のうち（宮城報告1図1・6・7・8・11・12）は、渡嘉敷小学校が旧蔵していた土器で、現在は当センターで保管している。ただ、宮城が報告した資料のその他は、この旧蔵土器には含まれなかった。一方、宮城報告にはない土器も多く見られ、先述した照屋が採集した土器は、渡嘉敷小学校に保管されていたとされるので、これらも含まれる可能性が高い（宮城1979）。渡嘉敷小学校旧蔵土器の多くは、宮城または照屋が採集したものと考えられる。

④伊藤圭・山田浩久・久貝弥嗣 2007年採集資料（第41図、遺物図版25-490～516）

伊藤らは、現地を踏査し採集した遺物について、詳細に報告している。その際、宮城報告に準じてC・D地点



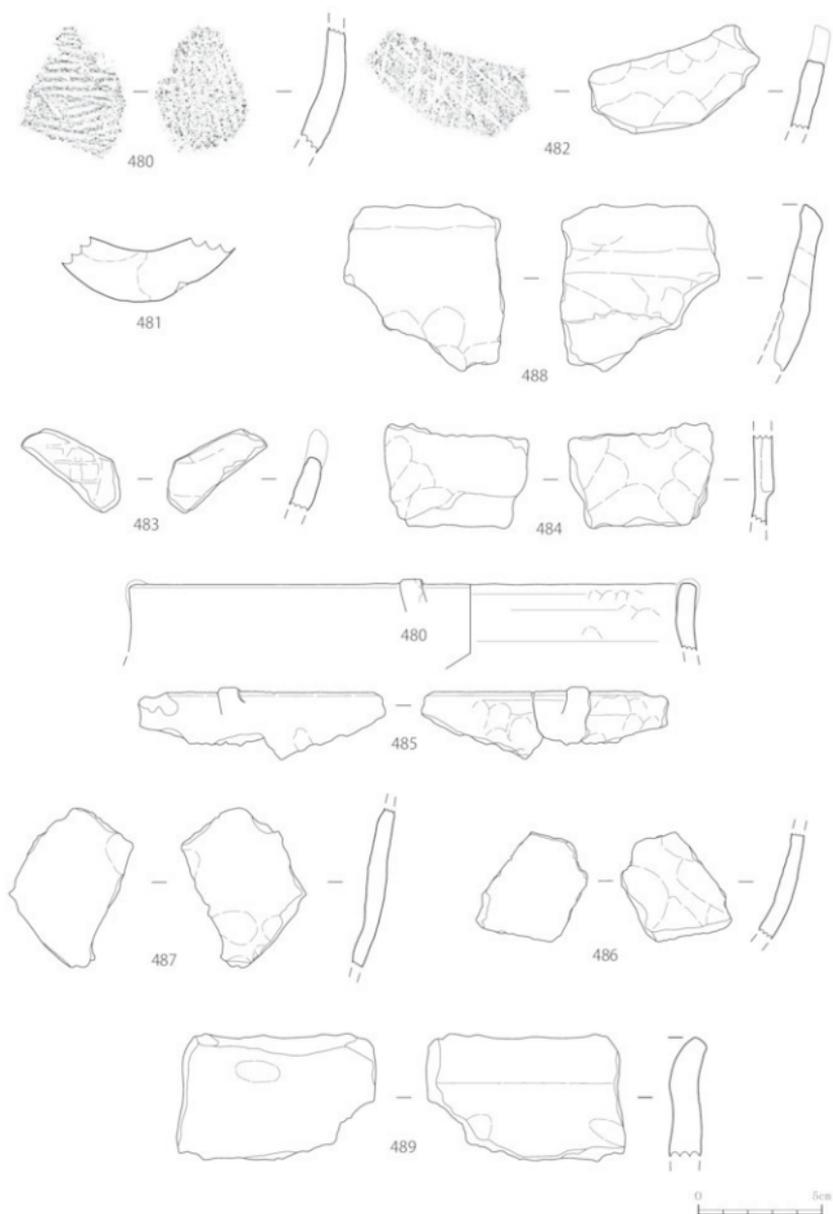
416



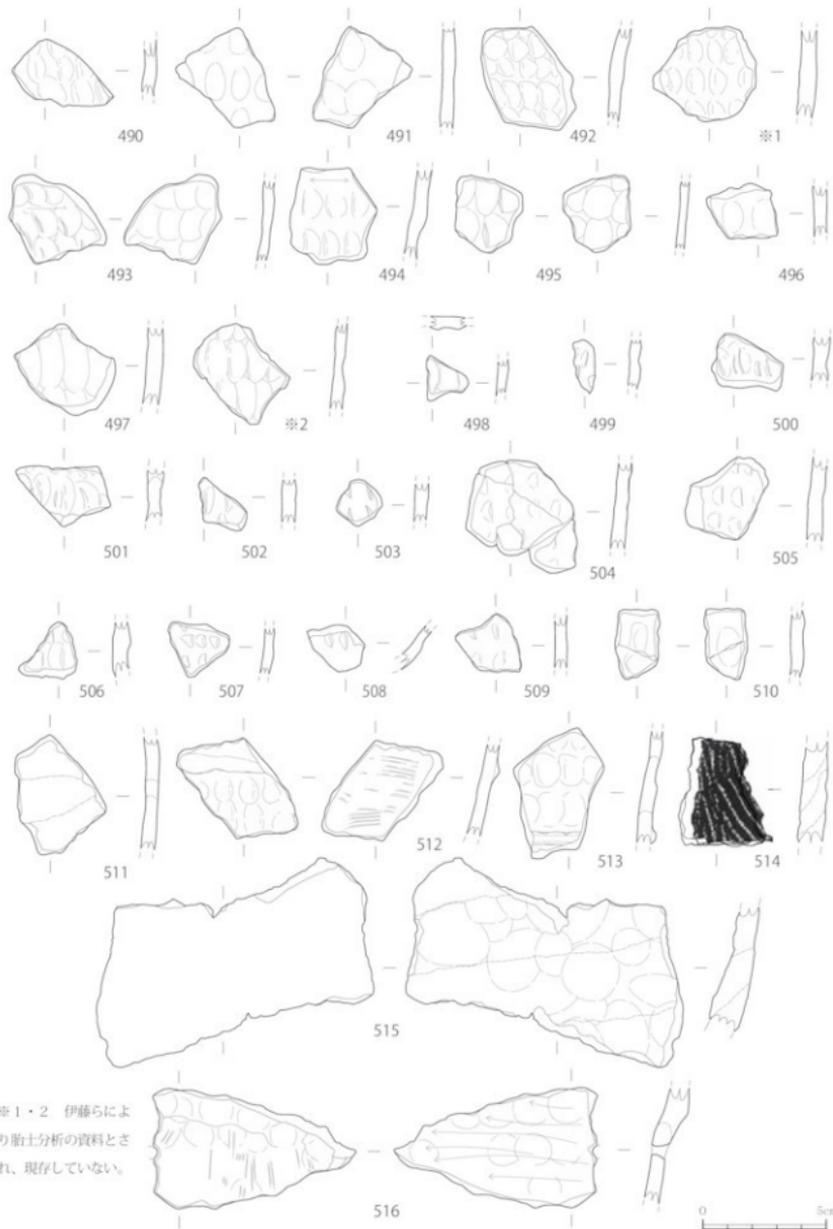
第 39 図 船越原遺跡既往採集土器 (3)



写真 102 渡嘉敷村史での船越原遺跡現況 (中村 1990 より)



第40図 船越原遺跡既往採集土器(4)



第41図 船越原遺跡既往採集土器(5)

で遺物を採集できたとする。この報告および伊藤自身に確認してもらったところ、このC地点は今回の2地点、D地点は4地点に対応することは間違いがなかった。

ただ、伊藤がC地点とした場所では、ヤブチ・東原式・野国タイプに分けられる爪形文と、条痕文系土器が確認されている。一方、宮城報告でこの地点で採集された爪形文は、先述したように現在の神野A式に相当するので、この土器は採集されていない。なお、D地点で表採されたものは、後期土器であり、今回の資料および宮城報告とも矛盾はないものと思われる。実測図・写真は伊藤らより提供を受けた。

各地点の対応関係 各地点の対応関係を第35図でみると、現時点で東海岸の宮城報告と今回の採集地点については、厳密に整合することは難しい。また、採集遺物についても、北方のA地点では後期土器が散布していたとされるが、今回は東海岸では採集できていない。そこで、ひとまず宮城報告A～C地点と今回の1～3地点を大きく東海岸という枠組みでまとめることとする。県教委1976年分布調査では、第1貝塚のものが宮城報告と接合することから、これを1～3地点としたい。さて、西海岸について位置・採集遺物ともにD地点と4地点は



写真 103 船越原遺跡西側全景 北より（左：阿波連浦遺跡から 右：船越原遺跡北側の展望台から）



写真 104 船越原遺跡西側全景 南より（船越原遺跡南側の展望台から）



写真 105 船越原遺跡2地点の調査前（2012年7月）



写真 106 流出する爪形文土器



写真 107 調査の案内表示



写真 108 重機掘削状況



写真 109 人力掘削状況



写真 110 爪形文系土器取り上げ状況



写真 111 断面実測状況

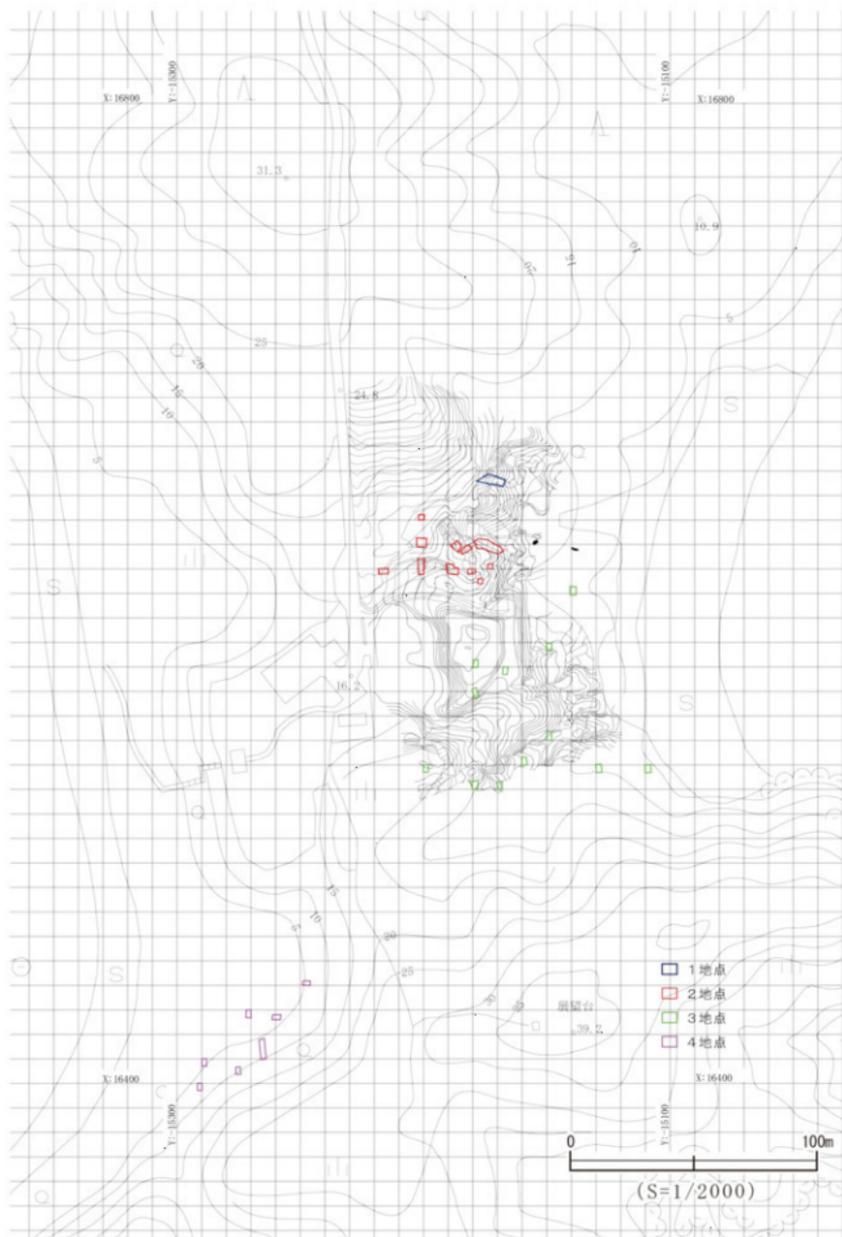


写真 112 断面剥ぎ取り状況



写真 113 現地説明会状況 (左: 全体の説明 右: 調査区での説明)





第 42 図 船越原遺跡の調査区



写真 114 環境省への事前説明



写真 115 法面保護着工状況



写真 116 法面保護施工完了状況 (2014年9月)



写真 117 法面保護施工後の様子 (2015年5月)

矛盾がない。県教委の船越原第2遺跡も後期土器が採集されているので、4地点として推定しておく。

ここで、宮城報告A～C地点に再度目を向けると、今回の1～3地点よりも海側にある(第35図)。東海岸の砂丘の様相を、宮城報告(写真101)、渡嘉敷村史(写真102)、そして現況(写真103・104・120)を比較すると、次第に砂丘自体が低くなっていることが窺える。厳密な対応は難しいが、A・B地点が1・2地点の前方、C地点が3地点の大きく窪んだ場所と一案として考えることができる。これについては、再度後述する。

2016年3月時点で、③のうち所在不明資料以外は、全て沖縄県立埋蔵文化財センターで保管している。

第3節 平成24・25(2012・2013)年度範囲確認調査

船越原遺跡の範囲確認調査は、2012・2013年度に実施している。まずは、爪形文土器包含層が露頭する2地点についてその残存状況を把握するために調査区を設定し、次に3・4地点において試掘調査を行った。以下、調査区の設定、基本層序を述べ、各地点の経過と結果について記述する。

調査区の設定

遺物散布が確認された1～4地点において、その各範囲および周辺について必要な調査区を設定した(第42図)。まず、2地点については爪形文土器が露頭する崖面を露頭区とした。その露頭の西側と北西側の調査区については、露頭西区、露頭北西区とした。これら以外については、『発掘調査のてびき』(文化庁2010)に示されるグリッド表示に基づき、平面直角座標第XV系の1kmグリッド「X=N016 Y=W015」の10mグリッド(百・十の位)、2mグリッド(A～Y)を用いることにした。

基本層序

本遺跡は遺物散布地点、包含層の範囲が4カ所あり、各地点により層序の細部は異なっているが、大まかに次のように捉えられる。

- I層 表土 本遺跡はほぼ砂丘地にあるので、現在の砂丘部分である。
- II層 旧表土 過去の砂丘地表もしくは、畑地・水田の作土、また盛土などの堆積層が見られる。
- III層 黄褐シルト～砂層 砂丘起源ではなく、おそらく砂岩等の風化土が再堆積したものと考えられる。2地点の爪形文土器包含層は本層で確認されている。また、2・3地点では本層の下部と考えられる層序において水平のラミナが幾層にも重なって見られた。4層では、本層に相当する土層は確認できていない。
- IV層 明赤褐砂層 岩盤の風化土と考えられる堆積層である。いわゆる国頭マージに近いものと思われる。1・



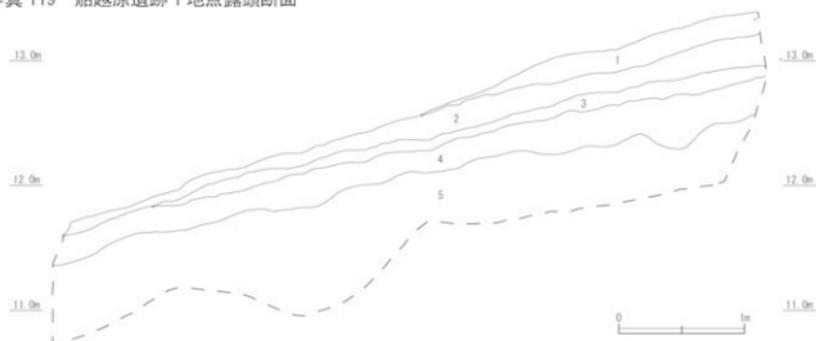
第43図 船越原遺跡1・2地点の位置



写真 118 船越原遺跡 1 地点現状 (2012 年 7 月)



写真 119 船越原遺跡 1 地点露頭断面



層序	No	土色	土質	遺人物など
I	1	2.5Y7/2	灰黄 中～粗砂	マイマイ(貝を巻く) しまり貝 ¹⁾ 2地点露頭状土色No1と同ー
II A	2	2.5Y3/2	黄褐 細～中砂	しまりやや貝 ¹⁾
II B	3	2.5Y4/2	黄灰黄 シルト凝結砂	しまり骨遺
III C	4	2.5Y7/6	黄黄褐 凝結砂混じりシルト	しまりが2.5Y7/4黄黄シルト～凝結砂より認め 上方は2.5Y4/2層灰黄のしみこみが窺われる 2地点露頭土色No2と同ー
IV	5	5Y6/6	黄赤褐 細～中砂	(白色粘 石炭?) 凝じり シルト～凝結砂 凝くしまる 2地点露頭土色No13と同ー

第 44 図 船越原遺跡 1 地点露頭断面



写真 120 船越原遺跡 2 地点露頭近景



写真 121 船越原遺跡 2 地点露頭断面



第 45 図 船越原遺跡 2 地点露頭断面



層序 No.	土色	土層	遺人層記号
1	2 217.2	黒褐色 腐一半砂	マイヤイ層を穿ち、土層が深い
2	2 216.2	黒褐色 腐一半砂	黒砂のシルト層と黒砂層の間に、マイヤイ層はより少ない。土層が浅い
3	1006.2	黒褐色 腐砂	マイヤイ層を穿ち、土層が深い
4	2 217.2	黒褐色 腐一半砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い
5	1006.2	2-5 黄褐色 腐砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い
6	2 216.2	黒褐色 腐砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い
7	2 217.4	黒褐色 シルト層	シルト層を穿ち、土層が浅い

層序 No.	土色	土層	遺人層記号
8	2 217.4	黒褐色 腐砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い
9	2 216.4	黒褐色 腐砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い
10	1007.3	2-5 黄褐色 シルト層	シルト層を穿ち、土層が浅い
11	2 216.4	2-5 黄褐色 シルト層	シルト層を穿ち、土層が浅い
12	1006.4	2-5 黄褐色 シルト層	シルト層を穿ち、土層が浅い
13	1306.5	黒褐色 腐砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い
14	1306.7	黒褐色 腐砂	黒砂層 (シルト層) を穿ち、土層が浅い

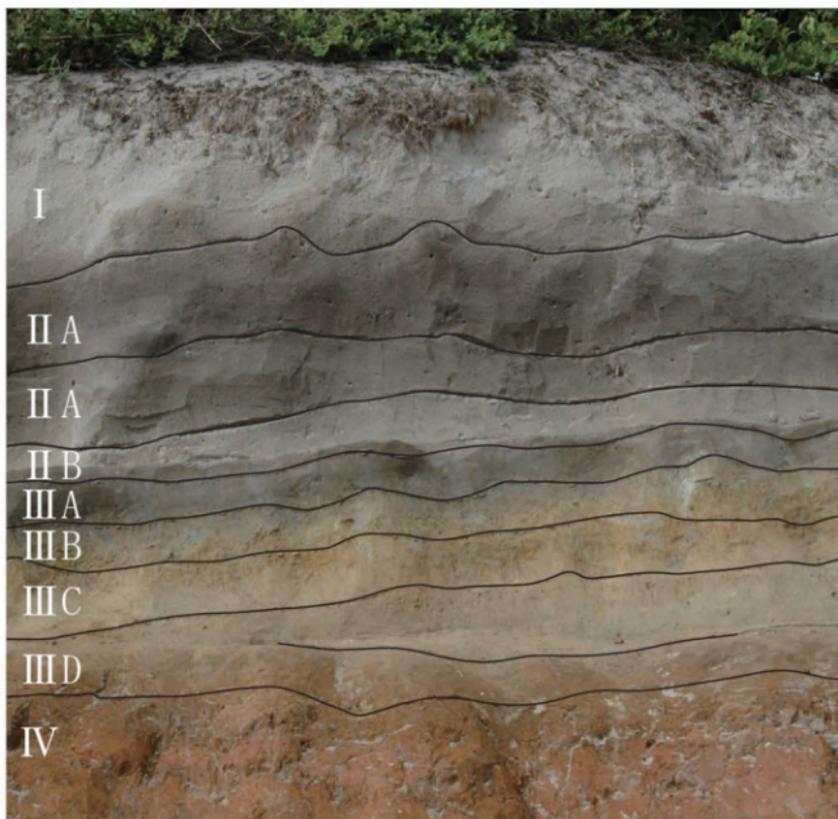


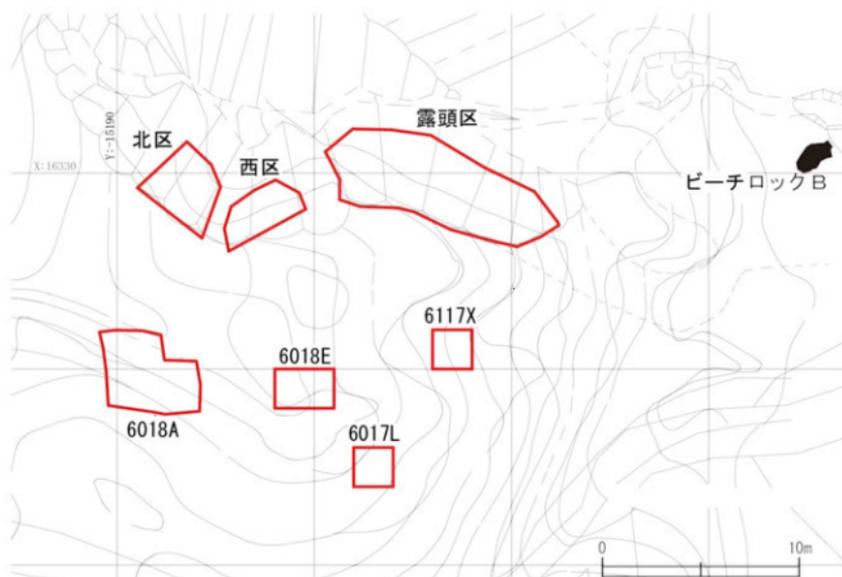
写真 122 船越原遺跡 2 地点露頭基本層序



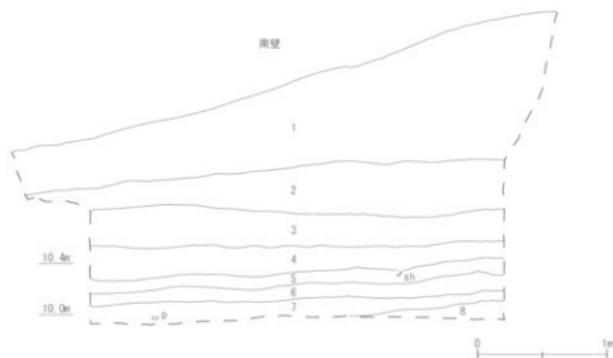
写真 123 船越原遺跡 2 地点露頭 III B 層爪形文系土器包含状況



写真 124 船越原遺跡 2 地点露頭調査終了状況



第 46 図 船越原遺跡 2 地点露頭の調査区



層序	No	土色	土質	遺入物など
I	1	2.517/2	灰黄 中～粗砂	マイマイ貝を含む。しまり弱い
II A	2	2.514/2	橙黄 細～中砂	真珠2.5X3.2シルト混雜～中砂がブロック状 (厚～10cm) に混じる。マイマイ貝は1より少ない。1よりしまりあり
	3	10Y6/2	灰黄褐 細砂	マイマイ貝を含む。しまり弱い
II B	4	2.517/2	透黄 細～中砂	海産貝 (チュウセンザガエ・シッコガイ) を含む。しまり弱い
III A	5	10Y5/3	にがい黄褐 中～粗砂	植籾～植籾混 貝片・鉄分を含む。しまり強い
	6	2.514/3	オリーブ褐 シルト～植籾砂	鉄分あり。2地点土色知りより若干強い
III B	7	2.515/3	黄褐 シルト～植籾砂	2地点土色知りより若干強い。ごくわずかに底が混じる
III C	8	2.517/6	橙黄褐 植籾砂混じりシルト	細～中粒 (チャート・石英等) がわずかに混入。しまりが7より強い



第 47 図 船越原遺跡 2 地点露頭西区平面・断面



写真 125 船越原遺跡 2 地点露頭西区Ⅲ A 層チヨウセンサザエ出土状況



写真 126 船越原遺跡 2 地点露頭西区Ⅲ A 層石材出土状況



写真 127 船越原遺跡 2 地点露頭西区堆積状況



写真 128 船越原遺跡2地点露頭西区ⅢB層爪形文系土器出土状況



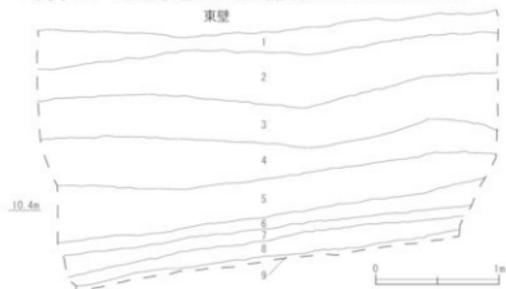
写真 129 爪形文系土器出土状況



写真 130 船越原遺跡 2 地点露頭北西区堆積状況



写真 131 船越原遺跡 2 地点露頭北西区石材出土状況



第 48 図 船越原遺跡 2 地点露頭北西区断面図

層序 No	土色	土質	混入物など
I	1 2.514/1	軽砂	
	2 2.514/2	軽灰土	シルト混入
	3 514/1	灰	軽砂
	4 516/2	灰オリーブ	軽砂
II A	5 10186/2	灰黄褐色	マイマイ殻を含む。しまり強い 海産貝（チュウセンザメ、 シヤコガイ）を含む。しまり弱 い。
	6 2.517/2	浅黄	軽～中砂
III A	7 10195/3	にがい黄褐色	軽砂～軽砂混 炭片、鉄分を含む。 しまり強め。
	8 2.515/3	黄褐色	2地点土色No7より若干暗い。こ くわずかに炭が混じる。石片多く 出土。
III C	9 2.517/6	明黄褐色	軽～中砂（チャート・石灰等） がわずかに混入。しまりが7より 弱め。

2地点でしか確認されていない。

V層 灰白砂岩 比較的脆く層状に割られる岩である。

1地点(第43・44図、写真118・119)

一番北側にある標高11～13m付近の地表が露頭している。今回の踏査で、爪形文土器1点を採集した。先述したように、宮城報告では、西海岸では最も北側のA地点では後期土器の包含層があったとするが、今回の1地点で相当するかは定かではない。Ⅲ層は見られるが、爪形文土器包含層は確認できなかった。

2地点(第43・45～59図、写真120～147)

標高は現況では10～14m前後の緩斜面にあたり、先述したように爪形文土器包含層が露頭する崖面が見られる(第43図、写真120・121)。調査は、まず露頭区の崖面を清掃し、層序の確認を行った。そして、露頭区南側において9つのトレンチを設けて、爪形文土器包含層の範囲を確認した(第49図、写真132)。それと同時に、爪形文土器の出土状況を確認するために、露頭区西端より西区と北西区として、包含層が残存していると思われる南側へ1mほど掘り広げた(第46図、写真124)。

層序 本地点においては、爪形文土器包含層が見られ、次のような堆積状況である(第45図 写真122・123)。

- I層 現砂丘 灰黄砂層 部分的に腐植土が見られるところもあるが、ほぼ現砂丘である。
- II A層 旧地表 明灰黄砂層 土壌化しており、水田作土と思われる部分もある。
- II B層 旧砂丘 浅黄砂層 I層よりもやや黄色が強いが粒度など大きくは変わらない。
- III A層 土壌化層 黄褐砂層 上層に比べると非常に硬いが、やや暗色化が見られるの土壌化が若干見られるものと考えた。本層とIII B層の間で、砂岩・緑色千枚岩などの石片が比較的に見られる。また、6018 Aで検出された礫集中地も概ね本層に相当すると考えているが、ここで得られた炭化物が後述する年代測定分析ではII B層に近い年代が示されている。
- III B層 爪形文土器包含層 浅黄シルト砂層 腐食はなく、下層との明確な不整合はなく、自然堆積層と考えられる。層厚は10cm以下と薄く、南に向かって低くなっておりその標高は9～11mである。爪形文土器の多くは、本層と水平に堆積しているような状況で、レベル的に9.4～10mの間に収まっている。土器は、露頭区西側、露頭西区、6018 Eで出土しており、他は土器が石が分からない小片のみであった。また、北側の6220 Y・6320 Y、南東側の6117 X、6017 Lでは本層自体が確認できなかった。
- III C層 自然堆積層 明黄褐砂混シルト層 III B層よりやや明るい色調で、後述するピーチロックが本層の直上に形成されている。露頭区においては、ピーチロックは確認されていない。
- III D層 自然堆積層 淡黄シルト砂層 ラミナが部分的に確認されている。
- IV層 砂岩風化土 明赤褐砂層
- V層 灰白砂岩

IV層 砂岩風化土 明赤褐砂層

V層 灰白砂岩

礫集中地点

緑色千枚岩、砂岩などの礫が集中した調査区は、露頭西区・北西区、6018 Aである(第50・51図、写真133～135)。特に、6018 Aでは径

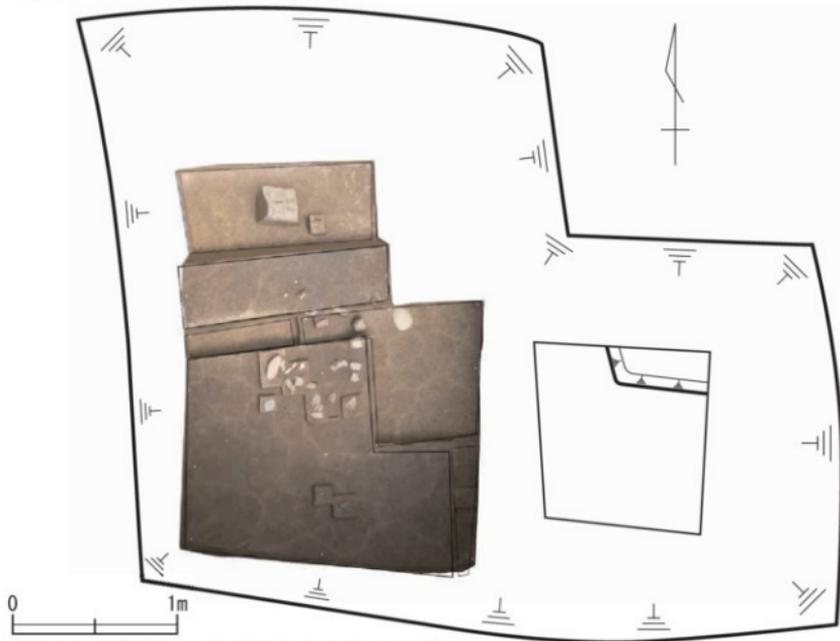
1mの範囲に拳大ほどの礫



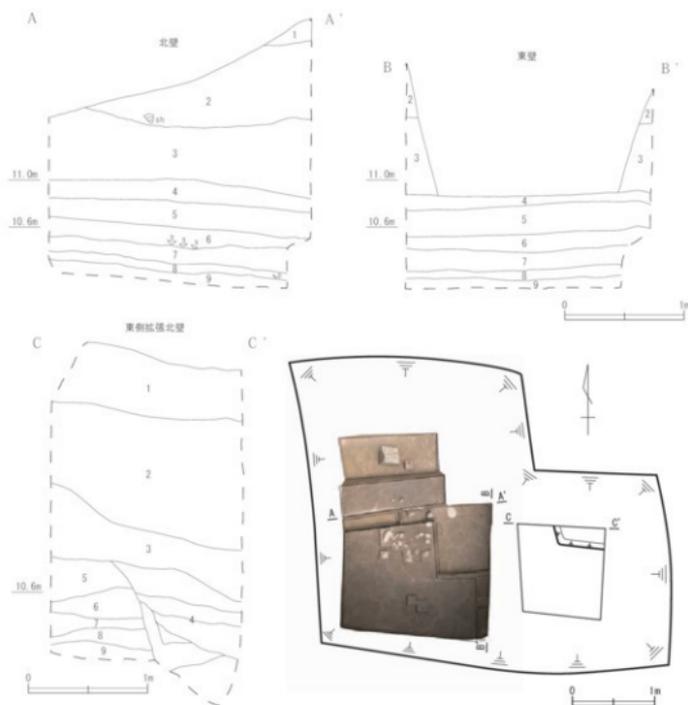
写真132 船越原遺跡2地点南側



第 49 図 船越原遺跡 2 地点南側の調査区



第 50 図 船越原遺跡 2 地点 6018 A 平面オルソ画像



層序	No.	土色	土質	掘入物など
I	1	2.514/1	黄土	細砂
	2	2.514/2	緑灰黄	細砂
	3	514/1	灰	細砂
	4	516/2	灰オリーブ	細砂
II A	5	10196/2	灰黄褐	細砂
II B	6	2.517/2	浅黄	細~中砂
III A	7	10195/3	にがい黄褐	中~粗砂
III B	8	2.515/3	黄褐	シルト~細砂
III C	9	2.517/6	黄褐	細砂混じりシルト

第51図 船越原遺跡2地点 6018 A断面

が20数個ほど見られた。層準的にはⅢA層と考えているが、部分的にはⅢB層に及ぶものは見られる。この礫が集中する範囲に明確な掘り込みなどは見られなかった。また、6018 Eでは集中しているわけではないが、爪形文土器とほぼ同じレベルで礫が見られており、これはⅢB層に伴うものと考えている(第52図 写真136・137)。なお、6018 Aの礫集中地点は取り上げず保護して埋め戻すことで、今後の保存・調査に備えることとした。

爪形文土器包含層の範囲と様相

今回の調査において、爪形文土器を包含するⅢB層は、標高露頭区西側と露頭西区を中心とした南北20m、東西50mの範囲に残存していることが判明した。ただ、先述したように、露頭区西側(第45図、写真122・123)と露頭西区(第47図、写真128・129)、6018 E(第52図、写真136・137)以外では、土器片も非常に少数であった。ただ、出土したものは全て破片が水平に堆積している状況であった。露頭の東側には既に砂丘がなく、ⅢC層が部分的に残存している状況で包含層はないものと思われる。北側も既にⅣ層が露頭し、その標高



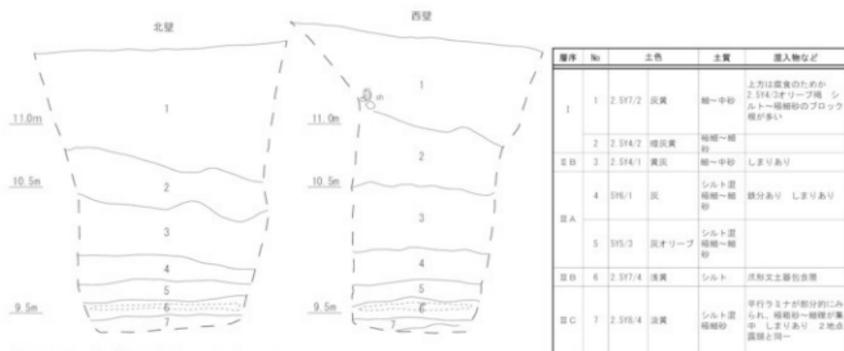
写真 133 船越原遺跡2地点 6018 A石材出土状況



写真 134 船越原遺跡2地点 6018 A堆積状況



写真 135 船越原遺跡2地点 6018 A石材集中状況



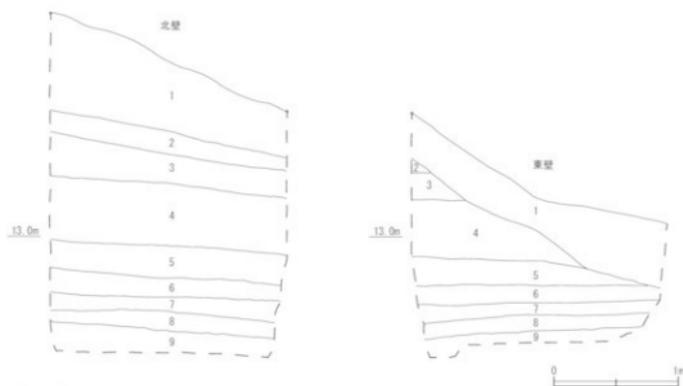
第 52 図 船越原遺跡 2 地点 6018 E 断面



写真 136 船越原遺跡 2 地点 6018 E 堆積状況



写真 137 船越原遺跡 2 地点 6018 E III B 層遺物出土状況 (左: 全体状況 右: 拡大)



第 53 図 船越原遺跡 2 地点 6021 A 断面



写真 138 船越原遺跡 2 地点 6021 A 堆積状況

層序 No	土色	土質	遺入物など	
I	1 7.S14.1	灰	粗砂	
	2 2.S16.6	黄	粗砂	しまり少し強い
	3 5I7.4	浅黄	粗砂	しまり強い
	4 2.S18.3	浅黄	粗砂	しまり少し強い
ⅡA	5 2.S14.2	緑灰黄	粗砂	
ⅡB	6 2.S17.3	浅黄	細～中砂	
ⅢA	7 2.S15.3	黄緑	中～粗砂	
ⅢB	8 2.S17.4	浅黄	シルト～粗砂	土器片出土
ⅢC	9 2.S17.6	緑黄褐	粗砂砂混じりシルト	



写真 139 船越原遺跡 2 地点 6021 A ⅢB層土器出土状況 (左:全体 右:アップ)

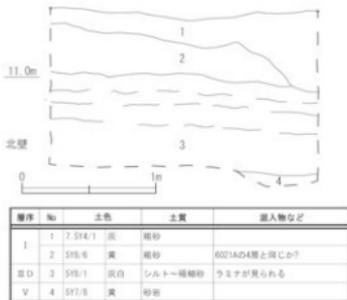
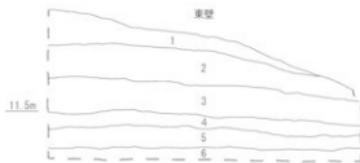
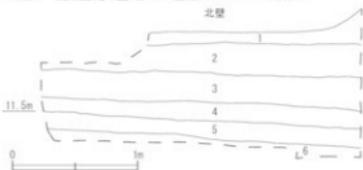


写真 140 船越原遺跡2地点 6020 E 堆積状況

第 54 図 船越原遺跡2地点 6020 E 断面



第 55 図 船越原遺跡2地点 6021 T Y 断面

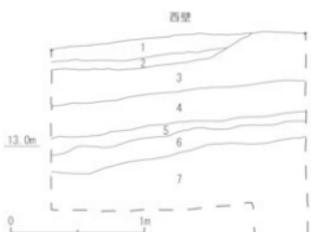
層序	No.	土色	土質	遺入物など
I	1	2.517.2 淡黄	中～粗砂	
	2	2.516.2 に近い黄	粗砂	しまり少し強い
ⅡB	3	2.517.2	細～中砂	
ⅡA	4	1016.2 に近い黄褐	中～粗砂	
ⅡB	5	2.515.3 黄褐	シルト～極細砂	
ⅡC	6	2.517.6 黄褐	極細砂混じりシルト	



写真 141 船越原遺跡2地点 6021 T Y 堆積状況 (左:北壁 右:西壁)

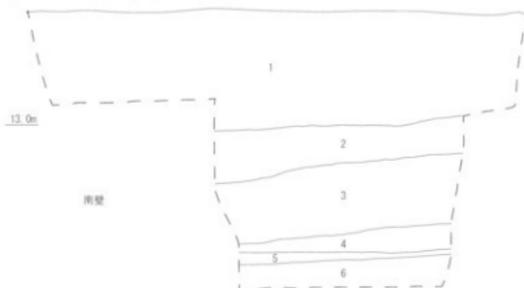


写真 142 船越原遺跡2地点 6021 T Y ⅢB層土器出土状況 (左:全体 右:アップ)



層序	No.	土色	土質	遺人物位
1	1	7.514/1	灰白	細砂
	2	519/4	灰黄	細砂
E A	3	2.514/2	暗灰黄	細砂
E B	4	2.517/2	灰黄	細~中砂
E D	5	519/1	灰白	細砂 しまり強い
	6	519/6	黄	細~中砂
V	7	517/8	黄	砂岩

第 56 図 船越原遺跡 2 地点 6320 Y 断面



第 57 図 船越原遺跡 2 地点 6220 Y 断面



写真 144 船越原遺跡 2 地点 6020 Y 堆積状況



写真 143 船越原遺跡 2 地点 6320 Y 堆積状況

層序	No.	土色	土質	遺人物位
1	1	2.517/2	灰黄	細砂
E A	2	2.514/2	暗灰黄	細砂 しまり強い 土層化あり
E B	3	2.517/3	黄黄	中砂 しまり強い 土層化なし
E A	4	2.515/3	黄褐	細~中砂 しまり強い
E C	5	2.517/4	黄黄	細~中砂 しまり強い
D	6	5195/6	暗赤褐	細砂 しまり強い

層序	No	土色	土質	埋入物など
I	1	2.517/2	灰黄	細～中砂
ⅡA	2	2.514/2	暗灰黄	細砂～細砂中～粗砂混
ⅡB	3	515/2	灰オリーブ	シルト～細砂
ⅢD	4	516/4	オリーブ黄	シルトに細砂わずかに混
	5	2.517/6	暗灰黄	シルトに細砂わずかに混
	6	2.516/4	にぶい黄	暗細砂
	7	10196/8	暗灰黄	シルト～細砂
	8	517/3	黄	シルトに細砂わずかに混
	9	10196/8	暗灰黄	シルトに細砂わずかに混

第58図 船越原遺跡2地点 6117 X断面

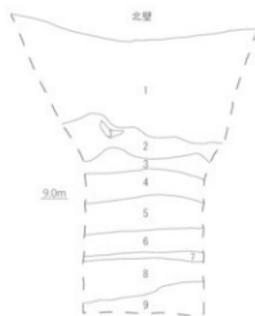
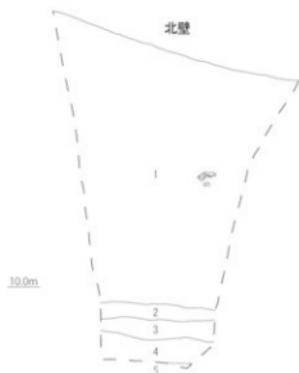


写真145 船越原遺跡2地点 6117 X堆積状況

層序	No	土色	土質	埋入物など
I	1	2.517/2	灰黄	細～中砂
	2	2.514/2	暗灰黄	細砂～粗砂
ⅡA	3	2.515/2	暗灰黄	シルト～細砂
	4	2.514/2	オリーブ黄	シルト混細～中砂
ⅢD	5	516/1	黄	細～中砂混粘土～シルト

第59図 船越原遺跡2地点 6017 L断面



写真146 船越原遺跡2地点 6017 L堆積状況

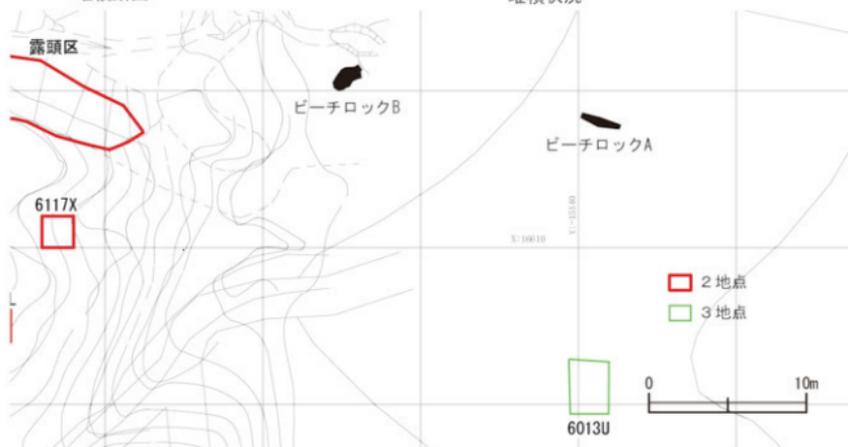


写真147 6117 XⅢA層 シャコガイ出土状況



第 60 図 船越原遺跡 2 地点東側ビーチロック
堆積断面

写真 148 船越原遺跡 2 地点東側ビーチロック
堆積状況



第 61 図 船越原遺跡 2 地点東側ビーチロック堆積位置



写真 149 船越原遺跡 2 地点東側ビーチロック (左: 全体 右: ビーチロック B)

は12～13mと急激に高くなっており、こちらにも及んでいないと考えられる。南側は大きく窪んでおり、後述するようにこれは採砂跡と考えられ、本来はここにも包含層が及んでいた可能性は高い。しかしながら、現状では3地点の試掘結果からも包含層は残存していないものと思われる。一方、西端の6021 BではⅢB層が確認されており、その西側は道路や駐車場になっているので、包含層が残存する可能性は否定できない。ただ、北から伸びてくる丘陵端部に当たるため、この包含層が大きく西側には伸びないものと思われる。

ビーチロックの分布

2地点露頭区の西側15mと30mの位置に、ビーチロックが分布する(第60・61図、写真148・149)。このビーチロックは標高5.5～6.0mにあり、ⅢC層直上に堆積している。これらの年代は後述するが、爪形文土器より新しい年代を示している。ビーチロックが原位置であると仮定すると、この地点には爪形文土器包含層であるⅢB層は及んでいなかったもしくは既に削平されていたと考えることができる。いずれにせよ、このビーチロックの存在も本遺跡の環境を知るうえで重要な痕跡である。



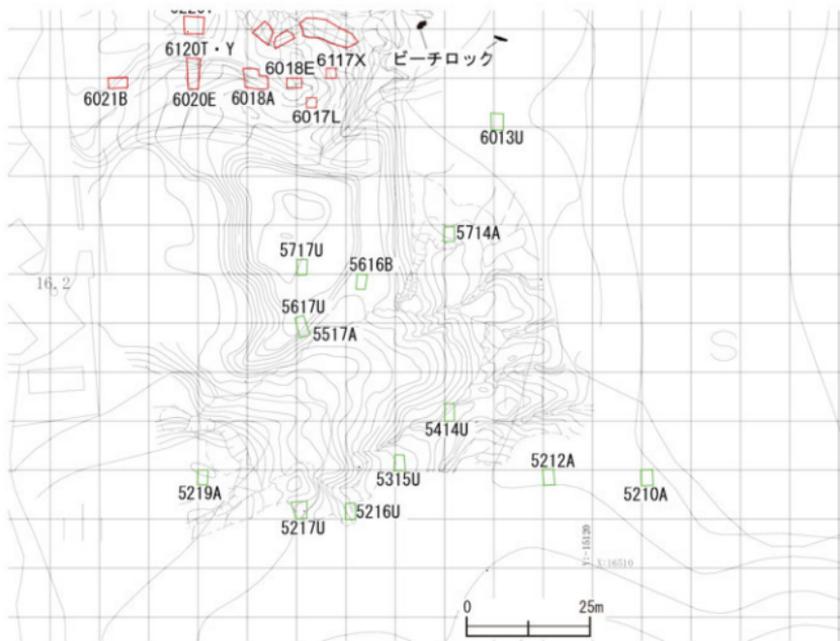
写真150 船越原遺跡3地点 西より



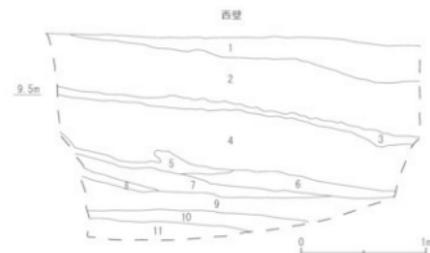
写真151 船越原遺跡3地点頂部付近



写真152 船越原遺跡3地点貝類・石材散布状況



第 62 図 船越原遺跡 3 地点調査区



第 63 図 船越原遺跡 3 地点 5616 B 断面

層序 No	土色	土質	遺入物など
I	1 2.5Y5/4	淡黄	シルト
	2 2.5Y7/3	淡黄	細砂
	3 2.5Y5/3	黄褐	細砂～細砂
II	4 2.5Y5/2	橙灰黄	細砂
	5 5Y5/3	オリーブ黄	細砂
	6 5Y5/3	灰オリーブ	細砂～細砂
	7 5Y5/6	オリーブ	細砂
	8 5Y7/2	灰白	細砂
	9 5Y6/4	オリーブ黄	細砂～細砂
III	10 5Y7/2	灰白	細砂
	11 5Y7/4	淡黄	細砂

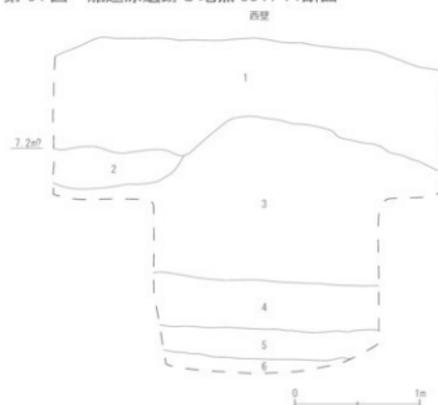


写真 153 船越原遺跡 3 地点 5616 B 堆積状況



層序 No.	土色	土質	埋入物など
I	1 2.516/3	にぶい黄 細～中砂	細～中粒5%未満混、プラスチック片 平行ラミナあり 腐砂丘
	2 2.516/4	にぶい黄 粘細～粘砂	粘粒10% シルトブロック混 平行ラミナあり 腐砂丘
V	3 517/3	浅黄 粘細砂	2.516/7粘黄褐色 シルトが30% 粘粒が70%混 風化し 丸砂粒

第 64 図 船越原遺跡 3 地点 5517 A 断面



層序 No.	土色	土質	埋入物など
I	1 2.516/3	にぶい黄	細～中砂
	2 2.517/4	浅黄	細～中砂
	3 2.517/6	粘黄褐色	シルト～粘細砂
III	4 516/3	浅黄	細～中砂
	5 2.516/6	黄	粘土混シルト
	6 2.516/3	にぶい黄	シルト

第 65 図 船越原遺跡 3 地点 5717 U 断面

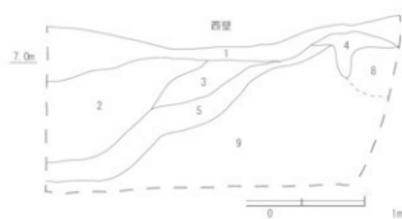


写真 154 船越原遺跡 3 地点 5517 A 堆積状況



写真 155 船越原遺跡 3 地点 5717 U 堆積状況

3 地点 (第 62～69 図、写真 150～160)
 先述したように、大量の具殻と少数の爪形
 文土器が散布している範囲であるが、大半は
 砂岩が露頭している。そこで、砂岩が露頭し
 ていない周辺において、12 か所の試掘を行
 った。その結果、試掘による遺物・遺構等の
 確認されなかった。なお、多くの調査区でⅢ
 層を確認したが、爪形文土器包含層はなか
 ったが、その多くでは層状のラミナが確認さ
 れており、激しい水流が伴う堆積環境であ
 ったことが推察される。なお、3 地点北側は
 遺物は散布していなかったが、現状で周囲
 より 2m ほど窪んでおり、ここがかつて神野 A
 式土器などが採集された宮城報告の C 地点で、
 その際の採砂跡であったと考えている。

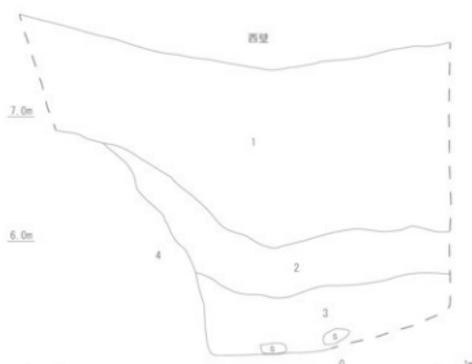


第 66 図 船越原遺跡 3 地点 5135 U 断面



写真 156 船越原遺跡 3 地点 5135 U 堆積状況

層序	No	土色	土質	埋入物など
I	1	10H5/4	灰黄緑	粘りなし、しまりあり、下のほうに鉄分がたまる
	2	10H7/3	灰黄緑	シルト～細砂
III	3	10H9/6	黄緑	粘りややあり、しまりあり、石灰含む
	4	10H9/4	灰黄緑	シルト
V	5	10H5/6	黄緑	粘り弱め、しまりあり、48ブロック状遺入、鉄分を含む
	6	2.5H6/2	灰黄	シルト～細砂
VII	7	10H9/1	灰白	粘りなし、しまり強め、風化した砂岩
	8	2.5H6/4	にぶい黄緑	シルト～細砂
	9	2.5H7/7	黄	粘りなし、しまりあり、風化した砂岩

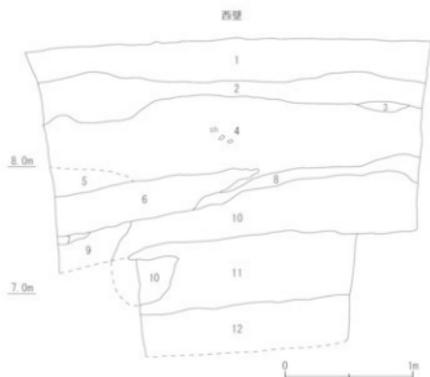


層序	No	土色	土質	埋入物など
I	1	2.5F	灰黄	細～中砂
	2	10H4/3	にぶい黄緑	シルト～中
II	3	10H6/4	にぶい黄緑	粘り弱め、しまりあり
	4	10H4/2	灰黄緑	シルト～細砂

第 67 図 船越原遺跡 3 地点 5212 A 断面

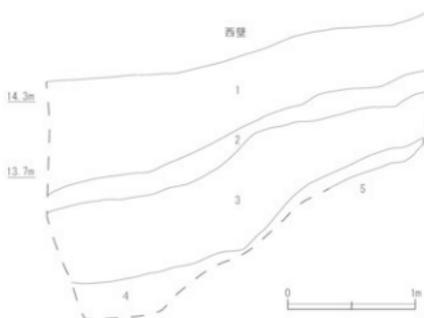


写真 157 船越原遺跡 3 地点 5212 A 堆積状況



層序	No	土色	土質	混入物など
I	1	2.5H.3	にぶい黄 細砂	
	2	2.5H.4	にぶい黄 細～中砂	
	3	2.5H.3	黄褐色 シルト混中砂	
II	4	2.5Y.4	黄褐色 中～粗砂	シャコガイ・ヤウセンサエ等貝殻混む
	5	2.5Y.4	黄褐色 中～粗砂	2.5H.4オリーブ層 細砂～粗砂が混じる。シャコガイ・ヤウセンサエ等貝殻混む
	6	2.5H.4	オリーブ層 極細～細砂	シャコガイ・ヤウセンサエ等貝殻混む
	7	2.5H.3	オリーブ層 細～中砂	
	8	2.5H.7	にぶい黄 シルト混細～中砂	
	9	5Y.3	灰オリーブ シルト混細～中砂	
	10	5Y.4	黄褐色 シルト～粗砂 (灰ブロック混)	ウミナ 部分混入
	11	2.5H.4	オリーブ層 細～中砂 (層～目録混)	
	III	12	2.5H.6	黄褐色 シルト～粗細砂

第 68 図 船越原遺跡3 地点 5315 U 断面



層序	No	土色	土質	混入物など
I	1	2.5F	黄褐色 細～中砂	粘性・しまり なし
	2	10Y4.3	にぶい黄褐色 シルト～中	粘性弱め しまりあり
II	3	10Y6.4	にぶい黄褐色 シルト～中	粘性なし しまりあり 2.5m以上に混む
	4	10Y4.2	黄褐色 シルト～粗細砂	風化した砂質

第 69 図 船越原遺跡3 地点 5217 U 断面



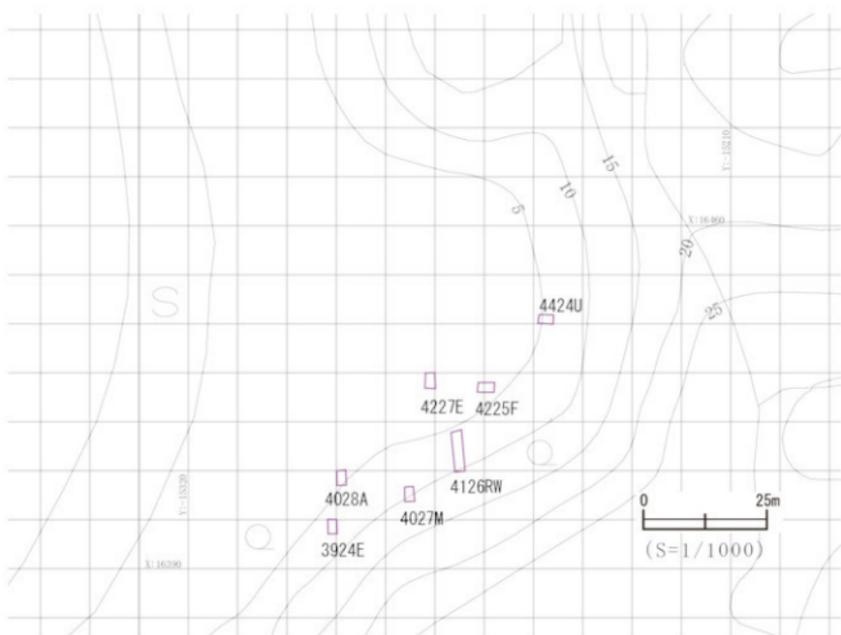
写真 158 船越原遺跡3 地点 5315 U 堆積状況



写真 159 船越原遺跡3 地点 6013 U 堆積状況



写真 160 船越原遺跡3 地点 5217 U 堆積状況



第 70 図 船越原遺跡 4 地点調査区



写真 161 船越原遺跡 4 地点 北より



写真 162 船越原遺跡 4 地点 4254 W 堆積状況



写真 163 船越原遺跡 4 地点 4028 A 堆積状況



写真 164 船越原遺跡 4 地点 4126 調査前



写真 165 船越原遺跡 4 地点 4126 RW 堆積状況

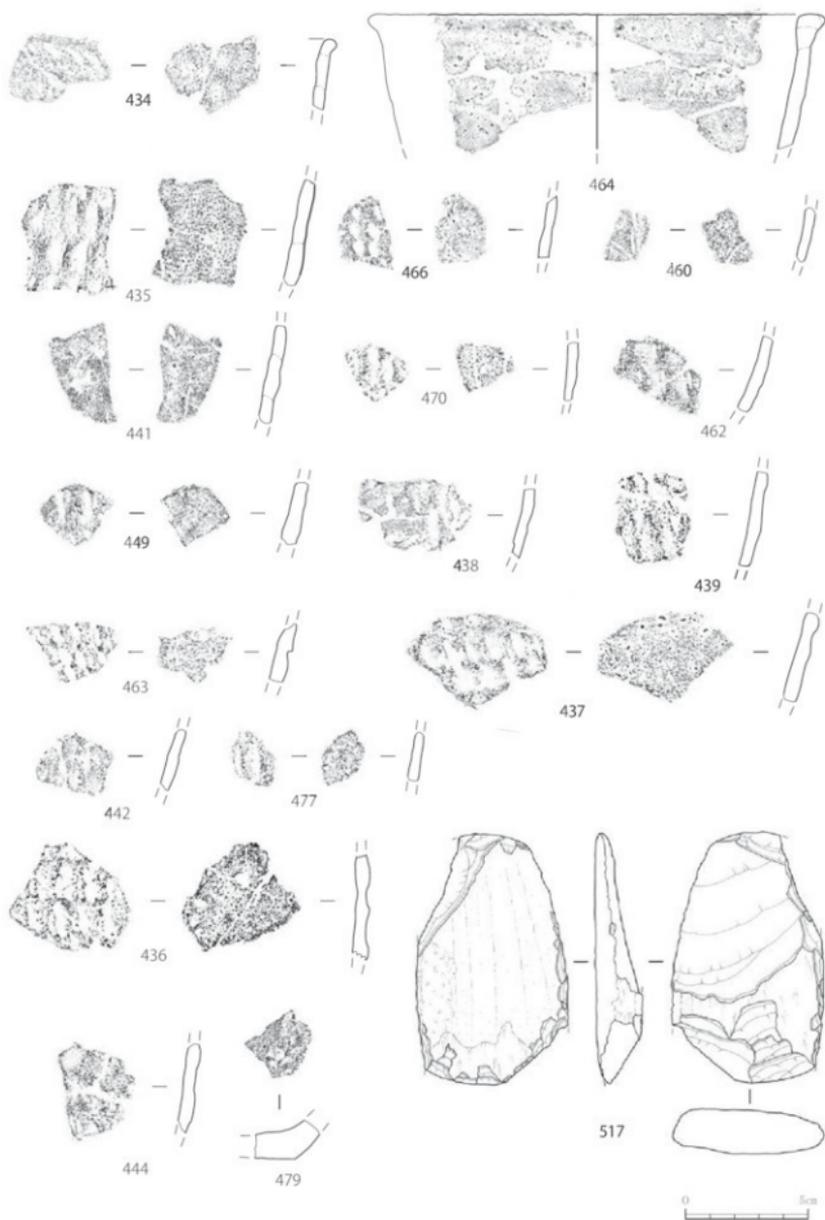
4 地点 (第 70・71 図、写真 161～165)

かつて、貝塚後期土器が採集できた西側の砂丘奥地で 7 か所の試掘を行った。その結果、遺物包含層・遺構は確認できなかった。だが、4126 RW の I 層において、貝塚後期土器が出土した。全ての調査区で、Ⅲ・Ⅳ層は確認されなかった。また、Ⅱ層についても旧地表ではあっても旧砂丘といえる土層はなかった。



第 71 図 船越原遺跡 4 地点 4126 RW 断面

層序 No.	土色	土質	遺入物など
I	1 2.515.2	緑灰黄	細砂
	2 2.512.2	黄褐	細砂～細砂
	3 2.517.2	灰黄	細～中砂
	4 2.514.3	オリブ褐	細砂～細砂
II	5 2.515.2	緑灰黄	細砂～細砂
	6 2.513.2	黄褐	シルト～細砂
	7 2.514.4	オリブ褐	細～中砂
	8 2.517.4	黄黄	中～細砂
	9 2.514.5	オリブ褐	中砂
	10 514.2	灰オリブ	細砂
	11 514.3	緑オリブ	細～中砂
	12 2.513.3	緑オリブ	細砂～細砂
	13 2.514.4	オリブ褐	細砂
	14 513.1	オリブ褐	細砂
	15 514.4	オリブ褐	細砂
	16 514.3	緑オリブ	シルト～細砂
	17 2.517.1	灰白	砂
V			



第 72 図 船越原遺跡今回調査表採・出土遺物

遺物（第72図、遺物図版22・23・26・27－427～431・433～479・517～527）

2地点ⅢB層から出したのは全て爪形文土器である。なお、今回1～3地点で採集した土器は、室川式（464）爪形文土器であった。

これまで、本遺跡では石器の採集は見られなかったが、今回の調査で2点見られた。

緑色千枚岩製の刃部磨製石斧（517）側縁は敲打及び剥離調整で、剥離調整がなされる側面は鋭利な形状となっている。表裏の刃部中心に研磨調整が施され、肩部は自然面及び剥離面となっている。これらの特徴から、爪形文土器時期の刃部磨製石斧と推定される。センター調査の2地点露頭区周辺で表採。

砂岩製の敲石（518）片側表面及び側面には磨面、側面及び背面中央に磨面を切って敲打痕が認められる。これらの使用痕跡のない箇所は自然面が残る。センター調査の3地点で表採。

貝類遺体については、非常に少なかったがオオベッコウガサガイ・シャコガイ類が目についた（第2表）。

第4節 渡嘉敷村船越原採集のオオツタノハ遺体の産状と年代について

山崎真治（沖縄県立博物館・美術館）

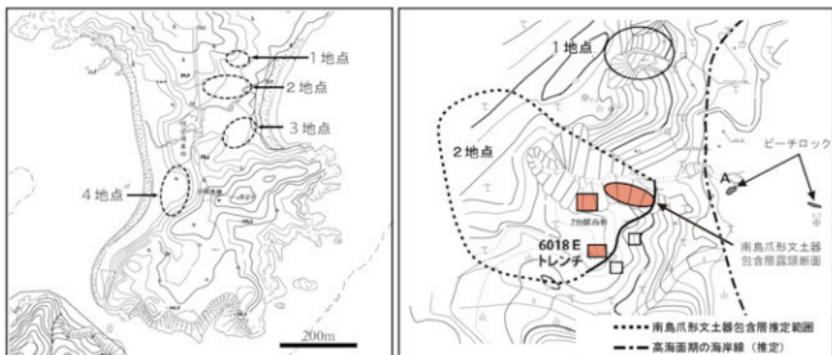
黒住耐二（千葉県立中央博物館）

國木田 大（東京大学大学院人文社会系研究科）

はじめに

オオツタノハは先史時代を中心に貝輪に利用される殻長8cm程度の大型のカサガイで、その生息域は限定されている。慶良間諸島渡嘉敷島の、渡嘉敷村船越原からオオツタノハの遺体が産出することは、すでに黒住らによって報告されており、その一部は条痕文土器包含層から産出することが確認されていた（黒住ほか2012）。また、最近では忍澤成規によって、慶良間諸島の座間味島、阿嘉島、渡嘉敷島から、貝殻形態的にオオツタノハの特徴を有する現生個体が多数採集されており、注目される（忍澤2014）。ただし、現生個体は殻長20～50mm、平均35mmと小型で、貝輪に利用されるような大型個体は皆無であったと報告されている。

山崎は、2012年7月に船越原遺跡の現地を訪れ、数例のオオツタノハ遺体を採集するとともに、その産状について検討を行った。また、その際に採集したオオツタノハ遺体について、國木田が放射性炭素年代測定を実施したので、本稿ではそれらの詳細について記載する。



第73図 遺跡周辺地形図・オオツタノハ採集地点（右図中のA）

資料の産状と同定

今回オオツタノハ遺体を採集したのは、第73図右図中のAに示したビーチロックの周辺である。ビーチロックの標高は6m程度で、現海面からは離水している。ビーチロック中やその周辺には土器等の人工遺物は分布していないが、ビーチロック中には巻貝等の貝殻がやや目立ち、ビーチロックの下位に位置するしまりの強い褐色砂層にも同様に貝殻が含まれていた。オオツタノハはこのビーチロック周辺から採集されており、厳密な産出層準を特定することはできなかったが、ビーチロック中あるいはビーチロック下位の褐色砂層中に含まれていたものと推定できる。採集したオオツタノハの計測値を表1に示す。なお、黒住ら(2012)によって報告されたオオツタノハ遺体は、主に3地点から採集されたものである。



写真166 ビーチロック (A) の位置

手前のハンマーの付近がビーチロック。第73図右図中のAから西側を望む。写真奥左側が2地点。



写真167 ビーチロック (A) の下位に位置する褐色砂層



写真168 採集されたオオツタノハ

試料の同定と年代測定

今回のツタノハ類(写真169・170)は、殻表の放射肋が2本程度セットになっており、殻頂部が片寄って位置すること、および一方が細くなる個体を含むこと(写真169)からツタノハではなく、オオツタノハと黒住耐二が同定した。採集されたオオツタノハはいずれも殻長60mm未満の個体で、この種としては小型である(第5表)。今回は、オオツタノハと同定できる資料のうち、2点について國木田大が放射性炭素年代測定を実施した。

放射性炭素年代測定の結果を第6表に示す。2件の測定値は、4600 yrBP 前後の年代値を示しており、これは従来知られている沖縄の条痕文土器期の年代値と比較しても矛盾のない値と言える。なお、船越原遺跡では、条痕文土器の土器として、①条痕文土器、②室川下層式、③神野A式類似土器の三者が確認されているが(宮城1979)、今回得られた年代値が、このうちどの型式に合致するのかについては、今後の検討が必要である。

第7表には、近年調査された条痕文期の代表的な遺跡である沖縄県南城市サキタリ洞遺跡の調査区II・IVC層



写真 169 試料 No. 1



写真 170 試料 No. 2

第 5 表 渡嘉敷島船越原採集オオツタノハの計測値

番号	種類	残存 最大長 (mm)	短径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
No.1	オオツタノハ	59.0	40.6	12.3	7.5	MTC-17178
No.2	オオツタノハ	50.7	36.8	15.6	6.0	MTC-17179

第 6 表 船越原採集オオツタノハの放射性炭素年代

Lab.No.	産地名	試料の種類	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代値 (yrBP, 1 σ)
MTC-17178	船越原	オオツタノハ、海産巻	2.6	4610 \pm 40
MTC-17179	船越原	オオツタノハ、海産巻	2.9	4575 \pm 40

※ $\delta^{13}\text{C}$ 値は、加速器の値ではなく安定同位体質量計で測定。

第 7 表 サキタリ洞遺跡調査区 II・IVC 層（条痕文期）の放射性炭素年代（沖縄県立博物館・美術館 2015）

Lab. No.	試料名	試料の種類	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	^{14}C 年代値 (yrBP, 1 σ)
MTC-16905	SAK152	汽水貝(シテナシジミ)	-6.0	4760 \pm 40
MTC-16907		炭化材(イアシシ骨付着)	-28.7	4760 \pm 40
PLD-23297	SAK656	汽水貝?(シテナシジミ?)	-11.16 \pm 0.31	4825 \pm 25
PLD-23296	SAK144	汽水貝(シテナシジミ)	-4.47 \pm 0.37	5605 \pm 30
PLD-24999	SAK1022	炭化材	-27.47 \pm 0.21	4585 \pm 20

(条痕文土器の単純包含層) から得られた年代値を示す(沖縄県立博物館・美術館 2015)。サキタリ洞遺跡では、5600～4600 yrBP にかけての 5 件の年代値が得られており、うち 4 件が 4800～4600 yrBP にまとまる。サキタリ洞遺跡の年代値は、やや幅をもつ結果となっており、今後、海洋リザーバー効果等の影響や条痕文土器期の年代幅に関して検討を進めていく必要がある。

おわりに

本稿では、渡嘉敷島船越原から採集されたオオツタノハとその年代について報告した。採集されたオオツタノハはいずれも殻長 60mm 未満の個体で、この種としては小型である。その年代については、層序的に条痕文土器に伴うことが確認されていたが、今回実施した貝殻そのものの放射性炭素年代測定の結果でも 4600 yrBP 前後の年代値が得られたことから、そうした年代観を追認することができた。また今回、オオツタノハが周知の船

越原遺跡（2地点）直下の離水ビーチロック周辺にも分布していることが確認できたが、オオツタノハと離水ビーチロックの関係を明確に把握することはできなかった。しかし、離水ビーチロックの放射性炭素年代測定でも、5600～4400 yrBP 前後の年代値が得られていることから（本章第5節参照）、一連の年代値は、船越原遺跡における縄文海進期（高海面期）の年代と当時の環境を推定する上でも、重要なデータになるものと考えられる。また、オオツタノハの分布域およびサイズの時代変化という生物学的な側面においても、興味深い例を示している。

参考文献

- 沖縄県立博物館・美術館 2015『南城市サキタリ洞遺跡発掘調査概要報告書Ⅱ』
忍澤成視 2014『日本列島先史時代における東西『貝の道』の比較研究・その2』『高梨学術奨励基金年報 平成25年度研究成果概要報告』公益財団法人高梨学術奨励基金：223-230頁
黒住耐二・樋泉岳二・赤嶺信哉・盛口満 2012『沖縄諸島の先史遺跡で初めて確認されたオオツタノハの生息（第15回動物考古学会研究集会開催報告）』『動物考古学』第29号：91頁
宮城朝光 1979『渡嘉敷島船越原遺跡の土器について』『花綵』創刊号：21～30頁

第5節 船越原遺跡の自然科学分析

パリオ・サーヴェイ株式会社

（1）平成24年度分析結果

はじめに

船越原遺跡は、沖縄県島尻郡渡嘉敷村字阿波連に所在する縄文時代の集落跡で、ヤブチ式・東原式を主体とする爪型土器を包含する層が確認されている。また、周辺では、ビーチロックの堆積も確認されている。本報告では、堆積層の年代観や古環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析、微粒炭分析を実施する。

1. 試料

土壌試料は、2地点露頭区南壁の基本層序より採取されている。2地点露頭区南壁は、上位からⅠ層～Ⅴ層に分層され、さらにⅡ層はⅡA層、ⅡB層、Ⅲ層はⅢA層～ⅢD層に細分される。Ⅰ層は明灰～暗褐色の粗粒砂からなる現砂丘である。ⅡA層は暗灰褐色の細粒～粗粒砂からなる旧表土、ⅡB層は明灰色の細粒～中粒砂からなる旧砂丘である。ⅢA層はやや暗褐色～灰色の細粒～中粒砂からなり、炭化物を含む。下位層の土壌化層と推定される。ⅢB層は灰黄～灰色の細粒砂からなり、爪型土器の包含層であり、炭化物なども含む。土壌化は認められないことから、自然堆積層と考えられる。ⅢC層は灰黄色のシルト質細粒砂、ⅢD層は明灰色のシルト～極細粒砂で、ラミナが顕著に認められる。下位層の風化塊と思われるシルト塊が混じる。Ⅳ層は赤褐～暗赤褐色の砂混じりシルトで、地山であるⅤ層の風化層と想定され、上部ではシルトの偽礫を含む。最下層のⅤ層は灰白色の砂層からなる地山である。土壌試料は、Ⅰ層～Ⅳ層より各層1～3点、計15点（試料番号1a～1c.2～8.9a,9b,12,13a,13b）が採取されている。また、これらの土壌試料より、貝、炭化物を抽出した。Ⅱ地点南壁の模式柱状図、試料採取位置および分析層位を第74図に示す。

ビーチロックが堆積している地点は、2地点露頭区南壁のⅢC層相当層上面にビーチロックが堆積していることが確認されている。これらは、標高6.3m以下に堆積している。本地点からも貝、サンゴなどを採取している。

これらの貝、炭化物、サンゴ、土壌試料を用いて、放射性炭素年代測定7点、花粉分析9点、微粒炭分析9点を実施する。試料の詳細については、結果と併せて表に示す。

2. 分析方法

1) 放射性炭素年代測定

炭化物については、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などに物理的に除去する。その後、HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去を行う(酸・アルカリ・酸処理)。

土壌については、根など目的物と異なる年代を持つものが混入している場合、これらをピンセットなどで物理的に除去した後、HClによる炭酸塩等酸可溶成分を除去する(HCl処理)。

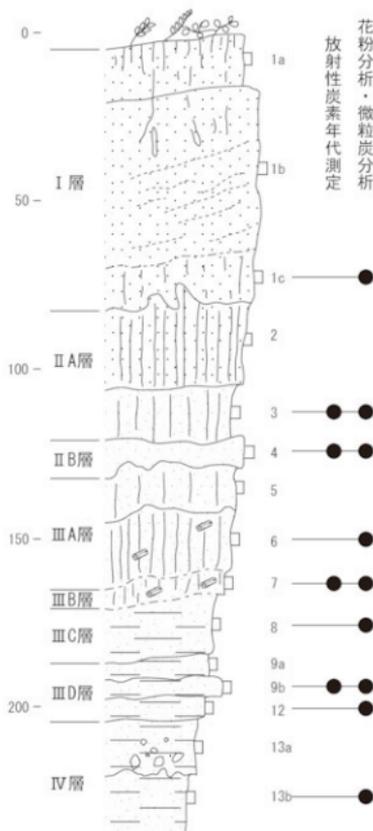
これらの試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱してCO₂を発生させる。

貝類やサンゴについては、土壌や根など目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。試料の表面を、HClを用いて約30%溶かし汚染された可能性のある部分を除去する(Edg処理)。試料中の炭酸カルシウム(CaCO₃)を分解し、CO₂を発生させる。

液体空素と液体空素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いてδ¹³Cを算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差とし



第74図 2地点南壁の模式柱状図、試料採取位置および分析層位

て標準偏差 (One Sigma) を用いる。

2) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9 : 濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉、草本花粉・シダ類胞子は、総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として百分率で出現率を算出し図示する。なお、花粉総数が 100 個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

3) 微粒炭分析

分析試料は、基本的に花粉分析残渣の一部を、微粒炭分析に用いる形をとる。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下で 20 μ m 以上の微粒炭について計数する。同定基準は山野井 (1996)、井上ほか (2002) 等を参考にする。また、特徴的な微粒炭 (たとえば木材組織をもつもの、植物珪酸体を含む組織片など) がみられる場合には特記事項として記載する。

結果は、分析土壌量 (cc)、分析残渣量 (ml)、プレパラート作成量 (μ l) を測定し、試料 1cc あたりの微粒炭数および花粉・胞子数を求め結果表・図に示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸め、100 個体未満は「<100」で表示する。

3. 結果

1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 8 表に、暦年校正結果を第 9 表に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、2 地点露頭区南壁の試料番号 3 出土貝が $4,110 \pm 20$ BP、試料番号 4 出土貝が $4,360 \pm 20$ BP、試料番号 7 出土炭化物が $5,750 \pm 30$ BP、試料番号 9b の土壌が $6,850 \pm 30$ BP、2 地点のビーチロック採取の貝・サンゴが $4,360 \pm 20$ BP、 $4,680 \pm 30$ BP、 $5,570 \pm 30$ BP の値を示す。なお貝はアマオブネ、タカラガイの仲間、ヤコウガイ? に同定された。

暦年校正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5,730 \pm 40 年) を校正することである。暦年校正は、CALIB 6.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、分析対象とした貝やサンゴは、生育環境や $\delta^{13}\text{C}$ の値からみて海洋由来の炭素によって構成されていることから、海洋炭素に由来する校正曲線を用いた暦年校正を行う。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値 (暦年校正プログラムの default 値である約 400 年) を使い、地域による補正は考慮していない。その他の炭化物・土壌は、北半球の大気中炭素に由来する校正曲線を用いる。

暦年校正は北半球の大気中炭素に由来する校正曲線を用い、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。校正された暦年代は、将来的に暦年校正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

第8表 放射性炭素年代測定結果

地点名	壁面	層位	試料番号 / 試料名	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
Ⅱ地点南壁	ⅡA層	3		貝(アマオブネ)	4,110±20	5.35±0.37	3,620±20	IAAA-123928
Ⅱ地点南壁	ⅡB層	4		貝(巻貝)	4,360±20	-0.20±0.31	3,960±20	IAAA-123929
Ⅱ地点南壁	ⅡB層	7		炭化物	5,750±30	-24.63±0.37	5,750±30	IAAA-123931
Ⅱ地点南壁	ⅡD層	9b		土壌中腐植	6,850±30	-20.55±0.37	6,770±30	IAAA-123932
Ⅱ地点				ビーチロック 貝(タカラガイの仲間)	4,360±20	5.44±0.31	3,870±20	IAAA-123933
Ⅱ地点				ビーチロック 貝(ヤコウガイ?)	4,680±30	-0.16±0.35	4,270±30	IAAA-123934
Ⅱ地点				ビーチロック サンゴ	5,570±30	-0.67±0.41	5,180±30	IAAA-123930

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第9表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)						相対比	Code No.				
		σ	cal	BC	cal	BC	cal			BP			
Ⅱ地点南壁 ⅡA層3	4,114±24	σ	cal	BC 2,273	-	cal	BC 2,175	cal	BP 4,222	-	4,124	1.000	IAAA-123928
		2 σ	cal	BC 2,318	-	cal	BC 2,125	cal	BP 4,267	-	4,074	1.000	
Ⅱ地点南壁 ⅡB層4	4,363±24	σ	cal	BC 2,581	-	cal	BC 2,489	cal	BP 4,530	-	4,438	1.000	IAAA-123929
		2 σ	cal	BC 2,634	-	cal	BC 2,461	cal	BP 4,583	-	4,410	1.000	
Ⅱ地点南壁 ⅡB層7	5,751±27	σ	cal	BC 4,667	-	cal	BC 4,661	cal	BP 6,616	-	6,610	0.650	IAAA-123931
		2 σ	cal	BC 4,654	-	cal	BC 4,639	cal	BP 6,603	-	6,588	0.139	
Ⅱ地点南壁 ⅡD層9b	6,846±27	σ	cal	BC 4,618	-	cal	BC 4,546	cal	BP 6,567	-	6,495	0.811	IAAA-123932
		2 σ	cal	BC 4,689	-	cal	BC 4,529	cal	BP 6,638	-	6,478	1.000	
Ⅱ地点 ビーチロック	4,364±23	σ	cal	BC 5,747	-	cal	BC 5,706	cal	BP 7,696	-	7,655	0.892	IAAA-123933
		2 σ	cal	BC 5,686	-	cal	BC 5,676	cal	BP 7,635	-	7,625	0.108	
Ⅱ地点 ビーチロック	4,675±25	σ	cal	BC 5,781	-	cal	BC 5,665	cal	BP 7,730	-	7,614	1.000	IAAA-123934
		2 σ	cal	BC 5,783	-	cal	BC 2,490	cal	BP 4,532	-	4,439	1.000	
Ⅱ地点 ビーチロック	5,571±28	σ	cal	BC 2,634	-	cal	BC 2,462	cal	BP 4,583	-	4,411	1.000	IAAA-123930
		2 σ	cal	BC 2,978	-	cal	BC 2,895	cal	BP 4,927	-	4,844	1.000	
Ⅱ地点 ビーチロック	5,571±28	σ	cal	BC 3,025	-	cal	BC 2,873	cal	BP 4,974	-	4,822	1.000	IAAA-123934
		2 σ	cal	BC 4,033	-	cal	BC 3,962	cal	BP 5,982	-	5,911	1.000	
Ⅱ地点 ビーチロック	5,571±28	σ	cal	BC 4,104	-	cal	BC 3,935	cal	BP 6,053	-	5,884	1.000	IAAA-123930
		2 σ	cal	BC 4,104	-	cal	BC 3,935	cal	BP 6,053	-	5,884	1.000	

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。
2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である。
5)相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

測定誤差を σ として計算させた結果、2地点露頭区南壁の試料番号3出土貝がcalBC 2,273-2,175、試料番号4出土貝がcalBC 2,582-2,489、試料番号7出土炭化物がcalBC 4,667-4,546、試料番号9bの土壌がcalBC 5,747-5,676、2地点のビーチロック採取の貝・サンゴがcalBC 2,583-2,490、calBC 2,978-2,895、calBC 4,033-3,962の値を示す。

2) 花粉分析

結果を第10表、第75図、写真171に示す。全体的に花粉化石の産出状況が悪く、検出される花粉・シダ類胞子の保存状態も悪い。試料番号4でのみ、花粉総数が100個体を超える産出が認められた。検出された種類をみると、木本花粉ではマツ属が多産し、イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科、ヤマモモ属、コナラ属アカガシ亜属、シイ属、ニレ属-ケヤキ属を伴う。草本花粉ではサトイモ科が多産し、イネ科、アブラナ科、セリ科、キク亜科、タンポポ亜科を伴う。

そのほかの試料では、花粉化石やシダ類胞子はほとんど、あるいは全く検出されない。

3) 微粒炭分析

結果を第10表、第75図、写真171に合わせて示す。1ccあたりの微粒炭数は、試料番号1c～6で約1,700～3,400個多い傾向にあり、試料番号7で約600個/cc、試料番号8～13bで約200個/cc～100個体未満と少ない。なお、壁孔や放射組織など木材組織を持つ微粒炭や小椋(2007,2008)で述べられているイネ科由来とされる微粒炭は全く検出されず、検出された微粒炭はすべて母材不明である。

1ccあたりの花粉・胞子数は、いずれも100個体未満であり、試料番号13bは無化石であった。

第 10 表 花粉分析・微粒炭分析結果

種 類	II 地点南壁								
	I 層 No.1c	II A層 No.3	II B層 No.4	III A層 No.6	III B層 No.7	III C層 No.8	III D層 No.9b	III D層 No.12	IV層 No.13b
木本花粉									
マツ属複雑管束亜属	-	-	9	-	-	-	-	-	-
マツ属(不明)	-	-	35	-	2	-	-	-	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	-	2	-	3	-	-	-	-
ヤマモモ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ハンノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ亜属	1	-	2	-	-	-	1	1	-
シイ属	-	-	2	-	-	-	-	-	-
ニレ属-ケヤキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-
エノキ属-ムクノキ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉									
イネ科	1	-	2	-	-	-	-	-	-
サトイモ科	-	-	47	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	1	-	-
アブラナ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ゼリ科	-	-	1	-	-	-	-	-	-
キク亜科	-	-	6	-	-	-	-	-	-
タンポポ亜科	-	-	5	-	-	-	-	-	-
不明花粉									
不明花粉	1	2	19	1	3	2	2	2	-
シダ類胞子									
シダ類胞子	1	-	42	-	4	1	-	1	-
合 計									
木本花粉	3	0	52	0	5	0	1	1	0
草本花粉	1	0	62	0	0	0	1	0	0
不明花粉	1	2	19	1	3	2	2	2	0
シダ類胞子	1	0	42	0	4	1	0	1	0
合計(不明を除く)	5	0	156	0	9	1	2	2	0
微粒炭数(個/cc)	2400	3400	1700	3400	600	100	<100	200	<100
花粉・胞子数(個/cc)	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	0

1) 微粒炭数、花粉・胞子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

2) <100:100個体未満。

4. 考察

1) 堆積層の年代と2地点の地形発達

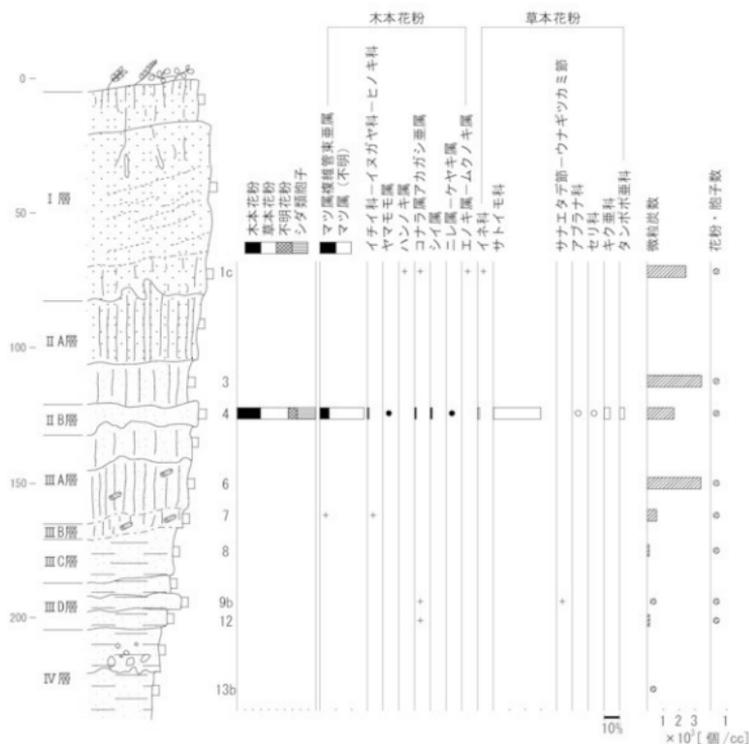
2地点の位置する丘陵地形を構成する地質は、中生代白亜紀から新生代古第三紀にかけて形成された国頭層群に対比される慶良間層の中の砂岩部層と呼ばれる主に砂岩からなる地質である(木崎編著,1985)。V層とされている砂岩が、これに相当する。その上位のIV層は、その層相から、V層の砂岩を母材として形成された土壌であると考えられる。IV層は、ある程度の厚みを持つことから、安定した地表面すなわち大きな浸食や堆積作用のない状態が比較的長期間継続したことが推定される。今回の調査分析では、IV層に関わる年代資料は得られていないが、上位のIII D層中の腐植の年代が約6,900BP(未較正年代、以下も引用文献との関係から全て未較正年代で表記する)であることを考慮すれば、IV層の土壌が形成されるような乾陸であった時期は、おそらく更新世末から完新世前半頃までの時期であったと考えられる。

その後、2地点ではIII D層・III C層のシルト質砂層、III B層・III C層の砂層の堆積へと環境が変化するが、この変化の要因は、海岸線との関係すなわち海進・海退である可能性が高い。それは、II地点の近傍でビーチロックが検出されたことによる。このビーチロックから得られた年代は、約5,600～4,400BPであったことからその形成時期は新しい方の年代の約4,400BPに近いと考えられる。ビーチロックは、形成時の汀線を示すが、今回検出されたビーチロックの標高は6m前後とされている。琉球列島の各島で完新世における最も高い汀線標高が認められる標高は、島による地殻変動の違いから一様ではなく、2～3m程度から10mを超す高さまで示されている(木庭,1990)。このデータには慶良間諸島の島は示されていないが、周辺の沖縄本島南部、粟国島、久米島などの値をみると4～5m程度である。これらの値を参照すると、今回の調査で検出されたビーチロッ

クは、渡嘉敷島における完新世の海進高頂期に形成された可能性が高いと考えられる。上述したように、ピーロックの形成年代は約 4,400BP に近いと考えられ、その年代は、2地点では II B 層から得られている。したがって、IV 層から III D ~ III A の各層を経て II B 層に至るまでの堆積層の変化は、完新世に起こった海進によって 2地点の地形環境が変化したことが原因であると考えられる。各層の層相と年代資料からは、以下の変遷が考えられる。

III D 層の腐植の年代から推定すると、約 7,000BP 以前にはすでに海進は始まっており、約 7,000BP 頃の 2地点は、これまでの内陸部を示す乾陸環境から、海岸低地に形成される後背湿地に変わっていたことが推定される。III D 層および III C 層のシルト質砂層は、低地背後の丘陵表層から洗い出された砂や泥が湿地内に堆積したものであると考えられる。

海進はさらに進み、5,800BP 頃には 2地点は海岸低地から海浜になったと考えられる。この時期に、爪形文土器の遺物包含層である III B 層とその上位の III A 層が形成されたと考えられる。これらの層は、細粒砂からな

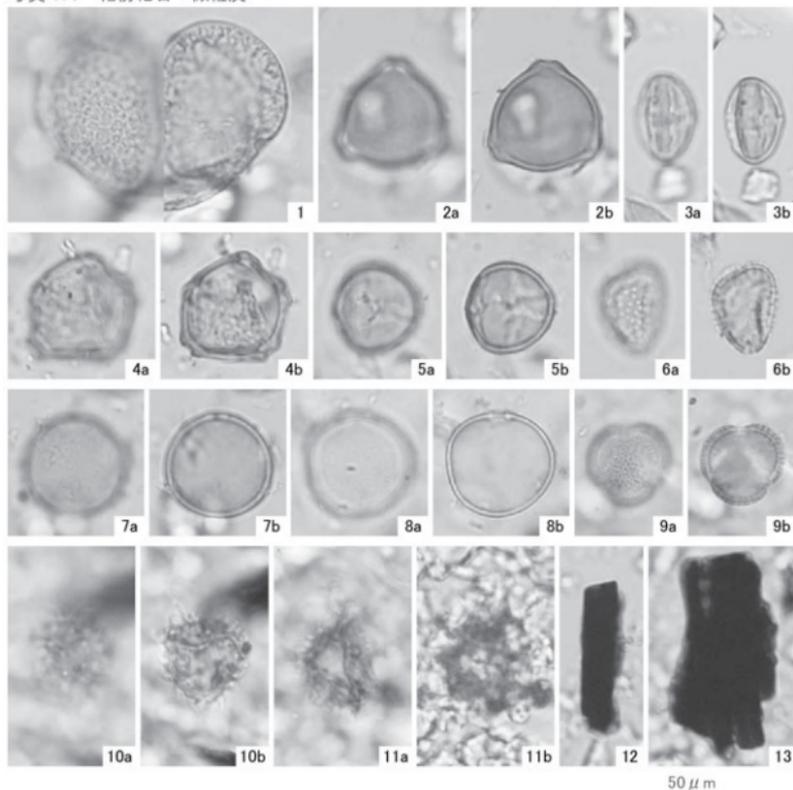


木本花粉、草本花粉・シダ類胞子のいずれも総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で表した。○●は 1%未満、+は花粉総数 100 個未満の試料において検出された種類を示す。

微粒炭数、花粉・胞子数は、堆積物 1cc あたりの個数で示し、○は 100 個 /cc 未満を示す。

第 75 図 花粉化石群集と微粒炭数

写真 171 花粉化石・微粒炭



- | | |
|----------------------------|------------------------|
| 1. マツ属(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) | 2. ヤマモモ属(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) |
| 3. シイ属(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) | 4. ハンノキ属(Ⅱ地点南壁 Ⅰ層:1c) |
| 5. コナラ属アカガシ亜属(Ⅱ地点南壁 Ⅰ層:1c) | 6. サトイモ科(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) |
| 7. エノキ属—ムクノキ属(Ⅱ地点南壁 Ⅰ層:1c) | 8. イネ科(Ⅱ地点南壁 Ⅰ層:1c) |
| 9. アブラナ科(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) | 10. キク亜科(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) |
| 11. タンポポ亜科(Ⅱ地点南壁 ⅡB層:4) | 12. 不明微粒炭(Ⅱ地点南壁 Ⅰ層:1c) |
| 13. 不明微粒炭(Ⅱ地点南壁 Ⅰ層:1c) | |

る砂層であるが、遺物や炭化物を包含し、植生によると考えられる擾乱も認められることなどから、これらの層が形成された2地点は、海浜の中でも常時は乾燥しており、暴浪や高潮などの時に浸水するという後浜であった可能性がある。

Ⅲ A 層の上位に堆積するⅡ B 層の砂層が形成された時期は、前述したように汀線が2地点に最も近づいた時期であるが、Ⅱ B 層の標高はビーチロックの標高よりも3~4m高いから、2地点自体は汀線よりも高い地形すなわちⅢ A 層形成時と同じ後浜の範囲にあったと考えられる。ただし、Ⅲ A 層形成時よりは汀線に近い位置にあったと考えられ、有機物の含有がほとんどないことを示唆する明灰色の色調を呈している。

その上位のⅡ A 層の色調は、砂層堆積後にしばらく安定した地表の時期があったことを示唆している。Ⅱ A

層から得られた年代資料からは、その堆積が海進高頂期からその直後頃であったと考えられる。おそらく、若干の海退があった後に海水準がしばらく安定したことによって、砂層の土壌化が進行し、Ⅱ A 層の色調が形成されたと考えられる。

I 層については現在の地表まで続くことから、現在とほぼ同様の地形環境下で形成されたことが推定される。現在の2地点の位置する地形は海浜ではないから、I 層の砂層は、海浜の堆積物ではなく、海浜の背後に形成された砂丘砂層である。砂丘の形成要因としては、次のように考えられる。ある時期に渡嘉敷島では急激な海退があり、そのためにこれまで後方礁原であった地形が海面から露出、乾燥した表面には多量の砂が生じ、それを供給源として、I 層の厚い砂丘が形成されたと考えられる。なお、今回の調査分析では年代資料が得られていないため、I 層の堆積開始年代すなわち急激な海退がいつ起こったかは不明である。現在では、砂丘表層には植生が繁茂し、若干の土壌化も進んでいる。

2) 古環境

今回の分析の結果では、花粉化石はほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。花粉化石・シダ類胞子の産出状況が悪い場合、元々取り込まれる花粉量が少なかった、あるいは、取り込まれた花粉が消失した、という2つの可能性があげられる。詳細な堆積環境が不明であるが、全体的に砂質の試料が多いことから、堆積速度が速かった可能性がある。また、わずかに検出される花粉化石・シダ類胞子の保存状態は悪く、ほとんどの個体において外膜が破損あるいは溶解している状態であった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壌微生物によって分解・消失するとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。各試料の花粉・胞子数をみると、いずれも堆積物1ccあたり100個体未満ときわめて少ない。これらのことから、今回花粉が検出されなかった理由として、堆積時に取り込まれにくかった可能性があり、取り込まれた花粉・シダ類胞子も、その後の経年変化により分解・消失したと考えられる。

Ⅱ B 層(試料番号4)は、少ないながらも同定した花粉総数が100個体を超えたが、保存状態はほかの試料同様、破損・溶解しているものが多い。花粉やシダ類胞子の腐蝕に対する抵抗性は種類により異なっており、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている(中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など)。検出された花粉は、分解に強い花粉、分解の影響を受けても同定可能な種類、生産量の多い種類などが検出されている。よって、分解に強い花粉が選択的に多く残されている可能性がある。少なくとも、検出された種類から、森林構成要素としてはコナラ属アカガシ亜属、セイ属、ヤマモモ属などが、二次林要素としてマツ属などがあげられ、海岸などにはイチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科(おそらくヒノキ科)、河川沿いなどの適湿地にニレ属-ケヤキ属などが生育していた可能性がある。

草本類では、サトイモ科が多産し、イネ科、アブラナ科、セリ科、キク亜科、タンポポ科が検出された。サトイモ科にはテンナンショウ属やクワズイモなどが含まれるほか、その他の草本類も開けた場所に生育する種類が含まれることから、これらの草本類が調査区周辺の草地や林床などに生育していた可能性がある。

一方、微粒炭数についてみると、Ⅲ A 層(試料番号6)とⅢ B 層(試料番号7)の境界で傾向が異なり、上位の試料では約1,700~3,400個/ccであるが、下位の試料では約600個/cc以下と少ない。土壌中に含まれる微粒炭は、人間活動と密接に関係していることが知られており、その変化は人為活動の変化を反映している場合が多く認められる(例えば安田,1987;山野井,1996;井上ほか,2002)。よって、Ⅲ A 層堆積時より後、Ⅲ B 層の年代測定結果を考慮すると5,800BP以降の周辺で、人為活動が活発化した可能性が想定される。

引用文献

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑,アークコーラル企画,155p.

井上 淳・吉川周作・千々和一豊,2002,琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について,日本第四紀学会講演要旨集,32,74-75.

木崎甲子郎編著,1985,琉球弧の地質誌.沖縄タイムス社,278p.

木庭元晴,1990,琉球列島第四紀のサンゴ礁形成と島弧変動.サンゴ礁地域研究グループ編 日本のサンゴ礁地域1 熱い自然-サンゴ礁の環境誌,古今書院,155-175.

三宅 尚・中越信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.

中村 純,1967,花粉分析,古今書院,232p.

中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.

小椋純一,2007,微粒炭の母材植物特定に関する研究.植生史研究,15,85-96.

小椋純一,2008,釧路湿原北東陸地部における微粒炭分析.日本植生史学会第23回大会講演要旨集,46-47

鳥倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.

徳永重元・山内輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

山野井 徹,1996,黒土の成因に関する地質学的検討.地質学雑誌,102,526-544.

安田喜恵,1987,文明は緑を食べる,読売新聞社,227p.

(2) 平成 25 年度分析結果

はじめに

船越原遺跡は、沖縄県島尻郡波嘉敷村字阿波連に所在する縄文時代の集落跡で、ヤブチ式・東原式を主体とする爪型文土器を包含する層が確認されている。また、周辺では、ビーチロックの堆積も確認されている。

本報告では、堆積層の年代観や古環境に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、粒度分析および土壌理化学分析を実施する。

1. 試料

放射性炭素年代測定を行った試料は、下記堆積物試料を採取した2地点露頭南壁の背後の調査区 6018 Aにおいて検出された礫集中遺構周囲で採取された炭化物2点(試料名は「北西平面」と「礫集中」と礫集中遺構検出面より上位の層位の土壌断面壁面より採取された炭化物1点(試料名は「試掘坑壁面」)の合計3点の炭化物である。

微細物分析、粒度分析および土壌理化学分析の対象とした試料は、2地点露頭区南壁の基本層序より採取されている。2地点露頭区南壁は、上位からI層～V層に分層され、さらにII層はII A層、II B層、III層はIII A層～III D層に細分される。I層は明灰～暗褐色の粗粒砂からなる現砂丘である。II A層は暗褐色の細粒～粗粒砂からなる旧表土、II B層は明灰色の細粒～中粒砂からなる旧砂丘である。III A層はやや暗褐色～灰色の細粒～中粒砂からなり、炭化物を含む。下位層の土壌化層と推定される。III B層は灰黄～灰色の細粒砂からなり、爪型文土器の包含層であり、炭化物なども含む。土壌化は認められないことから、自然堆積層と考えられる。III C層は灰黄色のシルト質細粒砂、III D層は明灰色のシルト～極細粒砂で、ラミナが顕著に認められる。下位層の風化塊と思われるシルト塊が混じる。IV層は赤褐～暗赤褐色の砂混じりシルトで、地山であるV層の風化層と想定され、上部ではシルトの偽礫を含む。最下層のV層は灰白色の砂層からなる地山である。土壌試料は、I層～IV層より各層1～3点、計15点(試料番号1a～1c,2～8,9a,9b,12,13a13b)が採取されている。また、これらの土壌試料より、貝、炭化物を抽出した。2地点南壁の模式柱状図、試料採取位置および分析層位を第76図に示す。

これらの堆積物試料を用いて、微細物分析3点、粒度分析9点および土壌理化学分析9点を実施する。選択した試料の採取位置については第76図に、試料の詳細については粒度分析結果や、土壌理化学分析結果の色調などを参照されたい。

2. 分析方法

1) 放射性炭素年代測定

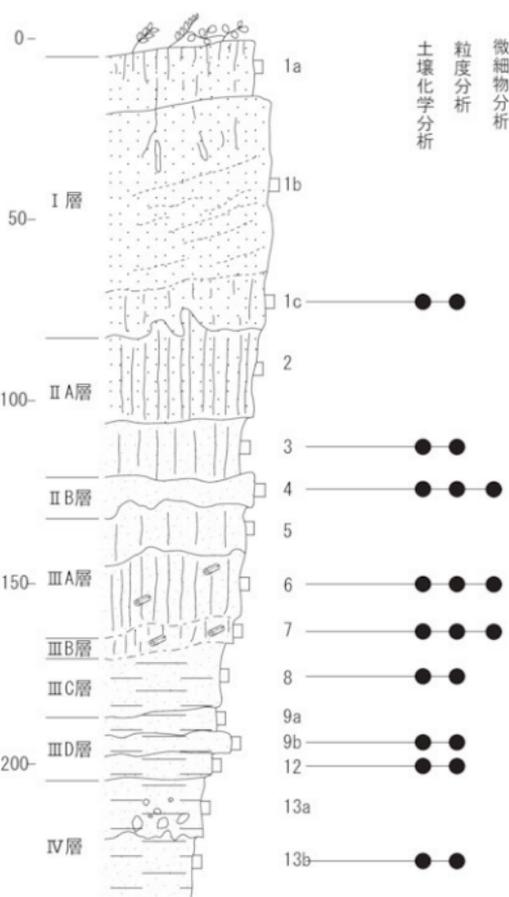
土壌や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。これらの試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱してCO₂を発生させる。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し、封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合層位

試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から、提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に¹³C/¹²Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma:68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線



第76図 2地点南壁の喪中式柱状図、試料採取位置及び分析層位

強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い(¹⁴Cの半減期5,730±40年)を校正することである。暦年較正は、CALIB 6.0のマニュアルにしたがひ、1年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、分析対象とした貝やサンゴは、生育環境やδ¹³Cの値からみて海洋由来の炭素によって構成されていることから、海洋炭素に由来する較正曲線を用いた暦年較正を行う。リザーバー効果による補正に関しては、地域的な補正を行うための情報に乏しいため、海洋での一般的な値(暦年較正プログラムのdefault値である約400年)を用い、地域による補正は考慮していない。その他の炭化物・土壌は、北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用いる。

暦年較正は北半球の大気中炭素に由来する較正曲線を用い、測定誤差σ、2σ双方の値を計算する。σは統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、2σは真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、σ、2σの範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表された値を記す。

2) 微細物分析

土壌試料から種実遺体などの遺物を分離・抽出するために、試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別に常温乾燥後、双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体や、主に径2mm以上の炭化材などの遺物を抽出する。抽出物は、個数および重量、最大径を求めて結果を一覧表で示す。分析残渣は、重量を表示する。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

3) 粒度分析

砂屑性堆積物研究会(1983)の方法を参考に礫・砂粒子画分は篩別法、シルト・粘土粒子画分はピベット法で行った。また、粒径区分はWentworth(1922)に従った。以下に分析操作工程を示す。

試料を風乾して2mmφ篩でふるい分けする。2mmφ篩上粒子は水洗・乾燥させた後、64、32、16、8、4mmφ篩で篩別して重量を測定する。一方、2mmφ篩下粒子は10.00gをビーカーに秤量し、蒸留水と30%過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤(4%カルボン)を加え、攪拌しながら30分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で1時間振とうする。振とう終了後、水で全量を1000mlにする。この沈底瓶を1分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピベット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分(0.063mm>)、粘土画分(0.0039mm>)を10ml採取し、105℃で24時間乾燥させた後、重量を測定し加積通過率(質量%)を求める。ピベット法終了後、懸濁液を63μm篩で水洗いする。63μm篩残留物を105℃で24時間熱乾燥後、1.0、0.5、0.25、0.125mmφ篩でふるい分け各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率(質量%)を求める。ピベット法およびふるい分け法によって求められる各粒径区分における残留質量(通過質量)から粒径区分範囲ごとの質量百分率(%)を算出する。

4) 土壌理化学分析

土壌理化学分析は、pH(H₂O)、有機炭素、全窒素、全鉄・全マンガン、ジチオナイト可溶鉄・マンガン、酸性シュウ酸塩可溶鉄の各分析を行う。pH(H₂O)はガラス電極法、有機炭素量はチューリン法、全窒素量は硫酸分解-水蒸気蒸留法、全鉄および全マンガンはフッ化水素酸分解-原子吸光法(土壌標準分析・測定法委員会1986;土壌環境分析法編集委員会編1997)に従う。また、酸性シュウ酸塩可溶鉄、ジチオナイト可溶鉄およびマンガンについてAcid-oxalate法、Holmgren法(Reeuwijk,1986)に従い抽出し、原子吸光法により定量した後、永塚(1973)の方法により遊離酸化鉄の活性度・結晶化指数を算出する。

①試料調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩い分けする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。また、風乾細土試料の一部を振動ミル(平工製作所製TI100;10ml容タンクステンカーバイト容器)で微粉

砕し、微粉碎試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

② pH(H₂O)

風乾細土 10.0 gをはかりとり、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター(ガラス電極法)でpH(H₂O)を測定する。

③有機炭素

粉碎土試料 2.000 ~ 3.000g を 100ml 三角フラスコに正確に秤とり、0.4N クロム酸・硫酸混液 10ml を正確に加え、約 200℃ の砂浴上で正確に 5 分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に 0.2 N 硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量 (Org C 乾土%) を求める。これに 1.724 を乗じて腐植含量 (%) を算出する。

④全窒素

粉碎土試料 1.00g をケルダール分解フラスコに秤とり、分解剤約 3.0g と硫酸 10ml を加え加熱分解する。分解後、蒸留水約 30ml を加え放冷した後、分解液全量を供試水蒸気蒸留法によって窒素を定量する。この定量値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全窒素量 (T-N%) を求める。また、有機炭素量を全窒素量で除し、C/N(炭素率)を算出する。

⑤全鉄、全マンガン

微粉碎試料約 0.50g をテフロンピーカーに精秤し、硝酸 5ml および過塩素酸 5ml を加え、時計皿で覆い、サンドバス上で有機物を分解する。過塩素酸の白煙が激しく出てきた後、過塩素酸 5ml とフッ化水素酸 10ml を加え、内容物を蒸発乾固させる。放冷後、6N-HCl 5ml、硝酸 1ml を加え加熱し、内容物を軽く溶解させた後、蒸留水 30ml を加え、内容物を完全に溶解させる。放冷後、100ml に定容する。この定容液を適宜希釈し、原子吸光度計により鉄 (Fe) およびマンガン (Mn) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) およびマンガン (Mn%) の含量を求める。

⑥ジチオナイト可溶鉄・マンガン (Holmgren 法)

微粉碎試料 500mg に DCB 抽出液 30ml を添加して 16 時間振とうする。振とう後、0.4% 高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光度計により鉄 (Fe) およびマンガン (Mn) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) およびマンガン (Mn%) の含量を求める。

⑦酸性シュウ酸塩可溶鉄 (Acid-oxalate 法)

微粉碎試料 300mg に 0.2M 酸性シュウ酸塩溶液 (pH3) を 30ml 加え、暗所で 4 時間振とうする。振とう後、0.4% 高分子凝集剤を 2 滴加えて軽く振とうした後、3000rpm で 15 分間遠心分離する。上澄み液の一定量を蒸留水で希釈し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光度計により鉄 (Fe) の濃度を測定する。測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの鉄 (Fe%) の含量を求める。

3. 結果

1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 11 表に示す。北西平面炭化物の測定年代(補正年代)は 4,250 ± 20BP、礫集中炭化物は 4,260 ± 20BP であるが、試掘坑壁面炭化物はこれよりも約 2,800 年も新しい 1,480 ± 20BP の値を示す。

各試料の較正暦年代を第 12 表に示す。測定誤差を σ として計算させた結果、北西平面炭化物は 4,847-4,830calBP、礫集中炭化物もほぼ同様の 4,848-4,833calBP であった。一方、試掘坑壁面炭化物は、6 世紀末から 7 世紀前半までの年代を示す。

第 11 表 放射性炭素年代測定結果

地名名	採取位置	種類	補正年代 BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
II 地点 南壁	北西平面	炭化物	4,250±20	-27.49±0.30	4,290±20	IAAA-140207
	礫集中	炭化物	4,260±20	-26.84±0.26	4,290±20	IAAA-140208
	背後 試掘坑壁面	炭化物	1,460±20	-26.55±0.23	1,480±20	IAAA-140209

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

第 12 表 暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代(cal)						相対比	Code No.
		σ	cal BC 2,898	-	cal BC 2,881	cal BP 4,847	-		
北西平面	4,251±24	2 σ	cal BC 2,911	-	cal BC 2,871	cal BP 4,860	-	4,820	IAAA -140207
		σ	cal BC 2,801	-	cal BC 2,779	cal BP 4,750	-	4,728	
		σ	cal BC 2,899	-	cal BC 2,884	cal BP 4,848	-	4,833	
礫集中	4,257±23	2 σ	cal BC 2,911	-	cal BC 2,875	cal BP 4,860	-	4,824	IAAA -140208
σ	cal AD 591	-	cal AD 635	cal BP 1,359	-	1,315			
試掘坑壁 面	1,459±20	2 σ	cal AD 567	-	cal AD 643	cal BP 1,383	-	1,307	IAAA -140209
σ									

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV 6.0(Copyright 1986-2010 M Stuiver and P.J Reimer)を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、2 σ は95%である。

5)相対比は、 σ 、2 σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

第 13 表 微細物分析結果

種類	II 地点南壁			備考
	II B層 4	III A層 6	III B層 7	
不明種実	0.002	-	-	乾重(g).2個.同一分類群
炭化材	-	-	0.007	乾重(g).4個.最大2.6mm
分析残渣(砂礫主体)				
2mm超	1.2	-	10.1	乾重(g)
2-1mm	29.9	33.5	20.4	乾重(g)
1-0.5mm	359.2	342.3	177.8	乾重(g)
分析量	700	700	600	容積(cc)
	1328	1455	1181	湿重(g)



1・2. 不明(II 地点南壁 II B層:4)

写真 172 種実遺体

2) 微細物分析

結果を第13表、写真172に示す。試料各200ccからは、種実等の遺物が検出されなかったため、試料をさらに400～500cc追加し、合計2000cc(3964g)を水洗して遺物の回収を試みた。

その結果、種実遺体は、ⅡB層(試料番号4)から2個(0.002g)検出された。2個とも同一分類群と考えられるが、同定ができなかった。種実は赤灰褐色、長さ1.5mm、径0.8mm程度の歪な多角形状倒卵体を呈す。両端は尖り、表面には数本の稜がある。皮は厚く、表面にはやや粗い凹点による微細な網目模様がある。これらは種類の同定には至らないため、環境に関する情報とすることはできない。

なお、ⅢA層(試料番号6)とⅢB層(試料番号7)からは、同定が可能な種実遺体は確認されなかった。また炭化材は、ⅢB層(試料番号7)から4個(0.007g)検出され、最大2.6mmを測る。これらも種類の同定はできなかった。

分析残渣は、ⅡB層(試料番号4)が390.2g、ⅢA層(試料番号6)が375.8g、ⅢB層(試料番号7)が208.3gの、合計974.3gを量り、粗粒砂を主体とする。

3) 粒度分析

結果を第14表に示す。層位による粒度組成の違いは比較的明瞭である。I層(試料番号1c)では粗粒砂を主体とし、中粒砂を副次的に伴う組成であり、ⅡA層(試料番号3)とⅡB層(試料番号4)はともに粗粒砂と中粒砂とを主体とする組成である。ⅢA層(試料番号6)も粗粒砂と中粒砂を主体とする組成であるが、ⅡA層およびⅡB層に比べてそれらの割合が低く、代わりに細粒砂と微粒砂が多くなっている。ⅢB層からⅢD層(試料番号7～12)まではシルトを主体とする組成であり、これに次いで細粒砂、微粒砂、粘土の3者を比較的多く伴う組成を示す。Ⅳ層(試料番号13b)は粘土を主体とする組成であり、次いでシルトが多く、粗粒砂、中粒砂、細粒砂、微粒砂の各粒径の割合はシルトの半分程度である。

4) 土壌理化学分析

結果を第15表に示す。土色は、Ⅳ層(試料番号13b)が7.5YR4/6褐色と赤味を帯びているが、他の試料は全体を通して明るく、黒色味に欠ける土壌である。また、I層(試料番号1c)とⅡA層(試料番号3)、ⅡB層(試料番号4)は炭酸塩が多く混入している。pH(H₂O)は、炭酸塩が混入したI層・ⅡA層・ⅡB層の3試料において8.9-9.1と他の試料と比べて高い。他の試料は7.7-8.4と弱アルカリ性から強アルカリ性である。腐植含量はいずれの試料も少なく0.10 - 0.28%である。ⅢA層(試料番号6)およびⅣ層(試料番号13b)では0.2%以上と他の試料に比べるとやや高いと捉えられるが、わずかの差である。全窒素においても、腐植含量同様少なくとも0.03%以下である。C/N比はⅢA層(試料番号6)で12と高いが、腐植・窒素共に低い値での比であり、真値とは言えない。また、他の試料は5-7と低い。鉄含量はI層、ⅡA層、ⅡB層で1.70-2.29%と少なく、ⅢA層とⅢD層上部(試料番号9b)で4.46-4.74%、これらの層間のⅢB層とⅢC層で8.43-8.93%、ⅢD

第14表 粒度分析結果

試料			粒度組成(%)												
			礫					砂					泥		
			大礫			中礫		細礫	極粗粒砂	粗粒砂	中粒砂	細粒砂	微粒砂	シルト	粘土
地点	試料番号	層位	<6φ	6~5φ	5~4φ	4~3φ	3~2φ	2~1φ	1~0φ	0~1φ	1~2φ	2~3φ	3~4φ	4~8φ	8φ<
Ⅱ地点南壁	1c	I	0.00	0.00	0.00	0.00	0.07	0.31	8.52	55.88	25.05	2.64	1.52	3.04	2.97
	3	ⅡA	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	0.14	2.34	36.85	38.17	7.41	4.57	7.31	3.18
	4	ⅡB	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.04	1.62	38.61	40.33	6.89	4.46	5.98	2.06
	6	ⅢA	0.00	0.00	0.00	0.00	0.08	0.06	1.75	22.97	26.58	10.71	9.79	17.51	10.54
	7	ⅢB	0.00	0.00	0.00	0.26	0.13	0.29	1.54	10.48	13.57	13.05	13.88	26.93	19.87
	8	ⅢC	0.00	0.00	0.00	0.00	0.04	0.10	2.00	8.00	9.69	14.85	16.74	30.75	17.83
	9b	ⅢD	0.00	0.00	0.00	0.00	0.22	0.39	0.74	6.62	13.35	20.29	20.71	27.55	10.13
	12		0.00	0.00	0.00	0.26	0.41	0.63	4.83	8.42	12.94	15.71	17.15	25.36	14.31
	13b		Ⅳ	0.00	0.00	0.00	0.00	0.03	0.08	2.46	8.18	11.97	10.03	9.41	18.82

第 15 表 土壤理化学分析結果

地点名	試料番号	層名	土色	pH (H ₂ O)	有機炭素 (%)	腐植 (%)	全窒素 (%)	C/N	鉄の形態					マンガンの形態		
									Fe ₂ (%)	Fe ₃ (%)	Fe ₀ (%)	活性度 Fe ₀ /Fe _d	結晶化指数 (Fe ₀ -Fe _d)/Fe ₀	Mn ₂ (%)	Mn _d (%)	
II 地点南壁	1c	I	2.5Y6/2	灰黄	8.9	0.11	0.19	0.02	5	1.88	0.59	0.07	0.17	0.26	0.04	n.d.
	3	II A	2.5Y5/2	暗灰黄	9.0	0.09	0.16	0.01	7	2.29	0.73	0.09	0.14	0.26	0.04	n.d.
	4	II B	2.5Y6/3	にぶい黄	9.1	0.07	0.12	0.01	7	1.70	0.56	0.06	0.17	0.29	0.03	n.d.
	6	III A	2.5Y5/3	黄褐	8.4	0.13	0.22	0.01	12	4.74	2.25	0.16	0.09	0.43	0.04	n.d.
	7	III B	2.5Y7/4	浅黄	8.1	0.07	0.12	0.01	5	8.43	3.86	0.29	0.08	0.43	0.08	n.d.
	8	III C	2.5Y7/4	浅黄	7.8	0.07	0.12	0.01	6	8.93	4.39	0.29	0.07	0.46	0.07	n.d.
	9b	III D	2.5Y6/4	にぶい黄	7.7	0.06	0.10	0.01	7	4.46	2.32	0.20	0.09	0.47	0.04	n.d.
	12		2.5Y6/3	にぶい黄	7.8	0.08	0.14	0.01	7	7.22	3.59	0.52	0.14	0.43	0.04	n.d.
	13b	IV	7.5YR4/6	褐	8.0	0.16	0.28	0.03	6	30.7	20.9	1.29	0.06	0.64	0.11	n.d.

注. (1) 土色: マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会謹監修, 1967)による。

(2) 腐植: 有機炭素×1.724。

(3) C/N: 有機炭素/全窒素。

(4) Fe₂: 全鉄(フッ化水素酸分解による)。

(5) Fe₀: ジチオナイトクエン酸可溶鉄。

(6) Fe_d: 酸性シュウ酸塩可溶鉄。

(7) 活性度: Fe₀/Fe_d

(8) 結晶化指数: (Fe₀-Fe_d)/Fe₀

(9) Mn₂: 全マンガン(フッ化水素酸分解による)。

(10) Mn_d: ジチオナイトクエン酸可溶マンガン。

層下部(試料番号12)で7.22%、IV層で30.7%である。ジチオナイト可溶鉄はI層、II A層、II B層で0.56-0.73%と少なく、III A層とIII D層上部で2.25-2.32%、層間のIII B層とIII C層で3.86-4.39%、III D層下部で3.59%、IV層で20.9%である。酸性シュウ酸塩可溶鉄はI層、II A層、II B層で0.06-0.09%と少なく、III A層とIII D層上部で0.16-0.20%、層間のIII B層とIII C層で0.29%、III D層下部で0.52%、IV層で1.29%である。鉄全量・ジチオナイト可溶鉄・酸性シュウ酸塩可溶鉄はそれぞれ同様に推移している。活性度はいずれの試料も0.2以下である。結晶化指数はIV層で0.64であり他の試料は0.5以下である。マンガン全量は鉄全量の傾向と同様であるが、0.03-0.11と総じて少ない。また、ジチオナイト可溶マンガンは定量下限値以下であった。

以上述べた各分析値の層位的な傾向を粒度組成も含めてまとめると以下ようになる。I層からII B層までは、炭酸塩の影響でpHが高く、粒度組成は粗粒質である。また、鉄全量も低い。III A層ではややpHが高く、上層より細粒分が増加し、鉄全量は上層の約2倍存在する。III B層とIII C層はほぼ同様の性質であり、III A層よりさらに細粒分が増加し、鉄全量もIII A層よりさらに高い。III D層上部は粘土量がIII A層と同様であり、鉄全量も同様であるが、やや細粒分が多い。III D層下部では、粘土量が増加し、鉄全量も増加した。IV層では、粘土量が多く、鉄全量も多くなる。

4. 考察

1) 粒度組成および土壤理化学性の変化について

遊離鉄の存在形態は、自然環境条件の違いにより種々さまざまな化合物を形成する。土壌中で二次的に生成した非ケイ酸塩態の鉄化合物を遊離鉄という。遊離鉄化合物は、非晶質・結晶質の2つの異なった形態で存在し、酸性シュウ酸塩可溶鉄は主に非晶質を、ジチオナイト可溶鉄は非晶質の鉄に加えて、ゲータイト・ヘマタイトを溶解するため、差し引きにより結晶質鉄の尺度とみなすことができる。また、鉄の活性度は、酸性シュウ酸塩可溶鉄とジチオナイト可溶鉄の比から表し、主要な土壌生成過程の一つである遊離酸化鉄の結晶化の尺度として用いる。結晶化指数とは、ジチオナイト可溶鉄から酸性シュウ酸塩可溶鉄を差し引き、全鉄との比により表す。結晶化指数は、遊離鉄の結晶化を伴った風化あるいは土壌生成の発達程度を表す尺度として用いる。遊離鉄の活性

度と結晶化指数を用いて、褐色森林土と黄褐色森林土、赤色土を判別することができる。今回の分析試料ではIV層で赤色土である他は、黄褐色森林土に分類された。

ところで、今回の分析では、遊離鉄は主に結晶質鉄鉱物からなることが明らかとなった。また、IV層では結晶化指数が0.5を超えたことにより、風化が進み鉄の結晶化が進んでいると捉えられる。高温多湿な気候が風化作用を促進させ、降水量が多いことから溶解しにくい鉄分は残り、酸化されやすいことが知られている。さらにⅢA層からⅢD層までは、やや風化が進んでいると考えられる結晶化指数であり、ⅡB層からⅠ層にかけては風化が進んでいない土壌であることが示された。

爪型文土器包含層であるⅢB層を含むⅢ層に注目すると、Ⅲ層の中部であるⅢB層およびⅢC層で鉄全量が多く、この2層を挟む上位のⅢA層と下位のⅢD層上部でやや減少する傾向にある。そしてⅢD層下部で再び増加する。粒度組成では、ⅢB層とⅢC層において、その上位と下位の層位に比べて粘土分の多いことが指摘され、Ⅲ層の中でも遺物の出土する層位において土壌の形成環境に変化のあったことが推定される。

2) 2地点における環境変化

平成24年度の船越原遺跡2地点露頭区における自然科学分析(以下、前項)では、南壁のⅡA、ⅡB、ⅢB、ⅢDの各層から採取された貝、炭化物、土壌を対象とした放射性炭素年代測定および近傍で確認されたピーチロックの放射性炭素年代測定を行い、それらの年代と断面観察による各層の層相から推定される地形発達について述べた。基本的には、完新世における海進と海退による汀線からの距離の変化によって各層が形成されていったと考えた。本報告では、その過程に粒度組成の変化や土壌理化学的な変化を重ねることによって、さらに環境変化の状況が明らかになったと考える。

前項で述べたように、IV層は更新世末から完新世前半頃までの時期に形成された乾陸上の土壌いわゆるマージに相当する。今回の分析では、粘土分の多い粒度組成、土壌化の進んでいることを示す鉄の活性度や結晶化指数の値およびそれらから判定される種類が赤色土となることなどが確認された。このことは、IV層の土壌としての性格を裏付ける結果として捉えることができる。

IV層からⅢ層への変化は、海進により相対的に汀線が近づいたことで、これまでの乾陸が海浜の背後に形成された後背湿地へと変わったことによると考えた。IV層に比べると、粘土含量が少なく、シルト含量が多い粒度組成であり、鉄の活性度や結晶化指数からみてもIV層よりも土壌化が進んでいないことなど、湿地に整合する結果であると言える。爪型文土器の遺物包含層であるⅢB層もこの湿地環境下で形成されたと考えられる。Ⅲ層の最上位に堆積するⅢA層は、下位の他のⅢ層に比べて、シルト・粘土の割合が低く、粗粒砂・中粒砂の割合が高くなっている。この粒度組成は、下位のⅢB層から上位のⅡB層への漸移的な組成とみることができる。前項では、Ⅲ層からⅡ層への変化は、海進によって、海浜背後の後背湿地から、海浜地形である後浜になったことを示しているとした。砂が多くなっているⅢA層の形成は、すでに後浜になりつつある環境を示している可能性がある。ⅢA層の腐植含量がわずかに高いことは、常時は乾燥している後浜において腐植の生成が進んだことを示唆している可能性がある。

ⅡB層およびⅡA層は、前項にて近傍で検出されたピーチロックの年代に近い値を示す貝が出土したことから、その形成時期は、海進高頂期であると考えた。ⅢA層形成時よりも汀線は近くなったが、地形は後浜である。ただし、砂の供給量はⅢA層形成時に比べて格段に多くなり、鉄の活性度や結晶化指数からみても土壌化のあまり進まない環境であったことが推定される。なお、前項では、ⅡA層の色調が若干暗い色であることから、ⅡB層形成時に比べて土壌化が進行したと述べたが、今回の分析からは、ⅡB層とⅡA層との間で粒度組成や土壌理化学的な数値にさほどの差異は認められない。したがって、ⅡA層形成時に特に安定した環境(砂の堆積速度が遅くなったり、植生が繁茂したりなど)となった可能性は低いと考えられる。

Ⅰ層は、急激な海退により陸化した後方礫原を砂の供給源として形成された海岸砂丘の砂層であると考えた。

基本的には風成砂は、海浜砂よりも粒度組成は細くなるはずであるが、今回の分析では、粒度組成においてⅡ層よりも粗粒砂の割合が高いことが認められ、土壌理化学性についてはⅡ層との間に差異はほとんど認められなかった。このことから、Ⅰ層を構成している砂の堆積は、砂丘形成時の風成環境下ではなく、ほとんどはⅡ層と同様の後浜の環境下で進行した可能性がある。すなわち、現在のような砂丘地形は、Ⅰ層の形成がかなり進んだ後に、地盤の上昇により出現した可能性がある。おそらく現地表面下の砂層は、砂丘出現後に堆積した風成砂層であると考えられるが、今後、この層位での年代資料が得られることがあれば、砂丘の出現すなわち地盤の上昇が起きた年代を推定することが可能になることが期待される。

3) 礫集中遺構の年代について

2地点露頭区南壁の背後6018 Aより検出された礫集中遺構から採取された炭化物の年代は、2点ともに約4,300BPを示した。この年代は、南壁各層の年代観でみるとⅡ B層の年代にほぼ相当する。したがって、礫集中遺構の構築はⅡ B層堆積時である可能性がある。その場合、礫集中遺構は、爪形文土器とは年代的に関連のないものとなる。ただし、礫集中遺構検出面より数cm程度上位の覆土から出土した炭化物の年代が、さらに新しい約1,500BPという年代を示したことから、測定した炭化物と礫集中遺構との関連性についてさらに検討が必要であると考えられる。現時点では礫集中遺構の年代については、今後の発掘調査成果と分析調査における課題としたい。

引用文献

- 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法,博友社,354p.
土壌環境分析法編集委員会編,1997,土壌環境分析法,博友社,427p.
L.P.van Reeuwijk,1986,PROCEDURES FOR SOIL ANALYSIS,International Soil Reference and Information Centre,106p.
永塚鎮男,1973,褐色森林土・黄褐色森林土・赤色土における遊離酸化鉄の存在形態について,ペドロジスト,17, 70-83.
農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.
ペドロジ学会編,1997,土壌調査ハンドブック改訂版,博友社.
砂屑性堆積物研究会編,1983,堆積物の研究法,地学双書,24,地学団体研究会,377p.
Wentworth,C.K.,1922,A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol,30,377-392.

第6節 小結

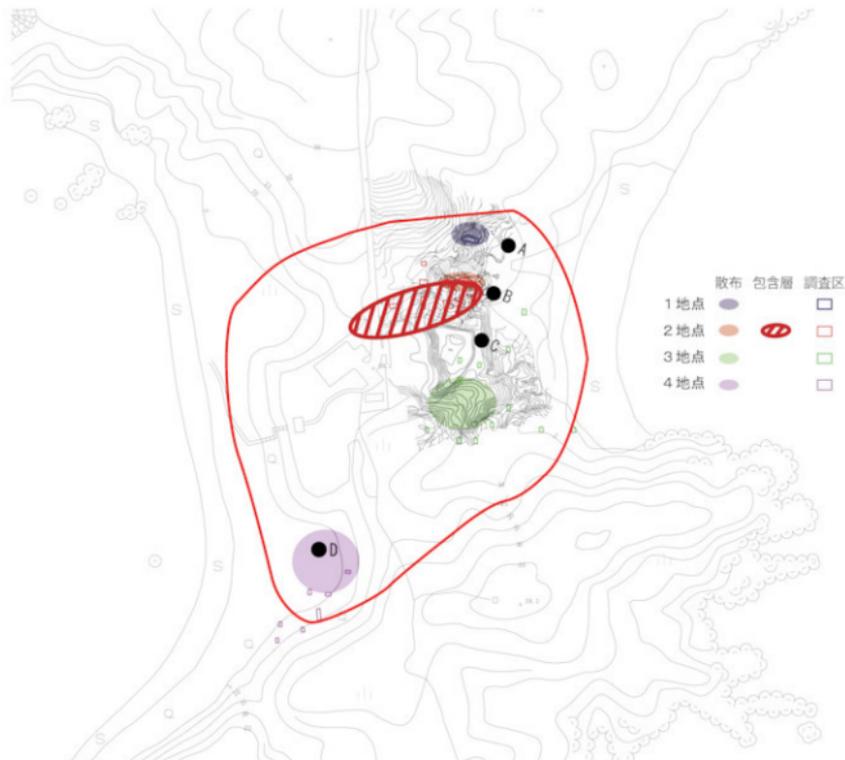
今回の船越原遺跡の範囲確認調査において、2地点における爪形文土器包含層の残存範囲を確認することができた。本遺跡は、先史時代の沖縄本島の遺跡で出土する石斧等の石材供給地ではないかと考えられてきた。今回の調査では、爪形文土器を包含するⅢ B層とその上層のⅢ A層で、砂岩や緑色千枚岩の礫が出土した。特に、6018 Aでは20数個の礫が集中する状況が確認できた。ただ、その数は多いとはいえ、やや丸みを持った石も見られるが、意識的な選別とは判断できない状況である。しかしながら、自然にこれらの石がここに集まったものとも考えにくい。

第4・5節における2地点の土層、ピーチロックの年代分析測定を踏まえて、本遺跡の環境について若干まとめたい。Ⅲ B層の年代は補正年代(以下略する)BP 5750年前後が測定されており、現在の爪形文土器の年代観に概ね含まれる(名島2014)。一方、ピーチロックは1点のみはBP 5570年前後だが、その他4点はBP 4360～4680年の間に収まっている。この年代に近いものとして、Ⅱ A層がBP 4110年前後、Ⅱ B層がBP 4360年前後、Ⅲ A層で検出された6018 Aの礫集中地付近がBP 4200年前後である。これらの年代観は、前

Ⅱ期の条痕文系土器と概ね近い（名島 2014）。ビーチロックは標高 5.5 ～ 6.0 m に位置する海浜堆積物なので、原位置だと仮定すると、約 4000 年前後は現在の海岸線よりも約 80 m 海進していたことが考えられる。そして、この年代であるⅡ層段階が、今回の調査で包含層は確認できていないが、条痕文系土器の時期と考えるのである。Ⅱ A 層は土壌化が進んでいる段階であることも、土器の存在が安定した土壤のもとで人の活動が見られたことを想定させる。

それでは、この条痕文系土器の時期を考えるにあたって、宮城報告における A ～ C 地点について再度検討してみる。第 35 図でみたように、宮城報告の略図と今回の調査区を単純に重ね合わせると、A ～ C 地点は今回の 3 地点のさらに東側で海にもかなり近い。しかし、過去の写真（写真 101・102）やビーチロックの位置・年代などからによると、海岸線よりも 50 m しか離れていないことはなかろう。また、3 地点と 2 地点の間に大きな窪みがあり、今回全く見つからない神野 A 式が採集された C 地点をここと仮に考えてみてその位置関係を想定した（第 77 図）。そうすると、A・B 地点は今回の 1・2 地点の少し海寄りの位置となる。あくまでも 1 案だが、爪形文土器期は 2（B）地点、少し南側の条痕文系土器期は 3（C）地点がそれぞれ主体になると想定できるのではないかと。

以上、船越原遺跡では現時点では、爪形文系土器が包含する範囲は極めて狭く、その後の様相も不明瞭である。しかしながら、石材供給地である可能性は十分に考えられ、沖縄の先史時代において重要な遺跡である。



第 77 図 船越原遺跡の想定範囲

第7章 阿波連浦貝塚の調査

第1節 概要

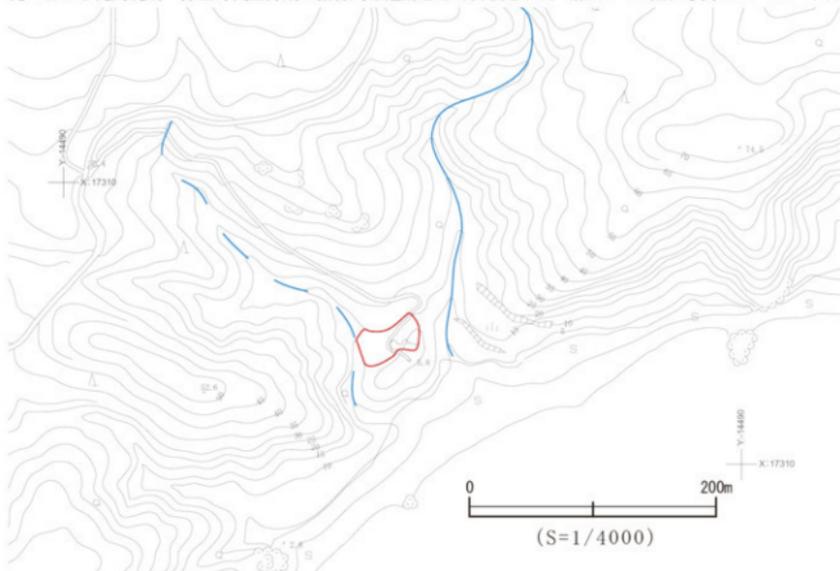
阿波連浦貝塚は、渡嘉敷島南東隅に所在する海岸砂丘に位置している（第4図、写真173～177）。遺跡は沖縄県教育委員会（以下、県教委）が行った遺跡分布調査により昭和51（1976）年に採砂により包含層が露出する状況や遺物が確認され、周知の埋蔵文化財となっている（県教委1977）。また沖縄国際大学（以下、冲国大）の考古学研究会による踏査（1978）及び試掘調査（1978・1979）、それを踏まえた同大学の考古学研究室による発掘調査（1986・1987）が行われ貝塚後期の遺跡であることが確認されている。（沖縄国際大学 1999）

遺跡の所在する砂丘は、南に向けて開けており、北側及び東側は砂岩の岩盤が露出している。現在の標高は西側で約8.2mで、砂丘から海岸までは約100mほど距離があり、正面の海にはリーフが広がっている。このほか砂丘の北東側及び南西側に川が流れていたとされているが、南西側の川は工事のため水の流れが変わったため現在は枯れている（第78図）。

現在砂丘の地表面にはアダン等が自生し覆われているが、南側は断面が露出しており、風雨により砂丘が削られ、周辺には土器や貝が散乱する状況となっている。

第2節 既往の調査研究・採集遺物

阿波連浦貝塚は前記のように冲国大による発掘調査が行われ、IV層では逆ハ字状の器形で底部が乳房状尖底を主体を占める土器群、VI層では頸部がくの字状でリボン状突起を有する九州縄文晩期の黒川式と特徴が類似する土器群、最下層であるVIII層では壺形土器、そして黒曜石製石鏃、ゴホウラなどの貝輪未成品などが出土し、沖縄における縄文晩期～弥生時代並行期の指標的な遺跡として評価された（第79・80図、写真178・179 中村



第78図 阿波連浦貝塚の位置



写真 173 阿波連浦貝塚遠景 西より (左：船越原遺跡北側の展望台から 右：阿波連浦貝塚北側丘陵より)



写真 174 調査以前の状況 南より (左：平成 22 年 右：平成 26 年度)



写真 175 阿波連浦貝塚 遠景 (南西側栈橋より) 写真 176 阿波連浦貝塚 遠景 (北側斜面より)



写真 177 阿波連浦貝塚全景 南より (写真中央が阿波連浦貝塚が所在する砂丘)



阿波連浦貝塚近景（西側山手より）



阿波連浦貝塚の遠景（南側棧橋より）



ハ-14 グリット完掘状況と層序

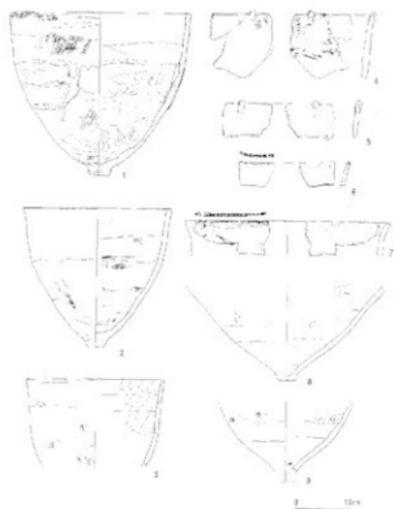


阿波連浦貝塚の近景（発掘状況）

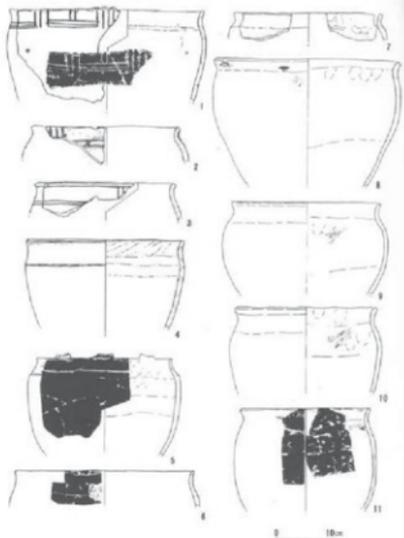


貝殻出土状況（ハ・ニ-14 グリット）

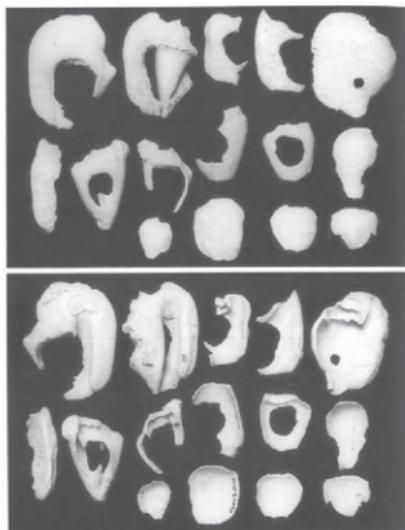
写真 178 沖国調査時阿波連浦貝塚調査風景（沖国大 1999）



第 79 図 冲国大調査阿波連浦貝塚Ⅳ層出土土器
(渡嘉敷村 1990)

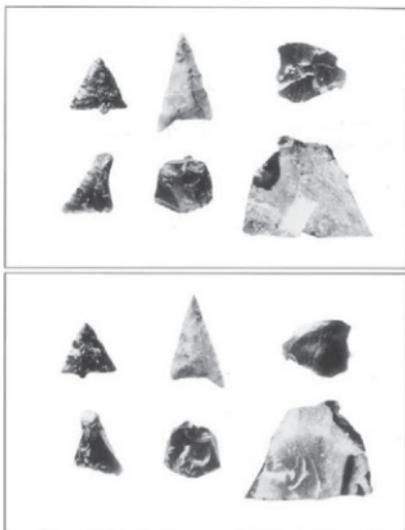


第 80 図 冲国大調査阿波連浦貝塚Ⅵ層出土土器
(渡嘉敷村 1990)

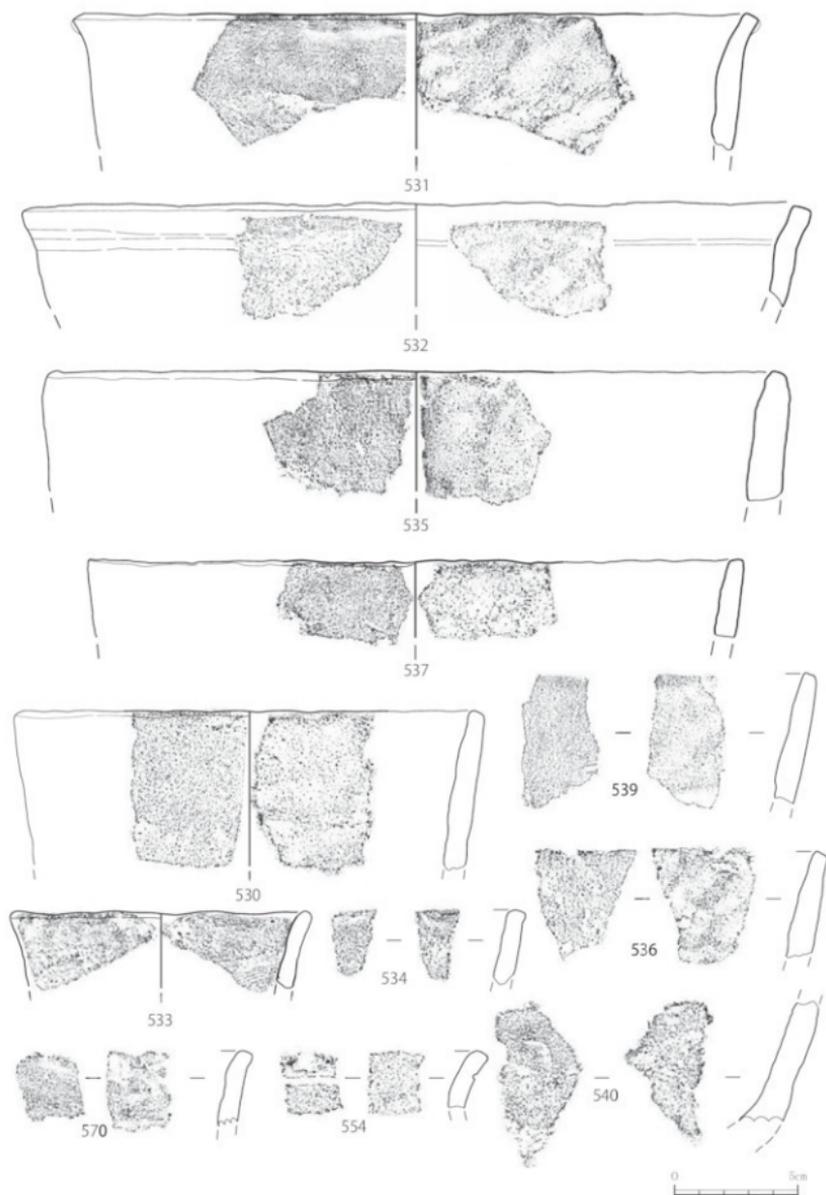


ゴホウラ製貝輪未成品等 (冲国 1999)

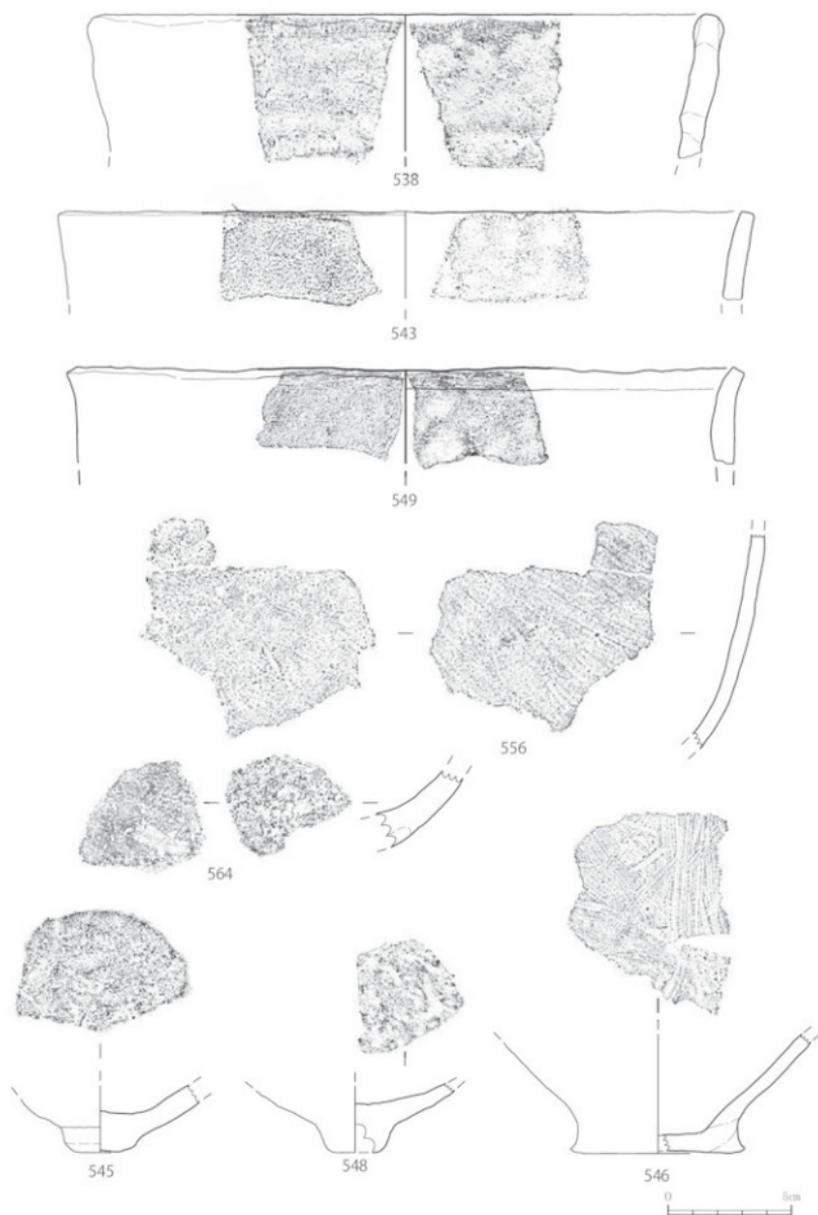
写真 179 冲国調査時阿波連浦貝塚出土遺物



黒曜石裂石鉄・剥片・石核 (冲国大 1999)



第 81 図 阿波連浦貝塚表探土器 (1)



第 82 図 阿波連浦貝塚表探土器 (2)

1990、沖国大 1999)。

特にVI層出土土器群は、黒川式の影響を受けた在出土器と評価され(中村 1990)、伊藤慎二は仲原式に後続するものとした(伊藤 1994)。宮城弘樹はこれらを受け、阿波連浦貝塚第VI層土器群として、仲原式と浜屋原式の間に位置付けた(宮城 1997)。新里貴之はこれまでの研究を受け、南西諸島の各地域の土器も踏まえて「阿波連浦下層式」として設定した(新里 1999)。その後、岸本義彦ほか 2000 や新里 2004 が広く知られるようになり、2000 年代概ね阿波連浦下層式の名称と内容が周知されたと言える。

今回、県教委による 1976 年分布調査で採集された資料を掲載した(第 81・82 図、遺物図版 28・29 - 530 ~ 541・543・545 ~ 552・555・556・558・561・562・546 ~ 567・571)。これらの資料は、沖国大の調査成果の範疇に収まるものであるが、たまたま 1 点くびれ平底系の底部(546)も得られていた。



写真 180 表土掘削状況



写真 181 人力掘削状況



写真 182 貝集積遺構検出状況



写真 183 壁面撮影状況



写真 184 壁面実測状況



写真 185 遺物出土箇所実測状況

第3節 平成26・27（2014・2015）年度範囲確認調査

今回の調査では、沖国大の調査トレンチ壁面と思われる範囲が露出しはじめており、このままでは遺物包含層が露頭することが想定されたため、その範囲を抑えることを目的とした（第83図、写真174）。

1. 調査区の設定

平成26年度は沖国大の調査トレンチを確定するために、砂丘の西側にトレンチAを、また遺跡の状況と土層の堆積状況を確認するため、特に崩壊が著しい箇所にトレンチBを設定した。平成27年度は阿波連浦貝塚の範囲を確認するために、砂丘の西側にトレンチ1を、トレンチBの北側にトレンチ2を、また過去に採砂が行われた砂丘の南側にトレンチ3を設定し調査を行った。このように最終的に5つの調査区を設定することになった（第84図）。

2. 基本層序

今回の調査では土層の堆積が当初想定していたより良好な状態であったことから、沖縄国際大学の調査成果と照らし合わせ調査を行うことができた。このため基本層序は沖国大の層序番号を踏襲し（沖国大1999）、新たに確認した土層を含め10層に分類を行った（写真190）。

以下に層序の様相や年代等について概略する。

I層 表土・造成層

オリブ黒色層 砂岩レキ、腐植土が多く混じる。トレンチA、トレンチBでは沖国大調査の埋戻し土と思われるものも確認できた。

II層 旧表土・旧耕作土層

黄灰色層 上層に比べ砂岩レキや腐植土は少ない。また深くなるにつれ土色は黒色が強くなる。過去の調査では細分されているが今回は1層にまとめた。

III層 自然堆積層

灰白色層 しまりが弱く、崩れやすい。オオベッコウガサやシャコガイなどの貝が出土する。

IV層 浜屋原土器が出土する自然堆積層

しまりはやや強く、土器や貝などの遺物が多く出土する。過去の調査では細分はされていないが、土層の様相や遺構が検出する状況から2層に細分している。

IV-1層 灰色層 主に土器や貝などの遺物が出土する層で、土器は浜屋原式土器が主体で、中には大堂原式土器の特徴を持つものも出土している。またトレンチB及びトレンチ1で貝集中遺構を検出した。

IV-2層 灰白色層 遺構検出面上層のものと思われる黒褐色のブロックが混じる層。トレンチB及びトレンチ1で土坑を検出した。

V層 自然堆積層

灰白色層 しまりはやや強い。下層のものと思われるやや薄手の土器が少量出土している。

VI層 阿波連浦下層式土器が出土する自然堆積層

しまりは少し強く、土器や貝などの遺物が出土する。またこの層の特徴として軽石の破片が多く出土している。

VI-1層 オリブ黒色層 炭や軽石の破片が混じり、土器や貝が主に出土する層。遺物は阿波連浦下層式土器やオオベッコウガサやシャコガイなどの貝が出土する。

VI-2層 灰オリブ色層 しまりは少し弱い。上層のものと思われる灰黒色のブロックが混じる層。

VII層 自然堆積層

淡黄色層 しまりが弱く崩れやすい。砂丘の東側にある2つのトレンチに比べトレンチ1で堆積が厚い。大



写真 186 トレンチB サブトレンチ北壁



写真 187 トレンチ1 南壁



写真 188 トレンチ2 東壁



写真 189 トレンチ3 西壁

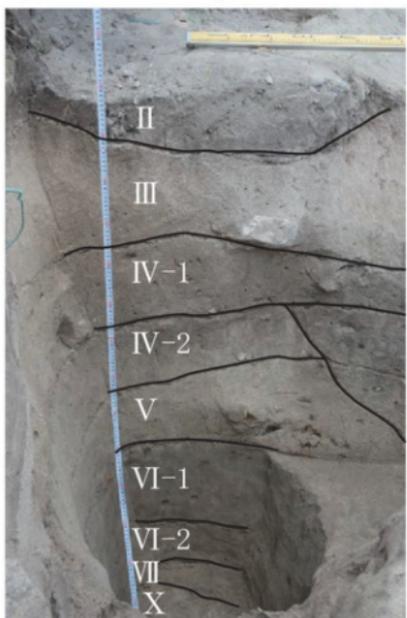


写真 190 阿波連浦貝塚 基本層序 (左: トレンチB 北壁 右: トレンチ1 南壁)

型のチョウセンサザエやヤコウガイが出土した。

Ⅷ層 貝塚後1期の自然堆積層

黒褐色貝混層 沖縄国際大学が調査した際にハー16グリットの東側で確認され、壺形土器が出土している。今回の調査では確認することができなかった。

Ⅸ層 貝塚前4期の自然堆積層

灰色層 トレンチ1で確認した土層で、前4期(点刻線文系)の範疇と考えられる無文土器が出土したことからⅧ層の下層と考えられる。

X層 基盤層

灰色砂岩層 トレンチ2及びトレンチBで確認した。上部はやや風化しておりⅧ層と判別が難しい箇所があった。

3. 平成26年度調査区

トレンチAは、幅1.5m、長さ4mの範囲で設定し、掘削は行わず平面及び壁面の清掃・検出作業を行った。その結果トレンチの西壁では過去の調査の埋め戻し土がI層を掘り込む状況が確認でき、また平面では過去の調査区の北東隅にあたると思われる掘り込みを検出した。これらの掘り込みについてはトレンチBの壁面及び平面においても確認することができたことから、過去の調査区を特定し、図化等の記録を行った(写真191)。

トレンチBは風雨による砂丘の崩壊が遺跡にどれほど影響しているかを確認するために、特に崩壊が進んでいる箇所に幅0.5m、長さ3mの範囲で設定し、基盤層が確認できる深さまで掘削を行った。またⅣ-1層より貝集積遺構を検出したことから、この遺構の広がりを確認するためにさらに南側に幅1m、長さ3mのトレンチを拡張し貝集中遺構の検出を行った(写真192・193)。



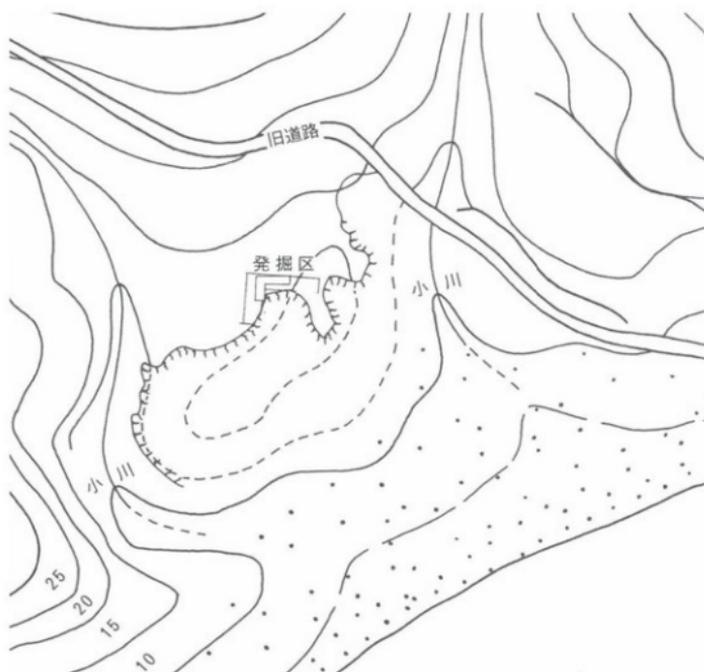
写真191 トレンチA 沖縄国際大学調査区検出状況(左:平面 西より 右:西壁 東より)



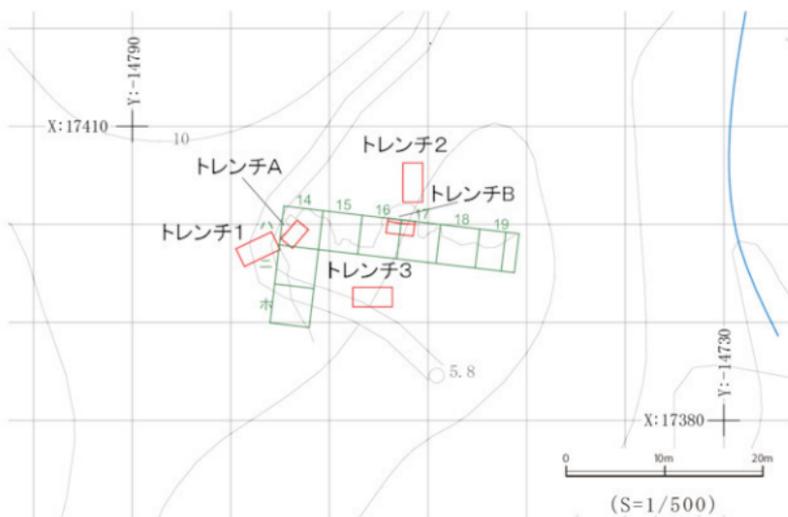
写真192 トレンチB 掘削前状況(北より)

写真193 トレンチB IV-1層

北壁遺物出土状況



第 83 図 沖縄国際大学の確認調査 調査区平面図 (沖国大 1999 より引用)



第 84 図 阿波連浦貝塚の調査区 赤：平成 26・27 年度調査区 緑：沖縄国際大学の調査区



写真 194 トレンチB貝集中遺構検出状況（近景 南より）



写真 195 トレンチB貝集中遺構
（近景 南より）



写真 196 トレンチB貝中積遺構
（近景 東より）



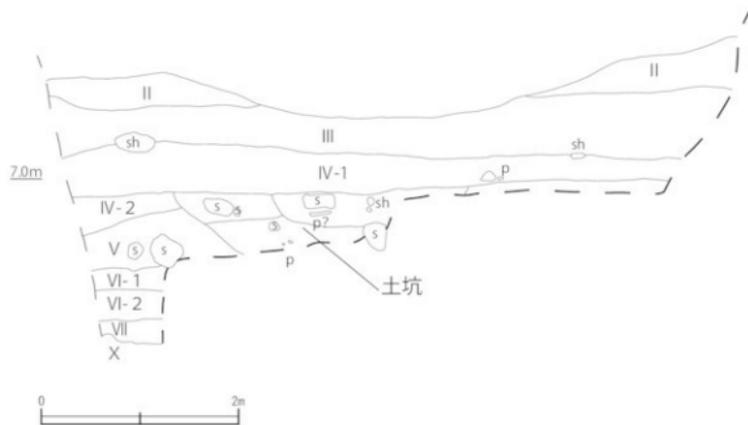
写真 197 トレンチBIV-1層遺物出土状況
（南より）



写真 198 トレンチBVI-1層遺物出土状況
（南より）



写真 199 阿波連浦貝塚 トレンチB 北壁分層状況



第 85 図 阿波連浦貝塚 トレンチB 北壁断面

調査の結果土層の堆積はⅡ層(18cm)、Ⅲ層(20cm)、Ⅳ-1層(25cm)、Ⅳ-2層(10cm)、Ⅴ層(25cm)、Ⅵ-1層(12cm)、Ⅵ-2層(14cm)、Ⅶ層(10cm)、Ⅹ層を確認した。基盤層であるⅩ層までの深度は2.3mで、海拔は6.2mとなっている(第85図、写真186・190)。

遺構はⅣ-1層から貝集中遺構を検出した。貝集中遺構からはオオベッコウガサやヤコウガイ、シャコガイ等の貝や、浜屋原式土器の破片が出土している。貝集中遺構はトレンチの北壁及び南壁の堆積状況か、掘り込む状況から確認できないことから、Ⅳ-1層中に集積されたと考えられる。またⅣ-2層ではトレンチの北壁及び南壁で土坑と思われる掘り込みを検出したが、サブトレンチでは平面は確認できず、半截なども行わなかったため性格は不明である。この遺構からオオベッコウガサやシャコガイ等が出土しているが、土器は出土しなかった(写真194～198)。

4. 平成27年度調査区

トレンチ1は遺跡の西側の範囲を確認するために、過去の沖縄国際大学が調査を行ったトレンチの西側に幅2m、長さ4mの範囲で設定し掘削を行った。またトレンチの中央でⅣ-1層より貝集中遺構を検出したため、遺構に影響の無い南側に幅1m、長さ2mのサブトレンチを設定し深度2mまで掘削を行った(写真200～207)。

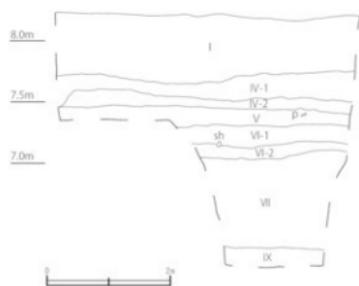
調査の結果土層の堆積はⅠ層(50cm)、Ⅳ-1層(18cm)、Ⅳ-2層(10cm)、Ⅴ層(13cm)、Ⅵ-1層(15cm)、Ⅵ-2層(12cm)、Ⅶ層(70cm)、Ⅹ層を確認した。このうちⅦ層はトレンチ1やトレンチBに比べ厚く堆積しており、これに伴いⅥ層より上層も高い位置で堆積している。Ⅱ層及びⅢ層についても現地表面より高い位置に堆積していたと考えられ、このため採砂の際に削平されてしまったためか確認できなかった。またⅩ層を検出した時点で掘削深度が2m(海拔6.2m)を超えたため、安全面を考慮し掘削を中止した(第86・87図、写真201・202)。このⅩ層より無文土器(第92図587)が出土し、貝塚前4期のものと考えた(写真207)。



写真200 阿波蓮浦貝塚 トレンチ1 完掘状況



写真 201 トレンチ 1 南壁堆積状況



第 86 図 トレンチ 1 南壁断面



写真 202 トレンチ 1 西壁堆積状況



第 87 図 トレンチ 1 西壁断面



写真 203 トレンチ 1 平面遺物出土状況



第 88 図 トレンチ 1 平面図

遺構はIV-1層から貝集中遺構を検出した。貝集中遺構からはトレンチBと同様に掘り込む状況は確認できず、出土する遺物もオオベッコウガサやシャコガイ等の貝や浜屋原式土器の破片など類似している。またサブトレンチの西壁付近より土坑1基を検出を検出した。土坑はIV-2層を掘り込んでおり、覆土はIV-2層に類似している。土坑は検出のみを行い、半截等を行っていないため出土する遺物や性格等は不明である(第88図、写真203・205)。なお、VI層にもサブトレンチにより貝集中遺構を部分的に確認した(写真206)。

トレンチ2は遺跡の北側の範囲を確認するためにトレンチBの北側に幅2m、長さ4mの範囲で設定し掘削を行った。その後東側にサブトレンチを設定し掘削を行った。また調査の最中に台風の影響で東壁が崩壊する危険があったため、地表より1mの範囲は分層を行っていない。

調査の結果土層の堆積はⅢ層(22cm)、IV-1層(18cm)、IV-2層(6cm)、V層(25cm)、VI層(5cm)、Ⅶ層(4



写真204 トレンチ1完掘状況(南より)



写真205 トレンチ1貝集中遺構(北西より)



写真206 トレンチ1 IV-1層・Ⅶ層検出状況



写真207 トレンチ1 Ⅹ層遺物出土状況



写真208 トレンチ2 IV-1層
遺物出土状況



写真209 トレンチ2 東壁分層状況



写真 210 トレンチ 2 東壁断面

調査の結果土層の堆積はⅢ層 (22cm)、Ⅳ-1層 (18cm)、Ⅳ-2層 (6cm)、Ⅴ層 (25cm)、Ⅵ層 (5cm)、Ⅶ層 (4cm)、Ⅹ層を確認した。基盤層であるⅩ層は地表より 1.4 m、海拔は 6.7 m で北に向けて傾斜しており、この傾斜に沿うようにⅥ層より下層は堆積が浅くなっている (第 89 図、写真 208 ~ 210)。

遺構は東壁のⅣ-2層で落ち込みを確認したが、覆土がⅣ-2層に類似しており、また遺物の出土も無いことから自然の落ち込みと考えられる。

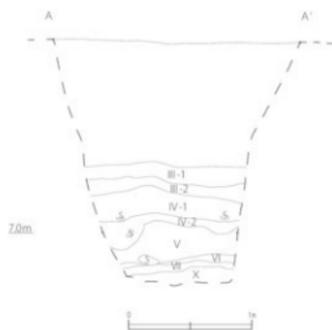
3 トレンチは遺跡の南側の範囲を確認するために幅 1 m、長さ 2 m の範囲で設定し掘削を行った。しかし地表より 1.5 m ほど掘削を行ったがビンやブルーシートの破片が出土する 1 層が続いていた。さらに掘削を試みたが周辺より雨水などが流れ込みやすい箇所、また台風の影響もあり崩落の可能性があったことから掘削を中止し、埋め戻しを行った。

5. 遺物 (第 90 ~ 92 図、遺物図版 28・30・31 - 542・544・573 ~ 599)

遺物は主に土器が出土しており、このほか石材が 1 点出土している。土器は貝塚前期の点刻線文土器や貝塚後期の阿波連浦下層式土器、浜屋原式土器、阿波連浦Ⅳ層土器群、無文尖底系が出土している。これらの土器はⅣ-1層から多く出土している。

Ⅳ層や貝積遺構からは無文尖底系土器や浜屋原式土器、阿波連浦Ⅳ層土器群が主に出土するが、トレンチ 1 ではこれらの土器のほかに阿波連浦下層式土器の特徴を持つものも出土している (580・584・595・596)。またⅥ層からの遺物の出土は少ないが、標識である阿波連浦下層式土器が出土している (544)。Ⅸ層からは無文土器 (587) が出土しており、ハケ状の器面調整、直線的な器形より前 4 期 (点刻線文系) と考えた。貝塚前期の土器や包含層は過去の調査では確認されておらず、船越原遺跡との関係などを考えるためにも重要な成果である。

また、多くの貝類遺体も出土しており、特にオオウベッコウガサガイ、ベッコウガサガイが多い (第 3 表)。また、出土地点では、1 地点のⅦ層、B 地点のⅣ層が目立っている。魚骨は 1 地点Ⅶ層でプダイの上咽頭骨、前顎骨が出土している (第 91 図)。



第 89 図 トレンチ 2 東壁断面図



写真 211 トレンチ3 掘削前状況（北東より）



写真 212 トレンチ3 完掘状況（東より）



写真 213 法面保護作業状況（左：遠景 右：法面施工状況）



写真 214 阿波蓮浦貝塚 法面保護後状況（左：シート設置状況 右：トレンチ1周辺）



写真 215 トレンチB 法面保護施工前

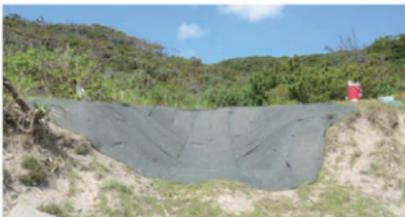
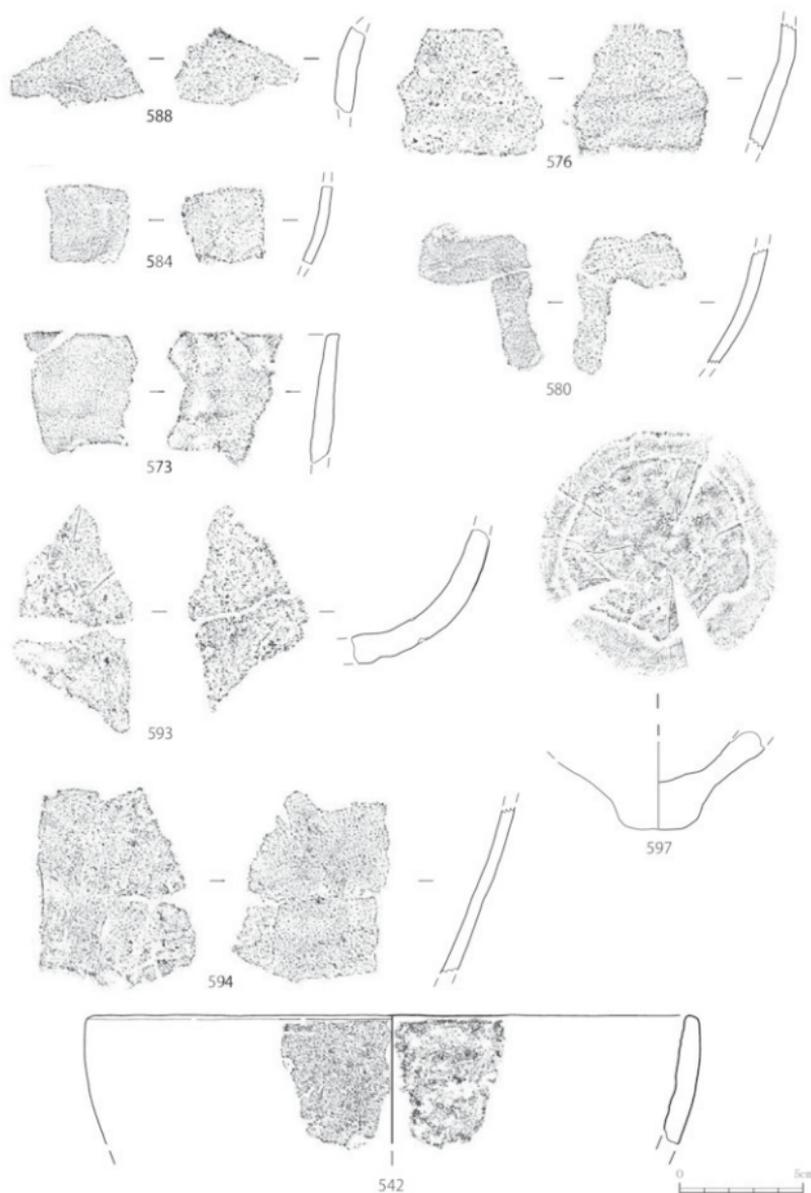
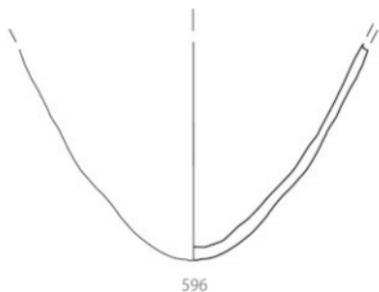


写真 216 トレンチB 法面保護施工後

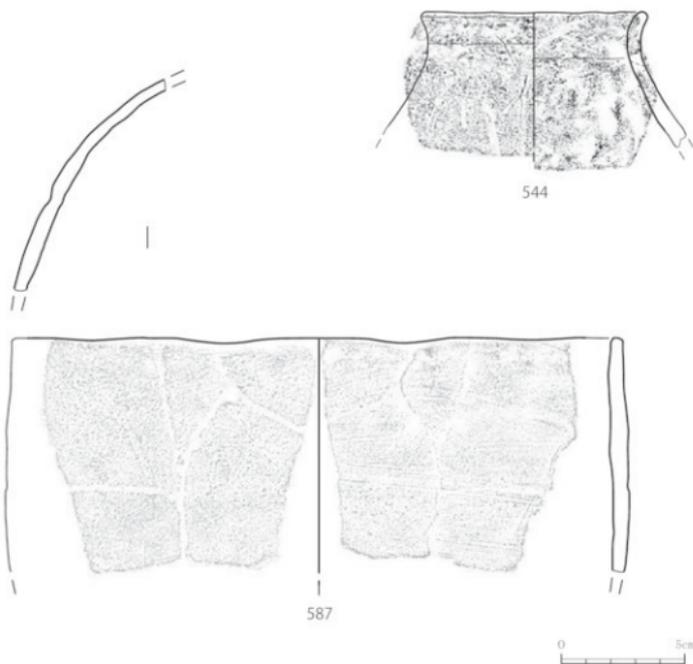


第 90 図 阿波蓮浦貝塚IV層出土土器 (1)



Ⅶ層出土 フダイ上咽頭骨・前上顎骨

第91図 阿波連浦貝塚Ⅳ層出土土器(2)・Ⅶ層出土魚骨



第 92 図 阿波蓮浦貝塚VI層 (544)・IX層 (587) 出土土器

6. 遺跡保護に伴う法面保護

阿波蓮浦貝塚は前記のとおり風雨による遺跡の崩壊が進んでおり、特に南側斜面はアダン等の植物も乏しく影響を受けやすい状況にあった。調査の結果阿波蓮浦貝塚は砂丘の西側に包含層が現存していることが確認できたため、これ以上の遺跡の崩壊を防ぐために平成 27 年度の調査終了後に船越原遺跡と同様に遺跡の保護を目的としたドレーンシート工法による法面保護を行った（写真 213～216）。

第4節 小結

今回の調査は阿波連浦貝塚の遺跡の範囲と状況を確認するために前記のとおり5か所のトレンチを設定し調査を行った。その結果、過去の調査で確認された3つの包含層のうちIV層とVI層を再確認することができ、新たにIX層とした包含層及び基盤層X層を確認することができた。今回確認した包含層については、前4期(点刻線文系)の無文土器であることから、過去の調査で確認されたVIII層より年代が古くなると考えIX層とした。

以下に阿波連浦貝塚の堆積状況と遺跡の範囲についてまとめる。

砂丘の基盤層であるX層は砂丘の東側及び北側で露出しており、南西に向かって傾斜している。その後砂丘の発達によりVII層が堆積するが、X層の傾斜とは反対に西側で厚く堆積しており、西から東へ傾斜する地形となる。この傾斜に沿ってVI層より上層は堆積しており、トレンチ1ではVI-1層の検出面の高さがトレンチBより約30cm高くなっている。

阿波連浦貝塚は各層毎に広がる範囲が異なっている。IV層及びVI層については過去の調査及び今回の調査から砂丘の東側岩盤付近からトレンチ1の西側まで、南側は今回調査を行ったトレンチ3の北側まで広がっていると考えられる。またVIII層はトレンチBで確認することができなかったことからハー16グリット南東側に、そして今回新たに確認したIX層はトレンチ1の周辺に広がっていると考えられる(第93図)。

以上各層序の状況より阿波連浦貝塚の遺跡範囲は、北及び東に露出する岩盤付近から砂丘が平面的に広がる南西に所在する川跡付近まで広がり、南側はトレンチ3の北側までと推定される。



第93図 阿波連浦貝塚遺跡想定範囲

第8章 渡嘉敷島における石材踏査

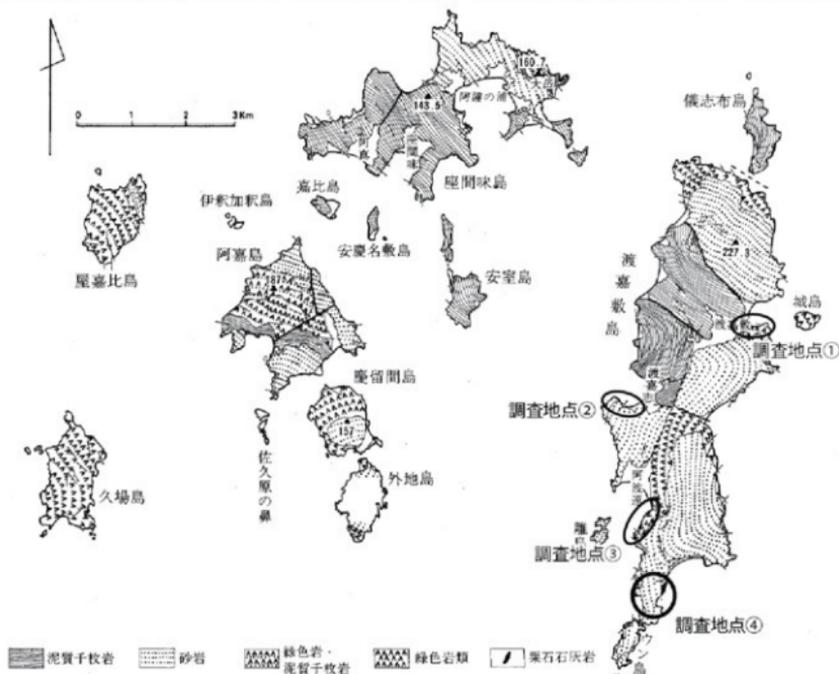
1 目的

沖縄本島より西に約30kmを隔てた渡嘉敷島は、沖縄本島北部に分布する名護層及び嘉陽層と同一の地質を有する島である(木崎編 1985)。名護層より産出する石材は、先史時代より石器の主たる素材として利用されていることから、同島も石材供給地の可能性がある。特に渡嘉敷島南東部に所在する船越原遺跡は縄文時代早期の爪形文土器段階の遺跡として知られ、対岸の沖縄本島西岸に所在する同時代の遺跡である嘉手納町野国貝塚B地点などで出土する名護層由来の石器石材の供給地と目されてきた(沖縄県教育委員会編 1984、伊藤ほか 2010)。

このことを踏まえ、2012年7月23～25日にかけて、特に石斧石材として利用されてきた緑色岩の露頭及び海岸転石について踏査を行った。以下にその成果について述べる。

2 渡嘉敷島の地質環境と踏査地点

渡嘉敷島の地層は慶良間層と呼ばれ、粘板岩部層、砂岩部層、緑色岩部層の3つの地層によって構成される。これは沖縄本島北部に分布する名護層及び嘉陽層とほぼ同じ地層と考えられている(木崎編 1985)。この地質と上記の目的とを踏まえ、緑色岩部層の分布地で、かつ実際に現地調査が可能と考えられる下記の4箇所を抽出



第94図 慶良間諸島の地質と踏査地点(木崎編 1985に踏査地点加筆)

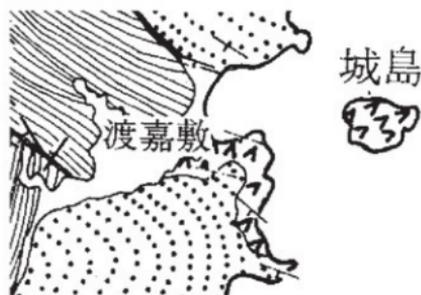
して踏査を行った（第94図）。

- 調査地点① 渡嘉敷港付近
- 調査地点② 渡嘉志久海岸
- 調査地点③ 阿波連漁港付近
- 調査地点④ 船越原遺跡周辺

3 踏査成果

調査地点① 渡嘉敷港付近（第95図）

渡嘉敷島東側中央部に所在する渡嘉敷漁港南側に緑色岩類優勢層が分布している。渡嘉敷川に架かる橋が工事中のため岩帯の露頭に渡ることは叶わなかったが、緑色千枚岩・片岩とみられる地層を確認することができる（写真217）。また河川敷には多量の転石を目視することができる（写真217下左）。



第95図 調査地点①（木崎編 1985 を300%拡大）



写真217 調査地点①

上左：渡嘉敷川下流

上右：緑色千枚岩・片岩露頭遠景

下左：緑色千枚岩・片岩露頭近景

調査地点② 渡嘉志久海岸（第96図）

渡嘉敷島西側中央部に所在する渡嘉志久海岸に、砂岩、粘板岩、緑色千枚岩・片岩の露頭が確認された（写真218）。またさらに西の半島状に突き出した地点には転石が多量にみられ、石器として十分使用に耐える数cm～30cm超の砂岩、粘板岩、緑色千枚岩・片岩の円礫及び楕円礫を確認することができる（写真218中右・下左）。



第96図 調査地点②

（木崎福1985を300%拡大）



写真218 調査地点②

上左：渡嘉志久海岸遠景

上右：渡嘉志久海岸南岸露頭

中左：緑色千枚岩・片岩露頭近景

中右：渡嘉志久海岸南岸転石状況遠景

下左：渡嘉志久海岸近景

調査地点③ 阿波連海岸南岸 (第97図)

阿波連集落南端部の阿波連漁港付近には、地質図の地層の線に沿って緑色千枚岩・片岩岩帯の露頭を確認することができる(写真219)。表面は激しく風化しているが、内面は石器製作に耐えられる石質を保っている。またさらに南の地点には岩帯から剥落した緑色千枚岩・片岩の板状角礫に加えて転石も多量にみられ、石器として十分加工・使用に耐える数cm～30cm超の砂岩、粘板岩、緑色千枚岩・片岩の円礫及び楕円礫を確認することができる(写真219中右・下左)。

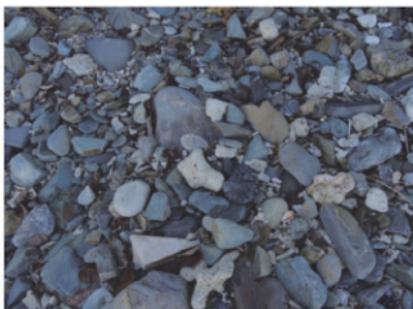


写真219 調査地点③

上左：阿波連海岸南端

中左：同転石状況遠景

下左：同近景



第97図 調査地点③ (木崎編1985を300%拡大)



中右：阿波連漁港付近の露頭

下右：同近景

調査地点④ 船越原遺跡付近(第98図)

渡嘉敷島南部の船越原遺跡付近についても石材踏査を行った。爪形文土器期の露頭及び包含層の分布する東岸側(④-1)は、石英粒が多量に混じる砂岩層が確認できるが、風化・片状化が進んでいて脆く石器には不向きである(写真220)。さらに遺跡の北側には栗石石灰岩の露頭があり、切石痕も確認された(写真221)。また対岸のIV地点側(④-2)も砂岩の露頭が分布して緑色岩類の岩帯は確認できないが、海岸には石器に利用することのできる数cmから30cm超の粘板岩や緑色千枚岩・片岩の円礫及び楕円礫の転石が多量にみられる(写真222)。



第98図 調査地点④(木崎編1985を300%拡大)



写真220 調査地点④-1

上左：船越原遺跡近隣の砂岩露頭

上右：同近景

下左：砂岩層に貫入する脈石英



写真 221 調査地点④—1 付近の粟石石灰岩露頭
 上左：露頭遠景
 上右・下左：露頭に残る切石痕

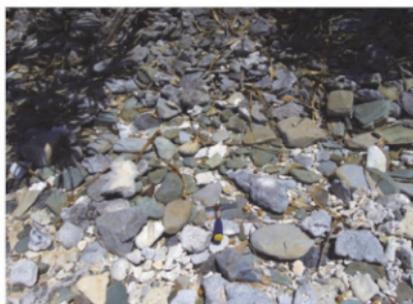


写真 222 調査地点④—2
 上左：海岸転石遠景
 上右：同近景
 下左：転石

4 考察

この石材踏査を踏まえて、船越原遺跡及び阿波連浦貝塚より出土した石器及び石材の産地について検討する。砂岩は、渡嘉敷島で採取されるうちでは概ね4種類の石質が認められる(第99図)。渡嘉志久貝塚で得られた砂岩製敲石(1)は、これらのうち(2)に比較的近いため、渡嘉敷島産の可能性が高いと言える。また船越原遺跡及び阿波連浦貝塚に地層中に含まれていた砂岩片は結晶化に富んだ石英を豊富に含む白色の石質となっており、第99図4・5と類似性が高い。(4・5)は露頭付近の砂岩であることから、自然崩落等により地層中に包含した可能性が挙げられる。また、船越原遺跡より表採された刃部磨製石斧についても、やや白色の強い色調で粘性があるものの若干硬度が弱い印象のある石質であるが(第100図1)、(2)もしくは(4)が特に質が近いように思われるため、島内の石材が候補に挙げられる。



第99図 砂岩の石質(原寸)

- 1：渡嘉志久貝塚表採の敲石(第7図62)
2-5：渡嘉敷島で採取できる石



第100図 緑色千枚岩・片岩の石質(原寸)

- 1：船越原遺跡表採の刃部磨製石斧(第72図517)
2-5：渡嘉敷島で採取できる緑色千枚岩・片岩





写真 223 野国貝塚出土の緑色岩系石材による局部磨製石斧

まとめ

渡嘉敷島内の緑色岩部層には、緑色千枚岩・片岩の露頭を各地点で確認することができた。野国貝塚 B 地点や波貝知東原遺跡より出土している局部磨製石斧は、残される自然面に水磨が認められないため（写真 223）、このような露頭や露頭から剥落した転石が利用されていた可能性が挙げられる。また島内の海岸部には転石が集中する箇所が数か所認められる。各地の転石に石材や形状等の違いはみられないことから、島内で有用な円礫・楕円礫の石材を獲得する場合は、このような転石が集中する海岸部を利用したと推定される。特に船越原遺跡付近の調査地点④-2 は地質図上では緑色岩類は分布しないが、転石が集中する海浜が近隣に存在することから、敲石類や曾畑式及び条痕文土器段階以降の円礫・楕円礫を素材とする全面研磨の磨製石斧の有用石材を容易に獲得できる環境にあったことが理解される。

他方、分布・発掘調査においても数点の石器が得られているが、これらも島内の石材である可能性が挙げられる。点数が少ないため、この石材選択が島内における主たるものであったが検討の余地を残すが、少なくとも石器に利用されるだけの石質を備えた石材であることは確かと言える。さらに船越原遺跡の発掘調査によって、2 地点 6018A グリッド III A 層より人為由来と考えられる砂岩の円礫集中が検出されたことで、船越原遺跡において海岸部より獲得した円礫状石材の保管等を行っていた可能性を考慮することができるようになった。石材踏査により渡嘉敷島の石材が石器石材としての石質を備えていたこと、転石集中部を近隣に備える立地であることが分かったことで、渡嘉敷島及び船越原遺跡の性格を考える一端を得られたと思われる。

参考文献

- 木崎甲子郎編 1985『琉球弧の地質誌』沖縄タイムス社
- 沖縄県教育委員会編 1984『野国 野国貝塚 B 地点発掘調査報告書』
- 伊藤圭・山田浩久・久貝弥彌・白石純 2010『渡嘉敷島船越原遺跡採集資料について』『恩納村博物館紀要』第 6 号 p1 - 32
 沖縄県恩納村博物館
- 浦添市教育委員会 2012『浦添市西海岸の石切場跡 港川地区 2 - 臨海道路「浦添線」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 - 1』
 浦添市文化財調査報告書
- 浦添市教育委員会 2013『浦添市西海岸の石切場跡 港川地区 1 - 沖縄西海岸道路「浦添北道路」建設事業に伴う埋蔵文化財
 発掘調査報告書 - 1』浦添市文化財調査報告書

第9章 総括

平成22～27年度に行った県内遺跡詳細分布調査成果として、慶良間諸島の遺跡概要、船越原遺跡と阿波連浦貝塚の範囲確認調査の内容を記述してきた。最後に、慶良間諸島における遺跡についてその変遷や特徴をまとめる(第101・102図)。なお、時代区分については、これまで述べてきたように、縄文～平安並行時代を先史時代、中世をグスク時代、近世・近代と称する。先史時代については、貝塚前期(縄文時代)、貝塚後期(弥生～平安並行時代)と細分する。

1. 先史時代

慶良間諸島の先史遺跡は、17遺跡を数える。そのうち、貝塚前期の遺跡は4遺跡で、他は全て貝塚後期が主体となる。

貝塚前期 最も古い遺跡は渡嘉敷島南端の船越原遺跡で、貝塚前1・2期が主体であったと考えられる。貝塚前4期には、座間味島の古座間味貝塚が黒曜石など希少な遺物が出土し、竪穴住居跡なども検出され、本地域の中心的な生活の場であったと思われる前5期まで継続する。阿嘉島のウタハ貝塚も、ほぼ同時期のウタハ式とされる独特の土器が出土しているが、その実態ははまだ不明である。一方、この時期の渡嘉敷島では、船越原遺跡も室川式は採集されているがその様相は明確ではなく、阿波連浦貝塚で前4期の無文土器(第9図587)が確認できたが、全容を把握するには至っていない。ただ、神山島灯台付近遺物散布地で伊波・萩堂式など(遺物図版9-179～182)を確認しており、本島などから舟で往来していたことが実感される。その目的を考えるには、やはり船越原遺跡が重要であり、今回の調査成果を踏まえてその内容をまとめる。

船越原遺跡 これまでの報告どおりに(宮城1979、中村1900、伊藤ほか2010)、貝塚前1期の爪形文土器包含層が東海岸側で確認できた。今回の調査では、貝塚前2期の神野A式などの条痕文土器も一定量見られておりこの遺構・包含層は明確にできなかったが、II層および2地点付近で確認されたビーチロックの年代がBP4000年前後という測定結果が得られた(第6章第4・5節)。このことは、海進が最も見られたこの段階にも人々の活動が見られたことを示している。そして、本遺跡を最初に具体的に報告した宮城朝光の報告(宮城1979)を検証することにより、爪形文土器包含層より南側がその生活の中心があったと推定した。さらに、第8章で検証したように、本遺跡は沖縄本島における石材供給地ではないかという見解も、6018Aトレンチで爪形文・条痕文土器前後のII・III層で円礫の集中地を確認できたことにより、その可能性は十分あることが再確認できた。

このほか、貝塚前4期土器や、貝塚後期前半の土器や九州系弥生土器の入れ込み式なども採得ではあるが、東側だけでなく西側にも見られている。ただ、この遺跡近辺では現状であるが水源は見られず、後述する1km先の阿波連浦貝塚にしか見られない。それでも、本遺跡は貝塚前期から後期前半まで利用されてきた遺跡であり、石材採取はその大きな目的であったとやはり考えられよう。今回の調査で、爪形文土器包含層、礫集中地はそのまま埋戻し、流出を防ぎ植生を促すドレーンシート工法により保護することができた。今後、未永く遺跡が保存され、さらなる調査・活用が望まれる。

貝塚後期 古座間味貝塚が、先述の前期から継続し、後1期前半の仲原式も確認され、隣接する古座間味第2貝塚も含めると後2期の土器も見られ、やはり中心的な場所であったと考えられる。そして、渡嘉敷島では阿波連浦貝塚では後1期の中心的な遺跡となるが、先述のように約1km南の船越原遺跡でも量は少ないが弥生土器が見られており、両遺跡合わせてその位置づけを考える必要がある。

後2期の遺跡としては、今までもその採集土器が報告されていた渡嘉志久貝塚のほか、今回その内容を明らか

にできた大和馬遺物散布地（第25・26図）も中心であった可能性が考えられる。そして、渡嘉志久貝塚では近年の研究で当該期の最末期とされる厚みが増した小さな平底の土器（當路2001、宮城2014、與嶺2015）が多く得られており、グスク土器も採集されている（第6～9図）。つまり、後期からグスク時代への移行過程を考えるうえで重要な遺跡であり、今後詳細な調査が望まれる。

今回新規に確認した貝塚後期土器が採集された渡嘉敷島北西海岸のアリガースワラ・バンリグチ遺物散布地（第11図）、安室島のウフタ遺物散布地（第30図）なども含めて、渡嘉敷島西海岸、座間味島・阿嘉島・慶留間島の砂丘地に本期の遺跡が点在する状況が改めて確認できた。まさに、これらが一つの内海としての地域であったものと思われる。

阿波連浦貝塚の調査では、陸路からは急峻な小道しかないため重機が利用できなかったこともあり、船越原遺跡より簡略な調査に留まった。既往調査に付け加える成果はやや少なかったが、法面を保護しその崩壊を防ぐことができた。

2. グスク時代

貝塚後期から継続する遺跡としては、採集遺物からすると、渡嘉敷島の渡嘉志久貝塚、座間味島の座間味貝塚・古座間味貝塚がある。グスクとしては、今回縄張り図の作成により、渡嘉敷島の安福宜グスク（城島）・ジングスク、座間味島のシルグスク、阿嘉島のグスク山・積城（ツングスク）の5遺跡は、防御性が認められているものと考えた。一方、座間味島のメーグスク、阿嘉島のアマングスクなどは人為的な平坦面などは確認できなかった。シルグスクやグスク山の採集遺物（遺物図版14-248～254、17-293～304）から、13世紀後半～14世紀代を中心としたものと考えられる。

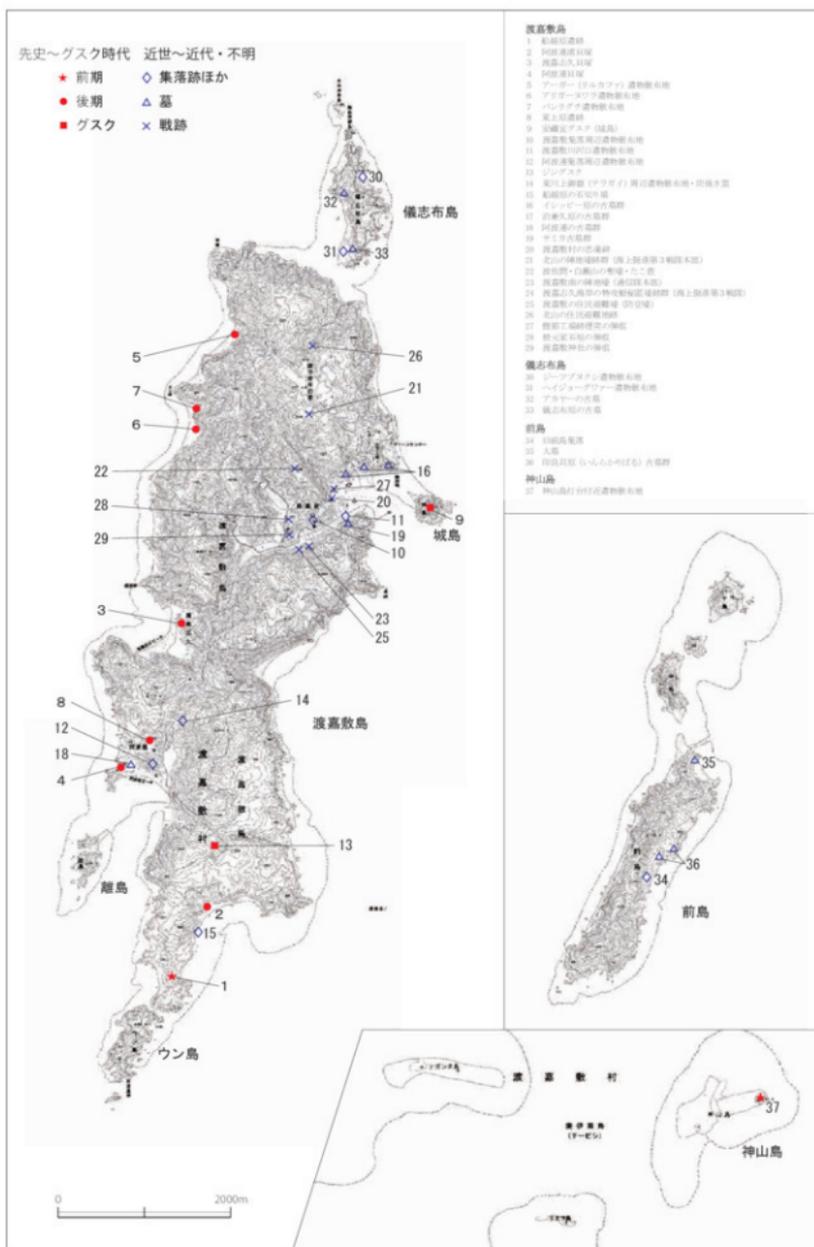
また、渡嘉敷島の東上原遺跡は、阿波連集落の旧道沿いの丘陵中腹に位置し、かなり残りの良い15世紀代の青磁が得られており、その他グスク土器、近世陶磁器も見られた（第12図）。立地としては丘陵中腹を利用しており、グスク的な印象も受けるが、近世まで継続する集落的な位置づけとなるだろうか。

3. 近世・近代

今回、最も多く確認できた時代の遺跡で、合計50遺跡を数える。その内訳は、古墓11、戦争遺跡28、集落跡ほか11となる。特に、今回文化調査としては初めてとなる前島、屋嘉比島で旧集落・集落跡などが確認できたことが大きい。ただ、これらはその所在は示せたが、周知の埋蔵文化財包蔵地として十分な内容を提示するためには、いまだ情報が少ない。そこで、関係者との協力・調整を得て、今後も試掘なども含めた現地調査も行うことで、さらに文化財としての位置づけが明確にしていくことが必要とされる。

引用参考文献

- 新垣 力 2003「沖縄出土の清朝陶磁」『紀要沖縄埋文研究』第1号 沖縄県埋蔵文化財センター
- 伊藤圭・山田浩久・久貝勇嗣・白石純 2010「渡嘉敷島船越原遺跡採集資料について」『恩納村博物館紀要』第6号 恩納村博物館
- 伊藤慎二 1994「沖縄編年の現状と諸問題」『史学研究集録』19号
- 沖縄県立図書館 1971「徐葆光中山傳信録上」郷土史講座テキスト冊封使使録集 十 沖縄県立図書館
- 沖縄県立図書館 1972「徐葆光中山傳信録下」郷土史講座テキスト冊封使使録集 十一 沖縄県立図書館
- 沖縄県教育委員会 1977「沖縄島の遺跡分布」沖縄県文化財調査報告書 第10集
- 沖縄県教育委員会 1982「古座間味貝塚範囲確認調査報告書」前同 第43集
- 沖縄県教育委員会 1983「ぐすく グスク分布調査報告（1）—沖縄本島及び周辺離島—」前同 第53集
- 沖縄県教育委員会 1984「野尻 野尻貝塚B地点発掘調査報告書」前同 第57集
- 沖縄県教育委員会 2003「沖縄県史 各論編第2巻 考古」



第 102 図 浪嘉敷村の遺跡分布

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅳ)ー本島周辺離島及び那覇市編ー』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第25集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『沿岸地域遺跡分布調査概報(Ⅲ)ー遺跡地図・概要編ー』前同 第55集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『沖縄県の戦争遺跡ー平成22～26年度戦争遺跡詳細確認調査報告書ー』前同第75集
- 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1999『渡嘉敷村阿波連浦貝塚発掘調査報告』『沖国大考古』第12号
- 岸本義彦 1989『先史時代』座間味村史 上 自然・歴史・産業 座間味村役場
- 岸本義彦・西銘章・宮城弘樹・安座間充 2000『沖縄編年後期の土器様相について』『琉球・東アジアの人と文化 高宮廣樞先生古稀記念論集』高宮廣樞先生古稀記念論集刊行会
- 小嶺幸次郎・仲松秀秀 1986『島尻郡 座間味村・渡嘉敷村』『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』角川書店
- 座間味村史編集委員会 1989『座間味村史 上 自然・歴史・産業』座間味村役場
- 新里貴之 1999『南西諸島における弥生並行期の土器』『人類史研究』11 人類史研究会
- 新里貴之 2004『沖縄諸島の土器』『考古資料大観 12 貝塚後期文化』小学館
- 新里貴之 2014『琉球列島の先史時代名称と時期区分』『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集 六一書房
- 新里貴之・伊藤慎二・宮城弘樹・新里亮人 2014『琉球先史・原史文化の考古学的画期』『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集 六一書房
- 瀬戸哲也 2010『沖縄における12～16世紀の貿易陶磁ー中国産陶磁を中心とした様相と組成ー』『貿易陶磁研究』第30号
- 瀬戸哲也・仁王浩司・玉城靖・宮城弘樹・安座間充・松原哲志 2007『沖縄における貿易陶磁研究ー14～16世紀を中心にー』『紀要沖縄埋蔵文化財センター』
- 太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XVー陶磁器分類編ー』
- 知名定順・花城潤子・盛本勲・阿利直治 1979『座間味村古座間味原出土の人骨について』『花緑』創刊号 沖縄国際大学考古学研究会 O.B. 会
- 高宮廣樞 1974『いわゆるカヤウチバンタ式および宇佐浜式土器について』『沖国大文学部紀要』2ー1
- 渡嘉敷村史編集委員会 1987『渡嘉敷村史 資料編』渡嘉敷村役場
- 渡嘉敷村史編集委員会 1990『渡嘉敷村史 通史編』渡嘉敷村役場
- 當眞研一 1995『離島の小規模グスク』『沖縄県立博物館紀要』第21号 沖縄県立博物館
- 當銘由嗣 2001『総括』『識名原遺跡』那覇市教育委員会 那覇市文化財調査報告書第49集
- 中岡聡 1997『九州南部地域弥生土器編年』『人類史研究』9 人類史研究会
- 名島弥生 2014『放射性炭素年代から見た琉球列島における考古学的時期区分の現状と課題』『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化』琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集第1集 六一書房
- 中村 愨 1990『渡嘉敷村の遺跡』『渡嘉敷村史 通史編』渡嘉敷村役場
- 新田重清 1961『慶良間諸島の遺跡分布について』『文化財要覧』琉球政府文化財保護委員会宮城朝光 1979『渡嘉敷島船越原遺跡の土器について』『花緑』創刊号 沖縄国際大学考古学研究会 O.B. 会
- 宮城晴美 2002『慶良間諸島』『沖縄県の地名』日本歴史地大系第48巻 平凡社
- 宮城弘樹 1997『弥生時代並行期の土器研究』『沖縄考古学会定例会発表レジュメ』沖縄考古学会
- 宮城弘樹 2005『貝塚時代後期土器の研究(Ⅲ)ー浜原原式土器とその概念整理ー』『廣友会誌』創刊号廣友会
- 宮城弘樹 2009『貝塚時代後期土器の研究(Ⅳ)ー大当原式土器とその概念整理ー』『廣友会誌』第5号廣友会
- 宮城弘樹 2014『貝塚時代後期土器の研究(Ⅵ)ーフェンサ下層式土器の概念整理ー』『廣友会誌』第7号廣友会
- 吉川嘉勝 2005『渡嘉敷島の自然と歴史・文化』『環境プログラム 渡嘉敷島の自然と歴史』独立行政法人国立青年の家
- 與嶺友紀也 2015『沖縄諸島におけるくむび平底土器群の再検討』『考古学研究』(通巻245号) 考古学研究会

第16表 遺物観察表(1)

No	種類	分類	出土・表採地	調査者・年月日	特記事項	
1	土器	後期・実成・阿波連下層・壺	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.12.14	底状工具による沈凹文を横位に1条、縦位に2条施文。口唇平坦に調整。光沢のある黒色が混入。 外側に深く直口口縁。内外面に指頭痕が残る。	
2	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	内外面指頭痕が残る。	
3	土器	後期・実成・大当原・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	内外面に指頭痕が残る。粘土組織結合部が隆起する。	
4	土器	後期・実成・大当原・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	内外面に指頭痕が残る。粘土組織結合部が隆起する。	
5	土器	後期・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	壺の肩高。外面ナデ。内面ナデ調整されるが、指頭痕が残る。	
6	土器	後期・実成・大当原・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	壺の肩高。外面ナデ。内面ナデ調整されるが、指頭痕が残る。粘土組織結合部が隆起する。	
7	土器	後期・実成・大当原・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	外面ナデ。内面ナデ調整するが、指頭痕が残る。粘土組織結合部が隆起する。	
8	土器	後期・実成・大当原・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	壺の肩高。内面板状工具でナデ。外面には指頭痕が残る。	
9	土器	後期・実成・大当原?・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	壺の肩高。外面ナデ調整するが、指頭痕が残る。粘土組織結合部が隆起する。内面ナデ調整するが、指頭痕が残る。	
10	土器	後期・実成・大当原?・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底部片。ハケ状工具によるナデ。乳孔状文施。	
11	土器	グスク・鉢	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	破損して全形は不明。	
12	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.06.29	底部に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
13	土器	後期・くびれ平底・壺	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.22	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
14	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
15	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
16	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
17	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
18	土器	後期・実成・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
19	土器	後期・実成?・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
20	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
21	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
22	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.06.29	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
23	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.06.29	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
24	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
25	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
26	土器	後期・壺	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	外面ナデ調整されるが、僅かに指頭痕が残る。内面指頭痕。	
27	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	センター・2010.08.14	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。
28	土器	後期	渡高志久貝塚南地点	センター・2010.08.14	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
29	土器	後期	渡高志久貝塚	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
30	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
31	土器	後期・実成	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
32	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
33	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
34	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
35	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
36	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.06.29	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
37	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.06.29	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
38	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
39	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.12.14	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
40	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.12.14	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
41	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.06.29	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
42	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.12.14	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
43	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.22	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
44	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.22	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
45	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.22	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
46	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図1	
47	土器	後期・実成	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図2	
48	土器	後期	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図3	
49	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図4	
50	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図5	
51	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図6	
52	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図7	
53	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図8	
54	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図9	
55	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図10	
56	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図11	
57	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図12	
58	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図13	
59	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図14	
60	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図15	
61	土器	後期・くびれ平底	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第2図16	
62	石器	磁石・磨石(中粒砂岩)	渡高志久貝塚(表採)	県教委・1976.10.08	木完成	
63	石器	磨石(粗粒・大粒岩(麻粒岩))	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	木完成	
64	石器	磨石(粗粒・大粒岩(麻粒岩))	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第3図1	
65	石器	磁石・大粒岩(中・小)	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第3図1	
66	貝	ヒメジャコ有孔製品	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第3図1	
67	貝	ヒメジャコ有孔製品	渡高志久貝塚(表採)	多和田・不明(県博保管)	多和田・知念1985 第3図1	
68	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.21	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
69	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.21	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
70	土器	グスク	渡高志久貝塚(表採)	センター・2010.07.21	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	
71	土器	後期・くびれ平底・壺	アーガー(リルカファ) 遺物散布地(表採)	センター・2010.08.12	口縁内面ナデ。	
72	土器	後期・くびれ平底・壺	アーガー(リルカファ) 遺物散布地(表採)	センター・2010.07.08	外面指頭痕。内面ナデ。	
73	土器	不明	アーガー(リルカファ) 遺物散布地(表採)	センター・2010.07.08	外面指頭痕。内面ナデ。	
74	土器	グスク	アーガー(リルカファ) 遺物散布地(表採)	センター・2010.08.12	底面に厚い粘土層あり。丸みを帯びる底面。	

第17表 遺物観察表(2)

No	種類	分類	出土・表掘地	調査者・年月日	特記事項
75	土器	後期	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.08	光沢のある新物含む
76	土器	後期・くびれ平底・壺	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.08	内外面ナデ。
77	土器	グスク・鉢	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.08.12	内外面ナデ調整するが、指頭痕残る。
78	土器	後期	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.08.12	
79	土器	後期	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.08.12	不明圧痕あり
80	土器	後期・くびれ平底・壺	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.08.12	内面に指頭痕。
81	沖縄産無釉陶器	碗	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.08	
82	沖縄産無釉陶器	碗・色絵	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.08.12	
83	沖縄産無釉陶器	食物	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.08	
84	沖縄産無釉陶器	鉢	アーク(リルカファ) 遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.08	
85	土器	グスク	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.17	
86	土器	不明	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.17	
87	土器	不明	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.17	
88	土器	不明	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
89	沖縄産無釉陶器	瓶	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
90	中国産青花	碗・清	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.17	
91	本土産染付	瓶・肥前	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.17	
92	沖縄産無釉陶器	食物	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
93	土器	後期・くびれ平底・アカジャンガーヌ	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.17	突帯文貼付。
94	土器	後期・くびれ平底・壺	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	外面ナデ調整。口縁内面は指頭痕。その下部はナデ。
95	土器	後期・尖底・阿波漆塗4層土器?・壺	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	外面ナデ。口縁内面にハケ状工具によるナデ。内面に縁下部に指頭痕がある。
96	土器	グスク	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
97	土器	後期・尖底・壺	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	破損して全形は不明だが、底部はやや丸みを帯びる。
98	土器	不明	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
99	土器	グスク	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
100	土器	グスク	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
101	土器	グスク	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
102	土器	不明	アリガーヌワラ遺物散布地(表掘)	センター・2010.07.21	
103	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地A(表掘)	センター・2010.07.21?	
104	中国産青花	皿・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地A(表掘)	センター・2010.07.21	
105	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地A(表掘)	センター・2010.07.21?	
106	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地D(表掘)	センター・2010.07.02	
107	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地C(表掘)	センター・2010.06.16	
108	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地C(表掘)	センター・2010.06.16	
109	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地E(表掘)	センター・2010.07.22	
110	沖縄産無釉陶器	碗	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地B(表掘)	センター・2010.06.16	
111	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地D(表掘)	センター・2010.07.22	
112	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地D(表掘)	センター・2010.07.02	
113	土器	後期・尖底・大当原・壺	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地H(表掘)	センター・2010.07.21	外面ナデ調整されるが、指頭痕が残る。粘土層接合部が隆起する。内面ハケ状工具でナデ。
114	本土産染付	碗・肥前	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地I(表掘)	センター・2010.07.21	
115	本土産染付	碗・肥前	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地I(表掘)	センター・2010.07.21	
116	中国産青花	碗・明・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地I(表掘)	センター・2010.08.12	
117	中国産青花	碗・明	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地N(表掘)	センター・2010.06.16	
118	中国産青花	碗・明	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地I(表掘)	センター・2010.08.13	
119	中国産青花	碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地I(表掘)	センター・2010.08.12	
120	沖縄産無釉陶器	碗?	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地J(表掘)	センター・2010.08.13	
121	中国産青花	小碗・清	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地J(表掘)	センター・2010.06.04	
122	土器	グスク	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地L(表掘)	センター・2010.07.22	
123	土器	不明	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地H(表掘)	センター・2010.07.21	
124	土器	グスク	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地M(表掘)	センター・2010.07.21	
125	土器	不明	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地P(表掘)	センター・2010.07.21	
126	中国産青花	碗・V型	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地P(表掘)	センター・2010.07.21	
127	中国産青花	碗・VI型	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地P(表掘)	センター・2010.07.21	
128	沖縄産無釉陶器	植鉢・清	琉嘉敷川河口遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.15	
129	中国産青花	碗・清	琉嘉敷川河口遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.29	
130	沖縄産無釉陶器	瓶	琉嘉敷川河口遺物散布地(表掘)	センター・2010.06.15	
131	中国産青花	碗・V型(雷文)	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地P(表掘)	センター・2010.07.21	
132	中国産青花	碗・IV型	琉嘉敷薬落周辺遺物散布地P(表掘)	センター・2010.07.21	

第18表 遺物観察表(3)

No	種類	分類	出土・表探地	調査者・年月日	特記事項
133	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地P(表探)	センター・2010.07.21	
134	中国産青花	碗・明(温州)	渡高敷集落周辺遺物散布地P(表探)	センター・2010.08.13	
135	中国産白磁	小碗・徳化	渡高敷川河口遺物散布地(表探)	センター・2010.06.15	
136	中国産青花	碗・清	渡高敷川河口遺物散布地(表探)	センター・2010.06.15	
137	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地Q(表探)	センター・2010.06.10	
138	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地O・U(表探)	センター・2010.07.21	
139	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地P(表探)	センター・2010.07.21	
140	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地P(表探)	センター・2010.08.13	
141	中国産青花	碗・清	渡高敷川河口遺物散布地(表探)	センター・2010.06.15	
142	中国産青花	碗・明	渡高敷川河口遺物散布地(表探)	センター・2010.06.15	
143	中国産色絵	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地Q(表探)	センター・2010.06.10	
144	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地O・U(表探)	センター・2010.07.21	
145	中国産青花	碗・清	渡高敷集落周辺遺物散布地P(表探)	センター・2010.08.12	
146	中国産青花	碗・清	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
147	中国産青花	碗・清	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
148	中国産青花	碗・清	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
149	中国産青磁	碗・V類	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
150	中国産青花	碗・清	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
151	中国産黒陶器	壺?	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
152	中国産青花	碗・清	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
153	本土産黒陶器	不明	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
154	本土産黒陶器	碗・肥前	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
155	土器	グスク	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
156	土器	後期	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
157	土器	グスク	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
158	土器	後期・実成・阿波連浦IV層土器群?・壺	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	外面がラメ状になるが、指頭指痕、口縁内面は指頭指痕が残る。粘土結合部が僅かに隆起。
159	土器	グスク	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
160	土器	グスク	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
161	土器	グスク	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
162	土器	後期・くびれ平底	東上原遺跡(表探)	眞教委・不明	
163	中国産青磁	碗・V類(無文)	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
164	中国産青磁	碗・V類(無文)	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
165	中国産青磁	碗・V類(蓮文)	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
166	中国産青磁	碗・清	東上原遺跡(表探)	センター・2010.06.03	
167	中国産色絵	碗・清	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
168	中国産青花	小碗・明	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
169	沖縄産黒陶器	皿・清	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	有明風
170	本土産黒陶器	碗・肥前	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
171	沖縄産黒陶器	碗	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
172	土器	後期	阿波連貝塚(表探)	センター・2010.07.20	ローリング
173	土器	後期	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
174	土器	後期	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
175	土器	後期	阿波連貝塚(表探)	センター・2010.07.20	
176	土器	後期	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	
177	土器	後期・くびれ平底?	阿波連貝塚(表探)	眞教委・不明	内外面ナデ。
178	土器	後期	阿波連貝塚(表探)	センター・2010.07.20	
179	土器	前期・点刻線文・伊波佐堂	神山島行台付遺物散布地(表探)	増地博・1988(眞博保管)	182と同一か?
180	土器	前期・点刻線文・伊波佐堂	神山島行台付遺物散布地(表探)	増地博・1988(眞博保管)	
181	土器	前期・点刻線文・面割前直	神山島行台付遺物散布地(表探)	増地博・1988(眞博保管)	
182	土器	前期・点刻線文・伊波佐堂	神山島行台付遺物散布地(表探)	増地博・1988(眞博保管)	179と同一か?
183	土器	グスク	神山島行台付遺物散布地(表探)	増地博・1988(眞博保管)	
184	土器	後期	神山島行台付遺物散布地(表探)	増地博・1988(眞博保管)	
185	中国産青花	碗・清	阿波連集落周辺遺物散布地A(表探)	センター・2010.06.01	
186	土器	グスク	阿波連集落周辺遺物散布地C(表探)	センター・2010.07.22	
187	土器	グスク	阿波連集落周辺遺物散布地C(表探)	センター・2010.07.22	
188	土器	不明	阿波連集落周辺遺物散布地C(表探)	センター・2010.07.22	
189	中国産青花	清	阿波連集落周辺遺物散布地B(表探)	センター・2010.06.01	
190	沖縄産黒陶器	不明	阿波連集落周辺遺物散布地F(表探)	センター・2010.07.23	
191	中国産青花	鉢・清	阿波連集落周辺遺物散布地B(表探)	センター・2010.06.01	
192	中国産青花	碗・清	阿波連集落周辺遺物散布地E(表探)	センター・2010.07.22	
193	沖縄産黒陶器	甌?	阿波連集落周辺遺物散布地E(表探)	センター・2010.07.22	
194	中国産青花	碗・清	阿波連集落周辺遺物散布地E(表探)	センター・2010.06.01	
195	中国産青花	碗・清	阿波連集落周辺遺物散布地B(表探)	センター・2010.06.01	
196	沖縄産黒陶器	播鉢	阿波連集落周辺遺物散布地E(表探)	センター・2010.06.01	
197	中国産青花	碗・清	阿波連集落周辺遺物散布地E(表探)	センター・2010.06.01	
198	沖縄産黒陶器	碗	阿波連集落周辺遺物散布地シルジャー(表探)	センター・2010.07.07	
199	沖縄産黒陶器	碗	和城宮石切り場北(阿波連浦南)(表探)	センター・2010.07.20	
200	沖縄産黒陶器	碗	和城宮石切り場北(阿波連浦南)(表探)	センター・2010.07.20	ローリング受ける
201	土器	後期・実成?・壺	ペーリダ遺物散布地(表探)	センター・2010.07.21	外面指頭痕、内面ナデ。

第19表 遺物観察表(4)

No	種類	分類	出土・表探地	調査者・年月日	特記事項
202	土器	後期	ハンリクテ遺物敷布地(表探)	センター・2010.07.21	粘灰質白含む
203	土器	後期	ハンリクテ遺物敷布地(表探)	センター・2010.07.21	粘灰質白含む
204	中国産青花	藍・清	東川上御座(ワグイ)周辺遺物敷布地(表探)	センター・2010.07.06	
205	本土産古代陶器	釉	嵐立布島子(表探)	センター・2010.06.10	サ
206	沖縄産無釉陶器	釉	嵐立布島子(表探)	センター・2010.06.10	
207	中国産青花	釉・清	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	
208	本土産土器	灰・肥前	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	
209	中国産青花	藍・清	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	ローリング
210	中国産青花	釉・清	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	
211	本土産古代陶器	小釉	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	
212	中国産青花	釉・清	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	
213	中国産青花	釉・明	日納島集落(表探)	センター・2010.06.02	ローリング
214	沖縄産無釉陶器	襖	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
215	不明陶器	襖	ジュープスラン遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	
216	沖縄産無釉陶器	器種不明	ジュープスラン遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
217	沖縄産無釉陶器	器種不明	ジュープスラン遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
218	沖縄産無釉陶器	器種不明	ジュープスラン遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
219	沖縄産無釉陶器	灰	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	
220	沖縄産無釉陶器	器種不明	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
221	沖縄産無釉陶器	釉	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	
222	沖縄産無釉陶器	襖	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	
223	沖縄産無釉陶器	襖	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
224	沖縄産無釉陶器	灰	ヘイジョウグワァー遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	
225	沖縄産無釉陶器	襖	ジュープスラン遺物敷布地(表探)	センター・2010.06.10	ローリング
226	土器	後期・襖	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.11.22	内外面ナデ
227	土器	後期・灰底・高屋原	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.07	
228	土器	後期	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.06.10	
229	土器	後期	吉野間味貝塚(表探)	センター・2012.06.15	
230	土器	後期・灰底・高屋原	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.07	
231	土器	後期	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.21	
232	土器	後期・灰底?・襖	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.07	外面指頭部。粘土継接部で破損し、やや隆起する。
233	土器	後期	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.07	
234	土器	後期	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.21	
235	土器	グスク	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.06.10	
236	土器	後期	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.06.10	
237	土器	後期・灰底	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.07	
238	土器	後期・灰底・襖	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.07	
239	土器	後期・くびれ平底・襖	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.06.10	底部部。内面ナデ。
240	土器	後期・灰底・襖	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.06.10	底部部。内外面に指頭部。底部は粘土盤状付。
241	土器	後期・くびれ平底・襖	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.11.22	底部部。底部中央にふけてやや窪む。内面指頭部。
242	土器	後期・灰底・襖	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.11.22	粘土盤状付。底部中央は窪む。内面ナデ。
243	中国産青磁	釉・V類	吉野間味貝塚(表探)	磯教委・1976.06.10	
244	中国産青花	釉・清	吉野間味貝塚(表探)	センター・2011.07.13	
245	沖縄産無釉陶器	襖	産案組合の埋付地(表探)	センター・2012.06.15	
246	石	打製石器?・変成岩(緑色石若)	吉野間味貝塚(表探)	センター・2012.06.15	
247	石	変成岩(緑色石若)	吉野間味貝塚(表探)	センター・2012.06.15	
248	中国産白磁	釉・A類	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
249	中国産白磁	釉・C・B類	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
250	中国産青磁	釉・IV類	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
251	中国産青磁	釉・II類	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
252	中国産青磁	釉・IV・V類	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
253	中国産青磁	釉・IV類	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
254	中国産青磁	釉	シムグスタド(表探)	富真?・1994.12.03	肌物物胎保管
255	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口唇平坦に調整。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部は指頭部が現れる。
256	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口唇平坦に調整。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部はハケ状工具でナデ。
257	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口唇平坦に調整。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部はハケ状工具でナデ。
258	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口唇平坦に調整。内面ナデ。
259	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口唇平坦に調整。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部はハケ状工具でナデ。
260	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部は指頭部が現れる。
261	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部はハケ状工具でナデ。
262	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	内外面ナデ。
263	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	内外面ナデ。
264	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。口縁内面ナデ。内面頸部～胴部はハケ状工具でナデ。
265	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。内面ナデ。縁のハケ目が見える。
266	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	内外面ナデ。
267	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	内外面ナデ。小サイズの襖。
268	土器	後期	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	
269	土器	後期・くびれ平底・フェンサ下層式・襖	大和馬遺物敷布地(表探)	磯教委・1976.06.10	外面ナデ。内面ナデ調整されるが、指頭部が現れる。

第20表 遺物観察表(5)

No	種別	分類	出土・表探地	調査者・年月日	特記事項
270	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
271	土器	後期・くびれ平底・フエンス下層式・糞	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	内外面ナデ。
272	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
273	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
274	土器	後期・くびれ平底・フエンス下層式・糞	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1981.08.12	蓋の肩部、外面ナデ、内面ナデ調整されるが、指痕が残る。内面肩部に粘土紐を輪積みあり。
275	土器	後期・くびれ平底	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
276	土器	後期・くびれ平底・フエンス下層式・糞	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	底部分。内外面ナデ。薄い粘土紐の上に粘土を輪積みしながら成形。
277	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
278	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
279	土器	後期・くびれ平底・フエンス下層式・糞	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	底部分。内面ナデ。
280	土器	後期・くびれ平底・フエンス下層式・糞	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	底部分。粘土紐の輪を設置し、輪の中心に粘土を押し込みながら底部分を製作。その後粘土紐を輪積み。
281	土器	後期・くびれ平底・フエンス下層式・糞	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	底部分。粘土紐の輪を設置し、輪の中心に粘土を押し込みながら底部分を製作。その後粘土紐を輪積み。内面ハケ状工具でナデ。
282	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
283	土器	後期	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
284	中国産陶器	壺	大和馬遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.06.10	
285	沖縄産無釉陶器	壺	阿武高海岸(表探)	センター・2012.06.15	
286	沖縄産無釉陶器	土器・菓子皿	阿武高海岸(表探)	センター・2012.06.15	ローリング
287	沖縄産無釉陶器	不明	阿武高海岸(表探)	センター・2012.06.15	ローリング
288	不明陶器	壺	阿武ニタ高(表探)	センター・2012.06.12	ローリング
289	沖縄産無釉陶器	壺	阿武ニタ高(表探)	センター・2012.06.12	
290	不明陶器	壺	阿武ニタ高(表探)	センター・2012.06.12	ローリング
291	不明陶器	壺	阿武ニタ高(表探)	センター・2012.06.12	ローリング
292	不明陶器	壺	阿武ニタ高(表探)	センター・2012.06.12	ローリング
293	中国産青磁	碗	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
294	中国産青磁	碗	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
295	中国産青磁	器種不明	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
296	沖縄産無釉陶器	土物	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
297	沖縄産無釉陶器	碗	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
298	土器	グスタ	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
299	土器	グスタ	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
300	土器	グスタ	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
301	土器	グスタ	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
302	土器	グスタ	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
303	土器	グスタ	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
304	土器	不明	グスタ山西側(表探)	鳥取委・1981.03.14	
305	陶瓦	瓦	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
306	陶瓦	色瓦	センター・2011.08.10		
307	中国産青磁	碗	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
308	本土産古代陶器	碗	阿佐集落北側石川(表探)	センター・2012.06.12	
309	沖縄産無釉陶器	小碗	阿佐集落北側石川(表探)	センター・2012.06.12	
310	中国産青花	碗・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
311	中国産青花	碗・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
312	中国産青花	碗・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
313	中国産青花	皿・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
314	中国産青花	小碗・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
315	中国産青花	碗・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
316	中国産青花	碗・清	阿佐遺物散布地(表探)	センター・2011.08.10	
317	本土産古代陶器	碗	阿佐集落南岸(表探)	センター・2012.06.12	
318	本土産古代陶器	碗	阿佐集落南岸(表探)	センター・2012.06.12	
319	本土産古代陶器	碗	阿佐集落南岸(表探)	センター・2012.06.12	
320	土器	後期・土流・阿波津浦IV層土器群・糞	阿武高遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.11.22	外反口縁。内外面ナデ調整されるが、指痕が残る。
321	土器	後期・裏口しくはグスタ	阿武高遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.11.22	
322	土器	後期・くびれ平底・糞	阿武高遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.11.22	内外面ナデ。
323	土器	不明	阿武高遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.11.22	
324	土器	後期・くびれ平底・糞	阿武高遺物散布地(表探)	鳥取委・1976.11.22	
325	中国産青花	碗・清	阿武高民団所(表探)	センター・2011.07.05	底部分。
326	中国産青磁	碗・V類(重文ワ)	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
327	中国産青磁	碗・V類	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
328	中国産青花	碗・清	阿武高民団(表探)	鳥取委・1981.03.14	
329	沖縄産無釉陶器	小皿	阿武高民団(表探)	鳥取委・1981.03.14	
330	土器	後期	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
331	土器	不明	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
332	土器	不明	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
333	土器	不明	阿武高民団(表探)	鳥取委・1981.03.14	
334	土器	後期	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
335	土器	不明	阿武高民団(表探)	鳥取委・1981.03.14	
336	中国産陶器	壺	阿武高民団(表探)	鳥取委・1981.03.14	
337	中国産青磁	碗・VI類(継蓮弁文)	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
338	中国産青磁	碗・V類(人形手)	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
339	中国産陶器	壺	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
340	土器	不明	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
341	土器	後期	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
342	土器	後期・土流・画屋原	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
343	土器	不明	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
344	土器	後期・土流・大当原・糞	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
345	土器	不明	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	内外面指痕。粘土紐接合部が隆起する。
346	土器	不明	阿武高民団地点(表探)	鳥取委・1981.03.14	
347	土器	後期	阿武高民団(表探)	鳥取委・1976.11.22	
348	中国産青花	碗・清	豊岡岡崎跡(表探)	センター・2011.07.28	
349	中国産青花	碗・清	豊岡岡崎跡(表探)	センター・2011.07.28	
350	土器	不明	豊岡岡崎跡(表探)	センター・2011.07.06	
351	土器	後期	豊岡岡崎跡(表探)	センター・2011.07.22	
352	土器	後期	豊岡岡崎跡(表探)	センター・2011.07.22	
353	土器	ハナリ磁々	高辻北遺物散布地(表探)	センター・2011.07.13	バナリタ
354	本土産無釉陶器	土物	高辻北遺物散布地(表探)	センター・2011.07.13	
355	本土産無釉陶器	土物	高辻北遺物散布地(表探)	センター・2011.07.13	

第21表 遺物観察表(6)

No	種類	分類	出土・表掘地	調査者・年月日	特記事項
336	沖縄産無釉陶器	甕	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	
337	沖縄産無釉陶器	甕	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	ローリング
338	沖縄産無釉陶器	鉢	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	
339	本土産近代陶器	碗	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	
360	沖縄産無釉陶器	甕	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	ローリング
361	沖縄産無釉陶器	鉢	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	
362	沖縄産無釉陶器	鉢	島比北遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.13	
363	沖縄産無釉陶器	罎子甕	慶留間気落東海岸(表掘)	センター・2012.06.14	ローリング
364	本土産近代陶器	罎子甕	慶留間気落東海岸(表掘)	センター・2012.06.14	
365	沖縄産無釉陶器	罎子甕	慶留間気落東海岸(表掘)	センター・2012.06.14	ローリング
366	沖縄産無釉陶器	罎子甕	慶留間気落東海岸(表掘)	センター・2012.06.14	ローリング
367	沖縄産無釉陶器	罎子甕	慶留間気落東海岸(表掘)	センター・2012.06.14	
368	沖縄産無釉陶器	罎子甕	慶留間気落東海岸(表掘)	センター・2012.06.14	
369	沖縄産無釉陶器	甕	安室貝塚周辺(アツタガール)(表掘)	センター・2011.07.12	
370	沖縄産無釉陶器	瓶	安室貝塚周辺(アツタガール)(表掘)	センター・2011.07.12	
371	沖縄産無釉陶器	瓶	安室貝塚周辺(アツタガール)(表掘)	センター・2011.07.12	
372	沖縄産無釉陶器	瓶	安室貝塚周辺(アツタガール)(表掘)	センター・2011.07.12	
373土器	前期	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
374土器	前期	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
375土器	前期	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
376土器	前期	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
377土器	前期	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
378土器	前期	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
379土器	不明	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
380土器	不明	ウツタハ日取? (表掘?)	県教委・1969.03.23		
381土器	後期・大成・大当原・豊	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		外面指頭痕、内面ナダ。
382土器	後期・大成・大当原・豊	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		外面ナダ、内面指頭圧痕が残る。粘土練合部が確認。
383土器	後期・大成・大当原・豊	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		外面粗鉢、内面指頭圧痕が残る。粘土練合部が確認。
384土器	後期	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		粗い混入物
385土器	後期・大成	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		粗い混入物
386土器	後期・大成	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		粗い混入物
387土器	後期	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		
388土器	後期	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		
389土器	後期・大成	ウツタ遺物散布地(表掘)	センター・2011.07.12		粗い混入物
390土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状を呈す指頭痕を整理と配する。内面ナダ調整が行われる。391の胴下半部と考えられた。
391土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状を呈す指頭痕を整理と配する。内面ナダ調整が行われる。390の胴下半部と考えられた。
392土器	前期・条紋文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状の爪形文。内面ナダ調整されるが、僅かに指頭痕が残る。宮城1979第1図12と同一。
393土器	前期・条紋文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状を呈す指頭痕を整理と配する。内面指頭痕が残る。
394土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状の爪形文。内面ナダ調整されるが、僅かに指頭痕が残る。底面ナダ。
395土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状の爪形文。ハナク状口縁ナダ。外面印字状を呈す指頭痕を整理と配する。内面ナダとられるが、指頭痕が残る。
396土器	前期・爪形文・東京?・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	縦位の短小爪文(弧状)を施す。内面にも同様の文様を2条施す。口唇は刻目。416と同一個体。
397土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面に横位の短小爪文?が縦位に施す。条紋文が残る。内面縦位のハナク状口縁ナダ。
399土器	前期・条紋文・神野A・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
400土器	前期・条紋文・神野A	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
402土器	前期・条紋文・神野A	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
403土器	前期・条紋文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
404土器	前期・条紋文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
405土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
406土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(表掘)	宮城・不明	不明	外面押引文状の長大な指頭痕で疑似連続線跡。内面ナダ。宮城1979第1図11と同一。
407土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面縦條文。内面ナダ調整されるが、僅かにハナク口縁が残る。底面付直交筋。
408土器	前期・条紋文・磐梯?・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面に横位の短小爪文?が縦位に施す。条紋文が残る。内面縦位のハナク状口縁ナダ。
409土器	前期・条紋文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
410土器	前期・条紋文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	
411土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状を呈す指頭痕を整理と配する。内面ナダ。
412土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状を呈す指頭痕を整理と配する。内面指頭痕が残る。
413土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	短小爪文状の長大な指頭痕で疑似連続線跡。内面ナダ。
414土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	外面印字状の爪形文。内面ナダ調整されるが、僅かに指頭痕が残る。
415土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(指定・表掘)	宮城・不明	不明	縦位の短小爪文(弧状)を3条施す。その下部には縦條文。胴部1段位の短小爪文(弧状)を2条施す。口唇は刻目。3条弧状に施す。胴下半部には、条紋、口縁内面に短小爪文(弧状)を2条施す。内面はナダ調整されるが、僅かにハナク口縁が残る。口唇は刻目。399と同一個体。宮城1979第1図16・7を含む。
416土器	前期・条紋文・神野A・深鉢	船越原遺跡2地点(表掘)	宮城・不明と県教委・1976.05.19が組合		縦位の短小爪文(弧状)を2条施す。その下部には縦條文。胴部1段位の短小爪文(弧状)を2条施す。口唇は刻目。3条弧状に施す。胴下半部には、条紋、口縁内面に短小爪文(弧状)を2条施す。内面はナダ調整されるが、僅かにハナク口縁が残る。口唇は刻目。399と同一個体。宮城1979第1図16・7を含む。
417土器	前期・条紋文・神野A・深鉢	船越原遺跡2地点(表掘)	宮城・不明		縦位の短小爪文(弧状)を2条施す。その下部には縦條文。胴部1段位の短小爪文(弧状)を2条施す。口唇は刻目。3条弧状に施す。胴下半部には、条紋、口縁内面に短小爪文(弧状)を2条施す。内面はナダ調整されるが、僅かにハナク口縁が残る。口唇は刻目。399と同一個体。宮城1979第1図16・7を含む。

第22表 遺物観察表(7)

No	種類	分類	出土・表探地	調査者・年月日	特記事項
418	土器	前期・条痕文・深鉢	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・不明	外面ナテ調整されるが、僅かにヘケ目録が残る。内面ハタテ工具でナテ。
419	土器	前期・条痕文・深鉢	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・1976.09.17	夫直底高片。外面ナテ調整されるが、ヘケ目録が残る。
420	土器	前期・条痕文	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・不明	雲母混入
421	土器	不明	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・不明	ローリング
422	土器	前期・条痕文	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・不明	
423	土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・1976.10.09	外面印字状を呈す指頭部を整然と配する。内面ナテ。
424	土器	後期	船越原遺跡4地点(指定・表探)	呉教委・1976.09.29	
425	土器	後期・夫直・阿波道徳IV層土器群	船越原遺跡4地点(指定・表探)	呉教委・1976.09.29	やや外反。内外面に指頭部。
426	土器	養生土器・入来1式・甕	船越原遺跡1～3地点(指定・表探)	呉教委・1976.10.09	やや内湾して立ち上がり、口唇部に三角形状の突帯混入。突帯部は接合肌。口唇は板状工具でナテ。
427	土器	前期・爪形文	船越原遺跡1地点(表探)	センター・2010.07.20	
428	土器	前期・爪形文	船越原遺跡3地点(表探)	センター・2010.07.20	
429	土器	前期・爪形文	船越原遺跡4地点(表探)	センター・2013.07.18	
430	土器	前期・爪形文	船越原遺跡3地点(表探)	センター・2010.06.16	
431	土器	前期・爪形文	船越原遺跡3地点(表探)	センター・2010.07.20	
432	土器	前期	船越原遺跡4地点(指定・表探)	呉教委・不明	
433	土器	不明	船越原石号場(表探)	センター・2010.06.17	
434	土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.27	口縁部上段は爪形文。その下部に僅かに指頭部と爪形文。内面ナテ調整されるが、指頭部が残る。
435	土器	前期・爪形文・野国・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅱ層	センター・2012.08.14	上下段の指頭部を重ね、不規則な縦位回線で、指頭部の幅は一定しない。
436	土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層ⅡNo1	センター・2012.08.16	外面印字状を呈す指頭部を整然と配する。内面ナテ。
437	土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層	センター・2012.08.14	外面印字状を呈す指頭部と爪形文。内面ナテ。
438	土器	前期・爪形文・野国・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層No4	センター・2012.08.16	上下段の指頭部を重ね、不規則な縦位回線で、指頭部の幅は一定しない。
439	土器	前期・爪形文・野国・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層No2	センター・2012.08.16	上下段の指頭部を重ね、不規則な縦位回線で、指頭部の幅は一定しない。
440	土器	前期	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層No2	センター・2012.08.16	
441	土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層	センター・2012.08.14	外面印字状を呈す指頭部があるが、摩耗しており不明。内面ナテ。
442	土器	前期・爪形文・野国・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層No5	センター・2012.08.16	表面が摩耗し、文様不鮮明だが、上下の指頭部を重ねている。
443	土器	前期・爪形文・野国	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.06.16	
444	土器	前期・爪形文・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層	センター・2013.09.19	表面が摩耗し、文様不鮮明だが、上下の指頭部を重ねている。
445	土器	前期・爪形文・野国	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.06.16	
446	土器	前期・爪形文・野国	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.06.16	
447	土器	前期・爪形文・ヤブチ	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.07.10	
448	土器	前期・爪形文・野国	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.09.19	
449	土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点露頭区Ⅲ層	センター・2012.08.14	
450	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.27	
451	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2006.03.13	
452	土器	前期・爪形文・野国	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2006.03.13	
453	土器	前期・爪形文・ヤブチ	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.27	
454	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.07.20	
455	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.07.20	
456	土器	前期・爪形文・ヤブチ	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.07.20	
457	土器	前期・爪形文・野国	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.27	
458	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.08.14	
459	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.07.10	
460	土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.07.10	沈腐土。疑似連続縦位爪形文。
461	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.06.16	
462	土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.07.10	沈腐土。疑似連続縦位爪形文。
463	土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.08.16	外面印字状の爪形文。内面ナテ調整されるが、僅かに指頭部が見られる。
464	土器	前期・肥厚口縁土・室川式・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.07.15	口唇部ナテ。外面ナテ。内面ナテ調整されるが、わずかに指頭部が残る。
465	土器	前期・爪形文・ヤブチ	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.07.19	
466	土器	前期・爪形文・東京・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2010.07.20	
467	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2006.03.13	
468	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.07.09	
469	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.07.09	
470	土器	前期・爪形文・ヤブチ・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.08.14	
471	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.28	
472	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.27	
473	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.06.27	
474	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.08.14	
475	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.07.09	
476	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.07.09	
477	土器	前期・爪形文・野国・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.08.16	表面が摩耗し、文様不鮮明だが、上下の指頭部を重ねている。
478	土器	前期・爪形文	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2012.08.16	
479	土器	前期	船越原遺跡2地点(表探)	センター・2013.09.18	底面平。平底。
480	土器	前期・条痕文・曹律?・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	不明(調査教資料館)	外面沈腐土。内面条痕。
481	土器	前期・条痕文・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	不明(調査教資料館)	底面平。内外面に指頭部が見られる。
482	土器	前期・籠目土器・高橋日・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	不明(調査教資料館)	底面平。高橋日土器に爪痕を施す。内面に指頭部が見られる。
483	土器	後期・夫直・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	不明(調査教資料館)	口縁部が肥厚。内外面ともナテ調整されるが、指頭部が残る。
484	土器	前期・籠目土器・高橋日・深鉢	船越原遺跡2地点(表探)	不明(調査教資料館)	底面平。高橋日土器に爪痕を施す。

第 23 表 遺物観察表 (8)

No	種類	分類	出土・表掘地	調査者・年月日	特記事項
485 土器	後期・土流・高屋原・壘	船橋原遺跡 (表掘)	不明 (調査教習資料館)	口縁部に形状異常を内面から外面にかけて見付。外面はナダ。内面に指頭痕が残る。	
486 土器	後期・土流・壘	船橋原遺跡 (表掘)	不明 (調査教習資料館)	内面に指頭痕が残る。	
487 土器	後期・土流・高屋原・壘	船橋原遺跡 (表掘)	不明 (調査教習資料館)	外面はナダ。内面指頭痕が残る。	
488 土器	後期・土流・壘	船橋原遺跡 (表掘)	不明 (調査教習資料館)	外面に指頭痕が残る。	
489 土器	後期・土流・壘	船橋原遺跡 (表掘)	不明 (調査教習資料館)	口縁部が外反。内外面ともにナダ調整されるが、指頭痕が残る。	
490 土器	前期・爪形文・野国	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 181	
491 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 182	
492 土器	前期	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 183	
493 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 185	
494 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 186	
495 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 187	
496 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 188	
497 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 189	
498 土器	前期・爪形文・ヤブチ	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1811	
499 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1812	
500 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1813	
501 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1814	
502 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1815	
503 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1816	
504 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1817	
505 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1818	
506 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1819	
507 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1820	
508 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1821	
509 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1822	
510 土器	前期・爪形文・東原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007		
511 土器	前期・爪形文・不明	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	無文土器。伊藤他 2010 図 24	
512 土器	前期・爪形文・不明	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	実態文・指頭痕。伊藤他 2010 図 25	
513 土器	前期・爪形文・不明	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	実態文・指頭痕。伊藤他 2010 図 26	
514 土器	前期・条痕文	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1827	
515 土器	後期・土流・高屋原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007	伊藤 2010 1828	
516 土器	後期・土流・高屋原	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	伊藤 12.04.2007		
517 G22	磨製石器・変成岩 (緑色千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	センター・2014.09.17		
518 G22	砥石?・燻積岩 (中粒砂岩)	船橋原遺跡 3 地点 (表掘)	センター・2010.08.13		
519 G47	変成岩 (千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 6018E	センター・2012.07.19		
520 G47	変成岩 (千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 6018E	センター・2012.07.19		
521 G47	変成岩 (緑色千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 6018E	IV 日層 センター・2012.08.14		
522 G47	堆積岩 (スコリア)	船橋原遺跡 2 地点 6017I, Ⅱ 日層	センター・2012.07.19		
523 G47	変成岩 (緑色千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 露頭西区 III 日層 %6	センター・2012.08.16		
524 G47	堆積岩 (片状砂岩)	船橋原遺跡 2 地点 露頭西区 III 日層 %19	センター・2012.08.16		
525 G47	堆積岩 (中粒砂岩)	船橋原遺跡 2 地点 露頭北西区 III 日層 %7	センター・2013.09.18		
526 G47	変成岩 (緑色千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 露頭西区 III 日層 %9	センター・2013.09.18		
527 G47	変成岩 (緑色千枚岩)	船橋原遺跡 2 地点 (表掘)	センター・2010.08.13		
528 G47	堆積岩 (中粒砂岩)	船橋原遺跡 (表掘)	調査教・1976.10. -		
529 G47	変成岩 (緑色千枚岩)	船橋原遺跡 (表掘)	調査教・1976.10. -		
530 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。内外面ナダ調整されるが、内面には指頭痕が残る。	
531 土器	後期・土流・阿波達遺跡 IV 層土器群・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	やや外反口縁。外面ナダ。口縁の一部に僅かに実態痕付。内面指頭痕。	
532 土器	後期・土流・阿波達遺跡 IV 層土器群・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	やや外反口縁。外面ナダ。口縁の一部に僅かに実態痕付。内面指頭痕がハイク状工具でナダ調整するが、指頭痕が残る。	
533 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.09.29	外面ナダ調整されるが、指頭痕が残る。	
534 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。外面ナダ。内面には指頭痕が残る。	
535 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.09.29	直口口縁。内外面ハイク状工具でナダ。内面には指頭痕が残る。口縁内面から外面にかけて形状異常見付。	
536 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。外面ナダ。内面には指頭痕が残る。	
537 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。外面ナダ。内面には指頭痕が残る。	
538 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。内外面ハイク状工具でナダ。内面には指頭痕が残る。口縁内面から外面にかけて形状異常見付。	
539 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。外面ナダ。内面ナダ調整されるが指頭痕が残る。	
540 土器	後期・土流・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	底部付近実状。外面ナダ調整されるが指頭痕が残る。内面は指頭痕。	
541 土器	後期	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09		
542 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 B 地点 IV 層貝集中 %2	センター・2014.08.26	やや内湾口縁。外面ナダ。内面指頭痕が残る。	
543 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	外面ナダ。内面ナダ調整されるが、指頭痕が残る。	
544 土器	後期・土流・阿波達遺跡下層・壘	阿波達遺跡 1 地点 VI 層	センター・2015.09.08	口縁部が外反し、口唇が倒れ下り小さい。外面ナダ。内面は指頭痕が残る。	
545 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.09.29	乳房状突起底部片。内外面に指頭痕が残る。	
546 土器	後期・くびれ平底・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	乳房状突起底部片。輪の中心に粘土を押し込みながら底部を製作。その最長土組を挿し込む。内面ハイク状工具でナダ調整。	
547 土器	後期	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.09.29	乳房状突起底部片。内外面に指頭痕が残る。	
548 土器	後期・土流・高屋原・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	内外反口縁。内外面に指頭痕が残る。	
549 土器	後期・土流・阿波達遺跡 IV 層土器群・壘	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	やや外反口縁。内外面に指頭痕が残る。	
550 土器	後期・土流	阿波達遺跡 (表掘)	調査教・1976.10.09	直口口縁。内面は指頭痕が残る。	

第24表 遺物観察表(9)

No	種類	分類	出土・表探地	調査者・年月日	特記事項
551土器	後期・土流	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.09.29	
552土器	後期・土流	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
553土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2006.03.13	
554土器	後期・土流・浜屋原・壘	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2012.07.26	外反口縁、内外面ナゲ。沈線文。
555土器	後期・土流・阿波連浦IV層土器群・壘	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
556土器	後期・土流・阿波連浦下層・壘	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	胴部片。外面ナゲ。内面ハケ状工具でナゲ。
557土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2012.07.26	
558土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2012.07.26	
559土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2012.07.26	
560土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2012.07.26	
561土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
562土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
563土器	不明	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2012.07.26	
564土器	後期・土流・浜屋原・壘	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	底部片。破損し全形不明だが、乳房状底流の可能性あり。
565土器	後期・土流	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
566土器	後期・土流	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
567土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
568土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2006.03.13	
569土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2006.03.13	
570土器	後期・土流・阿波連浦IV層土器群・壘	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2006.03.13	僅かに外反口縁。外面ナゲ。内面指頭痕。
571土器	後期	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	県教委・1976.10.09	
572中国産青花	壘・清	阿波連浦只屋	阿波連浦只屋(表探)	センター・2015.09.09	
573土器	後期・土流・浜屋原・壘	阿波連浦只屋2地点IV層	センター・2015.07.03	直口縁。内外面ナゲ。内面には僅かに指頭痕が残る。	
574土器	後期・土流	阿波連浦只屋1地点IV層No2	センター・2015.09.08		
575土器	後期・土流	阿波連浦只屋1地点V層	センター・2015.07.30		
576土器	後期・土流・壘	阿波連浦只屋1地点IV層具集中No18	センター・2015.09.09	内外面ナゲ調整されるが、指頭痕が残る。	
577土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点	センター・2014.08.21		
578土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点IV層	センター・2014.08.26		
579土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点	センター・2014.08.21		
580土器	後期・土流・阿波連浦下層・壘	阿波連浦只屋1地点IV層	センター・2015.07.29	外面ナゲ。内面ハケ状工具でナゲ。	
581土器	後期・土流	阿波連浦只屋1地点IV層	センター・2015.07.29		
582土器	後期・土流	阿波連浦只屋1地点IV層	センター・2015.07.30		
583土器	後期・土流	阿波連浦只屋1地点IV層具集中	センター・2015.09.09		
584土器	後期・土流・阿波連浦下層・壘	阿波連浦只屋1地点IV層具集中No15	センター・2015.09.09	内外面ナゲ。内面には僅かに指頭痕が残る。	
585土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点IV層	センター・2014.08.26		
586土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点IV層具集中No4	センター・2014.08.26		
587土器	前期・点刻線文・伊賀夜堂(無文)・深線	阿波連浦只屋1地点VI層	センター・2015.09.09	微小な波状口縁。外面ナゲ。内面は線かハケ状工具でナゲ。口縁部の上面縁は僅かに正円状でなく、一箇所をもち、外面ナゲ。内面ナゲ調整されるが、僅かに指頭痕が残る。	
588土器	後期・土流・浜屋原?・壘	阿波連浦只屋3地点1層	センター・2015.07.02		
589土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点VI層	センター・2014.09.09		
590土器	後期・土流	阿波連浦只屋B地点IV層	センター・2014.08.26		
591土器	後期・土流	阿波連浦只屋3地点1層	センター・2015.07.02		
592土器	後期・土流	阿波連浦只屋2地点IV層	センター・2015.07.03		
593土器	後期・土流・浜屋原・壘	阿波連浦只屋B地点IV層No2	センター・2014.08.25	底部片。破損し全形不明だが、乳房状底流の可能性あり。	
594土器	前期・土流・壘	阿波連浦只屋B地点VI層	センター・2014.09.09	外面ナゲ。内面ハケ状工具でナゲ。	
595土器	後期・土流・阿波連浦下層・壘	阿波連浦只屋1地点IV層	センター・2015.07.29	外反口縁。外面ナゲ。内面口縁部は指頭痕が残り、胴部はハケ状工具でナゲ。乳房状底片。外面ナゲ調整。内面胴部はナゲ調整されるが、底物を引きずった跡が残る。底部付近には線かハケ状工具が残り、指頭痕が僅かに残る。	
596土器	後期・土流・阿波連浦下層・壘	阿波連浦只屋1地点IV層	センター・2015.07.29		
597土器	後期・土流・浜屋原・壘	阿波連浦只屋B地点IV層	センター・2014.09.10	乳房状底流底部片。内外面に指頭痕が残る。	
598石杖	棒鎌首(軽石)	阿波連浦只屋1地点VI層具集中	センター・2015.09.08		
599石杖	棒鎌首(中粒砂岩)	阿波連浦只屋B地点VI層No6	県教委・1976.11.22		

付編 埋蔵文化財調査基準等関係資料

沖繩県埋蔵文化財発掘調査基準 (抜粋)

平成18年10月18日 沖繩県教育委員会 教育長決裁

(目的)

第1条 本基準は、沖繩県における埋蔵文化財の発掘調査(以下「発掘調査」という。)について必要な事項を定めることにより、発掘調査の適正化を図ることを目的とする。

(適用対象等)

第2条 本基準は、各種開発事業に伴い県教育委員会が実施する発掘調査について適用する。

(指導及び助言)

第3条 沖繩県教育委員会(以下「県教育委員会」という。)は、市町村教育委員会より指導及び助言を求められた場合には、本基準に基づき行うこととする。

(発掘基準の基本方針)

第4条 発掘調査の基本方針は、次のとおりとする。

(1) 埋蔵文化財所在状況の把握と周知徹底

埋蔵文化財包蔵地の範囲、性格等を明示した遺跡台帳及び遺跡地図については、詳細分布調査、予備調査等を活用して精度を高めるとともに、その内容について開発事業者等への周知徹底に努める。

(2) 埋蔵文化財の保存措置

埋蔵文化財は、後世に継承していくべきものであるという認識に立ち、開発事業との調整に当たっては可能な限り保存措置が講じられるよう努めるとともに、発掘調査後の遺跡の取扱いについても、発掘調査結果を検討し適切な措置を行う。

また、遺物等の取扱いについても、保管・活用に備えた適切な措置を行う。

(3) 開発事業の把握と調整

埋蔵文化財に影響を及ぼす可能性のある各種開発事業計画については、その早期把握に努めるとともに、埋蔵文化財保護のための調整を十分に行い、調整の経過については逐次記録し、疑義が生じることのないよう、その内容を協定書にまとめる。

なお、協定書の内容は、別紙1のとおりとする。

(4) 埋蔵文化財調査体制の整備と資質向上

発掘調査その他の埋蔵文化財行政を円滑に進めるため、県教育委員会は専門職員の配置を推進して、文化財の保護及び調査体制を充実させるとともに、研修等を通じてその資質向上を図る。

(5) 発掘調査の適切な施行

開発に伴う発掘調査は、原則として県又は、市町村教育委員会が実施する。

民間調査関係組織を導入する場合は、埋蔵文化財保護体制の整備を前提として、別紙2により適切にこれを行う。

(6) 発掘調査における安全の確保

発掘調査の実施に当たっては、人命尊重を第一とし、安全対策及び発掘調査作業現場の条件整備に必要な措置を十分講ずる。

(発掘調査)

第5条 発掘調査は、予備調査から始まり整理・報告書作成をもって完結する。その手順は、別紙3に示すところによるものとする。

(調査基準)

第6条 開発事業に伴う埋蔵文化財の取扱いについては、別紙4に定める調査基準によるものとする。

(発掘調査経費の負担)

第7条 予備調査の経費については、原則として県教育委員会負担とする。

2 本調査及び整理・報告書作成の経費については、原則として原因者に協力を求める。

(基準の改正)

第8条 県教育委員会は、必要に応じて、本基準の見直しを行うものとする。

<中略>

別紙3 発掘調査手順

発掘調査の手順は、以下のとおりとする。

1 予備調査

- (1) 分布調査 現地踏査等により、遺跡の所在の有無を判断するための予備的調査を行う。
- (2) 試掘調査 周知の埋蔵文化財包蔵地以外の場所において、トレンチ掘削等により遺跡の有無の確認を行う予備調査を行う。なお、遺跡の所在が確認された場合は、その状況を把握する確認調査へ移行することもある。
- (3) 確認調査 周知の埋蔵文化財包蔵地内において、遺跡の保護及び本調査のための資料を得ることを目的とする予備的調査を行う。

2 本調査

予備調査に基づき、対象となる範囲において本格的な全面調査を行う。その内容は、基本測量、表土除去、包含層発掘、遺構発掘、自然科学的調査、記録写真撮影、記録図面作成等である。なお、調査は、遺跡・遺構の状況を現地によらずとも復元できる精度とする。

3 整理・報告書作成

- (1) 資料整理 本調査等で得られた記録資料(図面・写真)の整理、出土遺物の整理(洗浄、注記、仕分け、接合、分類、復元)、実測、写真撮影、保存処理、科学的分析、保管・活用に備えた作業等を行う。
- (2) 報告書作成 成果の分析・検討、製図、原稿執筆、割付け編集、校正、印刷製本並びに配布を行う。

別紙4 調査基準

1 基本事項

- (1) 埋蔵文化財として扱う範囲については、近現代までの遺跡を対象に、その重要性等に応じて判断する。
- (2) 埋蔵文化財の取扱いを判断するに当たっては、その現状を把握するための予備調査を実施する。
- (3) 工事による掘削が埋蔵文化財に及ぶ場合は、本調査等を実施する。
- (4) 恒久的な建築物を建築する場合は、本調査等の対象とする。ただし、地下遺構に影響を及ぼさないと認められる建築物を建築する場合であって、当該建築物の一般的な耐用年数がおおむね30年未満のものは、原則として本調査等の対象としない。
- (5) 道路その他の恒久的な工作物を設置する場合は、本調査等の対象とする。ただし、本調査等の要否の判断に当たっては、当該工作物の設置後であっても必要な場合は発掘調査が可能か否かの観点から検討を行うものとする。
- (6) 盛土、一時的な工作物の設置等により埋蔵文化財に影響が及ぶ恐れがある場合は、本調査等を実施する。
なお、盛土については、厚さが遺物包含層又は遺構確認面からおおむね2メートルを超える場合は、本調査等を実施する。
- (7) 開発等により周知の埋蔵文化財包蔵地以外で遺跡が発見された場合は、開発事業者と速やかに協議を持ち、発掘調査を含む対策を講じる。
- (8) 地割、古道等歴史的に継承されてきた遺跡については、その景観を保存する方向で計画立案の段階から十分な協議を行う。
- (9) 史跡として将来保存活用が考えられる重要な遺跡については、発掘調査を含む十分な保存措置を講じる。

2 埋蔵文化財として扱う範囲に関する基準

- (1) 埋蔵文化財として扱う遺跡の範囲については、原則として次のとおりとする。

ア おおむね中世（1609年の慶長の役）までに属する遺跡は、埋蔵文化財として扱うものとする。

イ 近世（1609年以降～1879年の廃藩置県）に属する別表1の遺跡については、地域において必要なものを対象とする。

ウ 近現代（1879年以降）の遺跡については、別表2に挙げるものうち地域において特に重要なものを対象とする。

(2) 前号イに定める地域において必要なもの及び前号ウに定める特に重要なものとしての判断については、その遺跡が地域の歴史・文化を考える上で、必要な情報を得ることができるものであるかどうかを、次の点に留意しながら総合的に判断するものとする。

ア 歴史的に見て、地域の拠点となった遺跡及びその関連遺跡であること。

イ 文献、史料、口伝、伝承等の内容を検証することができるものと認められる遺跡であること。

ウ 試掘・確認調査の結果、検出遺構・出土遺物の内容等から見て、地域の歴史・文化を考える上で多くの情報を得ることができるものと認められる遺跡であること。

- (3) 埋蔵文化財として取り扱う遺跡の内容、種類等については、地域の実状にあわせて判断する。

3 各種事業の取扱い

- (1) 個人専用の住宅（新築及び増改築）・墓地造成等

周知の埋蔵文化財包蔵地及びその隣接地においてこれらを建築、造成する場合は、確認調査を実施する。確認調査の結果遺跡が発見されたときは遺跡の保存のための協議を行い、埋蔵文化財に影響を及ぼす恐れがあるときには、本調査等を実施する。

- (2) 道路、鉄道、河川、ダム等

道路、鉄道、河川、ダム等の建設地に埋蔵文化財が存在する場合は、本調査等が必要である。

イ ダムの水没地区については、非常時満水線までを本調査等の対象とする。

ウ 急傾斜地については、安全性を考慮し、可能な限り本調査等を実施する。

エ 砂防ダム（本体及び付帯施設）について、これを設置する地点に埋蔵文化財が存在する場合は、本調査等を実施する。

- (3) 農業基盤整備事業等（農地造成、圃場整備等）

農業基盤整備事業については、事前の協議を綿密に行い、予備調査を実施し、埋蔵文化財が発見された場合は、保存に努める。

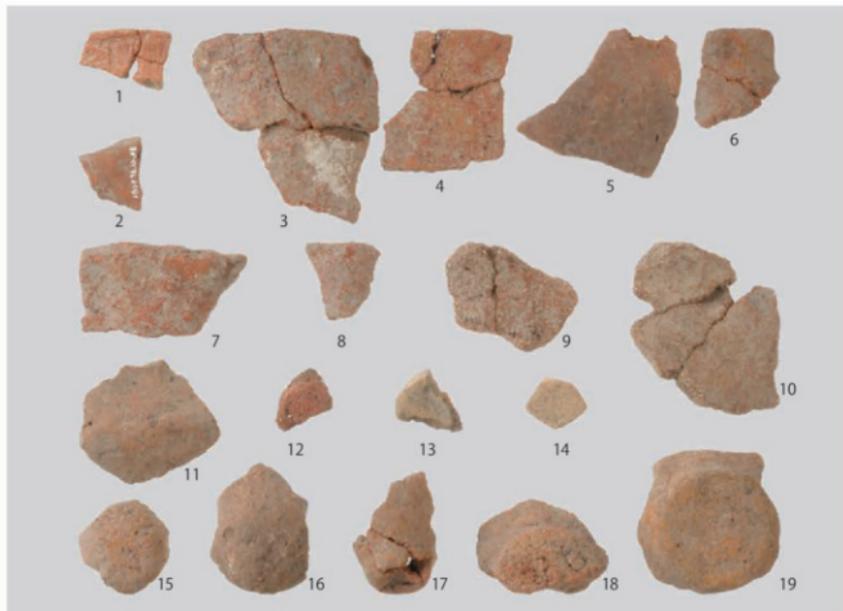
- イ 農地

盛土については、厚さが遺物包含層又は遺構確認面からおおむね2メートルを超える場合は、本調査等を実施する。

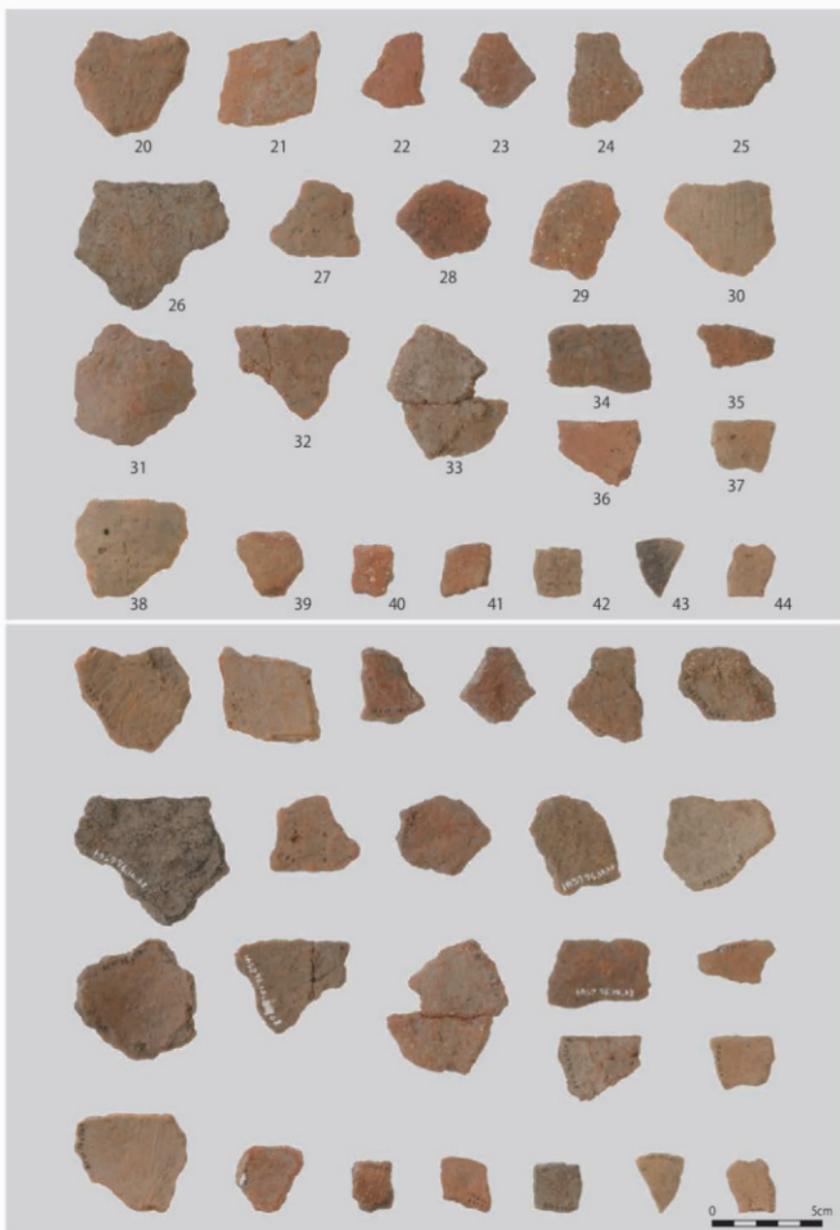
掘削については、遺物包含層又は遺構確認面から上に、おおむね、水田にあっては30センチメートル、畑地にあっては60センチメートルを確保することが望ましいが、営農条件及び土壌条件の実態に合わせて対応する。

- ウ 農道及び林道

農道及び林道の建設地に埋蔵文化財が存在する場合には、本調査等を実施する。ただし、簡易な農道及び林道について



遺物図版 1 渡嘉志久貝塚 (1) (1～19)



遺物図版2 渡嘉志久貝塚（2）（20～44）



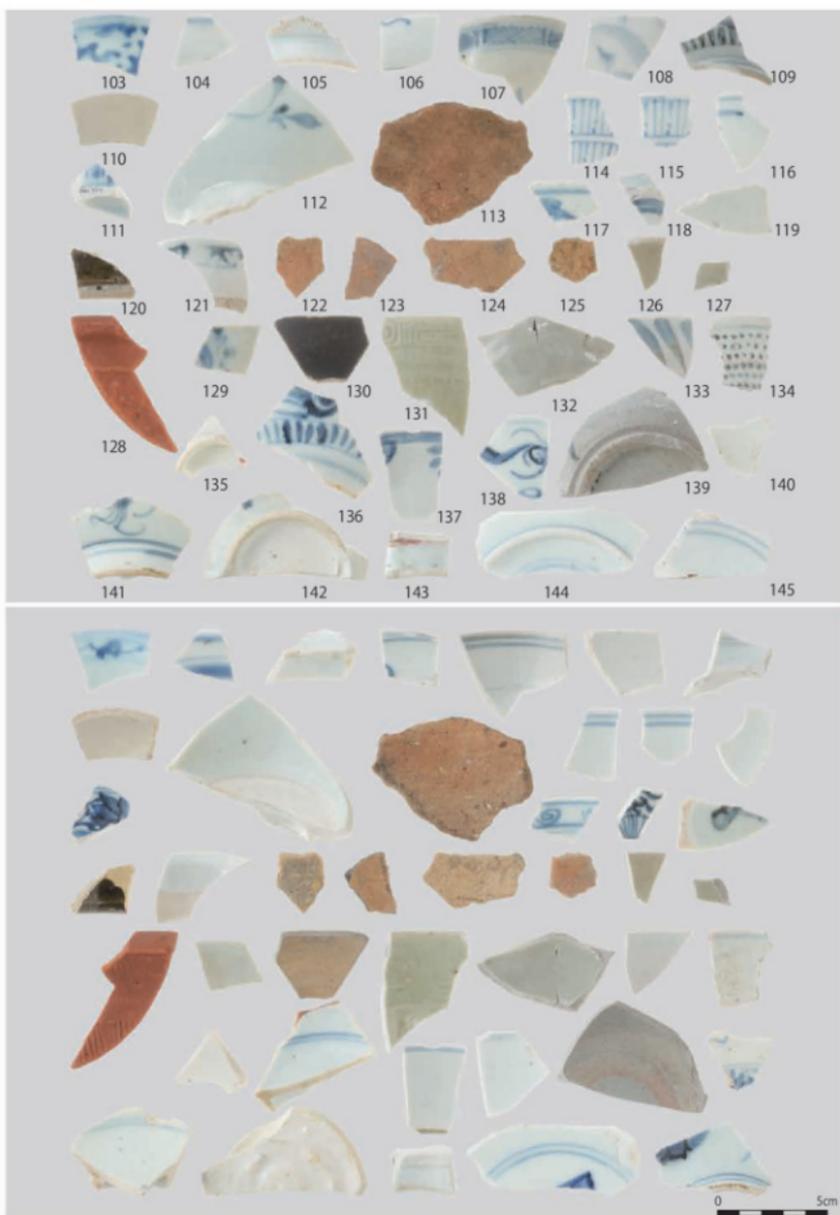
遺物図版3 渡嘉志久貝塚(3)(45~61)



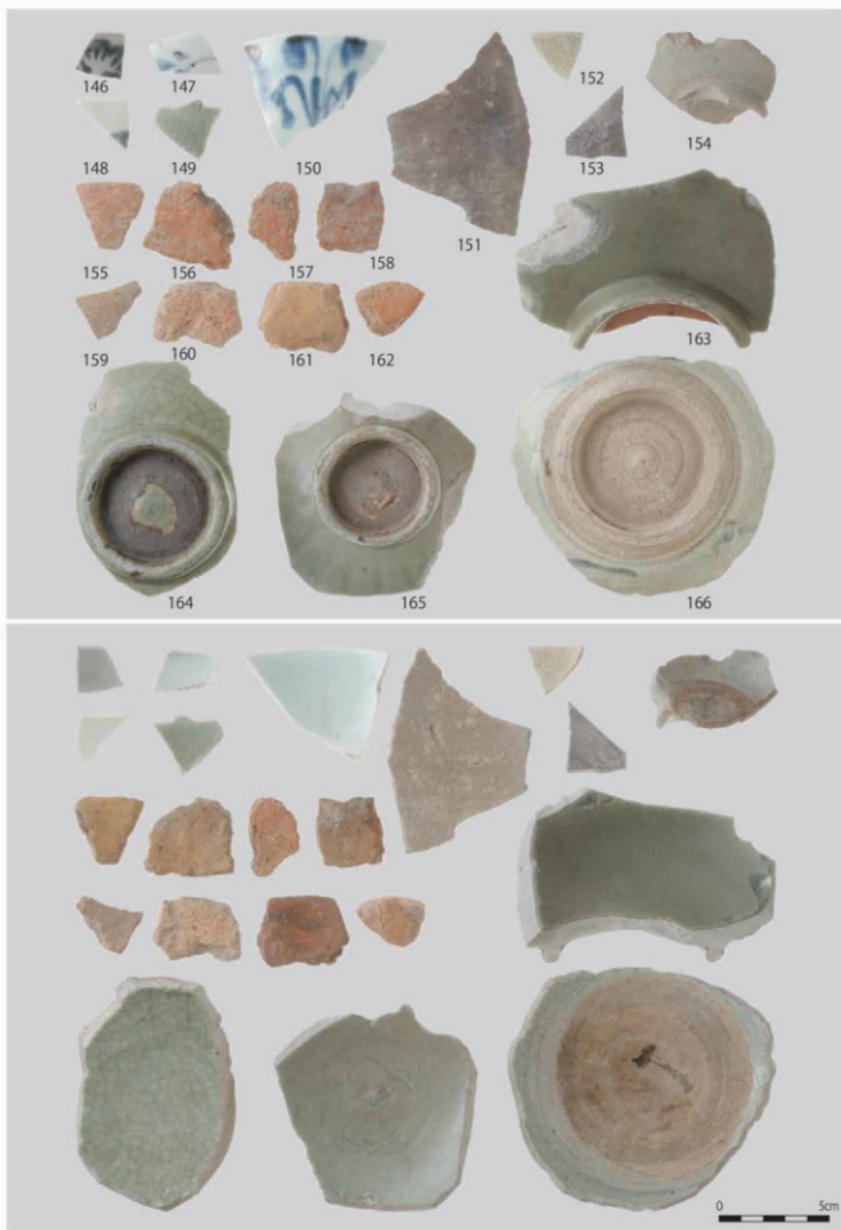
遺物図版4 渡嘉志久貝塚（4）（62～67）



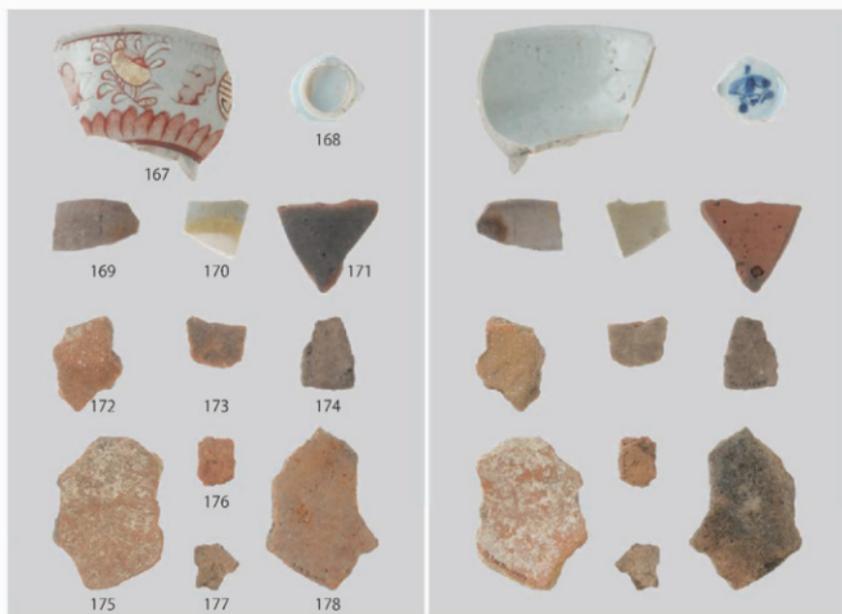
遺物図版5 渡嘉敷集落集落周辺遺物散布地 (68～70)・アーガー遺物散布地 (71～84)
アリガヌワラ遺物散布地 (85～102)



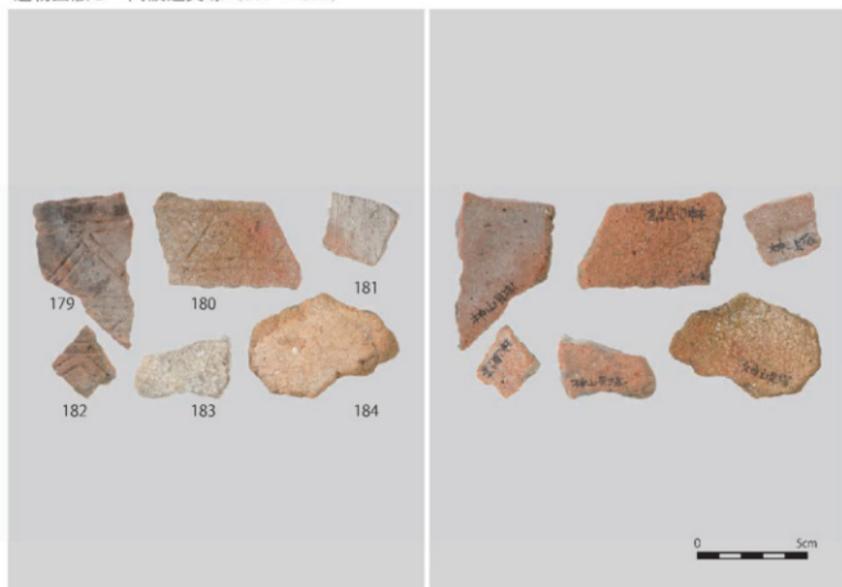
遺物図版 6 渡嘉敷集落周辺遺物散布地 (103・127・131・134・137・140・143・145)
 渡嘉敷川河口周辺遺物散布地 (128・130・135・136・141・142)



遺物図版7 東上原遺跡 (146～166)



遺物図版8 阿波連貝塚 (167～178)



遺物図版9 神山島灯台付近遺物散布地 (179～184)

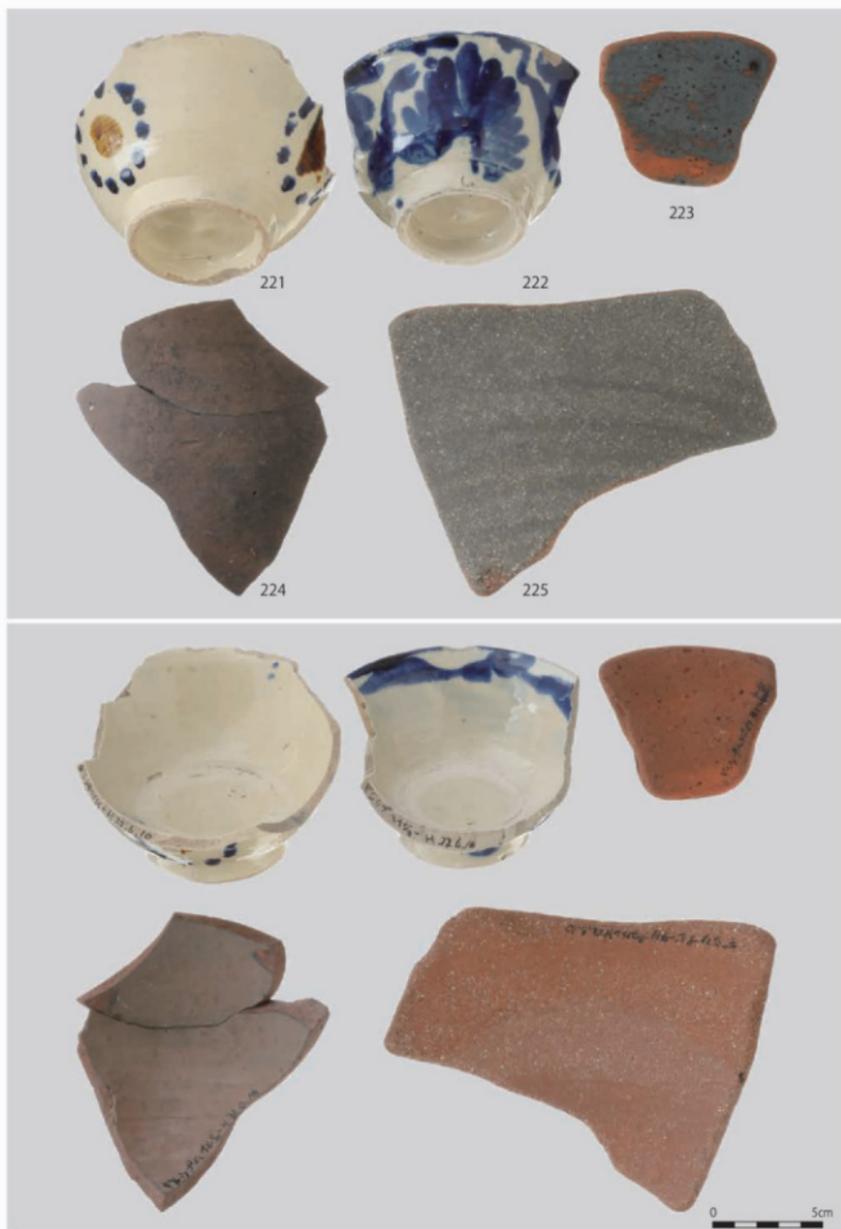


遺物図版 10 阿波連集落周辺遺物散布地 (185～198)・船越原石切り場北 (199・200)



遺物図版 11 ハンガチ 201～203・東川上御嶽周辺 (204)・旧前島集落 (207～213)

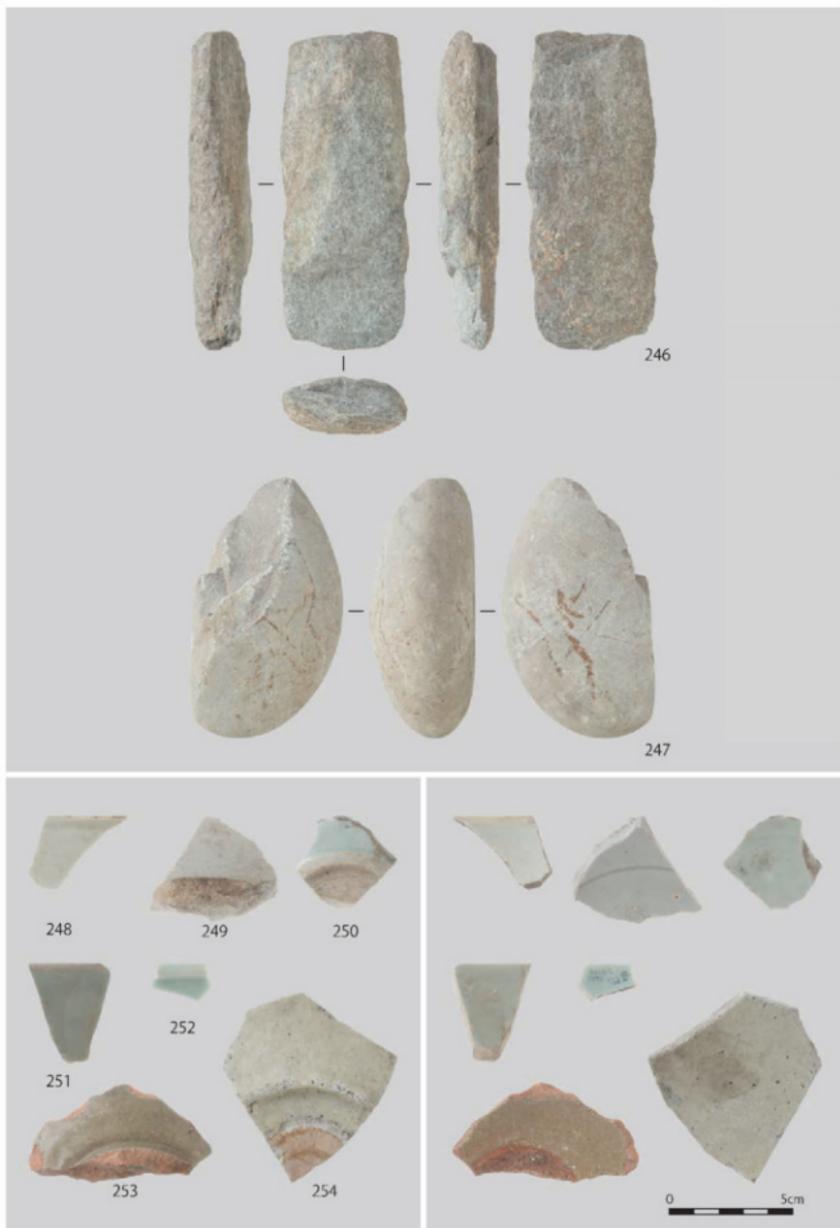
儀志布島不明 (205・206)・ヘイゾークワ (214・220)・ジープスガ遺物散布地 (215～218)



遺物図版 12 ヘイジョーグワァー遺物散布地 (221～225)



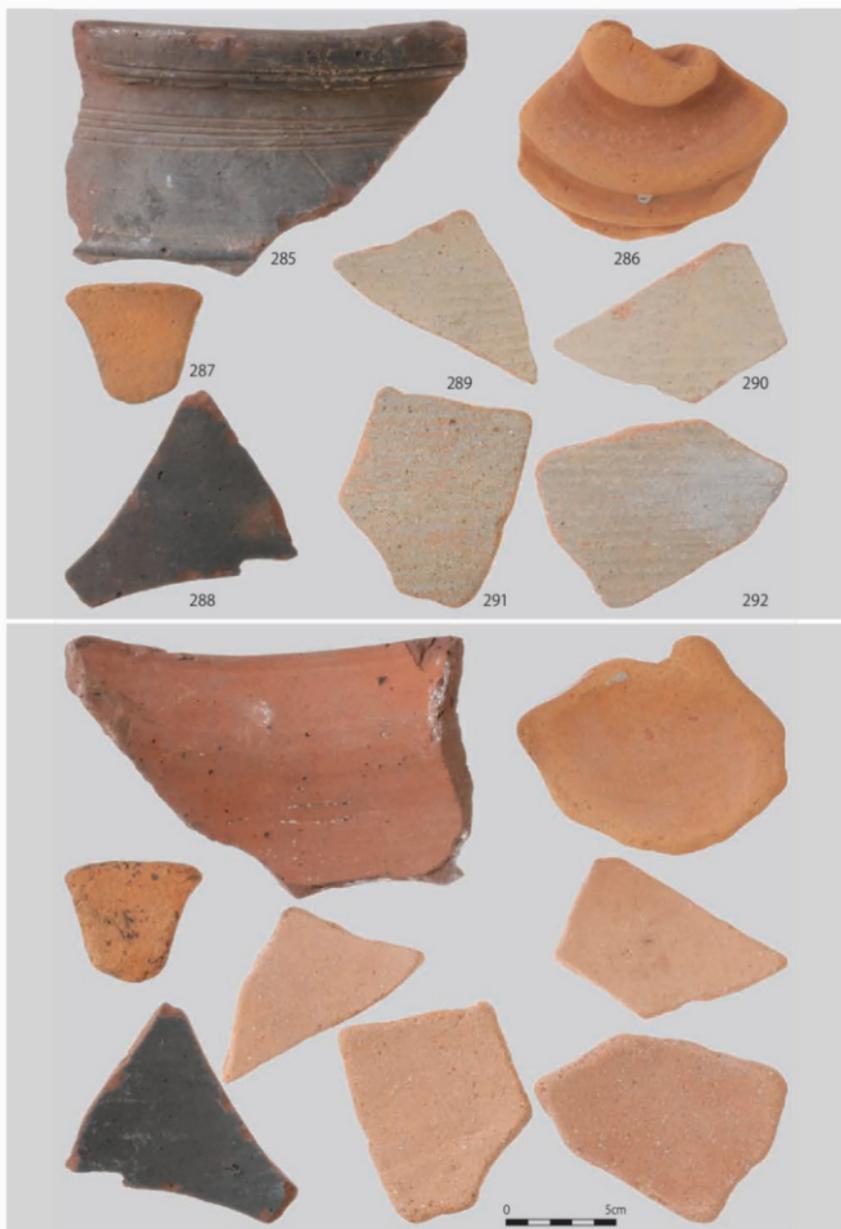
遺物図版 13 古座間味貝塚 (226～243)・座間味貝塚 (244)・産業組合の塚付近 (245)



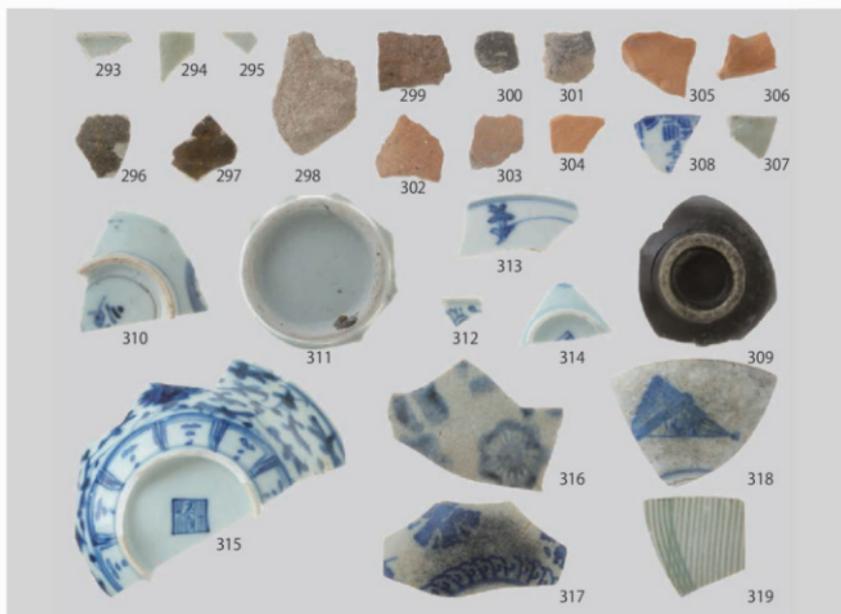
遺物図版 14 古座間味貝塚 (246・247)・シルグスク (248～254)



遺物図版 15 大和馬具塚 (255 ~ 283)



遺物図版 16 阿真東海岸 (285 ~ 287) ・阿真ニ夕浜 (288 ~ 292)



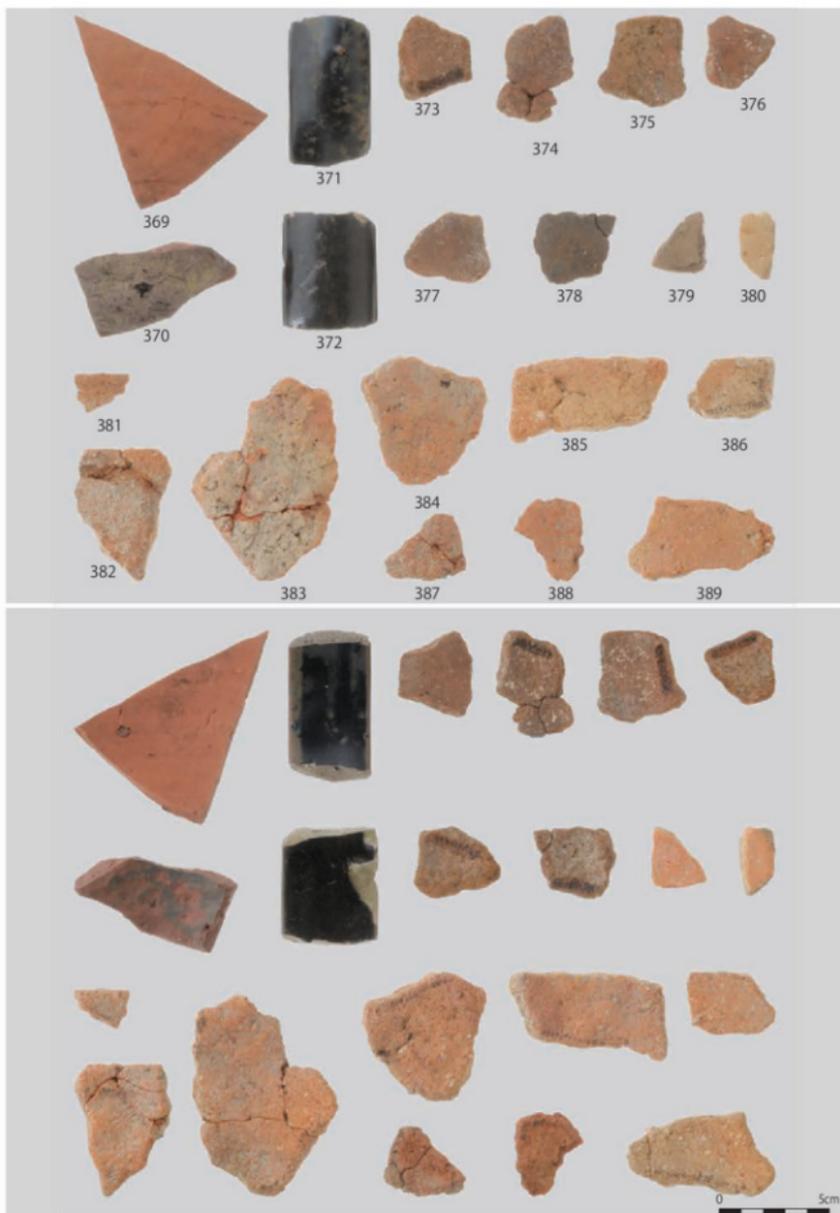
遺物図版 17 グスク山 (293 ~ 304)・阿佐遺物散布地 (305 ~ 319)



遺物図版 18 阿真遺物散布地 (320 ~ 324)・阿嘉貝塚 (325 ~ 336・341・344・347)・阿嘉公民館 (337 ~ 340・342・343・346)・慶留間遺跡 (348 ~ 352)・嘉比北遺物散布地 (353)



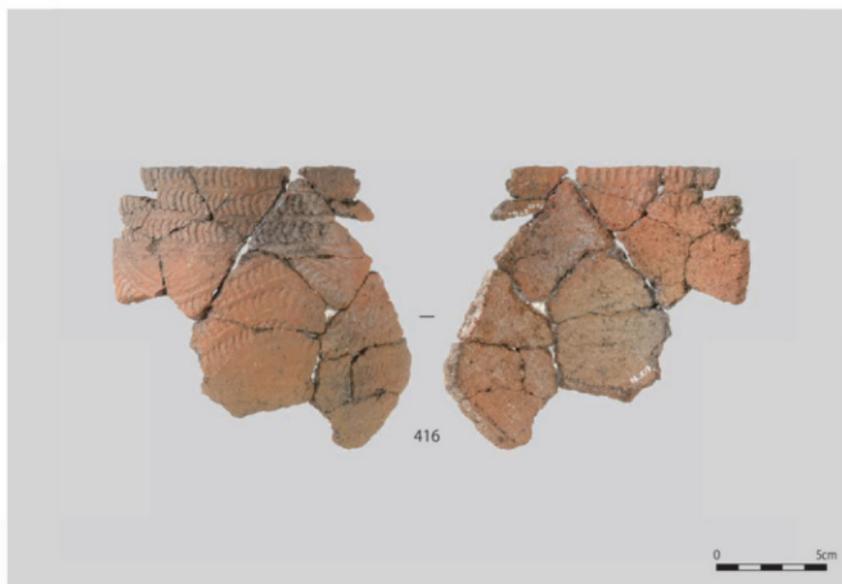
遺物図版 19 嘉比北遺物散布地 (354 ~ 362)・慶留間集落東海岸 (363 ~ 368)



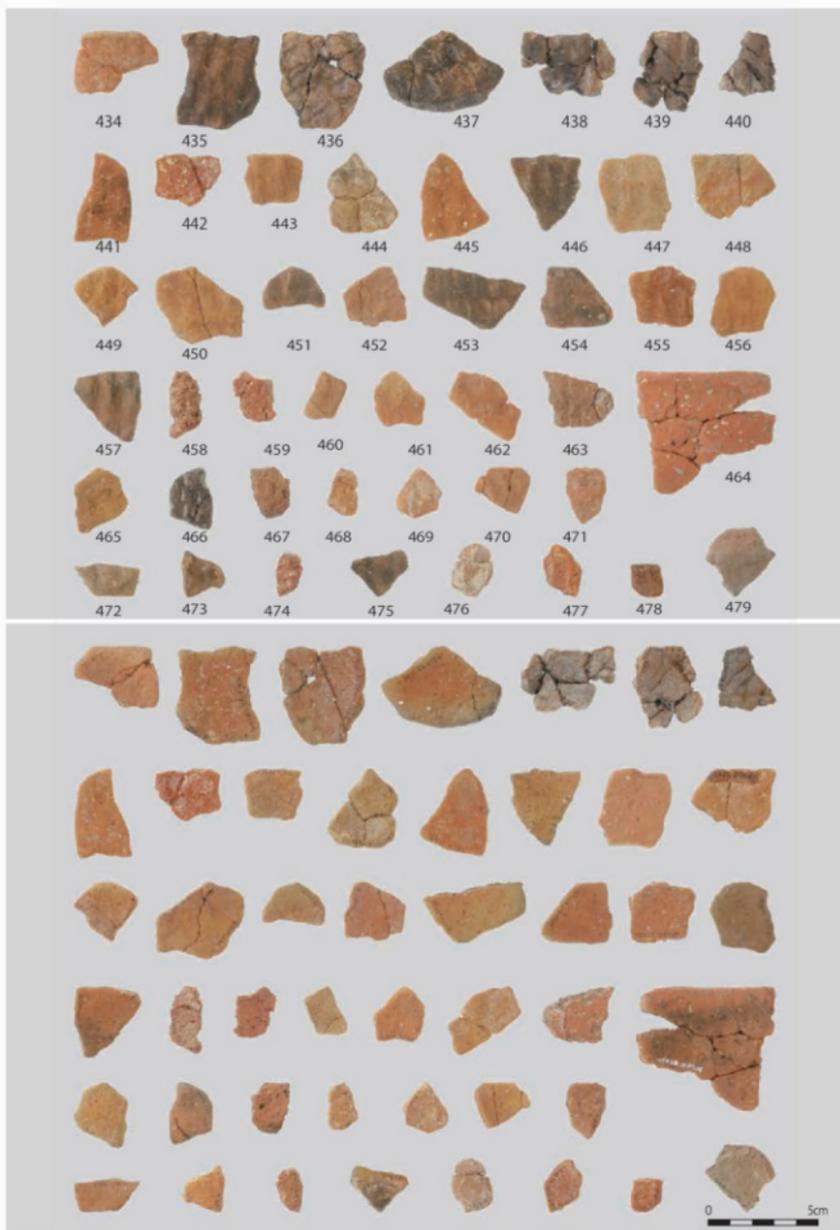
遺物図版 20 安室貝塚周辺 (369 ~ 372)・ウタハ貝塚? (373 ~ 380)
ウフタ遺物散布地 (381 ~ 389)



遺物図版 21 船越原遺跡 (1) (390 ~ 415)



遺物図版 22 船越原遺跡（2）（416～432）・船越原石切り場（433）



遺物図版 23 船越原遺跡 (3) (434 ~ 479)



遺物図版 24 船越原遺跡（4）（480～489）



遺物図版 25 船越原遺跡 (5) (490 ~ 516)



517



518

0 5cm



4 5 6 7 8 9 10 1

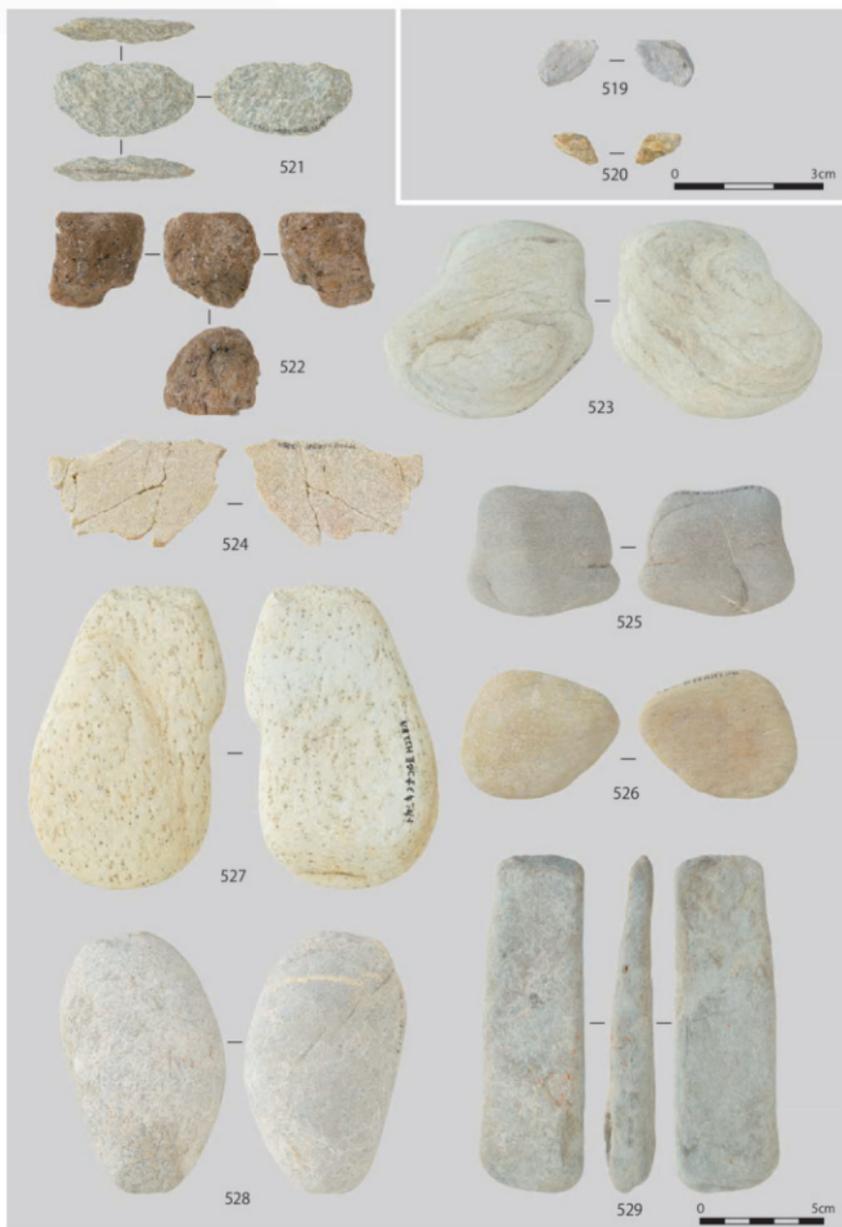


6 7 8 9 10 1



4 5 6 7 8 9 10 1

遺物図版 26 船越原遺跡 (6) (517・518)・座間味島採集地不明サンゴ石 (写真最下段)



遺物図版 27 船越原遺跡（7）（519～529）



遺物図版 28 阿波連浦貝塚（1）（530～549）



遺物図版 29 阿波連浦貝塚 (2) (550 ~ 572)



遺物図版 30 阿波連浦貝塚 (3) (573 ~ 594)



遺物図版 31 阿波連浦貝塚 (4) (595 ~ 599)

報告書抄録

ふりがな	けらましどうのいせき							
書名	慶良間諸島の遺跡							
副書名	平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第81集							
編著者名	瀬戸哲也・宮城淳一・亀島慎吾・大塚皓平・平良和輝・山崎真治・黒住耐二・國木田大・リノサウヴェイ株式会社							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原193-7 TEL. 098-835-8752 FAX 098-835-8754							
発行年月日	2016年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
慶良間諸島内全83遺跡	沖縄県島尻郡渡嘉敷村・屋岡味村	47353 47354		26°15'～	127°13'～	20100610～ 0814 20110705～ 0812		慶良間諸島全域の分布調査
船越原遺跡	沖縄県島尻郡渡嘉敷村阿波連	47353		26°11'～	127°23'～	20120612～ 0615		
阿波連浦貝塚	沖縄県島尻郡渡嘉敷村阿波連	47353		26°09'～	127°21'～	20140804～ 0911 20150630～ 910	210 ㎡	保存目的の範囲確認調査
阿波連浦貝塚	沖縄県島尻郡渡嘉敷村阿波連	47353		24°	07°		30 ㎡	保存目的の範囲確認調査
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
慶良間諸島内全83遺跡	遺物散布地・集落・墓・グスク・戦争遺跡	縄文～近世・近代	墓・戦争遺跡(塚など)以外は遺物散布のみ	土器(貝塚後期～グスク)・石器・中国産陶磁器・沖縄産陶器			新規確認20遺跡。83遺跡のうち、縄文～グスク時代の30遺跡は周知の埋蔵文化財包蔵地とする。他は、さらなる調査・調整が必要。今回の調査以外に既往調査の採集遺物も掲載。貝塚後期土器が良好に採集。	
船越原遺跡	集落	縄文前期～弥生時代並行期	爪形土器包含層・縄集中地	土器(貝塚前期～後期)・石器			4か所の遺物散布、爪形土器包含層の残存範囲を確認。自然崩壊が見込まれる法面を保護。	
阿波連浦貝塚	集落	弥生～平安時代並行期	貝塚後期土器包含層・貝殻集中地	土器(貝塚前期～後期)・石器			遺物包含層が西側に残存していることを確認。法面を保護。	
要約	<p>慶良間諸島では、1961(昭和36)年に遺跡の所在が報告されて以来、1970～1980年代にかけて沖縄最古の爪形土器が確認された船越原遺跡、縄文後期(貝塚前4期)の堅穴住居址などが確認された古座間味貝塚、弥生並行期(貝塚後前半)の良好な土器群が出土した阿波連浦貝塚など、沖縄考古学にとって重要な発見がなれ、遺跡の保護・周知が行われた。しかし、人口が2000人も満たない本諸島で大規模な開発もほとんどなかったことから、これらの遺跡調査は実施されなかった。</p> <p>そのような中で、2000年代に入って砂丘上に位置する船越原遺跡の包含層が露頭し、爪形土器が散布し自然崩壊の危機にあることが確認された。そこで、船越原遺跡の保護を含めた慶良間諸島における遺跡分布調査が必要であると判断し、沖縄県教育庁文化財課の指導の下、沖縄県立埋蔵文化財センターが実施することになった。</p> <p>慶良間諸島における分布調査では、久場島と神山島以外の各島で踏査を行い、渡嘉敷島・儀志布島・前島・神山島・座間味島・屋嘉比島・安室島・高比島・安慶名敷島・阿嘉島・慶留間島の11か所、合計83遺跡を数えることが判明した。特に、貝塚後期の遺跡が多く分布していることが確認された。また、近世～近代の遺跡が53か所見られ、今後は試掘などのさらなる調査、両村や関係者などと調整の上で、周知の埋蔵文化財包蔵地としての取扱いを検討することになる。</p> <p>船越原遺跡では、爪形土器包含層がまだ残存していることを確認し、本層前後で緑色千枚岩や砂岩の縄集中地も検出し、石材供給地としての位置づけが再度確認できた。阿波連浦貝塚では、既往調査の層序を確認し、丘陵奥の西側に包含層が十分に残されていることが明らかになった。両遺跡の自然崩壊の可能性が露頭している部分を、環境にも配慮したドレーンシート工法を用いて埋戻し、現状の保護を行った。</p>							

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第81集

慶良間諸島の遺跡

—平成22～27年度県内遺跡詳細分布調査報告書—

発行日 平成28(2016)年3月31日

発行・編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL:098-835-8751・8752

印刷 株式会社 中部電算フォーム

〒904-0032 沖縄市諸見里1-39-15



船越原遺跡遠景（砂丘部分）